

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究所 要項

2010

GRADUATE SCHOOL of SPORT SCIENCES
WASEDA UNIVERSITY





早稻田大学教旨

早稻田大学ハ学問ノ独立ヲ全ウシ、学問ノ活用ヲ效シ、模範国民ヲ造就スルヲ以テ建学ノ本旨ト爲ス。

早稻田大学ハ学問ノ独立ヲ本旨ト爲スヲ以テ、之力自由討究ヲ主トシ、常に独創ノ研鑽ニカメ以テ世界ノ学問ニ裨補セン事ヲ期ス。

早稻田大学ハ学問ノ活用ヲ本旨ト爲スヲ以テ、學理ヲ学理トシテ研究スルト共ニ、之ヲ實際ニ應用スルノ道ヲ講シ以テ時世ノ進運ニ資セン事ヲ期ス。

早稻田大学ハ模範国民ノ造就ヲ本旨ト爲スヲ以テ、個性ヲ尊重シ、身家ヲ發達シ、國家社會ヲ利済シ、併セテ広ク世界ニ活動ス可キ人格ヲ養成セン事ヲ期ス。

2010年度大学院スポーツ科学研究科暦

行 事		日 程
大学院入学式(全学)		2010年 4月 2日(金)
前 期	前期開始日	4月 1日(木)
	前期授業開始日	4月 6日(火)
	授業終了	7月 26日(月)
	補講期間	7月 27日(火)～8月 2日(月)
夏 季 休 業	自	8月 3日(火)
	至	9月 20日(月)
9月学位授与式		9月 20日(月)
後 期	後期開始日	9月 21日(火)
	後期授業開始	9月 27日(月)
	冬 季 休 業	12月 23日(木)
		2011年 1月 5日(水)
授業終了		1月 29日(土)
春 季 休 業	補講期間	1月 31日(月)～2月 5日(土)
	自	2月 6日(日)
		3月 31日(木)
学位授与式		3月 26日(土)

[行事等]

体育祭(授業休講) : 11月 5日(金)
 早稲田祭(授業休講) : 11月 6日(土)・7日(日)
 夏季一斉休業期間 : 8月 9日(月)～8月 13日(金)
 創立記念日(授業休講) : 10月 21日(木)
 年末年始一斉休業期間 : 12月 29日(水)～2011年1月 5日(水)

[成績発表]

修士2年生以上、修士1年制コース : 2011年2月 28日(月)
 修士1年生、博士後期課程 : 2011年3月 17日(木)

日曜日および国民の祝日に関する法律に規定する休日(一部)に授業を実施する。

早稲田大学学則第9条および早稲田大学大学院学則第26条第3項にもとづき、授業日数を確保するため、休業日に授業を行う。2010年度は以下の休業日に授業を実施することとする。

7月 19日(月) : 海の日

10月 11日(月) : 体育の日

※十分な授業回数を確保するために休業日に授業を実施することから、臨時の休業日を設ける。

2010年度は、4月 30日(金)～5月 1日(土)を休業日とする。

目 次

大学院スポーツ科学研究科暦

I	大学院スポーツ科学研究科沿革	1
II	大学院スポーツ科学研究科の理念	2
III	大学院スポーツ科学研究科における3つの方針	2
IV	大学院スポーツ科学研究科の研究領域とマネジメントコース	3
V	早稲田大学大学院学則(抜粋)	5
VI	早稲田大学学位規則(抜粋)	11
VII	修士論文・リサーチペーパー作成に関して	13
VIII	博士論文作成に関して(課程による者)	16
IX	人を対象とする研究および動物実験に関する規程	18
X	研究生制度について	18
XI	スポーツ科学研究科科目配当	19
XII	修了要件・学科目の履修方法	20
XIII	教育職員免許状取得について	26
XIV	学費	37
XV	学生生活等	40
1.	学籍番号	40
2.	学生証(身分証明書)	40
3.	各種証明書の交付	41
4.	諸願および諸届	41
5.	各種補助	42
6.	所沢総合事務センター	43
7.	掲示	43
8.	交通機関のストライキと授業	43
9.	天候悪化(台風・大雪等)による休講等の取り扱いについて	44
10.	自転車・自動車・オートバイの駐輪場・駐車場の利用について	44
11.	早稲田大学健康センター所沢分室	46
12.	早稲田大学学生健康増進互助会(学生早健会)	46
13.	奨学金制度	46
14.	学生教育研究災害傷害保険	46
XVI	所沢図書館および中央図書館の利用について	48
XVII	早稲田大学スポーツ科学会規則	51
XVIII	研究指導・演習・講義科目の概要	53
XIX	全学共通設置科目の概要	179
XX	教員名簿	219
	大学院スポーツ科学研究科科目配当表	221

I 大学院スポーツ科学研究科沿革

早稲田大学は1882年の創立以来、スポーツとともに歩んできた。日本の近代スポーツの礎は早稲田大学なくしてはありえなかつたといえる。本学創設者である大隈重信は創立時から、「知育・德育・体育の三者は相並行して進まざるべからずは、今更の問題にあらず」と語り、学生のスポーツ活動を積極的に奨励した。日本人初のオリンピック金メダリストの輩出、「早慶戦」を通じた観戦スポーツの国民への普及などにはこの思想が大きく貢献したといつても過言ではない。

本学は、これまで数多くのトップアスリート、指導者、学校教員、スポーツ団体などの組織運営の専門家を送り出し、トップレベルの競技力を科学的に分析する姿勢をいちはやく取り入れてきた。本学には、こうした姿勢を支えるナレッジ・スキル、人脈が伝統とともに組織文化のなかに脈々と継承されている。

このような伝統と文化のなか、学内でのスポーツ教育の制度化の需要に応え、本学では東京オリンピックが開催された1964年に教育学部に体育学専修を設け、定員120名の精銳教育を始めた。1987年には時代の要求に応え、最新のスポーツ施設や実験設備を配した新設の所沢キャンパス内において男女併せて240名に定員を増員し、人間科学部スポーツ科学科として改組した。一方、専門教育の充実の必要性から、1991年に大学院人間科学研究科が開設され、健康科学専攻内にスポーツに関する研究指導が設置された。2000年の組織再編の際、スポーツ科学研究領域が設置されたのを機に大学院におけるスポーツ研究は更に充実し、2005年度には19の研究指導を設置するに至った。

世界ならびにわが国のスポーツが隆盛を極めるなか、スポーツに対する多様化・高度化・専門化する社会ニーズに対応するため、また、100年を超える早稲田スポーツの伝統と力を継承・発展させるべく、2003年4月に人間科学部からスポーツ科学部が発展的に独立した。2006年4月には、最先端のスポーツ科学の知識とともに熱いスポーツマインドを持った専門職業人および科学者の育成を目的として、大学院スポーツ科学研究科が誕生し、スポーツ科学の専門教育・研究機能を担うこととなった。

II 大学院スポーツ科学研究科の理念

人間の日常生活活動において、スポーツは深く浸透し、私たちの生活に様々な影響を与えている。スポーツ科学が扱う領域として、スポーツをする身体に着目して医科学的な評価・検証を行うこと、健康増進や介護予防を通じて医療費削減や幸福な暮らしの実現に貢献すること、スポーツを“文化”としてとらえ深く洞察すること、スポーツビジネスの有り方について分析・提言すること、スポーツの強化や普及さらには市場の開拓を包含したマネジメントの技法を解明すること等々、日常生活に直結する様々な課題がある。

このようなスポーツに関わる様々な課題を対象として、研究と教育を総合的に実施するために本研究科が設置された。大学院学生は、所属する研究指導の演習に専念するだけではなく、研究科に設置される様々な分野の講義・演習を履修することによって、スポーツ科学に関わる最高度の研究成果を学習することができる。これらの学生が社会へと羽ばたき、スポーツに関わる様々な分野で活躍することを通じて、“豊かなスポーツ文化の創造”に資することが、本研究科設立の理念である。

III 大学院スポーツ科学研究科における3つの方針

1. ディプロマ・ポリシー(卒業認定・学位授与に関する方針)

早稲田大学の総合性・独創性を生かし、体系的な教育課程と、全学的な教育環境と学生生活環境のもとに、多様な学問・文化・言語・価値観の交流を育み、地球社会に主体的に貢献できる人材を育成する。

修士課程2年制コースでは、学校教育や社会教育における指導者の養成のみならず、スポーツに関する高度な知識を身につけながら、スポーツに関わる幅広い事業分野・ビジネス界における有能な専門職者として活躍する人材を養成する。また、新たなスポーツ環境づくりを通して、生活の質の向上や望ましいスポーツライフの形成に貢献できる人材の育成を目指す。

修士課程1年制コースはすでに実務経験を有する人材を対象とすることから、大学院での集中した教育を通して高度の知識を身につけさせ、各人の専門職者として活躍の舞台をさらに広げることを目的とする。

博士後期課程では、スポーツ科学に関わる高度の研究能力とその基礎となる豊かな学識を有したスポーツ科学の研究者養成を主眼とする。

2. カリキュラム・ポリシー(教育課程の編成・実施の方針)

修士課程では、2年制コース・1年制コースともに、所属する研究指導の演習と、スポーツ科学研究科に設置されている講義科目の合計で 30 単位履修することを修了要件とする。講義科目には、スポーツ科学のうちで教育課程に重要な課題を必要に応じて設置する。1年制コースでは研究指導・演習・講義を通常時間外に行うことによって、社会人が勤務に支障をきたすことなく授業を履修できるように配慮する。また他研究科の講義科目(8単位以内)も所定の手続きを経たうえで履修単位に含めることができる。研究指導は、修士論文の作成を主体として、研究の手法について全般的に指導する。すべての学生が修士論文を提出して審査に合格することを修了要件にする。

博士後期課程では1人の研究指導担当教員が少数の学生に対して、博士論文の作成のための綿密な指導を行い、修業年限内に博士論文を完成させられるようとする。また、博士学位論文を提出して審査に合格することを修了要件にする。

3. アドミッション・ポリシー(入学者受入方針)

早稲田大学では、『学問の独立』の教育理念のもとで、一定の高い基礎学力を持ち、かつ知的好奇心が旺盛で、本学の理念である進取の精神に富む、勉学意欲の高い学生を、わが国をはじめ世界から多数迎え入れる。修士課程2年制コースでは、学術研究者および高度職業人を育成するために、スポーツ文化、スポーツビジネス、スポーツ医科学、身体運動科学、コーチング科学の5つの研究領域において、スポーツ関連の幅広い事業分野で専門職者として活躍できる人材を求める。また、実務経験者を対象とする修士課程1年制コースでは、スポーツマネジメントに関する高い能力を持つ実務者となり得る人材を求める。本研究科では、スポーツ科学に期待される社会的要請の高まりに対応し、スポーツ関連の幅広い事業分野で専門職者として活躍し、社会のスポーツ科学の発展に大いに貢献できる人材を受け入れる。

さらに、実務経験者を対象とする修士課程(1年制コース)を設置して、スポーツマネジメント分野での実務者教育を行う。

IV 大学院スポーツ科学研究科の研究領域と マネジメントコース

修士課程(2年制コース)・博士後期課程

(1) スポーツ文化研究領域

本研究領域ではスポーツを、当該社会の精神文化、社会文化、技術文化のそれぞれに属する諸要素が有機的に連関しあつてなる体系とらえ、そこに生じる問題を社会学、教育学、文化人類学、倫理学、歴史学、哲学等の方法によって解決することをめざしている。そこでは、スポーツの本質理解に関わる基礎的問題から、スポーツメディア、スポーツ教育、スポーツ倫理、ジェンダー、観光化民族スポーツなど日常の社会生活に現れる応用的問題までが扱われる。スポーツを社会・文化現象として対象化し、これを人文・社会科学的に研究しうる人材の養成と並んで、そうした高度かつ広範な専門的知識を身につけた職業人の養成をもめざしている。

(2) スポーツビジネス研究領域

本研究領域では、プロスポーツやフィットネスクラブに代表される民間営利スポーツから、政府や学校のような公共非営利スポーツまでの幅広いスポーツビジネス分野を対象として、スポーツビジネス現象のしくみについての理解を進め、スポーツビジネスをめぐって生起している経営課題に対する解決方法を、働く個人やスポーツ参加者といったミクロ的視点から経営体とマクロ環境の関係といったマクロ的視点にまで幅広く学際的な方法を用いて究明する。そして、スポーツに関する基礎学問的な理解の上に、ビジネスやマネジメントに関する知識や技能を修得し、スポーツビジネスに関する高度な知識と技能を有した職業人および研究者の育成をめざす。

(3) スポーツ医科学研究領域

本研究領域では、スポーツ障害、健康医学、障害者スポーツに関連した医科学研究を推進すると同時に、研究に関連した知識と研究遂行能力を身につける。スポーツ医科学におけるトップクラスの実践の場をフィールドとして、スポーツ医科学における研究活動を進める。アスレティックトレーナー、フィジカルセラピスト、行政担当者、スポーツ関連企業のスタッフ、高度な研究能力と豊かな学識を有した研究教育者、および実践の場における高度な知識を有した指導者の養成を目的とする。国内外の他スポーツ医科学研究機関との連携をはかりながら国際的研究の場での活動が身につくよう配慮する。

(4) 身体運動科学研究領域

本研究領域では、健康増進やスポーツパフォーマンスの向上につながる研究を基礎科学的見地から進める。スポーツの自然科学的側面に関する高度の研究能力とその基礎となる豊かな学識を有した研究者およびそれ

らに関連する高度専門職業人、スポーツ科学や体育学に関する高度な知識と技能を備えた教員、スポーツ指導者、行政担当者、スポーツ関連企業のスタッフなどの養成を目的とする。他の研究機関との連携も密にし、研究・教育の充実を図る。

(5)コーチング科学研究領域

本研究領域では、現代社会に機能する「コーチング」をスポーツ・教育の分野から科学的にまた技能的に捉え、競技種目に対するコーチングの現象を専門的理解により深めることやスポーツ参加者への導入・展開の技術習得や環境づくりの関係を学際的な方法により究明する。一流選手をはじめとする競技者のパフォーマンス獲得のプロセスや根拠を解明し、効率よくパフォーマンスを向上させる原理を構築する。実戦的研究・教育を通じて理論武装した競技者の輩出およびそれを指導する能力を有する高度なスポーツ実践者、指導者、研究者の養成を目指す。

修士課程(1年制コース)

(1)トップスポーツマネジメントコース

スポーツビジネスや一般企業などでの実務経験を有する者に対して、スポーツサービスやスポーツグッズを中心としたプロスポーツビジネスの実践技能とマネジメント能力を開発することによって、トップスポーツ界で要請される人材を育成することを目的とする。トップスポーツビジネスに関する実践力と理論的研究能力の育成を図りつつ、トップスポーツビジネスに関わる諸問題を高度な教育・研究を通して解明し、トップスポーツビジネスの進展に寄与し得る実務的・専門的能力を養成する。

(2)スポーツクラブマネジメントコース

地域スポーツクラブ、民間スポーツクラブ、スポーツ行政、スポーツ団体等での実務経験を有する者に対して、スポーツサービスを中心としたコミュニティ・スポーツビジネスの実践技能とマネジメント能力を開発することによって、地域でのスポーツクラブビジネスや公共スポーツ施設経営などで要請される人材を育成することを目的とする。コミュニティ・スポーツビジネスに関する実践力と理論的研究能力の育成を図りつつ、コミュニティ・スポーツビジネスに関わる諸問題を高度な教育・研究を通して解明し、コミュニティ・スポーツビジネスの進展に寄与し得る実務的・専門的能力を養成する。

(3)健康スポーツマネジメントコース

健康増進の実務経験を有する者に対して、運動やスポーツを中心とした健康増進活動の実践技能とそのマネジメント能力を開発することによって、社会的に要請される人材を育成することを目的とする。健康増進に関する広範な基礎知識を踏まえて、スポーツや身体運動・トレーニングを通じた実践的な指導技法とその理論基盤を理解した上で、地域行政あるいは健康関連組織における健康増進のマネジメントを行う上での実務的・専門的能力を開発する。

(4)介護予防マネジメントコース

健康増進あるいは介護の実務経験を有する者に対して、介護予防活動の実践技能とそのマネジメント能力を開発することによって、社会的に要請される人材を育成することを目的とする。介護予防に関する広範な基礎知識を踏まえて、要介護認定者ならびに自立認定される虚弱高齢者に対して虚弱度の進行を抑制するための実践的な指導技法とその理論基盤を理解した上で、地域行政あるいは介護関連組織における介護予防のマネジメントを行う上での実務的・専門的能力を開発する。

V 早稲田大学大学院学則（抜粋）

第1章 総 則

(設置の目的)

第1条 本大学院は、高度にして専門的な学術の理論および応用を研究、教授し、その深奥を究めて、文化の創造、発展と人類の福祉に寄与することを目的とする。

(博士課程)

第2条 本大学院に博士課程をおく。

2 博士課程の標準修業年限は、5年とする。

3 博士課程は、これを前期2年、後期3年の課程に区分し、前期2年の課程を、修士課程として取り扱うものとする。

4 前項の前期2年の課程は、「修士課程」といい、後期3年の課程は、「博士後期課程」という。

5 修士課程の標準修業年限は、2年とする。

6 前項の規定にかかわらず、修士課程においては、主として実務の経験を有する者に対して教育を行う場合であって、教育研究上の必要があり、かつ、昼間と併せて夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適切な方法により教育上支障を生じないときは、研究科、専攻または学生の履修上の区分に応じ、標準修業年限を1年以上2年未満の期間とすることができる。

(課程の趣旨)

第3条 博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、または他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うものとする。

2 修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力または高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養うものとする。

(研究科の構成)

第4条 本大学院に次の研究科をおく、各研究科にそれぞれの専攻をおく。

研 究 科	課 程	
	修 士 課 程	博 士 後 期 課 程
スポーツ科学研究科	スポーツ科学専攻	スポーツ科学専攻

第2章 教育方法等

(教育方法)

第6条 本大学院の教育は、授業科目および学位論文の作成等に対する指導(以下「研究指導」という。)によって行うものとする。

(教育方法の特例)

第6条の2 本大学院の課程においては、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適切な方法によって教育を行うことができる。

(履修方法等)

第7条 各研究科における授業科目の内容・単位数および研究指導の内容ならびにこれらの履修方法は各研究科において別に定める。

2 学生の研究指導を担当する教員を指導教員といふ。

3 本大学院の講義、演習、実習などの授業科目の単位数の計算については、本大学学則第12条および第13条の規定を準用する。

(他研究科または学部の授業科目の履修)

第8条 当該学術院教授会または研究科運営委員会(以下「研究科運営委員会等」という。)において、教育研究上有益と認めるときは、他の研究科の授業科目または学部の授業科目を履修させ、これを第13条、第13条の2または第13条の3に規定する単位に充当することができる。

(入学前の既修得単位の認定)

第8条の2 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、本大学院に入学する前に本大学院または他大学の大学院(外国の大学の大学院を含む。)において修得した単位(科目等履修生として修得した単位を含む。)は、10単位を超えない範囲で、第13条に規定する単位に充当することができる。

(授業科目の委託)

第9条 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院(外国の大学の大学院を含む。)と予め協議の上、その大学院の授業科目を履修させることができる。

2 前項の規定により履修させた単位は10単位を超えない範囲で、これを第13条に規定する単位に充当することができる。

(研究指導の委託)

第10条 当該研究科運営委員会等において、教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院または研究所(外国の大学の大学院または研究所を含む。)と予め協議の上、本大学院の学生にその大学院等において研究指導を受けさせることができる。ただし、修士課程の学生について認める場合には、当該研究指導を受ける期間は、1年を超えないものとする。

(単位の認定)

第11条 授業科目を履修した者に対しては、試験その他の方法によって、その合格者に所定の単位を与える。

(試験および成績評価)

第12条 授業科目に関する試験は、当該研究科運営委員会等の定める方法によって、毎学年末、またはその研究科運営委員会等が適当と認める時期に行う。

2 授業科目の成績は、A+・A・B・C・Fの五級に分ち、A+・A・B・Cを合格とし、Fを不合格とする。

3 前項の規定にかかわらず、学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、必要な学修を考慮して単位を認めることができる。なお、成績は、P、Qの二級に分ち、Pを合格とし、Qを不合格とする。

第3章 課程の修了および学位の授与

(修士課程の修了要件)

第13条 修士課程の修了の要件は、大学院修士課程に2年以上在学し、各研究科の定めるところにより、所要の授業科目について所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に關しては、優れた業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院修士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

2 前項の場合において、当該修士課程の目的に応じ適当と認められるときは、特定の課題についての研究の成果の審査をもって修士論文の審査に代えることができる。

3 2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分にあっては第1項の前段に規定する在学年数については、当該標準修業年限以上在学するものとする。

(博士課程の修了要件)

第14条 博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に5年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあっては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に關しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあっては、当該課程における2年

の在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。

- 2 第2条第6項の規定により標準修業年限を1年以上2年未満とした修士課程を修了した者および第13条第1項ただし書の規定による在学期間をもって修士課程を修了した者の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に修士課程における在学期間に3年を加えた期間以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に關しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に3年(修士課程における在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。
- 3 前2項の規定にかかわらず、第29条第2号、第3号および第4号の規定により、博士後期課程への入学資格に關し修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者が、博士後期課程に入学した場合の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に3年以上在学し、各研究科の定めた所定の博士論文提出資格要件を満たし、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に關しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。
- 4 専門職学位課程を修了した者の博士課程の修了要件は、大学院博士課程に5年から当該専門職学位課程の標準修業年限を差し引いた期間以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた上、当該研究科運営委員会等の行う博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に關しては、優れた研究業績を上げた者については、標準修業年限を1年以上2年未満または2年とした専門職学位課程を修了した場合は、大学院博士課程に3年から当該専門職学位課程の標準修業年限を差し引いた期間以上在学すれば足りるものとする。
- 5 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り、当該研究科運営委員会等の許可を得て、博士論文を提出し、試験を受けることができる。

(博士学位の授与)

第15条 本大学院の博士課程を修了した者には、博士の学位を授与する。

(修士学位の授与)

第16条 本大学院の修士課程を修了した者には、修士の学位を授与する。

(課程によらない者の博士学位の授与)

第17条 博士学位は、第15条の規定にかかわらず、博士論文を提出して、その審査および試験に合格し、かつ、専攻学術に關し博士課程を修了した者と同様に広い学識を有することを確認された者に対しても授与することができる。

第5章 学年、学期および休業日

(学年および学期)

第25条 本大学院の学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

2 学年は次の2期に分ける。

前期 4月1日から9月20日まで

後期 9月21日から翌年3月31日まで

(休業日)

第26条 定期休業日は、次のとおりとする。

一 日曜日

二 国民の祝日に關する法律に規定する休日

三 本大学創立記念日(10月21日)

四 夏季休業 8月上旬から9月20日まで

五 冬季休業 12月下旬から翌年1月7日まで

六 春季休業 2月中旬から3月31日まで

2 夏季、冬季、春季休業期間の変更または臨時の休業日については、その都度公示する。

3 休業日でも、特別の必要があるときは授業を行うことがある。

第6章 入学、休学、退学、転学、専攻の変更および懲戒

(入学の時期)

第27条 入学時期は、毎学期の始めとする。

(修士課程の入学資格)

第28条 本大学院の修士課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について、入学を許可する。

一 大学を卒業した者

二 学校教育法第68条の2第3項の規定により学士の学位を授与された者

三 外国において通常の課程による16年の学校教育を修了した者

四 文部科学大臣の指定した者

五 大学に3年以上在学し、または外国において学校教育における15年の課程を修了し、本大学院において、所定の単位を優れた成績をもって修得したものと認めた者

六 各研究科において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、22歳に達した者

(博士後期課程の入学資格)

第29条 本大学院の博士後期課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について入学を許可する。

一 修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を得た者

二 外国において修士もしくは修士(専門職)の学位またはこれに相当する学位を得た者

三 文部科学大臣の指定した者

四 各研究科において、個別の入学資格審査により、修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達した者

(入学検定の手続)

第30条 本大学院に入学を志願する者は、第40条に定める入学検定料を納付し、必要書類を提出しなければならない。

(入学手続)

第31条 入学を許可された者は、別に定める入学金および授業料等を添えて、本大学院所定の用紙による誓約書、保証書および住民票記載事項証明書を指定された入学手続期間中に提出しなければならない。

(保証人)

第32条 保証人は、父兄または独立の生計を営む者で、確実に保証人としての責務を果し得る者でなければならない。

2 保証人として不適当と認めたときは、その変更を命ずることができる。

3 保証人は、保証する学生の在学中、その一身に関する事項について一切の責任を負わなければならない。

4 保証人が死亡し、またはその他の理由でその責務を果たし得ない場合には、新たに保証人を選定して届け出なければならない。

(在学年数の制限)

第33条 本大学院における在学年数は、修士課程および専門職学位課程にあっては4年、博士後期課程にあっては6年を超えることはできない。

2 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分における修士課程および専門職学位課程の在学年数にあっては当該標準修業年限の2倍を超えることはできな

いものとする。

(休 学)

第34条 病気その他の理由で引き続き2カ月以上出席することができない者は、休学願書にその理由を付し、保証人連署で所属する研究科の研究科長に願い出なければならない。

- 2 休学は当該学年限りとする。ただし、特別の事情がある場合には、引続き休学を許可することがある。この場合、休学の期間は通算し修士課程および専門職学位課程においては2年、博士後期課程においては3年を超えることはできない。
- 3 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分における修士課程および専門職学位課程の通算年数にあっては当該標準修業年限を超えることはできない。
- 4 休学期間中は、授業料の半額を納めなければならない。
- 5 休学者は、学期の始めでなければ復学することができない。
- 6 休学期間は、在学年数に算入しない。

(専攻および研究科の変更等)

第35条 専攻および研究科の変更または転入学に関する願い出があった場合には、当該研究科運営委員会等の議を経てこれを許可することができる。

(任意退学)

第36条 病気その他の事故によって退学しようとする者は、理由を付し、保証人連署で願い出なければならない。

(再入学)

第37条 正当な理由で退学した者が、再入学を志望したときは、選考の上これを許可することができる。この場合には、既修の授業科目の全部または一部を再び履修させることができる。

(懲 戒)

第38条 学生が、本大学の規約に違反し、または学生の本分に反する行為があったときは懲戒処分に付することがある。

- 2 懲戒は、戒告、停学、退学の3種とする。

(処分退学)

第39条 次の各号の一に該当する者は、退学処分に付す。

- 一 性行不良で改善の見込みがないと認められる者
- 二 学業を怠り、成績の見込みがないと認められる者
- 三 正当の理由がなくて出席常でない者
- 四 本大学院の秩序を乱し、その他学生としての本分に著しく反した者

第7章 入学検定料・入学金・授業料・演習料・実験演習料および施設費等

(入学検定料)

第40条 本大学院に入学を志願する者は、第30条の定める手続と同時に別表に定める入学検定料を納めなければならない。

(入学時の学費)

第41条 入学または転入学を許可された者は、入学金、授業料、演習料、実験演習料および施設費等を指定された入学手続期間内に納めなければならない。

(授業料等の納入)

第41条の2 学生が納めるべき入学金、授業料、施設費、演習料および実験演習料は、別表のとおりとする。

(授業料等の納入期日)

第42条 前条の入学金、授業料、施設費、演習料および実験演習料の納入期日は次のとおりとする。ただし、入学または転入学を許可された者が第41条の規定により指定された入学手続期間内に納める場合は、こ

の限りでない。

第1期分納期日 4月15日まで

第2期分納期日 10月1日まで

(納入学費の取扱)

第43条 すでに納入した授業料およびその他の学費は、事情の如何にかかわらず返還しない。

(中途退学者の学費)

第44条 学年の中途で退学した者でも、その期の学費を納入しなければならない。

(抹 簿)

第45条 学費の納入を怠った者は、抹籍することがある。

第9章 科目等履修生

(科目等履修生)

第51条 第27条から第29条までの規定によらないで、本大学院において授業科目を履修しようとする者または特定課題についての研究指導を受けようとする者があるときは、科目等履修生として入学させることができ

る。

(科目等履修生の種類)

第52条 官公庁、外国政府、学校、研究機関、民間団体等の委託に基づく者を委託履修生という。

2 前項に定める履修生以外の者を一般履修生という。

(科目等履修生の選考)

第53条 科目等履修生として入学を志願する者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入

学を許可する。

(科目等履修生の履修証明書)

第54条 科目等履修生が履修した科目について試験を受け、合格したときは、単位を授与し、本人の請求に

よって証明書を交付する。

第10章 研究生

(研究生)

第57条 本大学院博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学

院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、研究生として入学させることができ

る。

(研究生の選考)

第58条 研究生として研究指導を受けようとする者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上

入学を許可する。

(研究生の入学手続、学費および在学期間等)

第59条 研究生の入学手続、学費および在学期間等については別に規程をもって定める。

(正規学生の規定準用)

第60条 研究生については、本章の規定および別に定める規程によるほか、正規の学生に関する規定を準

用する。

VI 早稲田大学学位規則（抜粋）

(目的)

第1条 この規則は、早稲田大学学則(昭和24年4月1日。以下「大学学則」という。)および早稲田大学大学院学則(昭和51年4月1日教務達第1号。以下「大学院学則」という。)に定めるもののほか、早稲田大学が授与する学位について必要な事項を定めることを目的とする。

(学位)

第2条 本大学において授与する学位は、学士、博士、修士とする。

2 博士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位 (専攻分野)
スポーツ科学研究科	スポーツ科学専攻	博士 (スポーツ科学)

3 大学は、前項に定める学位のほか博士(学術)の学位を授与することができる。

4 修士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位 (専攻分野)
スポーツ科学研究科	スポーツ科学専攻	修士 (スポーツ科学)

(博士学位授与の要件)

第4条 博士の学位は、大学院学則第14条により博士課程を修了した者に授与する。

2 前項の規定にかかわらず、博士の学位は本大学院の博士課程を経ない者であっても、大学院学則第17条により授与することができる。

(修士学位授与の要件)

第6条 修士の学位は、大学院学則第13条により修士課程を修了した者に授与する。

(課程による者の学位論文の受理)

第7条 本大学院の課程による者の学位論文は、修士課程および専門職学位課程については2部を、博士後期課程については3部を作成し、それぞれに論文概要書を添えて研究科長に提出するものとする。ただし、研究科長は、審査に必要な部数の追加を求めることができる。

2 研究科長は、前項の学位論文を受理したときは、学位を授与できる者か否かについて研究科運営委員会の審査に付さなければならない。

(学位論文)

第10条 博士、修士および専門職学位の学位論文は1篇に限る。ただし、参考として、他の論文を添付することができる。

2 前項により、一旦受理した学位論文等は返還しない。

3 審査のため必要があるときには、学位論文の副本、訳文、模型または標本等の資料を提出させることがある。

(審査員)

第12条 研究科運営委員会は、第7条第2項の規定により、学位論文が審査に付されたとき、または第8条および第9条の規定により、学位の審査を付託されたときは、当該研究科の教員のうちから、3人以上の審査員を選任し、学位論文の審査および試験または学識の確認を委託しなければならない。

2 研究科運営委員会は必要と認めたときは、前項の規定にかかわらず本大学の教員または教員であった者を、学位論文の審査および試験または学識の確認の審査員に委嘱することができる。

3 研究科運営委員会は必要と認めたときは、第1項の規定にかかわらず他の大学院または研究所等の教員

等に学位論文の審査員を委嘱することができる。

- 4 研究科運営委員会は、第1項の審査員のうち1人を主任審査員として指名しなければならない。ただし、研究科委員会が必要と認めたときは、第2項の審査員のうち、本大学の教員である者を主任審査員として指名することができる。

(論文審査要旨の公表)

第20条 博士の学位を授与したときは、その論文の審査要旨は、大学が適当と認める方法によってこれを公表する。

(学位論文の公表)

第21条 博士の学位を授与された者は、授与された日から1年以内に、当該博士論文を、書籍または学術雑誌等により、公表しなければならない。ただし、学位を授与される前に、印刷公表されているときは、この限りではない。

- 2 前項の規定にかかわらず博士の学位を授与された者は、やむを得ない理由がある場合には、研究科運営委員会の承認を受けて、当該論文の全文に代えて、その内容を要約したものを印刷公表することができる。この場合、大学はその論文の全文を求めて応じて閲覧に供するものとする。

- 3 第1項の規定により、公表する場合は、当該論文に「早稲田大学審査学位論文(博士)」と、また前項の規定により公表する場合は、当該論文の要旨に、「早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨」と明記しなければならない。

(学位の名称)

第22条 本大学の授与する学位には、早稲田大学と付記するものとする。

(学位授与の取消)

第23条 本大学において博士、修士学位を授与された者につき、不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したときは、総長は、当該研究科運営委員会および研究科長会の議を経て、すでに授与した学位を取り消し、学位記を返還させ、かつ、その旨を公表するものとする。

VII 修士論文・リサーチペーパー作成に関して

【修士論文（修士課程2年制コース）】

1. 学位

本研究科修士課程2年制コースに通常2年以上4年以内在学し、別に示す所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文の審査および最終試験に合格した者に対して、「修士（スポーツ科学）」の学位が授与される。

2. 提出資格

修士論文の提出資格は、次の要件が満たされていないければならない。

- (1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。
- (2) 提出日までに学費が完納されていること。
- (3) 修士論文計画書が提出済みであること。

3. 修士論文計画書

- (1) 修士論文を提出する者は、その年度の6月末日までに、所定の用紙を使用して修士論文計画書を提出しなければならない。
- (2) 修士論文計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認印を受けていなければならない。
- (3) 修士論文計画書の提出については、5月に掲示にて知らせる。

4. 修士論文提出期日および受付期間

- (1) 提出締切日 1月中旬予定(詳細は掲示にて発表)
- (2) 提出受付時間 午前10時～午後4時(ただし、12:30～1:30を除く)
- (3) 提出受付場所 大学院スポーツ科学研究科(所沢総合事務センター)
- (4) ①受付時間以外には理由の如何を問わず受理しない。
②郵送による提出を認めない。
③代理人による提出には委任状を必要とする。

5. 修士論文要旨の作成

修士論文要旨はA4版2枚で作成する。

6. 修士論文の作成

- (1) 提出部数は審査員の人数分とする。
- (2) 修士論文は、横書きとし、A4判用紙等にパソコン等で片面打ちとする。また、欧文の場合はダブルスペースとする。
- (3) 表紙は、所定の見本にならって、題目(和文・英文)、氏名(和文・英文)、研究指導教員名などを記入する。
- (4) 製本の仕方は、修士論文要旨、表紙、目次、本文の順に、A4判ファイルにとじる。
表側に、所定の用紙を使用した審査依頼書を貼って提出する。

7. 公開審査会の開催

修士論文審査会は学生発表部分を公開とし、修士論文要旨は要旨集として予め配付する。

8. 修士論文審査員

- (1) 修士論文の審査員は、スポーツ科学研究科の修士課程研究指導担当教員3名以上をもって構成し、

その内の1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

- (2) 各審査員は、研究科運営委員会の議を経て決定する。

9. 修士論文の開示および公開

口頭試問終了後、修正した修士論文全文を電子媒体により研究科事務所に提出させ、それを学内ネットワーク上で開示する。また、要旨については、インターネットを通じて学外に公開する。ただし、提出者からの正当な理由による申し出があった場合には、本文の開示および要旨の公開を一定期間延期することができる。本人が許諾する場合には、学位論文の本文をインターネットを通じて学外に公開することができる。

【 リサーチペーパー（修士課程 1年制コース）】

1. 学位

本研究科修士課程1年制コースに通常1年以上2年以内在学し、別に示す所要の授業科目を30単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、リサーチペーパーの審査および最終試験に合格した者に対して「修士(スポーツ科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格

リサーチペーパーの提出資格は、次の要件が満たされていなければならない。

- (1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。
- (2) 提出日までに学費が完納されていること。
- (3) リサーチペーパー計画書が提出済みであること。

3. リサーチペーパー計画書

- (1) リサーチペーパーを提出する者は、その年度の所定の期日(10月頃)までに、所定の用紙を使ったリサーチペーパー計画書を提出しなければならない。
- (2) リサーチペーパー計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認印を受けていなければならない。
- (3) リサーチペーパー計画書の提出についての詳細は入学時に知らせる。

4. リサーチペーパー提出期日および受付期間

- (1) 提出締切日 1月中旬予定(詳細は掲示にて発表)
- (2) 提出受付時間 午前10時～午後4時(ただし、12:30～1:30を除く)
- (3) 提出受付場所 大学院スポーツ科学研究科(所沢総合事務センター)
- (4) ①受付時間以外には理由の如何を問わず受理しない。
②郵送による提出を認める。
③代理人による提出には委任状を必要とする。

5. リサーチペーパー要旨の作成

リサーチペーパー要旨はA4版2枚で作成する。

6. リサーチペーパーの作成

- (1) 提出部数は審査員の人数分とする。
- (2) リサーチペーパーは、横書きとし、A4判用紙等にパソコン等で片面打ちとする。また、欧文の場合はダブルスペースとする。
- (3) 表紙は、所定の見本にならって、題目(和文・英文)、氏名(和文・英文)、研究指導教員名などを記入する。

- (4) 製本の仕方は、リサーチペーパー要旨、表紙、目次、本文の順に、A4判ファイルにとじる。
所定の用紙を使用した審査依頼書を表面に貼付して提出する。

7. 公開審査会の開催

リサーチペーパー審査会は、学生発表部分を公開とし、リサーチペーパー要旨は要旨集として予め配付する。

8. リサーチペーパー審査員

(1) リサーチペーパーの審査員は、スポーツ科学学術院教員3名以上をもって構成し、その内の修士課程研究指導担当教員1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

(2) 各審査員は、研究科運営委員会の議を経て決定する。

9. リサーチペーパーの開示および公開

口頭試問終了後、修正したリサーチペーパー全文を電子媒体により研究科事務所に提出させ、それを学内ネットワーク上で開示する。また、要旨については、インターネットを通じて学外に公開する。ただし、提出者からの正当な理由による申し出があった場合には、本文の開示および要旨の公開を一定期間延期することができる。本人が許諾する場合には、学位論文の本文をインターネットを通じて学外に公開することができる。

Ⅷ 博士論文作成に関して（課程による者）

1. 学位について

本研究科博士後期課程に通常3年以上6年以内在学し、所要の研究指導を受けた上、博士学位論文の審査および試験に合格した者に対して「博士（スポーツ科学）」の学位が授与される。

2. 提出資格について

博士学位論文の提出資格は、次の要件が満たされていなければならない。

- (1) 早稲田大学大学院学則第14条に定めるもののほか、次の(2)または(3)の要件を満たしていなければならない。
- (2) 博士後期課程在学が3年以上の場合は、原則として研究業績が、博士学位論文に関連して、申請者が第一著者である公表学術論文または著書が、印刷中のものを含めて1編(冊)以上あること。
- (3) 博士後期課程在学が3年に満たず提出しようとする場合は、(2)の条件を満たした上で、申請者を第一著者とする公表学術論文または著書が、申請者の所属する研究グループ以外の研究者により、積極的な評価を受けて、公表学術論文または著書に3回以上引用されていること。

3. 博士学位申請に関する提出書類について

- | | |
|------------------------|-----|
| (1) 学位申請書(大学所定) | 1部 |
| (2) 学位論文 | 3部 |
| (3) 論文概要書 | 1部 |
| (4) 履歴書(スポーツ科学研究科所定) | 1部 |
| (5) 研究業績書(スポーツ科学研究科所定) | 1部 |
| (6) 研究業績書に記載した学術論文等の抜刷 | 各1部 |
| (7) 大学院における成績証明書(修士課程) | 1部 |

4. 博士学位論文等の提出期日について

例年、5月と10月の2回受け付ける。詳細な期日等はその都度掲示等で伝達する。

5. 博士学位論文等の作成要領について

(1) 博士学位論文

使用言語は原則として日本語とする。ただし、英語での提出を妨げないが英語の場合は和訳を提出させることがある。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判用紙等にパソコン等で片面打ちとし、活字またはその他印字によるものとする。英文の場合はダブルスペースとする。

(2) 論文概要書

使用言語は原則として日本語とする。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判用紙等にパソコン等で片面打ちとし、活字またはその他印字によるものとする。

字数は、2,000字以内とする。

6. 博士学位論文審査員について

論文審査員は、スポーツ科学研究科の博士後期課程研究指導担当の教員または教員であった者3名以上をもって構成し、その内研究科運営委員の教員1名を主任審査員とする。必要な場合には、修士課程研究指導担当教員および他の大学院あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

7. 審査について

(1) 予備審査

提出された学位論文および書類等をもとに学位論文の受理を決定する予備審査を行う。

(2) 公開審査会

論文審査にあたり、公開審査会を開催する。

※ 博士後期課程に3年以上在学し、かつ所要の研究指導を受けて退学した場合(通称、満期退学または単位取得退学)は、退学した日から起算して3年以内に限り『課程による者』として博士学位論文を提出することができる。なお、退学後3年以内とは、博士学位論文の「受理」を決定する運営委員会の開催日が、3年以内にあることであり、例年、受理を決定する運営委員会は6月と11月に開催される。

※ 審査に合格した学位論文は、本学中央図書館・所沢図書館・国会図書館に配架し閲覧に供する。

また、学内外から要望があった場合は、希望者にコピーのサービスをするのであらかじめご了承願いたい。

IX 人を対象とする研究および動物実験に関する規程

「人を対象とする研究に関する倫理規程」および「動物実験実施規程」は、大学で定められている。スポーツ科学研究科に所属する学生は、上記規程を充分遵守のうえ研究活動に精進されることを期待する。

なお、規定に従い研究計画を申請する際は、指導教員と充分相談のうえ申請すること。

X 研究生制度について

本研究科は、大学院学則第57条の定めるところにより本研究科博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上、研究生として入学を許可することがある。(出願の時期、手続き方法等については掲示で伝達する。)

なお、大学院研究生に関する規程第3条に規定する学費以外に学会費を所定額徴収する。

以下「大学院研究生に関する規程」の抜粋

(出願手続)

第2条 研究生として入学を志願する者は、所定の願書により、当該研究科長に願い出なければならない。

(入学手続、学費)

第3条 研究生として入学を許可された者は、次の区分による所定の学費を納入して、学生証の交付を受けなければならない。

- 一 研究指導料 博士後期課程の新3年生の授業料の半額。
- 二 演習料・実験実習料 博士後期課程の新3年生の演習料または実験実習料の全額。ただし、その年度の前期において学位を取得した場合は半額。

2 前項の学費の分納期は、次のとおりとする。

- 一 研究指導料 第1期 全額
- 二 演習料・実験実習料 第1期 半額 第2期 半額

(在学期間)

第4条 研究生の在学期間は1年とする。ただし、研究指導を継続して受けようとする時は、原則として2回に限り延長することができる。

2 在学期間の延長を希望する者は、毎年度の終わりまでに、理由を付して、当該研究科長に願いでなければならぬ。

X I スポーツ科学研究科学科目配当

1. 学科目配当の構成

課程	研究領域・コース	科目区分
修士課程 2年制コース	スポーツ文化研究領域 スポーツビジネス研究領域 スポーツ医科学研究領域 身体運動科学研究領域 コーチング科学研究領域	研究指導 修士論文 演習(1) 演習(2) 講義科目 実習科目
修士課程 1年制コース	トップスポーツマネジメントコース スポーツクラブマネジメントコース 健康スポーツマネジメントコース 介護予防マネジメントコース	研究指導 リサーチペーパー ¹ 演習(1) マネジメント科目 基礎選択科目
博士後期 課程	スポーツ文化研究領域 スポーツビジネス研究領域 スポーツ医科学研究領域 身体運動科学研究領域 コーチング科学研究領域	研究指導 博士論文 講義科目

2. 科目の説明

課程	科目区分	配当学年	期間	単位	備考
修士課程 2年制 コース	研究指導	1・2年	通年	無	曜日時限設定なし
	修士論文	2年	—	無	
	演習(1)	1・2年	通年	4単位	
	演習(2)	1・2年	通年	4単位	
	講義科目	1・2年	半期	2単位	
	実習科目	1・2年	通年	2単位	
修士課程 1年制 コース	研究指導	1年	通年	無	曜日時限設定なし
	リサーチペーパー ¹	1年	—	無	
	演習(1)	1年	通年	4単位	
	マネジメント科目	1年	半期または 半期の半分	2単位または 1単位	
	基礎選択科目	1年	半期または 半期の半分	2単位または 1単位	
博士後期 課程	研究指導	1・2・3年	通年	無	曜日時限設定なし
	博士論文	3年	—	無	
	講義科目	1・2・3年	通年・半期	2~4単位	希望者のみ

注意:集中講義として行う場合は期間相当分を実施

3. 大学院スポーツ科学研究科学科目配当表

卷末に掲載

X II 修了要件・学科目の履修方法

— 修士課程 —

【 修了要件 】

1. 修士2年制コース

修士2年制コースの修了要件は、通常2年以上4年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上(研究指導の評価が2年以上にわたり合格「P」であること)、修士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士(スポーツ科学)」の学位が授与される。

ただし、優れた業績を上げた者について本研究科運営委員会が認めた場合に限り、修士課程に1年以上在学すれば修了できる。

2. 修士1年制コース

修士1年制コースの修了要件は、通常1年以上2年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上(研究指導の評価が合格「P」であること)、リサーチペーパーの審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士(スポーツ科学)」の学位が授与される。

【 授業科目の履修方法 】

1. 修士課程(2年制コース)

(1) 研究指導および修士論文

研究指導を2年間受け、修士論文に合格する。なお、研究指導および修士論文に単位はない。

(2) 必修科目

各自が所属する研究指導の演習(1)、(2)の計8単位を履修しなければならない。

(3) 選択科目

演習科目、講義科目の中から研究領域にとらわれず22単位(以上)を履修しなければならない。ただし、1年制コース設置の「基礎選択科目」は履修することができない。

各自が所属する研究指導以外の演習科目は、2科目8単位以内に限り、修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の演習科目を登録する場合は、事前に当該演習科目の担当教員に了解を得なければならない。

(4) 各学年において登録できる授業科目の登録制限単位は30単位とする。

(5) 上記の履修方法を表にすると下記のとおりとなる。

必修/選択	科目区分	科目の説明	修了要件
必 修	研究指導	所属する研究指導	2年分合格
	修士論文		合格
	演習科目	所属する研究指導の演習(1)(2)	8単位
選 択	演習科目	所属する研究指導以外の演習(1)(2)	22単位(以上)
	講義科目 実習科目	領域にとらわれず自由に選択 (ただし、1年制コース「基礎選択科目」を含まない)	
修了単位数			30単位(以上)

2. 修士課程(1年制コース)

(1) 研究指導およびリサーチペーパー

研究指導およびリサーチペーパーに合格する。

(2) 必修科目

必修科目として、次の2つの科目区分から合計10単位(以上)を履修しなければならない。

①各自が所属する研究指導の演習(1)を4単位。

②各自が所属するコース設置のマネジメント科目から6単位(以上)。

(3) 選択科目

選択科目として、必修科目以外の研究科設置科目(演習科目、マネジメント科目、基礎選択科目、その他の講義科目)から、修了に必要な単位数30単位(以上)となるよう科目を履修する。この場合、2年制コース設置科目から履修してもよい。

各自が所属する研究指導以外の演習科目は、演習科目(1)を2科目8単位以内に限り、修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の演習科目を登録する場合は、事前に当該演習科目の担当教員に了解を得なければならない。

(4) 1年間に登録できる授業科目の登録制限単位は45単位とする。

(5) 上記の履修方法を表にすると下記のとおりとなる。

必修/選択	科目区分	科目の説明	修了要件
必 修	研究指導		合格
	リサーチペーパー		合格
	演習科目	所属する研究指導の演習(1)	4単位
	マネジメント科目		6単位(以上)
選 択	演習科目	所属する研究指導以外の演習(1)	30単位より必修科目で取得した単位を除した単位数
	マネジメント科目 基礎選択科目 講義科目等	領域・コースにとらわれず自由に選択(2年制コース設置科目を含む)	
	修了単位数		30単位(以上)

3. 通年科目履修の弾力化

半期休学・半期留学をした際の通年科目(研究指導、演習)の履修について、研究指導担当教員の許可がある場合に限り、通年科目を半期に分割し、継続して履修することができる。ただし、継続履修できるのは、同じ担当教員の科目を登録した場合に限る。

4. 他箇所設置科目および入学前修得科目

(1) 本大学の他箇所に設置されている大学院生対象科目を指導教員の許可を得て履修することができる。

修得した授業科目の単位のうち、10単位以内に限り講義科目の代替科目として修了に必要な単位に算入することができる。この場合の登録単位数は、当該年度の登録制限単位数の中に含まれる。

上記の他に、自由科目(修了に必要な単位とはならぬ科目)として他箇所で設置されている科目を履修することができる。

(2) 本研究科在学中に外国の大学院へ留学し、留学先で修得した講義科目の単位のうち、本研究科に設置されている講義科目(研究領域等は問わない)のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限

度として、当該講義科目に振り替えて認定することがある。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。

- (3) 本研究科入学前に、本大学の研究科または他大学大学院(外国の大学院を含む)において修得した講義科目の単位(科目等履修生として修得した単位を含む)のうち、本研究科に設置されている講義科目(研究領域は問わない)のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて認定することがある。なお、本研究科あるいは人間科学研究科の科目等履修生として在学し、本研究科あるいは人間科学研究科スポーツ科学研究領域の演習科目の単位を修得した場合も同様の取り扱いとする。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (4) 上記に規定する単位は、併せて10単位を限度とする。
- (5) 本研究科入学前にスポーツ科学部の学生として、本研究科の科目を先取履修で修得した単位は、14単位を限度として自動的に本研究科の修了単位に計上する。この場合の計上された単位数は、登録制限単位数の中に含まれない。

【 9月修了について 】

修士課程(2年制コース、1年制コース)の学位授与の要件中、3月までに

- ① 修士論文またはリサーチペーパーに関する要件を満たさなかった場合
- ② 所定の単位を充足することができなかつた場合
- ③ 上記 ① ② いずれの要件も満たさなかつた場合

のために、修了に関する要件を具備することができず、そのために引き続き在学する者については、以下の基準によりその年の9月に修士の学位を授与(9月15日付)することができる。

1. 修士論文について

- ① 修了できなかつた年度に「修士論文計画書」または「リサーチペーパー計画書」を提出していること
- ② 9月修了を希望する年度に指導教員の「研究指導」を登録していること
- ③ 9月修了を希望する年度の9月までに修士論文またはリサーチペーパーに関する要件を具備すること

2. 授業科目について

- ① 修士2年制コース:修了所要単位が4単位以内の不足であること
修士1年制コース:修了所要単位が8単位以内の不足であること
- ② 不足単位を修得する場合は、前期終了科目であること
演習科目または講義科目の通年科目を履修する場合は、9月修了の対象とはならない。

3. 手続について

9月修了を希望する場合は、その年度の4月の科目登録時に研究科所定の書類にてその旨研究科長へ届け出なければならない。その場合、指導教員の承認印が必要となる。

— 博士後期課程 —

【 修了要件 】

1. 博士後期課程の修了要件は、通常3年以上6年以内在学し、論文作成のために必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には「博士(スポーツ科学)」の学位が授与される。
2. 授業科目について必要単位はないが、指導教員の指示により、修士課程の授業科目を履修しなければ

ならない場合がある。

3. 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り博士論文を提出し審査および試験を受けることができる。

「3年以内」とは、提出された博士論文の受理を決定する研究科運営委員会が年2回(5月と11月)開催されるが、その開催年月日が退学後3年以内であれば審査および試験を受けることができるということである。

※課程内延長生(実質4年生以上)が博士論文の審査および試験に合格した場合、学位取得日は、合否判定が行われた研究科運営委員会開催日である。また同日を博士課程修了日とするので、学生証を速やかに所沢総合事務センターに返却すること。学費については、学位取得日を含む学期分を納入しなければならない。

【 GCOEプログラム「アクティヴ・ライフを創出するスポーツ科学」参加について】

スポーツ科学研究科では、2009年7月に文部科学省の「グローバルCOEプログラム」の採択を受け、人々の心と身体の健康のみならず、人々が活力をもって生きることのできる地域や社会のあり方をも含む「アクティヴ・ライフ」を実現するため、スポーツ科学の高い専門性と幅広い知識を兼ね備えた人材を育成することを目的として、プログラムを立ち上げた。

本プログラムには、以下の3つの研究プロジェクトが設置されており、参加を希望する博士後期課程の学生は、いずれか一つのプロジェクトに参画して、研究を遂行することになる。

- ・プロジェクトI :IT普及社会における子どもの体力低下抑止と健全育成促進
- ・プロジェクトII :医療・介護(社会保障)負担の軽減と中高年の生きがい創出
- ・プロジェクトIII :人類幸福の実現のためのトップスポーツ興隆の方策追究

またプログラムに参加する学生には、以下の義務を果たすことを課している。

(1) 指導教員の指導の下で、所定の研究業績を挙げるべくプロジェクト研究に参画し、標準年限での博士学位取得を目指すこと。

(2) 本プログラムに設置された所定の科目について、標準履修年限に修得できるように科目登録を行い履修すること。

(3) 毎年春に、学術振興会特別研究員(D1,D2はDC、D3はPD)への申請を行うこと。[申請可能な該当者のみ]

(4) 每年春に実施される「TOEFLテストITP」を受験すること。

(5) 適宜課される各種申請書等について、遅滞なく提出すること。

なお、プログラム参加者には以下の便益がはかられる。

(1) 本プログラムに設置された所定の科目の履修を通じて、学術振興会特別研究員などの研究職に就くための技法を学ぶことができる。

(2) 所定の要件を満たすものは、RAとして雇用され、プロジェクト研究への参画に対して賃金を得ることができる。

(3) 優秀な成績および研究業績を収めたものは、奨励研究費あるいは海外派遣費用の交付を受けることができる。

— 修士課程・博士後期課程 —

【成績】

成績は、次のとおり表示する。

(1) 研究指導

合否区分	合格	不合格
成績通知書	P	Q
成績証明書	P	記載なし

(2) 授業科目、修士論文、リサーチペーパー

合否区分	合 格				不合格
点 数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
成績通知書	A+	A	B	C	F
成績証明書	A+	A	B	C	記載なし

【G P A (Grade Point Average)】

本研究科では、成績を数値に換算し、科目登録した単位あたりの平均値をもとめている。海外に留学する際などに、主に用いられ、算出方法は次のとおり。

成績	換算値	算出方法
A+	4	修了算入科目について、左記の換算値により 1単位あたりの平均値を算出する。
A	3	
B	2	
C	1	G P A = [科目の単位数×その科目に対応する換算値]の総和 総登録単位数 (不合格科目を含む)
F	0	※G P Aは、小数第2位まで表示する

※G P Aは成績通知書により通知する。また、研究科として証明する。

※研究指導、博士学位論文の評価区分(合格:P、不合格:Q)はGPA計算の対象外。

— 科目名称変更 —

【修士課程】

講義科目

下記の研究指導は名称が変更となっている。変更後と変更前とは同一科目として取り扱うものとする。

2010年度以降科目名	2009年度以前科目名
スポーツ神経科学特論	生体機能学特論
脳・運動の生理学特論	脳科学からみる運動生理学特論

2009年度以降科目名	2008年度以前科目名
マーケティングリサーチ	SPSSとマーケティング

2008年度以降科目名	2007年度以前科目名
スポーツ組織特論	組織と人材

2007年度以降科目名	2006年度以前科目名
スポーツの法と契約	スポーツに関する法と契約
SPSSとマーケティング	統計学

— 授業時間 —

授業時間は下記のとおりである。所沢キャンパス以外のキャンパスで行う授業については、移動に伴う時間を考慮し、科目の登録を行う必要がある。

1時限目 9:00～10:30

2時限目 10:40～12:10

3時限目 13:00～14:30

4時限目 14:45～16:15

5時限目 16:30～18:00

6時限目 18:15～19:45

7時限目 19:55～21:25

X III 教育職員免許状取得について

1. スポーツ科学研究科で取得できる免許の種類及び教科は、次のとおりである。

免許状の種類：中学校教諭専修免許状
：高等学校教諭専修免許状

免許状の教科：保健体育

2. 免許状取得の条件

本研究科入学以前に、中学校教諭一種免許状又は高等学校教諭一種免許状を取得した者、又は教育職員免許法の5条第一項別表第1の所要資格を充たしている者。(「5条第一項別表第1の所要資格」とは、一種免許状取得に必要な「教職および教科に関する科目」の法令で定める単位数を言う)

なお、この免許法の所要資格のうち、すでに大学において、教科又は教職に関する専門教育科目の一部を履修している者は、スポーツ科学部科目等履修生として別途入学し、不足している科目の単位を修得することにより、本研究科在籍中に免許法の所要資格を充たすことができる。

大学院学生がスポーツ科学部科目等履修生として、学部科目の聴講ができる許可条件は、次のとおりである。

- (1) 教科又は教職に関する専門教育科目の一部を、すでに出身学部において履修している者に限る。現職の教員で、すでに一種免許状を修得している者を除く。
- (2) 研究科長及び指導教員が、正規の授業に支障がないと認めた科目・単位数に限る。
- (3) 科目等履修生としての学籍は、聴講する学部が所管し、成績通知書の配布、証明書の発行は当該学部が行う。
- (4) 聴講料は一部有料。

詳細については、所沢総合事務センターへ問い合わせること。

3. 免許状取得に必要な科目

別表のスポーツ科学研究科設置科目のなかから24単位以上を履修し、修士の学位を得ることにより、保健体育(中学・高校)の専修免許状が取得できる。(24単位の履修方法は分野に関係なく任意に履修して可)

4. その他

- (1) 免許状の申請は、本人が、自分の住所地又は教員採用学校所在地の授与権者(都道府県教育委員会)にたいして行う。ただし、日本の大学(学部)を卒業しており、かつ3月の修了予定者に限り、大学がとりまとめて申請を代行(一括申請)し、学位授与当日に免許状を手渡せるようとりはからっている。
また、免許状授与証明書の請求は、授与権者に行うこと。
- (2) 1997年6月「教育職員免許法の特例等に関する法律」が成立し、中学校免許状を取得する場合は、7日以上の介護等体験が義務付けられた。詳細については、教育学部から交付される「各種資格取得の手引」を参照すること。

別表1 2010年度対象科目

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営 管理学、体育社会学及び運動学(運動方法学を含む)	武道論演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) スポーツ倫理学・教育学演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) スポーツ社会学演習(1)・(2) スポーツ史演習(1)・(2) 舞踊論演習(1)・(2) スポーツ経営学演習(1)・(2) 健康スポーツ論演習(1)・(2) スポーツビジネススマネジメント論演習(1)・(2) スポーツクラブビジネス論演習(1)・(2) スポーツ組織論演習(1)・(2) スポーツビジネス・アドミニストレーション演習(1)・(2) スポーツ心理学演習(1)・(2) スポーツ情報処理演習(1)・(2) スポーツ認知神経科学演習(1)・(2) コーチング科学Ⅰ 演習(1)・(2) コーチング科学Ⅱ 演習(1)・(2) コーチング科学Ⅲ 演習(1)・(2) コーチング科学Ⅳ 演習(1)・(2) コーチング科学Ⅴ 演習(1)・(2) スポーツビジネスマーケティング演習(1)・(2) スポーツクラブマネジメント演習(1) 健康スポーツマネジメント演習(1) レクリエーション指導法演習 武道思想史特論 スポーツ人類学特論 スポーツ表象特論 スポーツ社会学特論 スポーツ史特論 舞踊表現特論 スポーツ経営学特論 健康スポーツマネジメント特論 スポーツビジネススマネジメント特論 スポーツクラブビジネス特論 トップスポーツビジネス特論 スポーツ組織特論 スポーツビジネス・アドミニストレーション特論 スポーツ統計学特論 スポーツ情報処理特論 スポーツ認知神経科学特論 コーチング特論 コーチ学特論 コーチング心理学特論 パフォーマンス評価 スポーツ戦術戦略特論 スポーツの法と契約 スポーツファイナンス特論 スポーツプロモーション特論 トップスポーツマネジメント特論 健康スポーツマネジメント研究法 スポーツクラブマネジメント研究法

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
生理学(運動生理学を含む)	生体ダイナミクス演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) 統合運動神経生理学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) トレーニング科学演習(1)・(2) 老年リハビリテーション演習 スポーツ神経科学特論 生体ダイナミクス特論 運動生化学特論 バイオメカニクス特論 スポーツ生理学特論 脳・運動の生理学特論 コーチングバイオメカニクス特論 コンディショニング特論 老年学特論 アスレティックトレーニング特論 身体運動科学基礎論
衛生学及び公衆衛生学	運動免疫学演習(1)・(2) 健康運動疫学演習(1)・(2)
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	スポーツ神経精神医科学演習(1)・(2) スポーツ健康管理学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) 健康行動科学演習(1)・(2) スポーツ整形外科学演習(1)・(2) 予防医学演習(1)・(2) スポーツ神経科学演習(1)・(2) 健康スポーツ指導法演習 メディカルコンディショニング特論 スポーツ神経精神医科学特論 スポーツ内科学特論 運動器発育・発達特論 スポーツ外科学特論 運動器解剖実習 健康行動科学特論 スポーツ整形外科学特論 精神生理学特論 健康指導コミュニケーション スポーツ医学概論
保健体育の教職に関する科目	体育科教育学演習(1)・(2) 学校体育マネジメント演習(1) スポーツ教育学特論 体育科教育特論 体育科教育学特論 体育科カリキュラム特論 体育科教育評価特論 体育科教育内容特論

別表1 2009年度対象科目

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営 管理学、体育社会学」及び運動学 (運動方法学を含む)	武道論演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) スポーツ倫理学・教育学演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) スポーツ社会学演習(1)・(2) スポーツ史演習(1)・(2) 舞踊論演習(1)・(2) スポーツ経営学演習(1)・(2) 健康スポーツ論演習(1)・(2) スポーツビジネスマネジメント論演習(1)・(2) スポーツクラブビジネス論演習(1)・(2) スポーツ組織論演習(1)・(2) スポーツビジネス・アドミニストレーション演習(1)・(2) スポーツ心理学演習(1)・(2) スポーツ情報処理演習(1)・(2) スポーツ認知神経科学演習(1)・(2) コーチング科学Ⅰ 演習(1)・(2) コーチング科学Ⅱ 演習(1)・(2) コーチング科学Ⅲ 演習(1)・(2) コーチング科学Ⅳ 演習(1)・(2) コーチング科学Ⅴ 演習(1)・(2) スポーツクラブマネジメント演習(1) 健康スポーツマネジメント演習(1) レクリエーション指導法演習 武道思想史特論 スポーツ人類学特論 スポーツ表象特論 スポーツ社会学特論 スポーツ史特論 舞踊表現特論 スポーツ経営学特論 健康スポーツマネジメント特論 スポーツビジネスマネジメント特論 スポーツクラブビジネス特論 トップスポーツビジネス特論 スポーツ組織特論 スポーツビジネス・アドミニストレーション特論 スポーツ統計学特論 スポーツ情報処理特論 スポーツ認知神経科学特論 コーチング特論 コーチ学特論 コーチング心理学特論 パフォーマンス評価 スポーツ戦術戦略特論 スポーツの法と契約 スポーツファイナンス特論 スポーツプロモーション特論 トップスポーツマネジメント特論
生理学(運動生理学を含む)	生体ダイナミクス演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2)

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
	運動生化学演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) 統合運動神経生理学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) トレーニング科学演習(1)・(2) 老年リハビリテーション演習 生体機能学特論 生体ダイナミクス特論 スポーツ栄養学特論 運動生化学特論 バイオメカニクス特論 スポーツ生理学特論 脳科学からみる運動生理学特論 コーチングバイオメカニクス特論 コンディショニング特論 老年学特論 身体運動科学基礎論
衛生学及び公衆衛生学	運動免疫学演習(1)・(2) 健康運動疫学演習(1)・(2)
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	スポーツ神経精神医科学演習(1)・(2) スポーツ健康管理学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) 健康行動科学演習(1)・(2) スポーツ整形外科学演習(1)・(2) 予防医学演習(1)・(2) スポーツ神経科学演習(1)・(2) 健康スポーツ指導法演習 メディカルコンディショニング特論 スポーツ神経精神医科学特論 スポーツ内科学特論 運動器発育・発達特論 スポーツ外科学特論 運動器解剖実習 健康行動科学特論 スポーツ整形外科学特論 精神生理学特論 健康指導コミュニケーション スポーツ医学概論
保健体育の教職に関する科目	体育科教育学演習(1)・(2) 学校体育マネジメント演習(1) スポーツ教育学特論 体育科教育特論 体育科教育学特論 体育カリキュラム特論 体育科教育評価特論 体育科教育内容特論

別表1 2008年度対象科目

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営 管理学、体育社会学」及び運動学 (運動方法学を含む)	武道論演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) スポーツ倫理学・教育学演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) スポーツ社会学演習(1)・(2) スポーツ史演習(1)・(2) 舞踊論演習(1)・(2) スポーツ経営学演習(1)・(2) 健康スポーツ論演習(1)・(2) スポーツビジネスマネジメント論演習(1)・(2) スポーツクラブビジネス論演習(1)・(2) スポーツ組織論演習(1)・(2) スポーツビジネス・アドミニストレーション演習(1)・(2) 身体形態学演習(1)・(2) スポーツ心理学演習(1)・(2) スポーツ情報処理演習(1)・(2) スポーツ認知神経科学演習(1)・(2) コーチング科学Ⅰ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅱ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅲ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅳ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅴ演習(1)・(2) スポーツクラブマネジメント演習(1) 健康スポーツマネジメント演習(1) レクリエーション指導法演習 武道思想史特論 スポーツ人類学特論 スポーツ表象特論 スポーツ社会学特論 スポーツ史特論 舞踊表現特論 スポーツ経営学特論 健康スポーツマネジメント特論 スポーツビジネスマネジメント特論 スポーツクラブビジネス特論 トップスポーツビジネス特論 スポーツ組織特論 スポーツビジネス・アドミニストレーション特論 スポーツ統計学特論 スポーツ情報処理特論 スポーツ認知神経科学特論 コーチング特論 コーチ学特論 コーチング心理学特論 パフォーマンス評価 スポーツ戦術戦略特論 スポーツの法と契約 スポーツファイナンス特論 スポーツプロモーション特論 トップスポーツマネジメント特論

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
生理学(運動生理学を含む)	生体ダイナミクス演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) 統合運動神経生理学演習(1)・(2) トレーニング科学演習(1)・(2) 老年リハビリテーション演習 バイオテクノロジー特論 生体機能学特論 生体ダイナミクス特論 スポーツ栄養学特論 運動生化学特論 バイオメカニクス特論 スポーツ生理学特論 脳科学からみる運動生理学特論 コーチングバイオメカニクス特論 コンディショニング特論 老年学特論 身体運動科学基礎論
衛生学及び公衆衛生学	運動免疫学演習(1)・(2) 健康運動疫学演習(1)・(2)
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	スポーツ神経精神医科学演習(1)・(2) スポーツ健康管理学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) 健康行動科学演習(1)・(2) スポーツ整形外科学演習(1)・(2) スポーツ神経科学演習(1)・(2) 健康スポーツ指導法演習 メディカルコンディショニング特論 スポーツ神経精神医科学特論 スポーツ内科学特論 運動器発育・発達特論 スポーツ外科学特論 運動器解剖実習 健康行動科学特論 スポーツ整形外科学特論 精神生理学特論 健康指導コミュニケーション スポーツ医学概論
保健体育の教職に関する科目	体育科教育学演習(1)・(2) 学校体育マネジメント演習(1) スポーツ教育学特論 体育科教育特論 体育科教育学特論 体育科カリキュラム特論 体育科教育評価特論 体育科教育内容特論

別表1 2007年度対象科目

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学」及び運動学(運動方法学を含む)	武道論演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) スポーツ倫理学・教育学演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) スポーツ社会学演習(1)・(2) スポーツ経営学演習(1)・(2) 健康スポーツ論演習(1)・(2) スポーツビジネスマネジメント論演習(1)・(2) スポーツクラブビジネス論演習(1)・(2) スポーツ情報処理演習(1)・(2) コーチング科学Ⅰ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅱ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅲ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅳ演習(1)・(2) スポーツクラブマネジメント演習(1) 健康スポーツマネジメント演習(1) 身体形態学演習(1)・(2) スポーツ心理学演習(1)・(2) 武道思想史特論 スポーツ人類学特論 スポーツ表象特論 スポーツ社会学特論 スポーツ経営学特論 健康スポーツマネジメント特論 スポーツビジネスマネジメント特論 スポーツクラブビジネス特論 トップスポーツビジネス特論 スポーツ統計学特論 スポーツ情報処理特論 コーチング特論 コーチ学特論 コーチング心理学特論 パフォーマンス評価 スポーツの法と契約 スポーツファイナンス特論 スポーツプロモーション特論 トップスポーツマネジメント特論
生理学(運動生理学を含む)	トレーニング科学演習(1)・(2) 生体ダイナミクス演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) 生体機能学特論 生体ダイナミクス特論 スポーツ栄養学特論 運動生化学特論 バイオメカニクス特論 スポーツ生理学特論 コーチングバイオメカニクス特論 コンディショニング特論

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
生理学(運動生理学を含む)	バイオテクノロジー特論 老年リハビリテーション演習 老年学特論 身体運動科学基礎論
衛生学及び公衆衛生学	運動免疫学演習(1)・(2) 健康運動疫学演習(1)・(2)
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	スポーツ神経科学演習(1)・(2) スポーツ神経精神医科学演習(1)・(2) スポーツ健康管理学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) メディカルコンディショニング特論 スポーツ神経精神医科学特論 スポーツ内科学特論 運動器発育・発達特論 スポーツ外科学特論 精神生理学特論 運動器解剖実習 スポーツ医学概論
保健体育の教職に関する科目	学校体育マネジメント演習(1) スポーツ教育学特論 体育科教育学特論 体育科カリキュラム特論 体育科教育評価特論 体育科教育内容特論

別表1 2006年度対象科目

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学」及び運動学(運動方法を含む)	武道論演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) スポーツ倫理学・教育学演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) スポーツ社会学演習(1)・(2) スポーツ経営学演習(1)・(2) 健康スポーツ論演習(1)・(2) スポーツビジネスマネジメント論演習(1)・(2) スポーツクラブビジネス論演習(1)・(2) スポーツ情報処理演習(1)・(2) コーチング科学Ⅰ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅱ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅲ演習(1)・(2) コーチング科学Ⅳ演習(1)・(2) スポーツクラブマネジメント演習(1) 健康スポーツマネジメント演習(1) 身体形態学演習(1)・(2) スポーツ心理学演習(1)・(2) 武道思想史特論 スポーツ人類学特論 スポーツ表象特論 スポーツ社会学特論 スポーツ経営学特論 健康スポーツマネジメント特論 スポーツビジネスマネジメント特論 スポーツクラブビジネス特論 トップスポーツビジネス特論 スポーツ統計学特論 スポーツ情報処理特論 コーチング特論 コーチ学特論(総合講座) コーチング心理学特論 パフォーマンス評価 スポーツに関する法と契約 スポーツファイナンス特論
生理学(運動生理学を含む)	トレーニング科学演習(1)・(2) 生体ダイナミクス演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) 生体機能学特論 生体ダイナミクス特論 スポーツ栄養学特論 運動生化学特論 バイオメカニクス特論 スポーツ生理学特論 コーチングバイオメカニクス特論 コンディショニング特論

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
衛生学及び公衆衛生学	運動免疫学演習(1)・(2) 健康運動疫学演習(1)・(2)
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	スポーツ神経科学演習(1)・(2) スポーツ神経精神医科学演習(1)・(2) スポーツ健康管理学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) メディカルコンディショニング特論 スポーツ神經精神医科学特論 スポーツ内科学特論 運動器発育・発達特論 スポーツ外科学特論 精神生理学特論 運動器解剖実習
保健体育の教職に関する科目	学校体育マネジメント演習(1) スポーツ教育学特論 体育科教育学特論 体育科カリキュラム特論 体育科教育評価特論 体育科教育内容特論

XIV 学費

1. 修士課程(2年制コース)

2010 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費			合 計	
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	学会費			
						入会金	年会費			
初 年 度	入学時	200,000	367,500	75,000	35,000	1,500	2,000	2,500	683,500	
	後期	—	367,500	75,000	35,000	1,500	—	2,500	481,500	
	計	200,000	735,000	150,000	70,000	3,000	2,000	5,000	1,165,000	
二 年 度	前期	—	370,500	75,000	35,000	1,500	—	2,500	484,500	
	後期	—	370,500	75,000	35,000	1,500	—	2,500	484,500	
	計	—	741,000	150,000	70,000	3,000	—	5,000	969,000	

* 本大学卒業生（修了生）の入学金は免除する。

* スポーツ科学部卒業生の学会費入会金は免除する。

* 人間科学部卒業生（2002 年度以前入学者）の学会費入会金は免除する。

2009 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費			合 計	
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	学会費			
						入会金	年会費			
二 年 度	前期	—	346,000	75,000	35,000	1,500	—	2,500	460,000	
	後期	—	346,000	75,000	35,000	1,500	—	2,500	460,000	
	計	—	692,000	150,000	70,000	3,000	—	5,000	920,000	

2. 修士課程(1年制コース)

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費			合 計	
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	学会費			
						入会金	年会費			
初 年 度	入学時	200,000	459,500	75,000	35,000	1,500	2,000	2,500	775,500	
	後期	—	459,500	75,000	35,000	1,500	—	2,500	573,500	
	計	200,000	919,000	150,000	70,000	3,000	2,000	5,000	1,349,000	

* 本大学卒業生（修了生）の入学金は免除する。

* スポーツ科学部卒業生の学会費入会金は免除する。

* 人間科学部卒業生（2002 年度以前入学者）の学会費入会金は免除する。

3. 博士後期課程

2010 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費			合 計	
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	学会費			
						入会金	年会費			
初 年 度	入学時	200,000	304,500	40,000	35,000	1,500	2,000	2,500	585,500	
	後期	—	304,500	40,000	35,000	1,500	—	2,500	383,500	
	計	200,000	609,000	80,000	70,000	3,000	2,000	5,000	969,000	

年 度	納入期	学 費				諸会費			合 計	
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増進互助会費	学会費			
						入会金	年会費			
二 年 度	前期	—	306,500	40,000	35,000	1,500	—	2,500	385,500	
	後期	—	306,500	40,000	35,000	1,500	—	2,500	385,500	
	計	—	613,000	80,000	70,000	3,000	—	5,000	771,000	
三 年 度	前期	—	308,500	40,000	35,000	1,500	—	2,500	387,500	
	後期	—	308,500	40,000	35,000	1,500	—	2,500	387,500	
	計	—	617,000	80,000	70,000	3,000	—	5,000	775,000	

* 本大学卒業生（修了生）の入学金は免除する。

* スポーツ科学部卒業生、スポーツ科学研究科修了生の学会費入会金は免除する。

* 人間科学部卒業生（2002年度以前入学者）の学会費入会金は免除する。

2009 年度入学者

(単位:円)

年 度	納入期	学 費				諸会費			合 計	
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増進互助会費	学会費			
						入会金	年会費			
二 年 度	前期	—	281,500	40,000	35,000	1,500	—	2,500	360,500	
	後期	—	281,500	40,000	35,000	1,500	—	2,500	360,500	
	計	—	563,000	80,000	70,000	3,000	—	5,000	721,000	
三 年 度	前期	—	281,500	—	35,000	1,500	—	2,500	320,500	
	後期	—	281,500	—	35,000	1,500	—	2,500	320,500	
	計	—	563,000	—	70,000	3,000	—	5,000	641,000	

2008 年度入学者

(単位:円)

年 度	納入期	学 費				諸会費			合 計	
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増進互助会費	学会費			
						入会金	年会費			
三 年 度	前期	—	281,500	—	35,000	—	—	2,500	319,000	
	後期	—	281,500	—	35,000	—	—	2,500	319,000	
	計	—	563,000	—	70,000	—	—	5,000	638,000	

4. 所定年限以上在学する学生(延長生)

判定	授業料	施設費	実験演習料
研究指導のみ残っている			
不足単位数はあるが研究指導は修了している	算出基準の 50%	算出基準の 1/2 (博士後期課程は 徴収せず)	算出基準の全額
不足単位数が 14 単位以下で 研究指導と授業科目を履修	算出基準の 70%		
不足単位数が 15 単位以上で 研究指導と授業科目を履修	算出基準の100%		

※算出基準とは、修士課程 2 年生、博士後期課程 3 年生の学期所定額。

他に、諸会費(学生健康増進互助会費、学会費)も併せて徴収する。

5. 学費未納による抹籍

学費未納の場合は、以下の日程で自動的に抹籍(本学学生の身分を失う)となり、学費が納入された学期末に遡って退学とみなす。この場合、学費未納学期の在学年数および成績が無効となるので注意すること。また、抹籍日以降、抹籍の取消しは一切認められない。

なお、特別の事情により学費納入が遅れる場合は「学費延納願」を提出すること。提出のない場合は、各学期の終了日を以って抹籍となる。抹籍日以前に離籍を希望する場合は、「退学願」を提出のこと。

「学費延納願」を提出した場合

判定	授業料	施設費	実験演習料
前期分	5月1日	翌年1月10日	3月31日
後期分	10月1日	翌年7月1日	9月20日

「学費延納願」を提出しない場合

判定	授業料	施設費	実験演習料
前期分	5月1日	9月20日	3月31日
後期分	10月1日	翌年3月31日	9月20日

XV 学生活動等

1. 学籍番号

学生は各自学籍番号をもつ。

学籍番号は各自の氏名にも代わるほど重要なもので、間違わないように記憶しておく必要がある。

2010年4月にスポーツ科学研究科の1年次に入学した者の学籍番号は次のとおりである。

5 0 1 0 A □ □ □ - □
a b c d e

a : 箇所コード（スポーツ科学研究科）

b : 入学年度（西暦下2桁）

c : 専攻コード:Aースポーツ科学専攻

d : 個人番号

百の位は次の課程を示す

0~2:修士課程2年制コース、3:修士課程1年制コース、5:博士後期課程、9:科目等履修生

e : チェックデジット（CD）

2. 学生証（身分証明書）

本大学の学生には入学と同時に学生証（身分証明書）を交付する。この学生証は、その身分を証明するために必要であるばかりでなく、学習上・事務手続き上のいろいろな場合に必要であるから破損・紛失のないように注意し、下記のこと留意すること。

- (1) 学生証は、入学時にスポーツ科学研究科より交付する。
- (2) 学生証は、「学生証（カード）」（以下「学生証」という）と有効年限を明示した「裏面シール」とからなり、学生証の裏面に「裏面シール」を貼り合わせてから、効力が生じる。
- (3) 学生証の交付を受けたら、速やかに学生証の裏面に「裏面シール」を貼り学生証の表の氏名欄に、黒い油性のペンまたはボールペンで氏名（漢字）を楷書で記入すること。なお、漢字を持たない留学生は、裏面シールの氏名欄に印刷されているアルファベットと同じように、活字体で記入すること。
- (4) 学生証は、在学期間中使用し、「裏面シール」は、毎学年度末に所沢総合事務センター大学院カウンターで交付するので、貼り替えること。
- (5) 住所を変更したときや、通学定期券発行控欄が一杯になったときは、速やかに所沢総合事務センターに届け出て、追加のシールの交付を受けること。
- (6) 学生証を紛失したり盗難にあつたりすると悪用されるおそれがあるので十分注意し、その際は、ただちに所沢総合事務センターに届け出ること。
- (7) 紛失などのために再交付を受ける場合は、所沢総合事務センターに再交付願（カラー写真1枚と手数料2,000円）を提出すること。なお、同一年度内に一度を超えて再交付を願い出る場合は、保証人の連署が必要になる。再交付は通常1週間程度かかる。
- (8) 試験、図書館や学生読書室の利用、各種証明書・学割・通学証明書の交付、種々の配付物を受け取るとき、その他本学教職員の請求があつたときは、学生証を呈示しなければならない。
- (9) 有効期間は、「裏面シール」に示された有効年の4月1日から翌年3月31日までの1年間である。
- (10) 学生証は、修了または退学などにより学生の身分がなくなると同時に、その効力を失うので、ただちに所

沢総合事務センターに返却しなければならない。修了の場合は、学生証と引き換えに学位記が授与されるので、その日まで必ず携帯すること。

3. 各種証明書の交付

- (1) 在学中の課程の在学証明書・修了見込証明書・学業成績証明書及び健康診断証明書は、「自動証明書発行機」(各キャンパスに設置されているどの機械からも発行可)により発行される。(但し、健康診断証明書は当該年度の健康診断を受診したものに限る。)
その際、学生証・暗証番号(入学手続時に登録)および発行手数料が必要となる。
上記以外の証明書については、「自動証明書発行機」では発行できないので、所沢総合事務センターへ申し出ること。
- (2) 通学証明書を必要とする者は、所沢総合事務センターにおいて所定の手続きをとり、その交付を受けること。
- (3) 学校学生生徒旅客運賃割引証(学割と略称)は、本人に限り年間10枚を限度として各キャンパス内に設置されている「自動証明書発行機」により発行される。
有効期間は発行日より3ヶ月間である。特別の理由(研究活動等)により年間10枚以上の学割証が必要になった場合は、所沢総合事務センターに申し出ること。
- (4) 各種証明書の料金は所沢総合事務センター内に掲示してある。

4. 諸願および諸届

学生諸君が勉学上の事故や身分その他に異動があつた場合には、必ずその事項についての願または届を提出しなければならない。以下その要領を説明する。

- (1) 諸願・諸届の作成についての注意
- ①用紙は所沢総合事務センターで交付する所定の用紙を用いること。
 - ②楷書ではつきり記入すること。(鉛筆不可)
 - ③休学願、復学願、退学願の本人氏名および保証人氏名の記入は、それぞれの自署とする。押印も同じ。
- (2) 諸願・諸届提出についての注意
- ①留学願
留学をしようとする者は、所沢総合事務センターに問い合わせること。
 - ②休学願
 - ア. 病気その他の正当な理由により、引き続き2ヶ月以上授業(試験を含む)に出席することができない者は、必ず指導教員に相談したうえで所定の「休学願」を提出し、学術院教授会の承認を得て休学することができる。
 - イ. 休学は当該学期限りであるが、特別の事情のある場合には、継続して合計2年に限り休学を許可することがある。
 - ウ. 病気で休学する場合は必ず医師(公立病院等)の診断書を添えなければならない。
 - エ. 休学中の学費については、所沢総合事務センターに問い合わせること。
 - ③復学願
 - ア. 復学は学期始めに限られる。
 - イ. 病気による休学で復学する場合は、必ず就学可能と認める医師の診断書を添付しなければならない。
 - ウ. 復学が許された者は、復学する学期分の授業料等を納入し、裏面シールの交付を受ける。

④退学願

- ア. 退学を願いとする場合は、退学願のほかに学生証を添えなければならない。
- イ. 学年の中途中で退学する場合でも、その期の学費を納めなければならない。納入していない場合は、退学扱いとはせず抹籍扱いとする。

⑤現住所変更届、改姓(名)届、その他

- ア. 本人または保証人が住所を変更した場合には、ただちにその旨を所沢総合事務センターに届け出なければならない(本人の住所等についてはWaseda-net Portalからも変更可能)。
- イ. 改姓(名)を行った場合には、その届に戸籍抄本を添付しなければならない。
- ウ. 保証人が死亡した場合、またはそのほかの理由で変更を必要とする場合には、新しい保証人を選定して届け出なければならない。

5. 各種補助

(1) 複写代補助費

複写代の補助として、博士後期課程在学者(助手・休学者は除く)に対して、年間5,000円相当のコピーカードを配付している。配付時期については、その都度掲示で通知する。

(2) 国際会議論文発表補助費

博士後期課程の学生に対して、国際会議・シンポジウム等に参加し、研究論文等の発表を行う際に必要な経費(①登録料、②海外旅費)の一部を補助する。

(補助対象者)

博士後期課程に在学する学生(助手、特別研究員DC奨学生の交付を受けている者、休学者は除く。ただし、海外留学による休学者は対象)。

(補助の対象となる国際会議等)

二ヶ国間以上の参加者を対象とする、専門学会等が主催する国際会議・シンポジウム等。

(補助額および補助回数)

①国際会議論文発表登録料：55,000円を上限として登録料(学会参加費)の一部を補助する。学生1人に対する補助回数は年間1回(1学会)とする。(当該年度4月～3月・懇親会等は対象外)

②海外論文発表出張補助費：海外で行われる国際会議・シンポジウム等において研究論文の発表を行う場合、110,000円を上限として海外旅費の一部を補助する。原則として、学会開催の前日に開催地に到着し、学会終了当日に開催地を出発して、帰着に要するまでの期間を対象とし、それを越えた場合は補助されない場合がある。学生1人に対する補助回数は年間1回(1学会)とする。(当該年度4～3月)

(申請手続)

「国際会議論文発表補助費交付申請書」に、申請者が研究論文等の発表を行うことが明記されている、国際会議・シンポジウム等のプログラム等および登録料が記載されているものと登録料の領収書等を添付し、所属研究科を経由して、大学に申請すること。

海外論文発表出張補助費も申請する場合は事前に「出張願」と航空賃見積書等を所属研究科に提出し、後日、航空賃の領収書、航空券半券を提出すること。

(3) 学会発表補助費

学生本人が発表代表者として、学会発表に要した費用の一部を補助する。

(補助対象者)

大学院博士後期課程および修士課程に在学する学生

(補助の対象となる学会等)

①博士後期課程:全国規模の学会等

②修士課程:全国規模の学会等または、国内および国外で開催される二ヶ国間以上の参加者を対象とする
国際学会等

(補助額および補助回数)

補助の対象は参加費のみとし5,000円を上限とし、補助回数の制限は設けない(交通費・懇親会費は
含まない)。

(申請手続)

この補助費を受けようとする場合は、「申請書」「参加費の領収書」「学会の案内」「発表抄録」「プログラム
の写し」を所沢総合事務センターへ提出すること。

なお、申請の時期は領収書の日付から3ヶ月以内で原則として年度内とする。

6. 所沢総合事務センター

大学院に関する諸手続は100号館4階にある所沢総合事務センターで行っている。開室時間は、午前9時
から午後5時を原則としているが、期間により変更することがあるため、事務センター前に掲示される開室時間
を確認すること。

なお、日曜日、国民の祝日、創立記念日、夏季・冬季休業中の土曜日、夏季事務所一斉休業期間、年末
年始、大学が指定する休日は、事務センターを閉室する。ただし、これらの日で全学で授業を行う日は、事務
センターを開室する。

また、土曜日は取り扱う業務が限定されるため、可能な限り平日に事務センターを利用されたい。

7. 掲示

大学および大学院からの学生に対する伝達事項は、すべて掲示によることになっているから、登校の際必
ず見る習慣をつけること。

掲示を見落とすと、思いがけない重大な結果を招くことがあるから十分注意されたい。

掲示板は、教務に関する一切のこと、奨学金関係、大学および大学院からの伝達、その他事務所からの連
絡などに使用する。

なお、本研究科の掲示板は、Dゾーン(所沢総合事務センター・図書館開放閲覧室横)に設置されている。

8. 交通機関のストライキと授業

首都圏のJR等がストを実施した場合の授業休講措置について

1. JR等交通機関のストが実施された場合(ゼネスト)

首都圏におけるJRのストが

- A 午前0時までに中止された場合、平常どおり授業を行う。
- B 午前8時までに中止された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
- C 午前8時までに中止の決定がない場合は、終日休講とする。

上記はJRの順法闘争および私鉄のストには適用しない。

2. 首都圏JRの部分(拠点)ストが実施された場合平常通り授業を行う。

3. 首都圏JRの全面時限ストが実施された場合

- A 午前8時までストが実施された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
 - B 正午までストが実施された場合、6時限目(17時55分)から授業を行う。
 - C 正午を超えてストが実施された場合、終日休講とする。
4. JRを除く私鉄および都市交通のみのストが実施された場合平常通り授業を行う。
5. ただし、所沢キャンパスに設置された授業科目を受講する者については、上記1・2・3は適用されるが4については
- ① 西武鉄道の新宿線または池袋線のどちらか一方でもストが実施された場合
 - ② ①の西武鉄道両線のストが実施されない場合でも、西武バスのストが実施された場合次のとおりとする。
- A 午前8時までストが実施された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
 - B 午前8時を超えてストが実施された場合、終日休講とする。

9. 天候悪化（台風・大雪等）による休講等の取り扱いについて

台風、大雨、洪水、暴風、暴風雪、大雪等の天候悪化に伴いキャンパスが危険であると大学が判断した場合、授業休講・試験延期の措置をとることがある。

その場合は、原則として各時限の授業・試験開始 60 分前までに決定し、本学ホームページ (<http://www.waseda.jp/top/index-j.html>) にて広報・周知する。ただし、気象状況が悪化し、危険であると判断した場合は、60 分前を過ぎても休講・試験の延期を決定することがある。

また、台風や大雪等、気象状況が時間の経過とともに悪化することが十分予測される場合は、前日に授業の休講・試験の延期措置の決定を行うことがある。

その場合は、前日の午後 7 時までに決定の判断を行い、本学ホームページに前日の午後 9 時までに掲載して広報・周知する。

なお、授業および試験が実施される場合でも、学生はキャンパスまでの交通経路内に気象庁による気象警報が発表され、気象状況等に鑑みて通学することが危険又は困難であると自身で判断し、欠席した場合には、所属研究科による承認済みの欠席届をもって、該当科目の担当教員へ申し出ること。

10. 自転車・自動車・オートバイの駐輪場・駐車場の利用について

所沢キャンパス内は、安全を確保するために、やむを得ない事情のない限り自動車・オートバイ(原付二輪車)の乗り入れはできない。

ただし、自転車で通学する場合には、所定の申請書を所沢総合事務センターへ提出し、駐輪場の利用許可を得なければならない。また、事情により自動車・オートバイで通学する場合にも、所定の申請書を所沢総合事務センターへ提出し、駐車場・駐輪場の利用許可を得なければならない。

自転車・自動車・オートバイでの通学にあたっては、交通の安全、災害・騒音の防止等をはかり、教育環境の保持に努めなければならない。

1) 自転車で通学する場合

- (1) 登録ステッカーの交付を受けるには、次の書類を所沢総合事務センターに提出しなければならない。
 - ① 登録申請書(所沢総合事務センターに備付)
 - ② 学生証

※ 駐輪場利用料金は無料
- (2) 登録ステッカーの有効期限は、大学院在学中とする。
- (3) 登録申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センタ

一に届け出ること。

2)事情により自動車で通学する場合

(1) 駐車許可証の交付を受けるには、次の書類等を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

- ① 駐車許可申請書(所沢総合事務センターに備付)
- ② 学生証
- ③ 前年度分駐車許可証(前年度からの継続利用者のみ必要)
- ④ 駐車場利用料金(年額5,000円)

※ 駐車場利用料金については、年度途中からの申請でも同一額とする。

(2) 駐車許可証の有効期間は、交付を受けた年度(1年間)限りとする。次年度も利用する場合には、新規の申請時と同様の手続が必要である。

(3) 駐車許可申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

(4) 駐車許可証を他人に貸与し、または他人から借用してはならない。

3)事情によりオートバイ(原付二輪車)で通学する場合

(1) 登録ステッカーの交付を受けるには、次の書類を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

- ① 登録申請書(所沢総合事務センターに備付)
- ② 学生証

※ 駐輪場利用料金は無料

(2) 登録ステッカーの有効期限は、大学院在学中とする。

(3) 登録申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

4)駐輪・駐車

(1) 自転車・自動車・オートバイは、それぞれ指定された駐輪場(駐輪指定場所)・駐車場に駐輪・駐車しなければならない。駐輪場(駐輪指定場所)・駐車場以外の駐輪・駐車は厳禁する。

- ① 自転車…正門自転車駐輪場または北門駐車場の自転車駐輪指定場所
- ② 自動車…北門駐車場
- ③ オートバイ…北門駐車場のオートバイ駐輪指定場所

ただし、フロンティア・リサーチセンターに所属する学生は、B地区の駐輪場・駐車場を利用することができます。また、フロンティア・リサーチセンターに所属する博士後期課程の学生は、南門の駐輪場を利用することができます。

(2) 正門駐輪場の利用時間は、8:00から22:30(土日は21:30)までとする。(この時間帯以外は閉門となる。)

(3) 自転車は登録ステッカーを後輪カバーに貼り、自動車は駐車許可証をフロントガラスに表を向けて置き、オートバイは登録ステッカーをナンバープレート付近に貼っておくこと。

5)注意事項

(1) 登録した自転車・自動車・オートバイ以外の駐輪・駐車は厳禁する。

(2) 大学・大学院等の行事、施設・設備の工事等により、駐輪場・駐車場の使用制限をすることがある。

(3) 駐輪場・駐車場内では徐行し、所定の区分に従って、整然と駐輪・駐車すること。

(4) 駐輪場(駐輪指定場所)・駐車場以外の駐輪・駐車は、通行の妨げや災害時等の避難の妨げになるので厳禁する。駐輪場・駐車場以外に駐輪・駐車している場合、長期間放置されている場合は、管理上支障をきたすので排除または処分することがある。

- (5) キャンパス内、駐輪場・駐車場での人為的事故、損傷等は、当事者間で解決すること。また、駐輪・駐車中の事故、災害、盗難等には、大学は一切責任を負わないもので、各自十分に注意すること。(警察が指導する「防犯登録」は必ずしておくこと。)
- (6) 上記の事項に違反した場合、または大学の警告に従わない場合は、駐輪場・駐車場の利用許可を取り消すことがある。

1 1. 早稲田大学健康センター所沢分室

学生食堂近くの308号室にあり、次の業務を行っている。

内線 3308、緊急内線 3000、DI:04-2947-6706、Fax:04-2947-6804

業務内容

- (1) 学生・教職員の定期健康診断、特殊健康診断
- (2) 各種健康診断書の発行 (ただし、定期健康診断を受診した者に限る。)
- (3) 健康相談
- (4) スポーツ障害相談、リハビリ相談
- (5) 内科相談
- (6) 精神保健相談、心理相談

※心療内科医および心理専門相談員による相談は、予約制

- (7) 保健統計、健康管理に関する調査研究
- (8) 健康教育

1 2. 早稲田大学学生健康増進互助会(学生早健会)

学生早健会は、早稲田大学学生の相互扶助の精神に基づき、在学中に会員が医院で支払った保険診療適用分の医療費につき、年間60,000円までの補助を行うなど、学生の経済的負担をできる限り軽減させることを目的としている互助組合です。医療給付の他にも歯科検診・体組成検査等を実施しています。

会員資格や医療給付の詳細については、「早稲田大学学生健康増進互助会案内」(所沢総合事務センターに常備してある)を参照のこと。

ホームページ:<http://www.waseda.jp/student/hoken/gojyokai/>

1 3. 奨学金制度

本学の奨学金制度は、本学独自の大隈記念奨学金・小野梓記念奨学金・博士後期課程奨学金などの学内奨学金をはじめ、日本学生支援機構・民間団体・地方公共団体の奨学金がある。

いずれの奨学金も、人物・学業成績が優秀でありながら、経済的理由により修学が困難な学生に給付または貸与することによって教育の機会均等を図るとともに、社会に貢献する人材の育成を目的としている。

これらの奨学金を受けるには、所沢総合事務センターで配付している「CHALLENGE(奨学金情報)大学院学生用」を受け取り、これにしたがって必要な手続きを行うことになる。

なお、奨学金の募集時期は、毎年4月上旬(全学年)であるので、それ以前に「CHALLENGE(奨学金情報)大学院学生用」を受け取ることが必要である。

1 4. 学生教育研究災害傷害保険

本学は、教育研究活動中や課外活動中の不慮の災害事故補償のために、保険料全額大学負担で、全学部、全大学院、日本語研究教育センターの正規学生(過年度生を含む)、科目等履修生に対して、「学生教育

研究災害傷害保険(学研災)」に加入している。

この保険は財団法人日本国際教育支援協会と国内損害保険会社との契約により実施されているもので、大学施設内外の正課中、大学行事中、課外活動中(大学施設外の場合は事前の届け出が必要)、大学施設内の事故を保険適用範囲にしている。

適用範囲や手続き方法については、早稲田大学ホームページを参照のこと(関連ホームページ 学生教育研究災害傷害保険 <http://www.waseda.jp/student/hoken/gakusaiho/> 学生教育研究賠償責任保険 <http://www.waseda.jp/student/hoken/gakkenbai/>)。

課外活動中の事故の場合は、事前の届け出がなければ、適用を受けることができない。

各サークルは、大学外での諸活動(合宿・研究・見学旅行・試合など)を行う場合は、必ず、学生生活課事務所(学生会館1階)に事前に届け出ること。特に、学研災は本学の学生のみに適用されるため、他大生がサークル活動に参加する場合には個別に保険に加入すること。また、大学院におけるゼミ合宿は所沢総合事務センターへ、体育各部の部活動はオープン教育センター戸山分室(35号館)に事前の届け出を行うと共に、万一事故が発生した場合は、必ず事故報告を行うことを徹底すること。

特に、夏季・冬季授業休止期間中などに国外において課外活動を行う際には、事前に綿密な計画を立て、予備調査を行った上、届け出を行うと共に、早稲田大学学生であると同時に社会的責任を負うべき市民であることを自覚し、節度ある行動をとることを希望する。

XVI 所沢図書館および中央図書館の利用について

はじめに

所沢図書館は、人間科学、スポーツ科学に関連する専門書や学習書、学術雑誌を中心に、利用者の一般教養に資する図書、雑誌等を収蔵している。早稲田大学図書館では、近年、外国雑誌を中心に電子資料やデータベースの充実を図っており、全学的に学内ネットワークからアクセスできるようになっている。所沢キャンパスの研究分野に関連するものとして、PsycINFOやSportsDiscus、医中誌Webなどが利用できる。

所沢図書館は、キャンパスのほぼ中央に位置し、中庭に面して「コ」の字形に配されている。館内は、開架図書エリア、バックナンバー書庫、新刊雑誌コーナー等の資料収蔵施設と、一般閲覧席、教職員・大学院学生を対象とした閲覧個室、グループ学習ができるグループ閲覧室といった閲覧用の施設からなっている。

利用について

詳細は所沢図書館ホームページ(<http://www.wul.waseda.ac.jp/TOKOROZAWA/index.html>)を参照のこと。

1. 開館時間

平日 9:00～21:00

土曜日 9:00～18:00

授業休止期間 月曜日～金曜日 9:00～18:00 (春季は、月曜日～土曜日 9:00～18:00)

2. 休館日

日曜日、祝日(授業実施日を除く)、休業日、大学創立記念日(10月21日)、夏・冬季休業期間の一定期間。
そのほか、業務上休館の必要がある場合。

3. 利用者カード

- (1) 図書館の入館および図書の貸出には、学生証を利用者カードとして使用する。
- (2) 学生証は、在学中有効なので大切に扱うこと。
- (3) 学生証は、本人以外は使用できない。
- (4) 学生証を紛失したときは、ただちに大学院事務所に届け出ること。

4. 入退館

- (1) 入館するときは、学生証を自動入館装置にスキャンして入館する。
- (2) 退館口には、BDS(図書帶出防止装置)が設置されている。

図書を館外に借用する時は、必ずカウンターで手続きをすること。

5. 資料の探し方

- (1) 全ての図書は、日本十進分類法(NDC)によって分類され、配架されている。
- (2) 早稲田大学学術情報検索システム「WINE」(<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>)で所蔵資料を検索することができる。使い方がわからないときは館員に相談すること。

6. 貸出・返却

- (1) 貸出・返却は、カウンターで手続きをすること。なお、閉館時の返却には、専用のブックポストが利用できる。
- (2) 貸出冊数は30冊、貸出期間は30日とする。
- (3) 参考図書および雑誌等は、館外に貸出できない。
- (4) 返却期間が過ぎても返却がない場合には、反則規定が適用される。

(5) 貸出図書を大切に扱うこと。図書紛失したり、汚損・破損したときには、ただちに届け出ること。図書館のルールにしたがった弁償をすることとなる。

7. 利用上の注意

- (1) 館内では他人に迷惑をかけないよう、雑談などは慎むこと。
- (2) 閲覧した図書は、配架されていた元の正確な位置に戻すか、返却台に置くこと。
- (3) 館内は禁煙とする。
- (4) 館内への飲食物の持ち込みは禁止されている。
- (5) 入館の際は携帯電話のスイッチを切るか、マナーモードに設定すること。
- (6) 館内では貴重品などを机に放置せず、自分で管理し、紛失や盗難に気をつけること。

8. 施設の利用

- (1) 開放閲覧室(46席)
エントランスホールから入るとすぐに開放閲覧室があり、ここは図書館の開館時間外も利用できる。
- (2) 新聞閲覧コーナー
継続している新聞は18誌で、原則として前月分までを保管している。
- (3) AV資料室
図書館所蔵のビデオ・DVD等を、AV資料室の機器で利用できる。複製や館外貸出は不可。
- (4) 情報検索室
WINE検索用端末機、学術情報検索専用端末機およびCD-ROM専用端末機、マイクロリーダー・プリンタ等が利用できる。
- (5) エントランス
入・退館ゲート脇にカウンターを配し、貸出・返却および問合せへの対応を行っている。書庫へのアプローチには新着図書コーナー、新刊一般雑誌および新書・文庫コーナーを置いている。
- (6) グループ閲覧室(10席/2室)
少人数授業が優先だが、空いた時間はグループで学習および研究等を行うときに手続きして利用できる。
- (7) コピーコーナー
カード式複写機が、コピーコーナー、新刊学術雑誌コーナー、情報検索室に設置されている。利用は図書館所蔵資料のコピーに限る。コピーカードは学内図書館共通。
- (8) 参考図書コーナー
辞書、事典、便覧、ハンドブック、地図等の参考図書が配架されている。
- (9) 開架閲覧室(200席)
和書が配架されている開架書架をはさんで、南側と北側に閲覧席がある。
- (10) 新刊学術雑誌コーナー
①新刊学術雑誌コーナー、②コピーコーナー、③検索コーナー、④閲覧個室等で構成されている。
- (11) バックナンバー書庫
合冊製本された雑誌が、和雑誌は誌名のアイウエオ順、外国雑誌は誌名のABC順に電動書架に配架されている。
- (12) 洋書コーナー
洋書は、バックナンバー書庫隣の電動書架に配架されている。

中央図書館およびキャンパス図書館の利用について

早稲田大学創立100周年記念事業の一環として計画され建設された中央図書館は、蔵書数・座席数ともに大学図書館としては日本有数の設備規模である。また、学内の各キャンパスには、高田早苗記念研究図書館、戸山図書館、理工学図書館があり、それぞれ特色ある資料を収集し、利用に供している。

所沢図書館は、キャンパス図書館の一つとして位置づけられ、上記の各図書館と連携してサービスの拡充に努めている。WINEで各館の所蔵検索が可能であり、図書や文献複写の取り寄せもできる。また、中央図書館、各キャンパス図書館へ直接出向いて利用することもできる。利用の方法は各館の利用案内を参照のこと。

XVII 早稲田大学スポーツ科学会規則

(名称)

第一条 本会は早稲田大学スポーツ科学会と称する。

(目的)

第二条 本会はスポーツ科学の研究およびその普及発展、ならびに本学術院に所属する院生および学生の教育指導に必要な事業を行う。

(事務局)

第三条 本会の事務局をスポーツ科学学術院内におく。

(会員)

第四条 本会は次の会員をもって構成する。

1. スポーツ科学学術院専任教員
2. スポーツ科学学術院本属の非常勤講師
3. スポーツ科学学術院本属の助手
4. スポーツ科学研究科生
5. スポーツ科学部生
6. その他、役員会が必要と認めた者

(入会金および会費)

第五条 前条1、3、4および5号に規定する会員は、以下の入会金および年会費を納めなければならない。

入会金:前条4号および5号会員 2,000 円

年会費:前条1号、3号および4号会員 5,000 円

前条5号会員 2,000 円

(役員および役員会)

第六条 本会に会長と編集担当、研究担当、広報担当および会計担当の理事ならびに監査役をおく。

- 2 会長はスポーツ科学学術院長とし、理事および監査役は第四条1号会員の中から会長が指名する。
- 3 理事および監査役の任期は会長の任期と同じとする。ただし、再任は妨げない。
- 4 会長の招集により、必要に応じて役員会を開催する。

(委員会)

第七条 各担当理事のもとに委員会をおくことができる。

- 2 委員会には第四条1号委員以外の委員を加えることができるものとし、運営・企画等に際しては、会員からの意見が反映されるように配慮する。

(事業と経費)

第八条 本会は次の事業を行う。

1. 研究論文集(オンライン・ジャーナル) ; 「スポーツ科学研究(Sport Sciences)」の発行

2. 「スポーツ科学学術院情報誌」の発行
 3. 「スポーツサイエンス研究会」の開催
 4. その他、役員会が本会の目的を達成するために必要と認めた事項
- 2 本会の事業に係る経費は、入会金、年会費およびその他の収入をもってこれを支弁する。

(総会)

第九条 本会は会長の招集により年1回総会を開催する。ただし、会長は臨時総会を必要に応じて招集することができるものとする。

(会計報告)

第十条 会計担当は監査役による会計監査終了後、総会にて会計報告を行う。

(規則の改正)

第十二条 本規則の改正は、役員会の議を経て学術院教授会にて行う。

附則 この規則は2005年9月27日から施行する。

XVIII 研究指導・演習・講義科目の概要

–修士課程2年制コース–

【研究指導】

[スポーツ文化研究領域]

武道論研究指導

志々田 文明

日本武道は一般に競技性、求道性、規範的教育性の要素が含まれ、特に後の二点は近代の競技スポーツと性格を異なる特徴をなしている。それは、武術を学ぶことを必須の教養とした武士が700年にわたって日本の政権を担い、武士の規範(いわゆる武士道)を形成した歴史に由来する。この研究指導では、その武道が国際的に広く普及しつつある実態を踏まえて、歴史学、思想史、社会学的な観点から武道の文献に基づいて多角的な考察をする。その過程で研究の基礎力を養成すると同時に、受講者の研究計画の実現に向けた指導を行う。また特に受講者がその研究を絶えず論文にし、国内外の学会で発表するためのサポートを行う。

Keywords: 武道、武士、武士道、思想史、国際化、文化変容

スポーツ人類学研究指導

寒川 恒夫

スポーツ人類学はスポーツ科学と文化人類学に籍を置く境界分野である。このためスポーツ科学の(特に人文社会科学系)諸概念と文化人類学の諸概念の理解の上に研究が展開されることになる。これまでに公にされているスポーツ人類学関連諸文献について、そこに示された理論モデルを上記諸概念との関わりの中で理解していく。また、修士論文の作成指導をおこなう。

スポーツ倫理学・教育学研究指導

友添 秀則

現代スポーツは勝利至上主義、ドーピング、過剰な商業主義、スポーツ・イベントのメガ化による環境破壊等に代表されるように、多様な倫理的アポリア(難問)を内包し、様々な局面でスポーツの倫理的な逸脱現象が頻出している。本研究指導では、このような現代スポーツにおける倫理的逸脱現象を対象に、応用倫理学的な考察を加え、スポーツ文化のあるべき存立基盤を解明していく。同時に、スポーツ文化による人間の陶冶可能性についても、人格教育論を中心に考察し、スポーツ教育における社会学習の方法論についても指導する。

スポーツメディア論研究指導

リー トンプソン

メディアとはコミュニケーションの媒体となるものであるが、とくにマスコミュニケーションの手段であるテレビ、ラジオ、新聞などのマスマディアをいうことが多い。マスマディア研究には大きく分ければ制作、内容、オーディエンスという3つの領域がある。スポーツメディア論では、少なくとも一つの領域からスポーツとメディアの関係を取り上げる。スポーツメディア論演習(1)(2)での勉強を踏まえて、各自の研究計画に基づいて、修士論文作成の指導を行う。社会学の立場から指導する。

スポーツ社会学研究指導

宮内 孝知

スポーツ社会学の学問的使命は、社会における「スポーツ」を理解可能な形で客観的に説明することである。

しかしながら、スポーツは、他の社会勢力と密接に関連しながら存在する。したがって、スポーツを説明することは、社会におけるシステムの1つとして説明することが必要である。とともに、現実のスポーツを理解するためには、スポーツの理念型を構築する必要もある。この2つの立場を踏まえながら、問題解決の具体的指針を与えるようとする。

スポーツ史研究指導

石井 昌幸

本研究指導では、スポーツという文化事象を歴史学の手法をもちいて分析し、理解し、叙述する方法を指導する。具体的には、テーマの立て方から、史料の収集法・整理法・分析法から論文執筆の方法までを指導する。

舞踊論研究指導

杉山 千鶴

舞踊を演じる者には、自己の身体を手段に上演の(作品の)意図を語ることが義務として課されている。本研究指導では特に舞踊のジャンルを規定せず、この義務を遂行するために、また演じる場に立つために必要とされる多くの要因を、理論と実践の両面から解明するものである。

理論については、演者に関する諸文献を精読し、さらに特定のジャンルを扱う場合には、当該ジャンルの歴史と現代における位置付けをも見つめ、各要因と、その成立する背景及び過程を考察する。また実践経験を可能な限り積み、これによってもいくつかの要因を見出すことは可能であろう。なお実践については、この他にも理論的アプローチによって明らかにされた要因の検証も合わせて行う。

特に洋舞を対象とする者に対しては、全国コンクールのシニア部門・創作部門への参加を望む希望があれば、個別リハーサルも行なう。

体育科教育学研究指導

吉永 武史

体育科教育学は、学校の体育授業を中心とする体育実践の改善を目的として行われる研究分野である。優れた体育授業とは、学習目標が明確に設定され、それが十分に達成されている授業であると言える。このような授業を実現していくためのストラテジーを明らかにしていくために、従前の体育科教育学の研究成果を踏まえてカリキュラム論と学習指導論の両面から体育授業研究にアプローチする。具体的には、体育授業の目的・目標論、学習内容論、内容編成論、教材づくり論、指導方法論など、それぞれ理論的・実証的方法で研究を進めていく。加えて、ボールゲームの指導モデルとして注目されている戦術学習論や、高度な実践的力量を備えた体育教師の養成に向けた教師教育論についても研究指導を行う。

[スポーツビジネス研究領域]

スポーツ経営学研究指導

木村 和彦

スポーツ経営は、スポーツ参加や観戦を支えるスポーツサービスを効果的・効率的に提供しようとする組織的な営みである。その領域は、メガスポーツイベントやプロスポーツ球団の経営から地域スポーツや学校体育の経営まで広範囲にわたる。本研究指導では、個別のスポーツ経営領域を対象に、主に経営学的なアプローチを用いてスポーツ経営現象の解明のための方法論を学び、研究成果を実践的な経営課題の解決につなげる提案力を高めていく。具体的には、経営戦略や事業戦略、マーケティングと消費者行動、組織と人的資源マネジメントなどに焦点を当て、定量的(質問紙調査など)・定性的(ケーススタディなど)分析手法を身につける。また新たなテーマとして、スポーツツーリズムについても注目している。

健康スポーツ論研究指導

中村 好男

本研究指導では、“スポーツを通じた健康増進”という社会的ニーズに応えるために、体力科学、運動生理学、栄養学などの＜身体の理論＞から、行動科学、社会マーケティングといった＜行動の理論＞、さらには、ビジネスマネジメント、マーケティングなどの＜社会組織の理論＞まで、様々な領域における基礎学問分野の知見を踏まえて、「地域住民へのスポーツ振興」ならびに「健康増進の達成」という目標を実現するための実践的技法を確立することを目指している。具体的には、地域自治体、総合型地域スポーツクラブ、老人福祉施設等のさまざまな現場（フィールド）での実践的研究によって、医療費削減や介護予防に資するためのプログラムの開発とその評価モデルの構築に加えて、地域社会における健康増進ならびに介護予防システムの構築を行う。主な研究課題は、1) 健康増進を目標とする運動やスポーツの振興と奨励の手法開発と評価、2) ウォーキングプログラムの開発と指導、3) 介護予防のための筋力向上トレーニングプログラムの開発と実践活用、4) スポーツビジネスの活性化とスポーツ振興、5) 総合型地域スポーツクラブの運営と地域スポーツ指導者の育成などがある。

Keywords: 体力、健康、運動、健康増進、介護予防、ウォーキング、行動科学、マネジメント

スポーツビジネスマネジメント論研究指導

原田 宗彦

スポーツにおける権利ビジネスの発展は、スポーツのメディア価値を増大させ、従来のスポーツ産業の構造を大きく進化させた。研究指導においては、スポーツビジネスのマクロ的視点として「スポーツと地域イノベーション」に関する研究、ミクロ的視点では「スポーツ消費者の行動学的分析」に関する研究をメインテーマとする。前者では、スポーツ振興モデルを応用した政策提言的研究やスポーツイベントの経済効果に関する研究、後者ではプロスポーツにおけるファンのチーム・ロイヤルティに関する研究や、スポーツ・フィットネス産業における経験価値マーケティングに関する研究の指導を含む。

スポーツクラブビジネス論研究指導

間野 義之

学校運動部活動と企業スポーツを両輪とした日本型スポーツシステムの限界が見え始めたなか、地域を中心とした新たなスポーツクラブシステムが求められている。企業運動部のクラブ化はもとより、Jクラブやプロ野球でも地域に根付いたクラブ化を模索しており、その一方で学校・地域・家庭・企業・行政の連携による「総合型地域スポーツクラブ」の普及・育成が国策として進められている。

プロ・アマを問わず、これらのクラブが自主独立し健全に発展するためには、多くの複雑な問題が存在する。それら諸問題の現実的な解決策（ソリューション）について研究指導する。具体的には、異なる環境に応じた複数のビジネスプランの設計、そのモデルを実現できる人材（マネジャー）の育成方策、指定管理者制度や PFI（Private Finance Initiative）などを用いた活動拠点の確保策、クラブ創設・継続に必要なファイナンスのあり方、継続事業体としての法人化策、地方自治体や中央政府との連携方策、効果的なマーケティング戦略などについて、個別あるいは総合的に研究指導する。

Keywords: スポーツクラブ、ビジネスプラン NPM (New Public Management)

トップスポーツビジネス論研究指導

平田 竹男

本研究指導では、IT 技術の発展およびマネジメント手法の進化を背景に、近年急速に進展を遂げるスポーツの世界をとりまくスポーツビジネスおよびエンターテイメントビジネス（以下トップスポーツビジネスという。）を対象として研究指導を行っていく。

研究内容としては、具体的な先進事例の学習を通じて基礎的理解を深めるとともに、トップスポーツビジネスを研究する上で必要不可欠な理論である、経営学、経済学、行政・政治学、法学の諸理論について深く学び、

具体的事例の分析に必要な定量的分析手法を習得する。それによって、トップスポーツビジネスに関わる経営課題に対する解決方法を究明するための調査・研究能力を開発し、実際にトップスポーツビジネスの現場で生かすことのできる経営能力の開発を目指す。

具体的な研究課題としては、

- 1)「強化・振興・資金獲得」というトップスポーツの果たす3つのミッションの関わりと循環を解明するためのマネジメントモデルの構築
- 2)トップスポーツクラブにおける、「勝者の決定構造」や「観客数を規定する要因」についての統計的分析
- 3)地域クラブにおけるトップスポーツビジネスの構造分析
- 4)日本・アジア・欧米によるトップスポーツビジネスの構造比較分析
- 5)人生におけるトップスポーツ等との関わりと転機に関するキャリア形成モデルの構築
- 6)IT技術の発展とトップスポーツビジネスのビジネスモデル変革・将来の可能性に関する分析
- 7)メディアの変遷とトップスポーツビジネスとの関係性

などがあげられる。

Keywords:スポーツビジネス、スポーツ産業、経営、マネジメント、ビジネスモデル、エンターテイメント、地域、アジア、IT、通信・放送の融合

スポーツ組織論研究指導

作野 誠一

人とスポーツの関わりは、「する」「みる」にとどまらず、「読む」「支える」など多岐にわたる。そして、いずれの関わり方も何らかの組織を介していることが多い。本研究指導においては、多様なスポーツ現象を把握・説明する枠組みとしての組織論について理解を深め、これを基盤とする組織マネジメントの方法について考究する。さらに、各自の関心に基づき研究を進めるための基本的な知識ならびに調査・分析技法等の習得をめざす。具体的な研究テーマとしては、各種スポーツ組織における組織構造、組織文化、リーダーシップ、モチベーション、組織化(支援)、人材マネジメント、スポーツボランティアのマネジメント、学校スポーツと地域スポーツの連携などが考えられる。

スポーツビジネス・アドミニストレーション研究指導

武藤 泰明

スポーツを実施する組織(クラブ、リーグ、協会等)のマネジメントには、他の企業や公益法人と同じ側面と、固有の側面がある。またこのため、「固有の側面」については、これまでに蓄積されてきたマネジメント理論を適用することができない。たとえば、リーグとこれに属するチームの関係は「取引」でも「支配」でもないし、グループ経営でもない。そしてそれにもかかわらず、これらの独立した主体は、同じ目的を持って活動している。

本研究指導では、スポーツマネジメントのこのような「普遍性と固有性」を、具体例に基づいて理解・把握することを第一の目的とする。そして第二に、これに基づいて、スポーツ組織の固有性に即したマネジメントのあり方を検討していく。

スポーツビジネスマーケティング研究指導

松岡 宏高

研究指導の内容:「見るスポーツ」を売るプロスポーツクラブ・球団や「するスポーツ」を売るクラブ・団体など、スポーツ組織のビジネスにおいてマーケティングは不可欠である。スポーツマーケティングには、スポーツを効率よくプロデュースして提供する「スポーツのマーケティング」と、企業がスポーツを利用してプロモーション活動を行う「スポーツによるマーケティング」があるが、両者においてスポーツ消費者(する人や見る人)を理解することが最優先の課題となる。本研究指導では、スポーツビジネス現場での効果的なマーケティングのために必要なスポーツ消費者の心理や行動の理解に焦点を当て、その解明に必要な研究手法を身につけることを目

的とする。具体的な研究テーマとしては、スポーツ観戦者の動機、ファンのチームに対するコミットメント、スポーツ参加者・観戦者のサービス評価と満足、プロスポーツクラブのプロモーションの効果、そしてスポーツスポンサーシップの効果などが考えられる。

[スポーツ医学研究領域]

運動免疫学研究指導

赤間 高雄

運動による免疫機能の変化、すなわち、適度な運動による免疫機能の向上と過剰な運動による免疫機能の抑制について、そのメカニズムを検討し、スポーツ現場への応用を研究する。高齢者の免疫機能を高める運動処方や競技スポーツ選手のコンディショニングにおける免疫指標の応用、ドーピング防止などの分野で各自が設定したテーマについて研究計画、実施、論文作成を指導する。

健康運動疫学研究指導

荒尾 孝

質の高い健康づくり研究を実施するためには、研究を開始する前に質の高い研究をデザインすることが極めて重要となる。特に、生活者としての人間集団を対象とした疫学的研究においては、多様な要因が単独あるいは相互に影響している可能性が強く、そのことの影響をなくすことが不可欠となる。そのためには研究をデザインする段階で十分な配慮をすることであり、また、統計解析の段階で交絡因子に対する調整を行うこととなる。そこで、本研究指導では、学生の修士論文の研究について、EBPH の手法による研究デザインの方法と疫学統計学に基づくデータ解析法について指導する。

スポーツ神経精神医学研究指導

内田 直

スポーツと中枢神経系の関わりを研究対象として、研究指導を行う。具体的な内容としては、睡眠・生体リズムとスポーツパフォーマンス、身体運動が脳や心の働きに与える影響(運動によるうつ状態の改善、前頭葉機能の改善等)、スポーツパフォーマンスに関連した脳機能などである。方法としては、ポリグラフ検査、脳波検査、MRI 検査、行動学的手法、疫学的手法などを用いる。これらについて、研究計画のたて方、実験や調査研究の実施法、データの解析法、データの解釈などについて、総合的に指導する。

スポーツ健康管理学研究指導

坂本 静男

スポーツには生活習慣病に対する効果などがある反面、突然死や熱中症といった急性内科的障害、貧血やオーバートレーニング症候群といった慢性内科的障害のあることを、これまでに報告されている論文や最新の研究報告等を抄読することにより、理解してもらう。それとともに、スポーツの効果を判定するための検査法や、内科的異常を診断する検査法などに関して、医師でもある大学院教員の指導下に体得してもらう。つまり運動負荷試験、心エコー図検査、ホルター心電図検査などを駆使したメディカルチェックの重要性を多方面から理解してもらう様な、体験学習的な講義を行うことになる。

運動器スポーツ医学研究指導

鳥居 俊

少子・高齢社会の到来によりスポーツや身体活動に関わる医学研究は競技選手のみならず、全ての国民に対して貢献することが期待される。

本研究指導では、発育期の運動器の形態発育・機能発達に関する研究、競技スポーツ選手に発生する運動器スポーツ障害の発生メカニズム・早期発見法・予防策の立案に関する研究、高齢期の運動器退行性疾患である変形性関節症、骨粗鬆症などの予防・治療の運動療法の開発・効果判定法に関する研究、などを中心

に指導を行う。

運動器の機能の計測に加え、最近注目される QOL 評価についても研究指導する。

スポーツ外科学研究指導

福林 徹

スポーツ科学者やコーチ、トレーナーなどに要求される外科領域でのスポーツ医学の諸問題についての研究指導を行う。具体的には、人体の部位別機能解剖とそれに基づいた評価法、スポーツによって生じる代表的な外傷・障害の診断と現場での処置、最新の治療法、およびスポーツ復帰までのリハビリテーション法について研究指導する。スポーツの種目別特性を加味しながら、最新の治療器や治療法、近年のこの分野での研究の動向について指導し、修士課程での研究のベースになるようとする。

健康行動科学研究指導

岡 浩一朗

身体活動・運動を中心とした健康づくりに関する心理学、行動科学的側面の研究について指導を行う。主な研究のテーマは、1) 中年者の健康増進(行動変容理論に基づく身体活動推進プログラムの開発と評価、がん予防のための身体活動の普及手法の提案、運動によるメンタルヘルス改善効果の検証など)、2) 高齢者の介護予防(介護予防運動プログラムの開発と評価、介護予防事業の医療経済的評価、介護予防の効果的な普及手法の提案など)、3) 患者のリハビリテーション(心疾患患者の QOL 改善のための運動療法の開発、膝痛・腰痛患者における効果的な痛みの自己管理法の探索など)である。また、4) 子どもの心の発育発達に及ぼす運動(特に、野外活動)の影響や運動・スポーツ支援環境の特定、5) 競技スポーツ選手の効果的な心理的コンディショニング手法の開発や健康関連問題への心理的援助などについても取り上げる。これらの研究テーマについて学ぶことにより、地域保健や介護福祉、医療・看護・リハビリテーション、学校保健、スポーツ指導等の現場で役に立つ心理・行動科学的アプローチの視点や具体的手法の獲得を目指す。

スポーツ整形外科学研究指導

金岡 恒治

脊椎疾患・外傷に関する研究を始めるに当たって、これまで報告されている研究の手法・結果について熟知し、独自の新しい仮説を見いだす。

予防医学研究指導

鈴木 克彦

激しい運動や過酷なトレーニングなどの身体的ストレスによる内科的障害の評価、病態機序の解析、および栄養、サプリメント、水分補給、休養、各種補完代替医療等による予防策の科学的根拠について研究する。具体的には、運動を中心とした生体のストレス応答と適応のメカニズムについて、特に生体防御(白血球機能、ホルモン・サイトカインの動態、活性酸素の代謝、筋損傷と修復)の面から研究している。また、適度な運動による生活習慣病の予防・治療と作用機序に関する検討、ストレス応答や免疫機能の解析・評価法の開発、臨床病院との連携による免疫低下、炎症、老化の制御に関する基礎的・応用的検討を進めている。研究内容については初学者で構わないが、生物化学系実験の経験と統計処理、英文読解能力は研究遂行上必須である。複数の研究プロジェクトに関わりながら、自らのテーマを設定し、研究を計画・実行し、学会発表、論文作成を進められるように指導する。

備考: 予防医学は守備範囲が広いため、演習以外にも関連科目として「スポーツ統計学特論」、「スポーツ内科学特論」、「生命科学特論」、「健康行動科学特論」、「運動生化学特論」、「スポーツ生理学特論」等も履修することによって、総合的な理解をはかることが望ましい。

Keywords: 運動、ストレス、白血球、活性酸素、ホルモン、サイトカイン、炎症、老化、生活習慣病

アスレティックトレーニング研究指導

廣瀬 統一

本講義では、アスレティックトレーニング関連分野の研究計画、結果分析、論文作成までのスキルを習得することを目的とする。

教科書:なし

参考文献:なし

[身体運動科学研究指導]

スポーツ神経科学研究指導

彼末 一之

運動や各種動作は骨格筋の収縮によって発現するが、それを目的に合致したものとするためには、中枢神経から目的に応じた運動指令を発するとともに、運動の結果が中枢神経系にフィードバックされることが必要である。また、ある動作を繰り返し行うことで、その動作の学習と上達がもたらされる。このような運動・スポーツにおける神経調節機構についてヒトでいろいろな実験を行って解析する方法を学び、設定したテーマについて研究する。

生体ダイナミクス研究指導

川上 泰雄

人間を対象とした生体計測に関する研究を指導する。特に、骨格筋・腱の形態的特性と機能的特性に関しての研究を中心に行う。人体筋の非侵襲的な可視化および収縮の定量化に関して、超音波やMRI等の画像解析の手法などを用いる。研究テーマの主軸は〈1〉人体筋のメカニクス、〈2〉筋特性の個人差と適応性、の2点である。〈1〉については、人体筋腱複合体を筋組織(筋線維)と腱組織に分け、それぞれの特性(筋特性、腱特性)を人間生体について定量化し、筋線維と腱組織との間の相互作用や身体運動における両者の協調について調べる。〈2〉については、筋特性の個人差と適応性に関して、体肢の筋群の筋量および筋形状の横断的・縦断的計測を行う。

運動生化学研究指導

樋口 満

ヒトを対象とした研究データを基に、一過性運動、及びトレーニングによる生体内の糖・脂質を中心とするエネルギー代謝の適応に関する応用運動生化学的研究に関して発表し議論する。

動物実験データを基に、トレーニングや栄養摂取による骨格筋におけるミトコンドリアの適応的変化、及び糖・脂質代謝機能の適応的変化など、基礎運動生化学的研究に関して発表し議論する。

スポーツ生理学研究指導

村岡 功

スポーツ生理学は各種スポーツ活動に対する生理的な応答と適応を探求する学問であるが、本格的に研究がなされたようになったのはたかだか60年前からである。しかし、近年に至って、運動不足に対する危機感から規則的なスポーツおよび身体運動が推奨されるとともに、一流競技者を育成するための科学的なバックアップが求められるようになったことなどを背景として、この分野は広く社会から注目を浴びるようになってきた。そして、これらのことと連動して、研究面でも著しい進歩がみられている。ここでは、主にエネルギー代謝に関する領域を中心テーマとして、スポーツや身体運動による健康づくりおよび各種スポーツにおける選手育成の観点から、最近の知見に基づいて研究指導を行う。

スポーツ心理学研究指導

山崎 勝男

精神生理学的な方法論によって、スポーツ行動の心理学的なシステムと生理学的なシステムの翻訳メカニズム

ムを追究する。現在展開中の研究テーマは、1) 事象関連脳電位を指標とした運動プログラムの解析、2) 運動スキル獲得過程のポリグラム的解析、3) 睡眠一覚醒リズムと精神的健康度の調査研究、4) 動機づけの脳波・ポリグラム的解明、5) 末梢自律系の指標による感情・情動の類別である。

スポーツ情報処理研究指導

菅田 雅彰

スポーツメディア情報およびスポーツ身体動作に関する高度な情報処理技術を学習するとともに、スポーツメディア情報解析、スポーツ身体動作のコンピュータシミュレーション、感覚運動制御系のコンピュータモデルなどを中心として、文献研究、および個々の研究課題に取り組む。

統合運動神経生理学研究指導

宝田 雄大

(I) 我々は、何らかの意味をもった運動や行動の結果を、感覚受容器と神経を介した脳への表象により知覚する。筋収縮力に対する大きさの知覚(force perception)などに関する神経科学的な研究を指導する。(II) 優れた可塑性を有するヒト骨格筋は、たとえ与えられる力学的刺激が小さくとも、虚血や血流制限を伴うことにより、筋肥大をともなった筋機能の改善を引き起こす。虚血下の筋運動に関する運動生理学的な研究を指導する。

スポーツ認知神経科学研究指導

正木 宏明

スポーツ場面で観察される巧みな動作はどのようにして実現されるのだろうか。その背景メカニズムを脳内情報処理の観点から解明していく。認知神経科学では脳の認知機能解明に主眼が置かれるが、ここでは人間と環境との相互作用を重視する心理学的アプローチも重視する。スポーツでは、視覚情報を瞬時に認知し、適切な行動を選択し、それを正確に実現する必要性に迫られる。実際の動作が目標動作から逸脱すれば、脳はその逸脱(エラー)を検出し、評価し、修正することで、より洗練された動作をつくりだしていく。こうした脳内情報処理について、高時間分解能の脳波と高空間分解能の fMRI を組み合わせて検討する。

Keywords: 脳波、事象関連電位、fMRI、運動学習、パフォーマンスモニタリング

バイオメカニクス研究指導

矢内 利政

高速度カメラ、電磁ゴニオメータ、床反力計測システム等を用いた身体運動解析と、超音波診断装置や MRI を用いて可視化した人体内部情報分析を融合することによって、スポーツにおける競技力向上のメカニズムや傷害発症のメカニズムを明らかにするとともに、トレーニングやリハビリテーションなどの補強運動とスポーツパフォーマンスとの関係を実験的に明らかにすることを研究の目的とする。修士論文作成に関しての様々な研究方法について指導する。

[コーチング科学研究領域]

コーチング科学 I 研究指導

磯 繁雄

陸上競技は、個人競技であるゆえスポーツバイオメカニクス・スポーツ生理学・スポーツ社会学等での研究として扱いやすい対象種目である。本研究指導では、陸上競技にかかる様々な基礎研究を学習することで、トップアスリート育成のためのコーチングシステムの理論的知見を学び、個別に設定したテーマについて方法論を構築し、研究をまとめる。

コーチング科学Ⅱ研究指導

奥野 景介

現代社会に機能する「コーチング」をスポーツ・教育の分野より科学的に、また技能的に捉え、競技に対するコーチングの現象について専門的に理解を深める。また、トップアスリートに関連する実践的研究の理解を深めることで高度なスポーツ実践専門家養成を目指す。

コーチング科学Ⅲ研究指導

土屋 純

スポーツパフォーマンスは技術面、戦術面、体力面、心理面などに細分化されて評価され、それについて向上策が検討されることが一般的である。本演習ではこのうち技術面、とりわけスポーツ技術の把握とその指導方法について、スポーツバイオメカニクスとスポーツ運動の観点から解明する研究を進める。

コーチング科学Ⅳ研究指導

堀野 博幸

「トップアスリートのトップパフォーマンス構築」と「育成年代の選手育成」に関するコーチングプロセスには、共通する要素が多い。本研究指導では、両者のコーチング現場で起こる種々の事象を、スポーツ心理学およびコーチング科学の観点から解明し、コーチングの体系化と知見の実践的応用を目指す。加えて、スポーツフィールドとアカデミックフィールドの融合を図るために、両フィールドでの活動を積極的に行う。

主な研究課題は、1)コーチングとスポーツ心理学、2)戦略・戦術分析、3)チームビルディングとチームマネジメント。

Keywords:コーチング、スポーツ心理学、メンタルサポート、戦略・戦術分析、チームマネジメント、選手および指導者育成システム

コーチング科学Ⅴ研究指導

倉石 平

コーチングにとって情報は、不可欠な存在である。コーチングをうまく遂行するにも、立案するにも必ずや情報が必要である。

コーチングには、あらゆる方向からの情報収集、その情報を意味のあるデータに変える分析、解析が必要であり、その意味のあるデータを如何にしてゲーム勝利のために(または、良い成果を出すために)反映させることができるか。そのためには、どのような練習をするべきか、また戦術戦略を如何にして立てるか、などがとても重要になってくる。

ここでは、先人たちの戦術戦略を学び、現代スポーツに如何に反映できるか。また、如何にして情報を収集できるか。その情報をどのようにして分析、解析が出来るか、ゲーム分析ソフトなどを使った分析なども体験しながら実践でのデータ分析をする。又そのデータを使っての戦術戦略の立案なども実践を絡めながら実習をする。すぐに実践できるアナリストを養成することをテーマに研究を進める。

トレーニング科学研究指導

岡田 純一

トレーニング科学研究の多くは基礎的研究を積み上げ実践的アイディアへと結びつける、あるいは経験に基づいた事例に科学的実証を与えるという過程を辿る。そこには能力や機能を向上させる様々な身体活動を実践し、それを分析・評価し、記述することが求められている。関連する諸分野の基礎研究を実践に応用する、あるいは新たなアイディアを創出することも必要である。このような視座を養い、研究を推進する。

【演習】

[スポーツ文化研究領域]

武道論演習（1）

志々田 文明

近代日本の武道教育に直接的また間接的に大きな影響を与えたのは江戸・近世の武芸思想であり、剣道、弓道、柔術・柔道に代表される現代の武道を考えるためにには近世武芸伝書の学習は欠かせない。また、空手や合気道など近代に急速に普及した武道研究についても、これらを武道として位置づけて研究しようとする以上、同様である。さらに、中国武術など日本武道以外の格闘技を研究する場合においても、伝書史料の豊富な近世武芸の研究は避けて通れないものである。よってこの演習では、近世以降の武士や知識人の技法・心法論、武芸観や武士道論を、武術伝書、論文及び学術書を通して検討する。なお、テキストはこれまでの学習史、受講者の専門・関心を鑑みて決定される。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：近世武芸伝書講読(1)	第16回：近世武芸伝書講読(16)
第2回：近世武芸伝書講読(2)	第17回：近世武芸伝書講読(17)
第3回：近世武芸伝書講読(3)	第18回：近世武芸伝書講読(18)
第4回：近世武芸伝書講読(4)	第19回：近世武芸伝書講読(19)
第5回：近世武芸伝書講読(5)	第20回：近世武芸伝書講読(20)
第6回：近世武芸伝書講読(6)	第21回：近世武芸伝書講読(21)
第7回：近世武芸伝書講読(7)	第22回：近世武芸伝書講読(22)
第8回：近世武芸伝書講読(8)	第23回：近世武芸伝書講読(23)
第9回：近世武芸伝書講読(9)	第24回：近世武芸伝書講読(24)
第10回：近世武芸伝書講読(10)	第25回：近世武芸伝書講読(25)
第11回：近世武芸伝書講読(11)	第26回：近世武芸伝書講読(26)
第12回：近世武芸伝書講読(12)	第27回：近世武芸伝書講読(27)
第13回：近世武芸伝書講読(13)	第28回：近世武芸伝書講読(28)
第14回：近世武芸伝書講読(14)	第29回：近世武芸伝書講読(29)
第15回：近世武芸伝書講読(15)	第30回：近世武芸伝書講読(30)

武道論演習（2）

志々田 文明

この演習では主に研究方法論を彫琢するために、以下の点を扱う。

- 1)「武道学研究」の学会誌に収載された武道史に関する研究論文や著書の分析・評価。
- 2)歴史学、人類学、社会学に関する文献の分析・評価

学問は積み重ねであり、こつこつと読み続けることで初めて当初難解であった文献がどうにか読めるようになる。この演習を通して、“The Devil is in the details”の精神、小さな疑問をおろそかにしない研究態度を養っていく。養成された実力を背景に、学習内容を論文化し、国内及び海外の学会で発表する能力を育成する。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(1)	第16回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(6)
第2回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(2)	第17回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(7)
第3回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(3)	第18回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(8)
第4回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(4)	第19回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(9)
第5回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(5)	第20回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(10)
第6回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(6)	第21回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(11)
第7回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(7)	第22回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(12)
第8回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(8)	第23回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(13)
第9回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(9)	第24回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(14)
第10回：武道史に関する研究論文や著書の分析・評価(10)	第25回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(15)
第11回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(1)	第26回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(16)
第12回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(2)	第27回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(17)
第13回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(3)	第28回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(18)
第14回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(4)	第29回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(19)
第15回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(5)	第30回：研究方法論:社会学関係文献の分析・評価(20)

スポーツ人類学演習（1）

寒川 恒夫

スポーツ人類学は、人間行動の重要な一領域を成すスポーツ(競技や遊び、舞踊、武道、動物スポーツなどを含む最広義のスポーツ)と身体を、文化の視点から研究する分野である。演習は、スポーツと身体に関する文化人類学的研究論文の講読・討論とフィールドワークとによって進められる。理論モデル理解に重きを置くため、地域と民族は特定しない。

成績評価基準:平常点

授業計画：

第1回：本科目のガイダンス	第16回：民族スポーツに関するフィールドワーク(7)
第2回：スポーツ人類学研究論文の輪読(1)	第17回：民族スポーツに関するフィールドワーク(8)
第3回：スポーツ人類学研究論文の輪読(2)	第18回：民族スポーツに関するフィールドワーク(9)
第4回：スポーツ人類学研究論文の輪読(3)	第19回：民族スポーツに関するフィールドワーク(10)
第5回：スポーツ人類学研究論文の輪読(4)	第20回：スポーツ人類学研究論文の輪読(9)
第6回：スポーツ人類学研究論文の輪読(5)	第21回：スポーツ人類学研究論文の輪読(10)

第7回：スポーツ人類学研究論文の輪読(6)	第22回：スポーツ人類学研究論文の輪読(11)
第8回：スポーツ人類学研究論文の輪読(7)	第23回：スポーツ人類学研究論文の輪読(12)
第9回：スポーツ人類学研究論文の輪読(8)	第24回：スポーツ人類学研究論文の輪読(13)
第10回：民族スポーツに関するフィールドワーク(1)	第25回：スポーツ人類学研究論文の輪読(14)
第11回：民族スポーツに関するフィールドワーク(2)	第26回：スポーツ人類学研究論文の輪読(15)
第12回：民族スポーツに関するフィールドワーク(3)	第27回：スポーツ人類学研究論文の輪読(16)
第13回：民族スポーツに関するフィールドワーク(4)	第28回：スポーツ人類学研究論文の輪読(17)
第14回：民族スポーツに関するフィールドワーク(5)	第29回：スポーツ人類学研究論文の輪読(18)
第15回：民族スポーツに関するフィールドワーク(6)	第30回：講評

スポーツ人類学演習（2）

寒川 恒夫

演習(1)の基礎に立って各受講者は地域と時代あるいは民族を特定し、そこに展開するスポーツあるいは身体の文化研究テーマを設定する。演習は、設定したテーマに沿って各受講者が研究発表をおこない、これについて討論する形で進められる。フィールドワークは演習(1)同様、続けられる。

成績評価基準:平常点

授業計画:

第1回：本科目のガイダンス	第16回：民族スポーツに関するフィールドワーク(7)
第2回：テーマ設定のための討論(1)	第17回：民族スポーツに関するフィールドワーク(8)
第3回：テーマ設定のための討論(2)	第18回：民族スポーツに関するフィールドワーク(9)
第4回：テーマ設定のための討論(3)	第19回：民族スポーツに関するフィールドワーク(10)
第5回：テーマ設定のための討論(4)	第20回：研究発表(3)
第6回：テーマ設定のための討論(5)	第21回：研究発表(4)
第7回：テーマ設定のための討論(6)	第22回：研究発表(5)
第8回：研究発表(1)	第23回：研究発表(6)
第9回：研究発表(2)	第24回：研究発表(7)
第10回：民族スポーツに関するフィールドワーク(1)	第25回：研究発表(8)
第11回：民族スポーツに関するフィールドワーク(2)	第26回：研究発表(9)
第12回：民族スポーツに関するフィールドワーク(3)	第27回：研究発表(10)
第13回：民族スポーツに関するフィールドワーク(4)	第28回：研究発表(11)
第14回：民族スポーツに関するフィールドワーク(5)	第29回：研究発表(12)
第15回：民族スポーツに関するフィールドワーク(6)	第30回：講評

スポーツ倫理学・教育学演習（1）

友添 秀則

スポーツ教育学・倫理学の文献について講読する。加えて、修士論文執筆のために方法論についても講ずる。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の討議・発表を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：スポーツ教育学に関する先行研究の分析・発表(1)
第2回：文献収集の方法(1)	第17回：スポーツ教育学に関する先行研究の分析・発表(2)

第3回：文献収集の方法(2)	第18回：スポーツ教育学に関する先行研究の分析・発表(3)
第4回：レジメ作成の方法	第19回：スポーツ教育学に関する先行研究の分析・発表(4)
第5回：スポーツ教育学・倫理学の先行文献の分析方法(1)	第20回：スポーツ教育学に関する先行研究の分析・発表(5)
第6回：スポーツ教育学・倫理学の先行文献の分析方法(2)	第21回：体育・スポーツにおける倫理学的研究の分析・発表(1)
第7回：スポーツ教育学・倫理学文献の輪読・討議(1)	第22回：体育・スポーツにおける倫理学的研究の分析・発表(2)
第8回：スポーツ教育学・倫理学文献の輪読・討議(2)	第23回：体育・スポーツにおける倫理学的研究の分析・発表(3)
第9回：スポーツ教育学・倫理学文献の輪読・討議(3)	第24回：体育・スポーツにおける倫理学的研究の分析・発表(4)
第10回：スポーツ教育学・倫理学文献の輪読・討議(4)	第25回：体育・スポーツにおける倫理学的研究の分析・発表(5)
第11回：スポーツ教育学・倫理学文献の輪読・討議(5)	第26回：文献研究に必要とされるスキル(1)
第12回：スポーツ教育学・倫理学文献の輪読・討議(6)	第27回：文献研究に必要とされるスキル(2)
第13回：スポーツ教育学・倫理学文献の輪読・討議(7)	第28回：文献研究に必要とされるスキル(3)
第14回：スポーツ教育学・倫理学文献の輪読・討議(8)	第29回：論文構想の設定
第15回：スポーツ教育学・倫理学文献の輪読・討議の総括	第30回：総括と今後の課題

スポーツ倫理学・教育学演習（2）

友添 秀則

演習(1)に引き続いて、スポーツ教育学・倫理学に関する修士論文の作成方略について講じる。各自の問題意識に応じて論文執筆に必要なスキルや研究方法について、発表・討議を通して深め、修士論文を完成させることを目的とする。2年次の履修を原則とする。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の討議・発表を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：修士論文の構想・発表・討議(1)
第2回：修士論文執筆と文献収集の方法(1)	第17回：修士論文の構想・発表・討議(2)
第3回：修士論文執筆と文献収集の方法(2)	第18回：修士論文の構想・発表・討議(3)
第4回：発表レジメ作成の方法	第19回：修士論文の構想・発表・討議(4)
第5回：スポーツ教育学・倫理学の先行文献の分析方法(1)	第20回：修士論文の構想・発表・討議(5)
第6回：スポーツ教育学・倫理学の先行文献の分析方法(2)	第21回：修士論文の構築に必要な研究方略(1)
第7回：スポーツ教育学・倫理学研究に関する発表(1)	第22回：修士論文の構築に必要な研究方略(2)
第8回：スポーツ教育学・倫理学研究に関する発表(2)	第23回：修士論文の構築に必要な研究方略(3)
第9回：スポーツ教育学・倫理学研究に関する発表(3)	第24回：修士論文の構築に必要な研究方略(4)
第10回：スポーツ教育学・倫理学研究に関する発表(4)	第25回：修士論文の構築に必要な研究方略(5)

第11回：スポーツ教育学・倫理学研究に関する発表(5)	第26回：修士論文の構築に必要な研究方略(6)
第12回：スポーツ教育学・倫理学研究に関する発表(6)	第27回：修士論文の構築に必要な研究方略(7)
第13回：スポーツ教育学・倫理学研究に関する発表(7)	第28回：演習のまとめ(1)
第14回：スポーツ教育学・倫理学研究に関する発表(8)	第29回：演習のまとめ(2)
第15回：スポーツ教育学・倫理学に関する研究発表 の総括	第30回：総括と今後の課題

スポーツメディア論演習（1）

リー　トンプソン

スポーツとメディアを取り上げる文献を読むことによって、その関係の理解を深める。研究の課題、主流理論、研究方法などを学ぶことによって、自らの研究の参考にする。全員で共通な文献を読み、ディスカッションする。(1)では日本文の文献を取り上げる。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：文献講読とディスカッション
第2回：文献講読とディスカッション	第17回：文献講読とディスカッション
第3回：文献講読とディスカッション	第18回：文献講読とディスカッション
第4回：文献講読とディスカッション	第19回：文献講読とディスカッション
第5回：文献講読とディスカッション	第20回：文献講読とディスカッション
第6回：文献講読とディスカッション	第21回：文献講読とディスカッション
第7回：文献講読とディスカッション	第22回：文献講読とディスカッション
第8回：文献講読とディスカッション	第23回：文献講読とディスカッション
第9回：文献講読とディスカッション	第24回：文献講読とディスカッション
第10回：文献講読とディスカッション	第25回：文献講読とディスカッション
第11回：文献講読とディスカッション	第26回：文献講読とディスカッション
第12回：文献講読とディスカッション	第27回：文献講読とディスカッション
第13回：文献講読とディスカッション	第28回：文献講読とディスカッション
第14回：文献講読とディスカッション	第29回：文献講読とディスカッション
第15回：文献講読とディスカッション	第30回：文献講読とディスカッション

スポーツメディア論演習（2）

リー　トンプソン

スポーツとメディアを取り上げる文献を読むことによって、その関係の理解を深める。研究の課題、主流理論、研究方法などを学ぶことによって、自らの研究の参考にする。全員で共通な文献を読み、ディスカッションする。(2)では英文の文献を取り上げる。今考えているのは David Rowe, Sport, Culture and the Media (second edition), Open University Press, 2004.

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：文献講読とディスカッション	第16回：英文講読とディスカッション
第2回：文献講読とディスカッション	第17回：英文講読とディスカッション
第3回：文献講読とディスカッション	第18回：英文講読とディスカッション
第4回：文献講読とディスカッション	第19回：英文講読とディスカッション

第5回：文献講読とディスカッション	第20回：英文講読とディスカッション
第6回：文献講読とディスカッション	第21回：英文講読とディスカッション
第7回：文献講読とディスカッション	第22回：英文講読とディスカッション
第8回：文献講読とディスカッション	第23回：英文講読とディスカッション
第9回：文献講読とディスカッション	第24回：英文講読とディスカッション
第10回：文献講読とディスカッション	第25回：英文講読とディスカッション
第11回：文献講読とディスカッション	第26回：英文講読とディスカッション
第12回：文献講読とディスカッション	第27回：英文講読とディスカッション
第13回：文献講読とディスカッション	第28回：英文講読とディスカッション
第14回：文献講読とディスカッション	第29回：英文講読とディスカッション
第15回：文献講読とディスカッション	第30回：英文講読とディスカッション

スポーツ社会学演習（1）

宮内 孝知

スポーツ社会学は広い研究領域を有することから、本演習では、スポーツ社会学の研究誌、著作から幅広く原著、総説、論文等を選び、分担講読を通して、スポーツ社会学の理解を深めるとともに、スポーツ社会の研究領域を把握するようにする。

成績評価基準：作成された発表レジュメ、ディスカッション、出席等で総合的に評価する。

授業計画：

第1回：受講者の希望を聴取しながら、主テーマ・副テーマを決定する。	第16回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第2回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第17回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第3回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第18回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第4回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第19回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第5回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第20回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第6回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第21回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第7回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第22回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第8回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第23回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第9回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第24回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第10回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第25回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。
第11回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。	第26回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようする。

第12回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようとする。	第27回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようとする。
第13回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようとする。	第28回：各自の修士論文のテーマ、研究方法等を明確にするようなレジュメの作成と発表、討論。
第14回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようとする。	第29回：各自の修士論文のテーマ、研究方法等を明確にするようなレジュメの作成と発表、討論。
第15回：毎時テーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら発展させていくようとする。	第30回：各自の修士論文のテーマ、研究方法等を明確にするようなレジュメの作成と発表、討論。

スポーツ社会学演習（2）

宮内 孝知

演習(1)における研究領域の把握を基に、各自がテーマ設定をし、関連文献を講読しながら、修士論文研究課題を求めていく。必要に応じては、社会調査の方法をとることもある。それらを通して、スポーツ社会学を志向する資質を育てる。

成績評価基準：作成された発表レジュメ、ディスカッション、出席等で総合的に評価する。

授業計画：

第1回：受講者の修士論文テーマに即したレジュメを明らかにし、その研究方法について具体的な検討をする。	第16回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第2回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第17回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第3回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第18回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第4回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第19回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第5回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第20回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第6回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第21回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第7回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第22回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第8回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第23回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第9回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第24回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第10回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第25回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。
第11回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第26回：年間を通して行ってきた各テーマを、全員で総合的に検討し、各自の修士論文の仕上げを目指す。

第12回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第27回：年間を通して行ってきた各テーマを、全員で総合的に検討し、各自の修士論文の仕上げを目指す。
第13回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第28回：年間を通して行ってきた各テーマを、全員で総合的に検討し、各自の修士論文の仕上げを目指す。
第14回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第29回：年間を通して行ってきた各テーマを、全員で総合的に検討し、各自の修士論文の仕上げを目指す。
第15回：修士論文のテーマに即したレジュメを作成し、それを材料に討論しながら内容を深めていく。	第30回：年間を通して行ってきた各テーマを、全員で総合的に検討し、各自の修士論文の仕上げを目指す。

スポーツ史演習（1）

石井 昌幸

文献講読を通じて、歴史叙述のじっさいの方法について学ぶとともに、特にイギリス現代（第二次大戦後）スポーツ史と同時代のイギリス文化一般についての知見を深める。テキストには、Richard Holt and Tony Mason, *Sport in Britain, 1945–2000*, Blackwell Publishing: Oxford (2000) を用いる。

成績評価基準：授業時に課す発表と課題レポートによる。

授業計画：

第1回：テキスト講読、解説と討論。	第16回：テキスト講読、解説と討論。
第2回：テキスト講読、解説と討論。	第17回：テキスト講読、解説と討論。
第3回：テキスト講読、解説と討論。	第18回：テキスト講読、解説と討論。
第4回：テキスト講読、解説と討論。	第19回：テキスト講読、解説と討論。
第5回：テキスト講読、解説と討論。	第20回：テキスト講読、解説と討論。
第6回：テキスト講読、解説と討論。	第21回：テキスト講読、解説と討論。
第7回：テキスト講読、解説と討論。	第22回：テキスト講読、解説と討論。
第8回：テキスト講読、解説と討論。	第23回：テキスト講読、解説と討論。
第9回：テキスト講読、解説と討論。	第24回：テキスト講読、解説と討論。
第10回：テキスト講読、解説と討論。	第25回：テキスト講読、解説と討論。
第11回：テキスト講読、解説と討論。	第26回：テキスト講読、解説と討論。
第12回：テキスト講読、解説と討論。	第27回：テキスト講読、解説と討論。
第13回：テキスト講読、解説と討論。	第28回：テキスト講読、解説と討論。
第14回：テキスト講読、解説と討論。	第29回：テキスト講読、解説と討論。
第15回：テキスト講読、解説と討論。	第30回：テキスト講読、解説と討論。

スポーツ史演習（2）

石井 昌幸

文献講読を通じて、歴史叙述のじっさいの方法について学ぶとともに、特にイギリス現代（第二次大戦後）スポーツ史と同時代のイギリス文化一般についての知見を深める。テキストには、演習（1）からひき続き Richard Holt and Tony Mason, *Sport in Britain, 1945–2000*, Blackwell Publishing: Oxford (2000) を用いる。

成績評価基準：授業時に課す発表と課題レポートによる。

授業計画：

第1回：テキスト講読、解説と討論。	第16回：テキスト講読、解説と討論。
第2回：テキスト講読、解説と討論。	第17回：テキスト講読、解説と討論。
第3回：テキスト講読、解説と討論。	第18回：テキスト講読、解説と討論。
第4回：テキスト講読、解説と討論。	第19回：テキスト講読、解説と討論。
第5回：テキスト講読、解説と討論。	第20回：テキスト講読、解説と討論。
第6回：テキスト講読、解説と討論。	第21回：テキスト講読、解説と討論。
第7回：テキスト講読、解説と討論。	第22回：テキスト講読、解説と討論。
第8回：テキスト講読、解説と討論。	第23回：テキスト講読、解説と討論。
第9回：テキスト講読、解説と討論。	第24回：テキスト講読、解説と討論。
第10回：テキスト講読、解説と討論。	第25回：テキスト講読、解説と討論。
第11回：テキスト講読、解説と討論。	第26回：テキスト講読、解説と討論。
第12回：テキスト講読、解説と討論。	第27回：テキスト講読、解説と討論。
第13回：テキスト講読、解説と討論。	第28回：テキスト講読、解説と討論。
第14回：テキスト講読、解説と討論。	第29回：テキスト講読、解説と討論。
第15回：テキスト講読、解説と討論。	第30回：テキスト講読、解説と討論。

舞踊論演習（1）

杉山 千鶴

本演習は、実践を通して舞踊への理解を深めると共に上演芸術としての舞踊の諸相に対する認識を深めるものである。その一助として、舞踊並びに関連領域である美術や音楽などの公演・展示会の精力的な鑑賞を課外に行う。

その成果として全国コンクールのテクニカル部門・創作部門等への挑戦を勧める。希望があれば、これに応じた個別リハーサルも行なう。

成績評価基準：出席、レポートを総合して評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、関連領域の芸術の鑑賞
第2回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、練習曲	第17回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、関連領域の芸術の鑑賞
第3回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、練習曲	第18回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、関連領域の芸術の鑑賞
第4回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、練習曲	第19回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、関連領域の芸術の鑑賞
第5回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、練習曲	第20回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、関連領域の芸術の鑑賞
第6回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、練習曲	第21回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、コンクール、公演参加者のリハーサル
第7回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、練習曲	第22回：基本レッスン(ストレッチ、バーレッスン、ステップ)、コンクール、公演参加者のリハーサル

第8回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、練習曲	第23回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール、公演参加者のリハーサル
第9回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、練習曲	第24回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール、公演参加者のリハーサル
第10回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール参加者のリハーサル	第25回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール、公演参加者のリハーサル
第11回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール参加者のリハーサル	第26回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール、公演参加者のリハーサル
第12回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール参加者のリハーサル	第27回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール、公演参加者のリハーサル
第13回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール参加者のリハーサル	第28回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール、公演参加者のリハーサル
第14回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール参加者のリハーサル	第29回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール、公演参加者のリハーサル
第15回：基本レッスン（ストレッチ、バーレッスン、ステップ）、コンクール参加者のリハーサル	第30回：総括

舞踊論演習（2）

杉山 千鶴

受講者の関心もしくは研究テーマに応じた文献を講読する。

舞踊学の各領域、舞踊の多様な側面により多くかつ専門的に触れるものとする。

修士論文への足がかりもしくは寄与することとなることを期待する。

成績評価基準：出席、発表、ディスカッションへの参加姿勢、レポートを総合して評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス 文献の選定	第16回：第15回まで（春学期）の総括と文献の選定
第2回：文献講読とディスカッション①	第17回：文献講読とディスカッション①
第3回：文献講読とディスカッション②	第18回：文献講読とディスカッション②
第4回：文献講読とディスカッション③	第19回：文献講読とディスカッション③
第5回：文献講読とディスカッション④	第20回：文献講読とディスカッション④
第6回：文献講読とディスカッション⑤	第21回：文献講読とディスカッション⑤
第7回：文献講読とディスカッション⑥	第22回：文献講読とディスカッション⑥
第8回：文献講読とディスカッション⑦	第23回：文献講読とディスカッション⑦
第9回：文献講読とディスカッション⑧	第24回：文献講読とディスカッション⑧
第10回：文献講読とディスカッション⑨	第25回：文献講読とディスカッション⑨
第11回：文献講読とディスカッション⑩	第26回：文献講読とディスカッション⑩
第12回：論文の講読による補足①	第27回：補足資料の検討と講読①
第13回：論文の講読による補足②	第28回：補足資料の検討と講読②
第14回：論文の講読による補足③	第29回：補足資料の検討と講読③
第15回：前半部のまとめの発表とその内容の検討	第30回：総括

体育科教育学演習（1）

吉永 武史

本演習では、体育科教育に関する文献の講読などを通して、体育科の目的・目標論、教科内容論、教材づくり論、学習指導論、学習評価論についての基礎的理解を深め、体育科教育の内容論ならびに方法論を確立することを目指す。

体育科教育学の研究領域は、授業の前提条件に関わる基礎的研究、授業計画のための理論的研究、授業実践を対象に事実の記述分析や仮説検証を行う実践的研究によって構成される。本演習では主に、体育科教育の実践のための理論的研究に焦点を当て、体育科教育に関する文献の講読などを通して、体育科の目的・目標論、教科内容論、教材づくり論、学習指導論、学習評価論についての基礎的理解を深める。加えて、実際の体育授業の映像分析を通して、体育授業で生じる問題を解決するための授業研究にアプローチしていく。

成績評価基準：出席状況(30%)、討論内容(20%)、中間ならびに期末レポート(50%)により評価する。

授業計画：

第1回：演習の概要と進め方	第16回：体育科の学習指導論(3) 学習集団をめぐる論議過程
第2回：体育科の目的・目標論	第17回：体育科の学習指導論(4)教授技術
第3回：運動領域論：我が国における運動特性の考え方	第18回：体育科の学習評価論(1) 学習評価の意義と目的
第4回：体育科の教科内容論(1)教科内容の構造	第19回：体育科の学習評価論(2)学習評価の観点
第5回：体育科の教科内容論(2)運動学習	第20回：体育科の学習評価論(3)学習評価の方法
第6回：体育科の教科内容論(3)認識学習	第21回：体育科の授業研究(1) 体育の授業研究のアプローチ
第7回：体育科の教科内容論(4)社会的学習	第22回：体育科の授業研究(2) 経験的方法による研究
第8回：体育科の教科内容論(5)情意的学習	第23回：体育科の授業研究(3) 解釈学的方法による研究
第9回：体育科の教科内容論(6)球技の学習内容	第24回：体育科の授業研究(4) 授業場面の期間記録法による授業分析
第10回：体育科の教科内容論(7)陸上運動の学習内容	第25回：体育科の授業研究(5) 学習従事観察法による授業分析
第11回：体育科の教科内容論(8) 学習内容としての身体的認識	第26回：体育科の授業研究(6) Group Time Sampling 法による授業分析
第12回：体育科の教材づくり論	第27回：体育科の授業研究(7) 教師の相互作用行動観察法による授業分析
第13回：体育科の学習指導論(1)学習指導の構造	第28回：体育科の授業研究(8) ナラティブ分析法による授業分析
第14回：体育科の学習指導論(2)授業のイニシアティブ	第29回：体育科の授業研究(9) Game Performance Assessment Instrument によるゲーム分析
第15回：小括ならびに中間レポート課題	第30回：総括ならびに期末レポート課題

体育科教育学演習（2）

吉永 武史

本演習では、演習(1)における成果をベースに、体育科教育学に関する研究テーマを設定し、研究計画をデザインする。設定した研究テーマに沿って各自が取り組んだ研究成果を発表し、その内容についてディスカッションを行う。本演習の履修は2年次を原則とする。

成績評価基準：出席状況、発表内容、討論内容などにより総合的に評価する。

授業計画：

第1回：演習の概要と進め方	第16回：研究の中間報告とディスカッション①
第2回：研究のテーマ設定ならびに計画デザイン①	第17回：研究の中間報告とディスカッション②
第3回：研究のテーマ設定ならびに計画デザイン②	第18回：研究の中間報告とディスカッション③
第4回：研究のテーマ設定ならびに計画デザイン③	第19回：研究の中間報告とディスカッション④
第5回：研究のテーマ設定ならびに計画デザイン④	第20回：研究の中間報告とディスカッション⑤
第6回：研究のテーマ設定ならびに計画デザイン⑤	第21回：研究の中間報告とディスカッション⑥
第7回：研究のテーマ設定ならびに計画デザイン⑥	第22回：研究の中間報告とディスカッション⑦
第8回：研究のテーマ設定ならびに計画デザイン⑦	第23回：研究成果の発表とディスカッション①
第9回：資料・データの分析とディスカッション①	第24回：研究成果の発表とディスカッション②
第10回：資料・データの分析とディスカッション②	第25回：研究成果の発表とディスカッション③
第11回：資料・データの分析とディスカッション③	第26回：研究成果の発表とディスカッション④
第12回：資料・データの分析とディスカッション④	第27回：研究成果の発表とディスカッション⑤
第13回：資料・データの分析とディスカッション⑤	第28回：研究成果の発表とディスカッション⑥
第14回：資料・データの分析とディスカッション⑥	第29回：研究成果の発表とディスカッション⑦
第15回：資料・データの分析とディスカッション⑦	第30回：総括

[スポーツビジネス研究領域]

スポーツ経営学演習（1）

木村 和彦

個別のスポーツ経営領域または経営体（事業所）を対象に対して、主に経営学的なアプローチを用いてスポーツ経営現象の解明のための方法論を学び、研究成果を実践的な経営課題の解決につなげる提案力を高めていくために、具体的には経営戦略や事業戦略、マーケティングと消費者行動、組織と人的資源マネジメントなどに焦点を当てケーススタディを行い、経営の改善に向けた提案を行う。

教科書：なし

参考書：適宜紹介する

成績評価基準：小テスト、中間発表、最終発表を総合して評価する

授業計画：

第1回：オリエンテーション：本授業の進め方	第16回：マーケティングと消費者行動
第2回：オリエンテーション：本授業の進め方	第17回：組織と人的資源マネジメント
第3回：ケーススタディの方法論(1)	第18回：組織と人的資源マネジメント
第4回：ケーススタディの方法論(1)	第19回：中間発表
第5回：ケーススタディの方法論(2)	第20回：中間発表
第6回：ケーススタディの方法論(2)	第21回：プレゼンテーションの方法

第7回：ケーススタディの方法論(3)	第22回：プレゼンテーションの方法
第8回：ケーススタディの方法論(3)	第23回：企画提案の方法
第9回：ケースの選定:方法論に関する小テスト	第24回：企画提案の方法
第10回：ケースの選定:方法論に関する小テスト	第25回：最終発表と討議1
第11回：SWOT分析	第26回：最終発表と討議1
第12回：SWOT分析	第27回：最終発表と討議2
第13回：経営戦略と事業戦略	第28回：最終発表と討議2
第14回：経営戦略と事業戦略	第29回：小テストと解説
第15回：マーケティングと消費者行動	第30回：小テストと解説

スポーツ経営学演習（2）

木村 和彦

個別のスポーツ経営領域または経営体（事業所）を対象に対して、主に経営学的なアプローチを用いてスポーツ経営現象の解明のための方法論を学び、研究成果を実践的な経営課題の解決につなげる提案力を高めていくために、具体的には質問紙調査等、スポーツ消費者を対象とした定量的な調査・分析を行い、それらの結果に基づいて事業戦略やプロダクト開発を中心として経営の改善に向けた提案を行う。

教科書:なし

参考文献:適宜紹介する

成績評価基準:小テストと最終発表を総合して評価する

授業計画:

第1回：定量的調査・分析の方法(1)調査技法	第16回：調査実習(4)集計・分析
第2回：定量的調査・分析の方法(1)調査技法	第17回：調査実習(5)まとめ
第3回：定量的調査・分析の方法(2) 調査票の作成	第18回：調査実習(5)まとめ
第4回：定量的調査・分析の方法(2) 調査票の作成	第19回：論文・レポートの書き方
第5回：定量的調査・分析の方法(3)SPSS	第20回：論文・レポートの書き方
第6回：定量的調査・分析の方法(3)SPSS	第21回：発表資料の作成(1)
第7回：小テスト；研究対象の選定	第22回：発表資料の作成(1)
第8回：小テスト；研究対象の選定	第23回：発表資料の作成(2)
第9回：調査実習(1)調査目的、調査計画	第24回：発表資料の作成(2)
第10回：調査実習(1)調査目的、調査計画	第25回：最終発表と討議(1)
第11回：調査実習(2)調査実施	第26回：最終発表と討議(1)
第12回：調査実習(2)調査実施	第27回：最終発表と討議(2)
第13回：調査実習(3)調査実施	第28回：最終発表と討議(2)
第14回：調査実習(3)調査実施	第29回：修士論文の作成に向けて
第15回：調査実習(4)集計・分析	第30回：修士論文の作成に向けて

健康スポーツ論演習（1）

中村 好男

本授業では、“スポーツを通じた健康増進”という社会的ニーズに応えるために、体力科学、運動生理学、栄養学などの＜身体の理論＞から、行動科学、社会マーケティングといった＜行動の理論＞、さらには、ビジネ

スマネジメント、マーケティングなどの<社会組織の理論>にわたるまで、様々な領域における基礎学問分野の知見を学習する。

成績評価基準:授業出席および授業中の発表を総合的に評価する。

授業計画:

第1回 : 健康スポーツのマーケティングとマネジメント	第16回 : 夏期研究成果中間報告(1)
第2回 : 健康スポーツマーケティングの具体事例(1) フィットネス業界	第17回 : 夏期研究成果中間報告(2)
第3回 : 健康スポーツマーケティングの具体事例(2) 地域スポーツクラブ	第18回 : 夏期研究成果講評と課題解説
第4回 : 健康スポーツマーケティングの具体事例(3) 特定保健指導	第19回 : 論文作成技法(1. 構成)
第5回 : 健康スポーツマーケティングの具体事例(4) ウォーキング	第20回 : 論文作成技法(2. 表記ならびに引用法)
第6回 : 健康スポーツマーケティングの具体事例(5) 栄養指導	第21回 : 論文作成技法 (3. 問題設定・仮説提示から研究目的まで)
第7回 : 健康スポーツマネジメントの調査研究技法	第22回 : 論文作成技法 (4. 問題解決のための方法・結果の一貫性)
第8回 : 健康スポーツに関する予備調査(1)	第23回 : 論文作成技法(5. データ分析)
第9回 : 健康スポーツに関する予備調査(2)	第24回 : 論文作成技法(6. 統計分析と検定)
第10回 : 健康スポーツに関する予備調査(3)	第25回 : 論文作成技法 (7. 研究目的と考察の一貫性と結論)
第11回 : 健康スポーツに関する予備調査(4)	第26回 : プレゼンテーション技法(1)
第12回 : 健康スポーツに関する予備調査(5)	第27回 : プレゼンテーション技法(2)
第13回 : 予備調査結果発表(1)	第28回 : プレゼンテーション技法(3)
第14回 : 予備調査結果発表(2)	第29回 : プレゼンテーション技法(4)
第15回 : 夏期休業中の個別研究推進に向けた課題提示と解説	第30回 : 本研究に向けた取り組みと課題解説

健康スポーツ論演習（2）

中村 好男

本授業では、健康スポーツ論演習(1)での学習を踏まえて、「地域住民へのスポーツ振興」ならびに「健康増進の達成」という目標を実現するための実践的技法を確立することを目指す。具体的には、地域自治体、総合型地域スポーツクラブ、老人福祉施設等のさまざまな現場(フィールド)での実践的研究を行い、医療費削減や介護予防に資するためのプログラムの開発とその評価モデルの構築に加えて、地域社会における健康増進ならびに介護予防システムの構築を行う。

成績評価基準:授業出席および授業中の発表を総合的に評価する。

授業計画:

第1回 : 調査研究指導:春期休業中の研究進捗状況報告	第16回 : 健康スポーツに関する調査(7)
第2回 : 先行文献講読指導(1)	第17回 : 健康スポーツに関する調査(8)

第3回：先行文献講読指導(2)	第18回：健康スポーツに関する調査(9)
第4回：先行文献講読指導(3)	第19回：健康スポーツに関する調査(10)
第5回：先行文献講読指導(4)	第20回：健康スポーツに関する調査(11)
第6回：研究計画書の作成技法(1)	第21回：健康スポーツに関する調査(12)
第7回：研究計画書の作成技法(2)	第22回：プレゼンテーション技法(2)
第8回：健康スポーツに関する調査(1)	第23回：健康スポーツに関する調査(13)
第9回：健康スポーツに関する調査(2)	第24回：健康スポーツに関する調査(14)
第10回：健康スポーツに関する調査(3)	第25回：健康スポーツに関する調査(15)
第11回：健康スポーツに関する調査(4)	第26回：研究成果発表(1)
第12回：健康スポーツに関する調査(5)	第27回：研究成果発表(2)
第13回：健康スポーツに関する調査(6)	第28回：プレゼンテーション技法(3)
第14回：調査中間報告	第29回：プレゼンテーション技法(4)
第15回：プレゼンテーション技法(1)	第30回：まとめ：口頭試問演習

スポーツビジネスマネジメント論演習（1）

原田 宗彦

スポーツビジネスを取り巻く社会経済環境の把握と分析に取り組むとともに、クラブ事業やリーグ経営における価値創造と集客のためのマーケティングを、先行研究や先進的事例の中から学ぶとともに理論化を試みる。演習(1)は、原則として1年生の授業とする。

成績評価基準：出席とプレゼンテーション、そしてゼミへの貢献度によって評価を行う。

授業計画：

第1回：授業ガイダンス	第16回：スポーツビジネス概論4
第2回：スポーツビジネス概論1	第17回：日本語論文アブストラクト発表1
第3回：スポーツビジネス概論2	第18回：日本語論文アブストラクト発表2
第4回：グループワーク1	第19回：日本語論文アブストラクト発表3
第5回：グループワーク2	第20回：日本語論文アブストラクト発表4
第6回：グループワーク3	第21回：日本語論文アブストラクト発表5
第7回：研究論文の読み方1	第22回：日本語論文アブストラクト発表6
第8回：研究論文の読み方2	第23回：リサーチプロジェクト発表1
第9回：英語論文アブストラクト発表1	第24回：リサーチプロジェクト発表2
第10回：英語論文アブストラクト発表2	第25回：リサーチプロジェクト発表3
第11回：英語論文アブストラクト発表3	第26回：リサーチプロジェクト発表4
第12回：英語論文アブストラクト発表4	第27回：リサーチプロジェクト発表5
第13回：英語論文アブストラクト発表5	第28回：リサーチプロジェクト発表6
第14回：英語論文アブストラクト発表6	第29回：スポーツビジネス概論5
第15回：スポーツビジネス概論3	第30回：演習のまとめとレポート課題

スポーツビジネスマネジメント論演習（2）

原田 宗彦

スポーツクラブやプロリーグの経営的課題に取り組むとともに、スポーツベンチャーの起業に必要となる種々のビジネスモデルの構築と可能性について検証する。演習(2)は、原則として2年生の授業とする。

成績評価基準：出席とプレゼンテーション、そしてゼミへの貢献度によって評価を行う。

授業計画：

第1回：授業ガイダンス	第16回：日本語論文アブストラクト発表2
第2回：研究論文の書き方1	第17回：日本語論文アブストラクト発表3
第3回：研究論文の書き方2	第18回：日本語論文アブストラクト発表4
第4回：英語論文アブストラクト発表1	第19回：日本語論文アブストラクト発表5
第5回：英語論文アブストラクト発表2	第20回：日本語論文アブストラクト発表6
第6回：英語論文アブストラクト発表3	第21回：修論中間発表1
第7回：英語論文アブストラクト発表4	第22回：修論中間発表2
第8回：英語論文アブストラクト発表5	第23回：修論中間発表3
第9回：英語論文アブストラクト発表6	第24回：研究論文の書き方4
第10回：社会調査技法1(質的データと量的データについて)	第25回：SPSS 演習1
第11回：社会調査技法2(データ処理法と統計)	第26回：SPSS 演習2
第12回：修論テーマ発表1	第27回：SPSS 演習3
第13回：修論テーマ発表2	第28回：プレゼンテーション1
第14回：修論テーマ発表3	第29回：プレゼンテーション2
第15回：日本語論文アブストラクト発表1	第30回：プレゼンテーション3

スポーツクラブビジネス論演習（1）

間野 義之

二年制修士の1年目の演習として、スポーツクラブビジネス関連研究の基礎を身につけることを目的とする。

具体的な先行研究の精読、調査研究の方法論の獲得をめざす。

学生参加型の演習とし、交代での発表と、全員での討論を行う。

成績評価基準：演習での発言ならびにレポートにて評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：本文中の文献引用
第2回：研究内容のクオリティ	第17回：引用文献リスト
第3回：掲載論文の特徴	第18回：論文原稿を準備するための一般的な規定
第4回：投稿原稿の構成	第19回：原稿の各部分をタイプする際の指示
第5回：表現・提示の質的チェック	第20回：修士論文・博士論文・レポート
第6回：文章スタイル	第21回：博士論文等を学術誌に掲載する場合
第7回：文法	第22回：口頭発表のための原稿
第8回：言葉の偏見をなくすための指針	第23回：採用された原稿の編集作業
第9回：句読法、綴り等	第24回：校訂済み原稿の再検討
第10回：引用	第25回：校正
第11回：数・メートル法による表示	第26回：論文出版後
第12回：統計や数式を含む原稿	第27回：原稿提出前のチェックリスト
第13回：表	第28回：学術情報の報告と出版に関する倫理基準
第14回：図	第29回：法的資料を参考文献とする場合
第15回：脚注と注	第30回：まとめ

スポーツクラブビジネス論演習（2）

間野 義之

二年制修士課程の2年目の演習として、スポーツクラブビジネス関連研究の専門性を高めることを目的とする。

各自の修士論文の研究計画や先行研究を発表し、批判的あるいは建設的な討議を行う。

成績評価基準：演習での発言ならびにレポートにて評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：本調査結果(1)
第2回：研究計画(1)	第17回：本調査結果(2)
第3回：研究計画(2)	第18回：本調査結果(3)
第4回：研究計画(3)	第19回：本調査結果(4)
第5回：研究計画(4)	第20回：考察(1)
第6回：研究方法(1)	第21回：考察(2)
第7回：研究方法(2)	第22回：考察(3)
第8回：研究方法(3)	第23回：考察(4)
第9回：研究方法(4)	第24回：結論(1)
第10回：プレ調査結果(1)	第25回：結論(2)
第11回：プレ調査結果(2)	第26回：結論(3)
第12回：プレ調査結果(3)	第27回：結論(4)
第13回：プレ調査結果(4)	第28回：引用参考文献(1)
第14回：発表練習	第29回：引用参考文献(2)
第15回：中間まとめ	第30回：まとめ

トップスポーツビジネス論演習（1）

平田 竹男

トップスポーツビジネスに関する実践力と理論的研究能力の育成を図りつつ、トップスポーツビジネスに関わる諸問題を高度な教育・研究を通して解明するための演習を行う。

成績評価基準：授業出席・発表内容を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：トップスポーツビジネスとは	第16回：夏期研究成果中間報告(1)
第2回：トリプルミッションとは	第17回：夏期研究成果中間報告(2)
第3回：勝利とは	第18回：研究計画書の作成技法
第4回：普及とは	第19回：論文作成技法(1. 構成)
第5回：市場とは	第20回：論文作成技法(2. 表記ならびに引用法)
第6回：理念とは	第21回：論文作成技法 (3. 問題設定・仮説提示から研究目的まで)
第7回：トップスポーツビジネスの具体事例(1) サッカー	第22回：論文作成技法 (4. 問題解決のための方法・結果の一貫性)
第8回：トップスポーツビジネスの具体事例(2)野球	第23回：論文作成技法(5. データ分析)
第9回：トップスポーツビジネスの具体事例(3)陸上	第24回：論文作成技法(6. 統計分析と検定)
第10回：トップスポーツビジネスの具体事例(4) メディア	第25回：論文作成技法 (7. 研究目的と考察の一貫性と結論)

第11回：トップスポーツビジネスの具体事例(5) スポーツ用品	第26回：研究成果発表(1)
第12回：トップスポーツビジネスの具体事例(6)選手	第27回：研究成果発表(2)
第13回：トップスポーツリーグの具体事例(1) 欧州サッカー	第28回：プレゼンテーション技法(1)
第14回：トップスポーツリーグの具体事例(2) 北米野球	第29回：プレゼンテーション技法(2)
第15回：夏期休業中の個別研究推進に向けた課題 提示と解説	第30回：まとめ：口頭試問演習

トップスポーツビジネス論演習（2）

平田 竹男

演習(1)を基礎に、各受講者の研究テーマを中心に、研究目的、研究計画、結果の解決について発表し、考察を深める。

成績評価基準：授業出席・発表内容を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：調査研究指導：春期休業中の研究進捗状況報告	第16回：トップスポーツビジネスに関する調査(7)
第2回：先行文献講読指導(1)	第17回：トップスポーツビジネスに関する調査(8)
第3回：先行文献講読指導(2)	第18回：トップスポーツビジネスに関する調査(9)
第4回：先行文献講読指導(3)	第19回：トップスポーツビジネスに関する調査(10)
第5回：先行文献講読指導(4)	第20回：トップスポーツビジネスに関する調査(11)
第6回：研究計画書の作成技法(1)	第21回：トップスポーツビジネスに関する調査(12)
第7回：研究計画書の作成技法(2)	第22回：プレゼンテーション技法(2)
第8回：トップスポーツビジネスに関する調査(1)	第23回：トップスポーツビジネスに関する調査(13)
第9回：トップスポーツビジネスに関する調査(2)	第24回：トップスポーツビジネスに関する調査(14)
第10回：トップスポーツビジネスに関する調査(3)	第25回：トップスポーツビジネスに関する調査(15)
第11回：トップスポーツビジネスに関する調査(4)	第26回：研究成果発表(1)
第12回：トップスポーツビジネスに関する調査(5)	第27回：研究成果発表(2)
第13回：トップスポーツビジネスに関する調査(6)	第28回：プレゼンテーション技法(3)
第14回：調査中間報告	第29回：プレゼンテーション技法(4)
第15回：プレゼンテーション技法(1)	第30回：まとめ：口頭試問演習

スポーツ組織論演習（1）

作野 誠一

本演習は、修士論文の作成に向けて、各自の関心に応じた研究テーマを決定するとともに、研究の枠組を構築することめざす。各自の関心に応じた関連先行研究の報告を通じて、修士論文テーマの決定ならびに研究の基本的枠組の構築に向けた討議・指導をおこなう。本演習は1年次の登録が望ましい。

成績評価基準：出席状況及び授業での発表内容によって評価する。

授業計画：

第1回：授業ガイダンス 前半ガイダンス	第16回：後半ガイダンス
第2回：先行研究・参考文献の収集	第17回：先行研究の検討

第3回：先行研究の検討①	第18回：先行研究の検討
第4回：先行研究の検討②	第19回：データ分析① 量的データ
第5回：研究テーマの基本的方向性	第20回：先行研究の検討
第6回：先行研究の検討③	第21回：先行研究の検討
第7回：先行研究の検討④	第22回：データ分析② 質的データ
第8回：先行研究のまとめ方	第23回：先行研究の検討
第9回：先行研究の検討⑤	第24回：先行研究の検討
第10回：先行研究の検討⑥	第25回：データ分析③ SPSS の利用
第11回：研究方法の設計① 分析枠組	第26回：先行研究の検討
第12回：先行研究の検討⑦	第27回：先行研究の検討
第13回：先行研究の検討⑧	第28回：先行研究の検討
第14回：研究方法の設計② 概念と操作化	第29回：後半のまとめ
第15回：前半のまとめ	第30回：まとめ

スポーツ組織論演習（2）

作野 誠一

本演習は、修士論文の作成に向けて多方面からの研究指導を行う。各自の研究に関する課題報告と進捗状況の確認を軸としながら、その過程において、研究方法、調査方法、分析方法等について指導する。本演習は2年次の登録が望ましい。

成績評価基準：出席状況及び授業での発表内容によって評価する。

授業計画：

第1回：授業ガイダンス 前半ガイダンス	第16回：後半ガイダンス
第2回：先行研究・参考文献の収集	第17回：先行研究の検討⑨
第3回：先行研究の検討①	第18回：先行研究の検討⑩
第4回：先行研究の検討②	第19回：データ分析① 記述統計
第5回：研究テーマの確認	第20回：研究の進捗報告と討議①
第6回：先行研究の検討③	第21回：研究の進捗報告と討議②
第7回：先行研究の検討④	第22回：データ分析② 多変量解析
第8回：先行研究のまとめ方	第23回：研究の進捗報告と討議③
第9回：先行研究の検討⑤	第24回：研究の進捗報告と討議④
第10回：先行研究の検討⑥	第25回：データ分析③ 質的データの処理
第11回：調査デザイン① 先行研究から質問紙へ	第26回：研究の進捗報告と討議⑤
第12回：先行研究の検討⑦	第27回：研究の進捗報告と討議⑥
第13回：先行研究の検討⑧	第28回：研究の進捗報告と討議⑦
第14回：調査デザイン② 調査の実際	第29回：後半のまとめ
第15回：前半のまとめ	第30回：全体のまとめ

スポーツビジネス・アドミニストレーション演習（1）

武藤 泰明

演習の方法：受講する学生は教科書・参考図書を分担して講読、発表します。今年度の教科書はマッキンゼー「企業価値評価（第4版）」。参考図書は適宜選択します。

演習の内容：企業分析で広く用いられている企業価値評価の方法を理解・習得することが第一の目的です。

第二の目的は、これをスポーツ組織に適用する方法について検討することです。

成績評価基準：発表・提出された資料の水準によって評価します。

授業計画：

第1回：演習の概要と進めかた	第16回：教科書講読(14章)とスポーツ組織への適用の検討
第2回：教科書講読(1章)とスポーツ組織への適用の検討	第17回：教科書講読(15章)とスポーツ組織への適用の検討
第3回：教科書講読(2章)とスポーツ組織への適用の検討	第18回：教科書講読(16章)とスポーツ組織への適用の検討
第4回：教科書講読(3章)とスポーツ組織への適用の検討	第19回：教科書講読(17章)とスポーツ組織への適用の検討
第5回：教科書講読(4章)とスポーツ組織への適用の検討	第20回：教科書講読(18章)とスポーツ組織への適用の検討
第6回：教科書講読(5章)とスポーツ組織への適用の検討	第21回：教科書講読(19章)とスポーツ組織への適用の検討
第7回：教科書講読(6章)とスポーツ組織への適用の検討	第22回：教科書講読(20章)とスポーツ組織への適用の検討
第8回：教科書講読(7章)とスポーツ組織への適用の検討	第23回：教科書講読(21章)とスポーツ組織への適用の検討
第9回：教科書講読(8章)とスポーツ組織への適用の検討	第24回：教科書講読(22章)とスポーツ組織への適用の検討
第10回：教科書講読(9章)とスポーツ組織への適用の検討	第25回：教科書講読(23章)とスポーツ組織への適用の検討
第11回：教科書講読(10章)とスポーツ組織への適用の検討	第26回：教科書講読(24章)とスポーツ組織への適用の検討
第12回：教科書講読(11章)とスポーツ組織への適用の検討	第27回：教科書講読(25章)とスポーツ組織への適用の検討
第13回：教科書講読(12章)とスポーツ組織への適用の検討	第28回：教科書講読(26章)とスポーツ組織への適用の検討
第14回：教科書講読(13章)とスポーツ組織への適用の検討	第29回：教科書講読(資料編)とスポーツ組織への適用の検討
第15回：前期総括	第30回：総括

スポーツビジネス・アドミニストレーション演習（2）

武藤 泰明

授業方法：受講する学生はスポーツビジネス・アドミニストレーションに関連する日本と海外の先行研究の動向をテーマ分野ごとに調査・発表します。一連の演習によって、①スポーツビジネス・アドミニストレーションのホット・イシューを発見・理解すること②文献検索方法に習熟すること③自身の研究テーマを発見、あるいはレベルアップしていくことを目的とします。

授業内容：まず学生の関心領域をある程度尊重しながら、対象とするテーマ分野の設定を行います。これに基づき、毎回テーマ分野ごとに資料整理と発表を繰り返します。

成績評価基準:発表・提出された資料の水準によって評価します。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：先行研究の概要(3) 欧州サッカーリーグ(その3)
第2回：基本文献のリストアップ(1)和文	第17回：先行研究の概要(3) 欧州サッカーリーグ(その4)
第3回：基本文献のリストアップ(2)英文	第18回：先行研究の概要(3) 欧州サッカーリーグ(その5)
第4回：基本文献のリストアップ(2)英文(続き)	第19回：先行研究の概要(4)F1
第5回：テーマの類型化と分野の設定	第20回：先行研究の概要(4)F1(その2)
第6回：先行研究の概要(1) スタジアム・ビジネス(国内)	第21回：先行研究の概要(5)大相撲
第7回：先行研究の概要(1) スタジアム・ビジネス(米国)	第22回：先行研究の概要(6)NPB 及び球団
第8回：先行研究の概要(1) スタジアム・ビジネス(欧洲)	第23回：先行研究の概要(7) Jリーグ及びJクラブ
第9回：先行研究の概要(2) 米国の4大プロスポーツ(MLB)	第24回：先行研究の概要(7) Jリーグ及びJクラブ(その2)
第10回：先行研究の概要(2) 米国の4大プロスポーツ(NBA)	第25回：先行研究の概要(7) Jリーグ及びJクラブ(その3)
第11回：先行研究の概要(2) 米国の4大プロスポーツ(NFL)	第26回：先行研究の概要(8) 国内の他の競技(マイナースポーツ等)
第12回：先行研究の概要(2) 米国の4大プロスポーツ(NHL)	第27回：先行研究の概要(8) 国内の他の競技(マイナースポーツ等その2)
第13回：先行研究の概要(3)欧州サッカーリーグ	第28回：先行研究の概要(9) 海外の他の競技(マイナースポーツ等)
第14回：先行研究の概要(3) 欧州サッカーリーグ(その2)	第29回：ホット・イシューの類型化とマッピング
第15回：前期総括と後期課題・方針の提示	第30回：ホット・イシューの類型化とマッピング(その2)

注:第6回～第28回については第5回で設定した分野によって変わることがある。

スポーツビジネスマーケティング演習（1）

松岡 宏高

本演習では、スポーツマーケティングをテーマとした研究論文を精読し、検討することによって、当該領域の研究デザインや研究方法、およびこれまでに報告された知見について理解することを目的とする。また、このプロセスを通して、受講生が各自の研究テーマの設定を行う。

成績評価基準:演習への出席・参加および発表、レポートによって評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：先行研究のまとめ方
第2回：スポーツマーケティング研究領域の確認	第17回：先行研究のまとめ方
第3回：先行研究・参考資料の収集1	第18回：先行研究の検討

第4回：先行研究・参考資料の収集2	第19回：先行研究の検討
第5回：研究論文の読み方1	第20回：先行研究の検討
第6回：研究論文の読み方2	第21回：先行研究の検討
第7回：先行研究の検討	第22回：先行研究の検討
第8回：先行研究の検討	第23回：先行研究の検討
第9回：先行研究の検討	第24回：先行研究の検討
第10回：先行研究の検討	第25回：先行研究の検討
第11回：先行研究の検討	第26回：研究テーマの検討
第12回：先行研究の検討	第27回：研究テーマの検討
第13回：先行研究の検討	第28回：研究テーマの発表
第14回：先行研究の検討	第29回：研究テーマの発表
第15回：先行研究の検討	第30回：まとめ

スポーツビジネスマーケティング演習（2）

松岡 宏高

本演習では、スポーツマーケティングをテーマとした研究の遂行に必要な研究手法を学び、受講者自身が研究を計画し、実施することによって、その能力を高めることをめざす。

成績評価基準：演習への出席・参加および発表、レポートによって評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：データの収集
第2回：スポーツマーケティング研究領域の確認	第17回：研究の進捗状況報告
第3回：研究に必要な基礎的知識	第18回：研究の進捗状況報告
第4回：研究に必要な基礎的知識	第19回：データ処理
第5回：研究に必要な基礎的知識	第20回：データ処理
第6回：データ収集法	第21回：統計ソフトの活用
第7回：データ収集法	第22回：統計ソフトの活用
第8回：データ分析法	第23回：統計ソフトの活用
第9回：データ分析法	第24回：統計ソフトの活用
第10回：データ分析法	第25回：統計ソフトの活用
第11回：データ分析法	第26回：研究論文のまとめ方
第12回：研究計画の作成	第27回：研究論文のまとめ方
第13回：研究計画の作成	第28回：研究成果の発表
第14回：研究計画の発表	第29回：研究成果の発表
第15回：研究計画の発表	第30回：まとめ

[スポーツ医科学研究領域]

運動免疫学演習（1）

赤間 高雄

運動による免疫機能の変化のメカニズムを検討するために、免疫学の最新の知見を整理して理解することを目的にする。免疫学に関する書籍や論文を分担講読して、相互に討論する。原則として1年生が対象。

成績評価基準：出席と分担発表を総合的に評価する（出席50%、発表50%）。

授業計画：

第1回：ガイダンス、分担の決定	第16回：担当者の発表と全体討論
第2回：担当者の発表と全体討論	第17回：担当者の発表と全体討論
第3回：担当者の発表と全体討論	第18回：担当者の発表と全体討論
第4回：担当者の発表と全体討論	第19回：担当者の発表と全体討論
第5回：担当者の発表と全体討論	第20回：担当者の発表と全体討論
第6回：担当者の発表と全体討論	第21回：担当者の発表と全体討論
第7回：担当者の発表と全体討論	第22回：担当者の発表と全体討論
第8回：担当者の発表と全体討論	第23回：担当者の発表と全体討論
第9回：担当者の発表と全体討論	第24回：担当者の発表と全体討論
第10回：担当者の発表と全体討論	第25回：担当者の発表と全体討論
第11回：担当者の発表と全体討論	第26回：担当者の発表と全体討論
第12回：担当者の発表と全体討論	第27回：担当者の発表と全体討論
第13回：担当者の発表と全体討論	第28回：担当者の発表と全体討論
第14回：担当者の発表と全体討論	第29回：担当者の発表と全体討論
第15回：担当者の発表と全体討論	第30回：まとめの発表と講評

運動免疫学演習（2）

赤間 高雄

運動免疫学における各自の研究テーマに関して、研究目的、研究方法、結果と考察、関連した先行研究について発表し、相互に討論する。これによって、より質の高い研究をめざす。原則として2年生が対象。

成績評価基準：出席と分担発表を総合的に評価する（出席50%、発表50%）。

授業計画：

第1回：ガイダンス、分担の決定	第16回：担当者の発表と全体討論
第2回：担当者の発表と全体討論	第17回：担当者の発表と全体討論
第3回：担当者の発表と全体討論	第18回：担当者の発表と全体討論
第4回：担当者の発表と全体討論	第19回：担当者の発表と全体討論
第5回：担当者の発表と全体討論	第20回：担当者の発表と全体討論
第6回：担当者の発表と全体討論	第21回：担当者の発表と全体討論
第7回：担当者の発表と全体討論	第22回：担当者の発表と全体討論
第8回：担当者の発表と全体討論	第23回：担当者の発表と全体討論
第9回：担当者の発表と全体討論	第24回：担当者の発表と全体討論
第10回：担当者の発表と全体討論	第25回：担当者の発表と全体討論
第11回：担当者の発表と全体討論	第26回：担当者の発表と全体討論
第12回：担当者の発表と全体討論	第27回：担当者の発表と全体討論
第13回：担当者の発表と全体討論	第28回：担当者の発表と全体討論
第14回：担当者の発表と全体討論	第29回：担当者の発表と全体討論
第15回：担当者の発表と全体討論	第30回：まとめの発表と講評

健康運動疫学演習（1）

荒尾 孝

現代の公衆衛生学においては、健康づくりが最重要課題であり、科学的根拠に基づく健康づくりによる具体

的な成果が求められる。その様な成果を得るためにには、健康づくりに関する質の高い研究成果の蓄積が必要となる。そのためには、まず、質の高いこれまでの研究成果をシステムティックに収集し、批判的にレビューし、解決すべき研究課題を明確にする必要がある。そのうえで、質の高い(内的、外的妥当性の高い)研究をデザインし、信頼性と妥当性の高い測定・調査方法を用いてデータを収集し、最適な統計学的手法を用いて解析を行い、結論を導き出すことが重要となる。このような一連の質の高い研究手続きによって得られた研究成果が“Evidence”であり、これから公衆衛生学には Evidence Based なアプローチによる健康づくり(Evidence Based Health Promotion)が求められることになる。そこで、本演習では、EBHP とはどのような考え方なのかといった総論について学び、その各論として科学的な論文の構造と機能について学ぶ。その後に、具体的な関連分野の論文を用いて Evidence Based な論文の読み方について指導を行う。また、最後に、EBHP の考え方に基づく質の高い研究デザインの方法について指導する。

成績評価基準:授業への出席(40%)、授業での態度、積極性など(20%)レポート課題の内容(40%)などを総合的に評価

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第16回：輪読(9)、輪読(10)(医学研究のデザイン)
第2回：輪読(1)、輪読(2)(健康運動疫学の基礎)	第17回：研究のデザイン演習(1)
第3回：輪読(3)、輪読(4)(健康運動疫学の基礎)	第18回：研究のデザイン演習(2)
第4回：輪読(5)、輪読(6)(健康運動疫学の基礎)	第19回：研究のデザイン演習(3)
第5回：講義—EBM と EBHP	第20回：研究のデザイン演習(4)
第6回：EBM 演習一手順 1(問題の定式化)	第21回：研究のデザイン演習(5)
第7回：EBM 演習一手順 2(情報の収集)	第22回：研究のデザイン演習(6)
第8回：EBM 演習一手順 3(批判的吟味)	第23回：研究のデザイン演習(7)
第9回：EBM 演習一手順 4(実践)	第24回：予備研究の実践(1)
第10回：EBM 演習一手順 5(評価)	第25回：予備研究の実践(2)
第11回：講義—研究デザイン論	第26回：予備研究の実践(3)
第12回：輪読(1)、輪読(2)(医学研究のデザイン)	第27回：予備研究の実践(4)
第13回：輪読(3)、輪読(4)(医学研究のデザイン)	第28回：予備研究の実践(5)
第14回：輪読(5)、輪読(6)(医学研究のデザイン)	第29回：予備研究の実践(6)
第15回：輪読(7)、輪読(8)(医学研究のデザイン)	第30回：レポート課題と解説

健康運動疫学演習（2）

荒尾 孝

健康づくりに関する研究では多種多様なデータを用いることとなる。そして、そのデータ処理においてはデータの種類、研究の目的や方法によって用いる統計学的手法が異なる。したがって、質の高い健康づくり研究を実施するためには、その研究に最適な統計解析(統計的手続き、検定法、解析結果の解釈)を行うことが重要となる。特に、生活者としての人間集団を対象とした健康運動疫学研究においては、多様な要因が単独あるいは相互に影響しあっている可能性が強く、そのことに対する配慮が不可欠となる。そのためには研究をデザインする段階で十分な配慮をすることであり、また、統計解析の段階で交絡因子に対する調整を十分に行うこと必要である。そこで、本演習では、多変量解析による統計学的処理法についての基本を学ぶとともに、観察研究と介入研究の仮想データを用いたデータ解析法についての実習を行う。

成績評価基準:授業への出席(40%)、授業での態度、積極性など(20%)レポート課題の内容(40%)などを総合的に評価

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第16回：演習(3)観察データを用いた解析(4)
第2回：講義(1)健康運動疫学のための基礎統計学	第17回：演習(3)観察データを用いた解析(5)
第3回：講義(2)健康運動疫学のための基礎統計学	第18回：観察データを用いた研究演習レポート発表・討論(1)
第4回：輪読(1)、輪読(2)(医学的研究のための多変量解析)	第19回：観察データを用いた研究演習レポート発表・討論(2)
第5回：輪読(3)、輪読(4)(医学的研究のための多変量解析)	第20回：介入データを用いた研究プロトコールの作成(1)
第6回：輪読(5)、輪読(6)(医学的研究のための多変量解析)	第21回：介入データを用いた研究プロトコールの作成(2)
第7回：輪読(7)、輪読(8)(医学的研究のための多変量解析)	第22回：介入研究データの入力・チェック
第8回：輪読(9)、輪読(10)(医学的研究のための多変量解析)	第23回：演習(4)介入データを用いた解析(1)
第9回：演習(1)観察データを用いた研究プロトコールの作成(1)	第24回：演習(4)介入データを用いた解析(2)
第10回：演習(1)観察データを用いた研究プロトコールの作成(2)	第25回：演習(4)介入データを用いた解析(3)
第11回：演習(2)観察データの入力・チェック(1)	第26回：演習(4)介入データを用いた解析(4)
第12回：演習(2)観察データの入力・チェック(2)	第27回：演習(4)介入データを用いた解析(5)
第13回：演習(3)観察データを用いた解析(1)	第28回：介入データを用いた研究演習レポート発表・討論(1)
第14回：演習(3)観察データを用いた解析(2)	第29回：介入データを用いた研究演習レポート発表・討論(2)
第15回：演習(3)観察データを用いた解析(3)	第30回：レポート課題と解説

スポーツ神経精神医科学演習（1）

内田 直

スポーツと中枢神経系の関わり、特に睡眠・生体リズムとスポーツパフォーマンス、身体運動が脳や心の働きに与える影響(運動によるうつ状態の改善、前頭葉機能の改善等)、スポーツパフォーマンスに関連した脳機能などについて、招聘講師の講義、文献抄読および実験計画の検討などを行う。

成績評価基準:発表などを通じて、文献読解力、論理的思考力、プレゼンテーション能力などを評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第16回：夏季休暇中の研究活動の総合討論と今後の方向
第2回：講義:睡眠の生理学基礎	第17回：研究進捗と討論1
第3回：講義:運動が睡眠に与える影響レビュー	第18回：研究進捗と討論2
第4回：講義:運動の気分改善効果レビュー	第19回：研究進捗と討論3
第5回：講義:運動が脳機能に与える影響レビュー	第20回：招聘講師講義 スポーツ科学における機能的 MRI 研究

第6回：研究計画検討1	第21回：研究に必要な過去文献レビュー 6
第7回：研究計画検討2	第22回：研究に必要な過去文献レビュー 7
第8回：研究計画検討3	第23回：研究に必要な過去文献レビュー 8
第9回：招聘講師講義 記憶と睡眠	第24回：研究に必要な過去文献レビュー 9
第10回：研究に必要な過去文献レビュー1	第25回：研究に必要な過去文献レビュー10
第11回：研究に必要な過去文献レビュー2	第26回：スポーツ精神医学専門講義
第12回：研究に必要な過去文献レビュー3	第27回：睡眠医学専門講義
第13回：研究に必要な過去文献レビュー4	第28回：スポーツ脳科学専門講義
第14回：研究に必要な過去文献レビュー5	第29回：運動生理学と神経系専門講義
第15回：前期の総括と夏季休暇中の研究活動の総合討論	第30回：総合総括

スポーツ神経精神医科学演習（2）

内田 直

スポーツと中枢神経系の関わり、特に睡眠・生体リズムとスポーツパフォーマンス、身体運動が脳や心の働きに与える影響(運動によるうつ状態の改善、前頭葉機能の改善等)、スポーツパフォーマンスに関連した脳機能などについて、招聘講師の講義、文献抄読および実験計画の検討などを行う。

成績評価基準：発表などを通じて、文献読解力、論理的思考力、プレゼンテーション能力などを評価する。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第16回：夏季休暇中の研究活動の総合討論と今後の方向
第2回：講義：睡眠の生理学基礎 2	第17回：研究進捗と討論1
第3回：講義：運動が睡眠に与える影響レビュー 2	第18回：研究進捗と討論2
第4回：講義：運動の気分改善効果レビュー 2	第19回：研究進捗と討論3
第5回：講義：運動が脳機能に与える影響レビュー 2	第20回：招聘講師講義 スポーツ科学における機能的MRI研究
第6回：研究計画検討1	第21回：研究に必要な過去文献レビュー 6
第7回：研究計画検討2	第22回：研究に必要な過去文献レビュー 7
第8回：研究計画検討3	第23回：研究に必要な過去文献レビュー 8
第9回：招聘講師講義 記憶と睡眠	第24回：研究に必要な過去文献レビュー 9
第10回：研究に必要な過去文献レビュー1	第25回：研究に必要な過去文献レビュー10
第11回：研究に必要な過去文献レビュー2	第26回：スポーツ精神医学専門講義 2
第12回：研究に必要な過去文献レビュー3	第27回：睡眠医学専門講義 2
第13回：研究に必要な過去文献レビュー4	第28回：スポーツ脳科学専門講義 2
第14回：研究に必要な過去文献レビュー5	第29回：運動生理学と神経系専門講義 2
第15回：前期の総括と夏季休暇中の研究活動の総合討論	第30回：総合総括

スポーツ健康管理学演習（1）

坂本 静男

スポーツあるいは運動が一般人の健康管理に有用であることはよく知られた事実であり、また逆にスポーツ選手のコンディショニングを考えていく上では運動量や運動強度を考慮していくことが重要であることもよく知られ

したことである。実際的に呼気ガス分析を含めた運動負荷試験やスポーツ(運動)中のホルター心電図検査などを行ってその結果を検討したり、また多数の文献的検討を行い、安全になおかつ効果的にスポーツを実践していく上での注意点を知ることが、この演習の中心的課題である。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回:オリエンテーション	第16回:安静時心電図記録の実際
第2回:一般人の健康管理総論	第17回:潜水反射試験の実際
第3回:一般人の健康管理各論—メタボリックシンドローム(1)	第18回:運動負荷試験の実際(1)
第4回:一般人の健康管理各論—メタボリックシンドローム(2)	第19回:運動負荷試験の実際(2)
第5回:一般人の健康管理各論—メタボリックシンドローム(3)	第20回:運動負荷試験の実際(3)
第6回:一般人の健康管理各論—メタボリックシンドローム(4)	第21回:運動負荷試験の実際(4)
第7回:一般人の健康管理各論—メタボリックシンドローム(5)	第22回:長時間心電図記録の実際(1)
第8回:スポーツ選手の健康管理総論	第23回:長時間心電図記録の実際(2)
第9回:スポーツ選手の健康管理各論—内科的急性スポーツ障害(1)	第24回:長時間心電図記録の実際(3)
第10回:スポーツ選手の健康管理各論—内科的急性スポーツ障害(2)	第25回:スポーツ医学関連の文献抄読(1)
第11回:スポーツ選手の健康管理各論—内科的急性スポーツ障害(3)	第26回:スポーツ医学関連の文献抄読(2)
第12回:スポーツ選手の健康管理各論—内科的慢性スポーツ障害(1)	第27回:スポーツ医学関連の文献抄読(3)
第13回:スポーツ選手の健康管理各論—内科的慢性スポーツ障害(2)	第28回:スポーツ医学関連の文献抄読(4)
第14回:スポーツ選手の健康管理各論—内科的慢性スポーツ障害(3)	第29回:スポーツ医学関連の文献抄読(5)
第15回:スポーツ選手の健康管理各論—内科的慢性スポーツ障害(4)	第30回:スポーツ医学関連の文献抄読(6)

スポーツ健康管理学演習（2）

坂本 静男

スポーツを安全に、なつかつ効果的に行っていく上で、いかにスポーツのためのメディカルチェックが重要であるかを、文献的に、実際的に検討していく。その中でも特に重要な検査である運動負荷試験について、実際に運動負荷試験も経験し、自身のデータも含めて心電図学的、脂質代謝学的、呼吸生理学的観点から、学んでいくことになる。その他の検査に関しても、可能な限り実体験してその重要性に関して検討していくことになる。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：修士論文研究結果の検討(1)
第2回：スポーツのためのメディカルチェック総論	第17回：修士論文研究結果の検討(2)
第3回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 問診から安静時心電図まで	第18回：修士論文研究結果の検討(3)
第4回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 運動負荷試験の実際(1)	第19回：修士論文研究結果の検討(4)
第5回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 運動負荷試験の実際(2)	第20回：修士論文研究結果の検討(5)
第6回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 運動負荷試験の実際(3)	第21回：スポーツ医学関連の文献抄読(1)
第7回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 運動負荷試験の実際(4)	第22回：スポーツ医学関連の文献抄読(2)
第8回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 心エコー図検査(1)	第23回：スポーツ医学関連の文献抄読(3)
第9回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 心エコー図検査(2)	第24回：スポーツ医学関連の文献抄読(4)
第10回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 心エコー図検査(3)	第25回：修士論文研究結果の検討(6)
第11回：スポーツのためのメディカルチェック各論— POMS 検査(1)	第26回：修士論文研究結果の検討(7)
第12回：スポーツのためのメディカルチェック各論— POMS 検査(2)	第27回：修士論文研究結果の検討(8)
第13回：スポーツのためのメディカルチェック各論— POMS 検査(3)	第28回：スポーツ医学関連の文献抄読(5)
第14回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 長時間心電図検査(1)	第29回：スポーツ医学関連の文献抄読(6)
第15回：スポーツのためのメディカルチェック各論— 長期間心電図検査(2)	第30回：スポーツ医学関連の文献抄読(7)

運動器スポーツ医学演習（1）

鳥居 俊

運動器スポーツ医学の最新の領域に関する文献抄読とこれに基づく討論を行う。

特に、運動器の発育発達に関する知見、若年期のスポーツ障害の発生メカニズムに関する知見を中心とした文献を扱う。

成績評価基準：出席と発表（レポート）による

授業計画：

第1回：イントロダクション	第16回：抄読14、討論14
第2回：抄読1、討論1	第17回：抄読15、討論15
第3回：抄読2、討論2	第18回：抄読16、討論16
第4回：抄読3、討論3	第19回：抄読17、討論17

第5回：抄読4、討論4	第20回：抄読18、討論18
第6回：抄読5、討論5	第21回：抄読19、討論19
第7回：抄読6、討論6	第22回：抄読20、討論20
第8回：抄読7、討論7	第23回：抄読21、討論21
第9回：抄読8、討論8	第24回：抄読22、討論22
第10回：抄読9、討論9	第25回：抄読23、討論23
第11回：抄読10、討論10	第26回：抄読24、討論24
第12回：抄読11、討論11	第27回：抄読25、討論25
第13回：抄読12、討論12	第28回：抄読26、討論26
第14回：抄読13、討論13	第29回：抄読27、討論27
第15回：春学期まとめ、総合討論	第30回：秋学期まとめ、総合討論

運動器スポーツ医学演習（2）

鳥居 俊

運動器は損傷や加齢によって変性し、機能の低下を招く。運動器損傷の治療やリハビリテーション、加齢による運動器変性疾患の運動療法に関する最新の論文を抄読、討論を行う。

成績評価基準：出席と発表（レポート）による

授業計画：

第1回：イントロダクション	第16回：抄読14、討論14
第2回：抄読1、討論1	第17回：抄読15、討論15
第3回：抄読2、討論2	第18回：抄読16、討論16
第4回：抄読3、討論3	第19回：抄読17、討論17
第5回：抄読4、討論4	第20回：抄読18、討論18
第6回：抄読5、討論5	第21回：抄読19、討論19
第7回：抄読6、討論6	第22回：抄読20、討論20
第8回：抄読7、討論7	第23回：抄読21、討論21
第9回：抄読8、討論8	第24回：抄読22、討論22
第10回：抄読9、討論9	第25回：抄読23、討論23
第11回：抄読10、討論10	第26回：抄読24、討論24
第12回：抄読11、討論11	第27回：抄読25、討論25
第13回：抄読12、討論12	第28回：抄読26、討論26
第14回：抄読13、討論13	第29回：抄読27、討論27
第15回：春学期まとめ、総合討論	第30回：秋学期まとめ、総合討論

スポーツ外科学演習（1）

福林 徹

スポーツ選手を医科学的に把握するためには生体内の諸器官の部位と働きを正確に把握しなければならない。特に骨・関節などの運動器の働きとその作用部位を正確に把握し、その異常を早期に発見することはスポーツ選手のコンディショニング維持や、リハビリテーションを進めるには欠くことのできない要素である。本演習では院生の研究発表や学会予行、最新の外国文献の輪読等を行い、スポーツ外科学の最新の情報が得られるようにする。院生はそれらの情報をもとに修士論文の作成を準備する。

成績評価基準：授業への出席、発表、レポート等により評価する。

授業計画：

第1回：福林研の研究の方向性	第16回：学会報告
第2回：M2の研究発表と質疑	第17回：最近の知見 肩関節の動作解析と障害
第3回：D3、D2の研究発表と質疑	第18回：最近の知見 サッカーゲーム中の3次元解析
第4回：最新の知見 膝靭帯損傷とその予防	第19回：D3博士論文とその概要(1)
第5回：学会予行(ACSM)	第20回：D3博士論文とその概要(2)
第6回：最新の知見 足関節のバイオメカニクス	第21回：最新の知見 tissue engineering の方向性
第7回：学会予行(運動療法学会、リハビリ学会)	第22回：学会予行
第8回：最新の知見 筋電図	第23回：学会予行
第9回：学会報告と今後の研究	第24回：M2修士論文とその概要
第10回：学会予行(JOSKAS)	第25回：M2修士論文とその概要
第11回：D1研究の方向性	第26回：最新の知見 injury prevention
第12回：M1研究の方向性 その1	第27回：D1、D2の研究の方向性
第13回：M2研究の方向性 その2	第28回：M1研究の方向性
第14回：最新の知見 肉離れ	第29回：M1研究の方向性
第15回：夏休みの研究計画	第30回：福林研総括

スポーツ外科学演習（2）

福林 徹

演習(1)に引き続き行う。院生の研究発表や学会予行、最新の外国文献の輪読等の情報を参考にして、教官サイドから世界の最新情報や学会での討論内容をさらに提供し幅広い討論を行う。また時として外部より専門教員を招きその分野の専門的知見が得られるようにする。

成績評価基準：授業への出席、発表、レポート等により評価する。

授業計画：

第1回：福林研の研究の方向性	第16回：学会報告
第2回：M2の研究発表と質疑	第17回：最近の知見 肩関節の動作解析と障害
第3回：D3、D2の研究発表と質疑	第18回：最近の知見 サッカーゲーム中の3次元解析
第4回：最新の知見 膝靭帯損傷とその予防	第19回：D3博士論文とその概要(1)
第5回：学会予行(ACSM)	第20回：D3博士論文とその概要(2)
第6回：最新の知見 足関節のバイオメカニクス	第21回：最新の知見 tissue engineering の方向性
第7回：学会予行(運動療法学会、リハビリ学会)	第22回：学会予行
第8回：最新の知見 筋電図	第23回：学会予行
第9回：学会報告と今後の研究	第24回：M2修士論文とその概要
第10回：学会予行(JOSKAS)	第25回：M2修士論文とその概要
第11回：D1研究の方向性	第26回：最新の知見 injury prevention
第12回：M1研究の方向性 その1	第27回：D1、D2の研究の方向性
第13回：M2研究の方向性 その2	第28回：M1研究の方向性
第14回：最新の知見 肉離れ	第29回：M1研究の方向性
第15回：夏休みの研究計画	第30回：福林研総括

健康行動科学演習（1）

岡 浩一朗

本演習では、健康づくり(特に、身体活動・運動の推進)のための効果的な支援方策の最新情報や基礎知識に関するリテラシーを高め、修士論文をまとめるための研究能力および問題解決能力を高めることを主な目標にする。特に、情報検索、論文読解、統計解析、プレゼンテーションスキルに関するトレーニングを重視する。

教科書:特になし。資料は講義中に適宜配布する。

成績評価基準:出席状況、レポートなどの提出物から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第16回：プレゼンテーションスキルトレーニング(2)
第2回：情報検索トレーニング(1)	第17回：プレゼンテーションスキルトレーニング(3)
第3回：情報検索トレーニング(2)	第18回：プレゼンテーションスキルトレーニング(4)
第4回：情報検索トレーニング(3)	第19回：プレゼンテーションスキルトレーニング(5)
第5回：論文読解トレーニング(1)	第20回：クリティカルリーディングトレーニング(1)
第6回：論文読解トレーニング(2)	第21回：クリティカルリーディングトレーニング(2)
第7回：論文読解トレーニング(3)	第22回：クリティカルリーディングトレーニング(3)
第8回：論文読解トレーニング(4)	第23回：クリティカルリーディングトレーニング(4)
第9回：論文読解トレーニング(5)	第24回：クリティカルリーディングトレーニング(5)
第10回：統計解析トレーニング(1)	第25回：クリティカルリーディングトレーニング(6)
第11回：統計解析トレーニング(2)	第26回：クリティカルリーディングトレーニング(7)
第12回：統計解析トレーニング(3)	第27回：クリティカルリーディングトレーニング(8)
第13回：統計解析トレーニング(4)	第28回：クリティカルリーディングトレーニング(9)
第14回：統計解析トレーニング(5)	第29回：クリティカルリーディングトレーニング(10)
第15回：プレゼンテーションスキルトレーニング(1)	第30回：レポート課題と解説

健康行動科学演習（2）

岡 浩一朗

本演習では、健康づくり(特に、身体活動・運動の推進)のための効果的な支援方策の最新情報に関するリテラシーを高め、修士論文をまとめるための研究能力および問題解決能力を高めることを主な目標にする。特に、ダイレクトリーディング(特定の領域を決めて、一定数の論文を読み、その要旨を説明する)を中心に演習を進め、最終的には総説論文を作成する。

教科書:特になし。資料は講義中に適宜配布する。

成績評価基準:出席状況、レポートなどの提出物から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第16回：ダイレクトリーディングトレーニング(15)
第2回：ダイレクトリーディングトレーニング(1)	第17回：ダイレクトリーディングトレーニング(16)
第3回：ダイレクトリーディングトレーニング(2)	第18回：ダイレクトリーディングトレーニング(17)
第4回：ダイレクトリーディングトレーニング(3)	第19回：ダイレクトリーディングトレーニング(18)
第5回：ダイレクトリーディングトレーニング(4)	第20回：ダイレクトリーディングトレーニング(19)
第6回：ダイレクトリーディングトレーニング(5)	第21回：ダイレクトリーディングトレーニング(20)
第7回：ダイレクトリーディングトレーニング(6)	第22回：総説論文の作成(1)
第8回：ダイレクトリーディングトレーニング(7)	第23回：総説論文の作成(2)
第9回：ダイレクトリーディングトレーニング(8)	第24回：総説論文の作成(3)

第10回：ダイレクトリーディングトレーニング(9)	第25回：総説論文の作成(4)
第11回：ダイレクトリーディングトレーニング(10)	第26回：総説論文の作成(5)
第12回：ダイレクトリーディングトレーニング(11)	第27回：総説論文の作成(6)
第13回：ダイレクトリーディングトレーニング(12)	第28回：総説論文の作成(7)
第14回：ダイレクトリーディングトレーニング(13)	第29回：総説論文の作成(8)
第15回：ダイレクトリーディングトレーニング(14)	第30回：レポート課題と解説

スポーツ整形外科学演習（1）

金岡 恒治

これまでに報告してきた脊椎疾患・外傷に関する学術的論文の紹介とその評価。

脊椎疾患・外傷に関する研究を始めるに当たって、これまで報告されている研究の手法・結果について熟知し、独自の新しい仮説を見いだす。

成績評価基準:学会発表内容・投稿論文により評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第2回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第17回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第3回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第18回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第4回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第19回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第5回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第20回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第6回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第21回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第7回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第22回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第8回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第23回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第9回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第24回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第10回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第25回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第11回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第26回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第12回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第27回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第13回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第28回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索

第14回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第29回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索
第15回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索	第30回：関心領域の文献考察、研究仮説の立案、研究手法の模索

スポーツ整形外科学演習（2）

金岡 恒治

脊椎疾患・外傷に関する研究を行うのに必要な、脊椎の動作解析、筋電解析、画像評価、統計解析などの研究手法を紹介する。

演習(1)で得た独自の仮説を検証するための手法を明確にし、研究を実施する。

成績評価基準：学会発表内容・投稿論文により評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：研究手法の確立、実施
第2回：研究手法の確立、実施	第17回：研究手法の確立、実施
第3回：研究手法の確立、実施	第18回：研究手法の確立、実施
第4回：研究手法の確立、実施	第19回：研究手法の確立、実施
第5回：研究手法の確立、実施	第20回：研究手法の確立、実施
第6回：研究手法の確立、実施	第21回：研究手法の確立、実施
第7回：研究手法の確立、実施	第22回：研究手法の確立、実施
第8回：研究手法の確立、実施	第23回：研究手法の確立、実施
第9回：研究手法の確立、実施	第24回：研究手法の確立、実施
第10回：研究手法の確立、実施	第25回：研究手法の確立、実施
第11回：研究手法の確立、実施	第26回：研究手法の確立、実施
第12回：研究手法の確立、実施	第27回：研究手法の確立、実施
第13回：研究手法の確立、実施	第28回：研究手法の確立、実施
第14回：研究手法の確立、実施	第29回：研究手法の確立、実施
第15回：研究手法の確立、実施	第30回：研究手法の確立、実施

予防医学演習（1）

鈴木 克彦

医科学研究の進歩に伴い、さまざまな疾患が遺伝要因と環境要因の相互作用により発症するという概念が具体化され、また多くの疾患の発症にストレスや免疫異常、炎症などが密接に関与することも明らかにされつつある。予防医学において、免疫学は「疫を免れる学」としてその基礎と応用の理解がきわめて重要である。そこで前半は、まず免疫学の知識を体系的に習得しながら、それらがいかにライフスタイルと関連し、病気（おもに免疫関連疾患と感染症）の診断・治療・予防に応用されているかを理解する。後半は、今日の疾病構造は生活習慣病が主体であるため、分子細胞生物学や免疫学等の生命科学が、いかに疾病の診断や予防・治療に応用されているかを学ぶ。特に生活習慣病の予防・治療について運動・栄養の意義・役割に重点をおき、体力医学・介護予防との関連を理解できるように予防医学を学習する。

教科書：森口覚、酒井徹、山本茂編『管理栄養士講座 感染と生体防御』建帛（ケンパク）社.

参考文献：逐次紹介する。

成績評価基準：受講と発表、レポート等を総合して評価する。

備考：ある程度医学的知識を習得済みであることが望ましい。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス、免疫の基本概念、構成細胞	第16回：人体の構造と機能
第2回：抗原と抗体、受容体	第17回：健康増進と栄養学
第3回：接着分子、サイトカイン、補体	第18回：健康診断・臨床検査
第4回：感染免疫	第19回：メタボリックシンドローム
第5回：運動・ストレスと免疫	第20回：運動習慣と疾病予防
第6回：運動によるサイトカイン応答に関する研究	第21回：疫学・老化研究
第7回：免疫関連疾患	第22回：健康寿命と老人保健
第8回：移植免疫	第23回：高齢者医療・介護予防
第9回：腫瘍免疫	第24回：運動と免疫
第10回：白血病とその治療	第25回：激運動と生体防御
第11回：免疫機能測定法	第26回：健康づくり政策
第12回：老化と生体防御	第27回：介護予防と地域福祉活動
第13回：栄養と生体防御	第28回：運動とサイトカインの実験的研究
第14回：運動と生体防御	第29回：運動による生体のストレス応答と制御
第15回：白血球機能解析の新たな展開	第30回：まとめと課題

予防医学演習（2）

鈴木 克彦

予防医学的問題の実態把握や原因究明には、分子・細胞レベル（生化学、免疫学等）、個体レベル（生理学、診断学等）や集団レベル（疫学等）などのさまざまなアプローチが必要となる。そこで、主に英文の分析・評価法に関する資料や論文を発表し討論することによって健康事象の分析・評価のあり方を学ぶ。また、各自の研究テーマに関する文献や進捗状況を報告することによって、修士論文の作成を支援する。

教科書:特に指定しない。

参考文献:逐次紹介する。

成績評価基準:受講とレポート等を総合して評価する。

備考:予防医学演習（1）を履修済みであることが望ましい。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第16回：英文論文の発表と討論
第2回：英文論文の発表と討論	第17回：英文論文の発表と討論
第3回：英文論文の発表と討論	第18回：英文論文の発表と討論
第4回：英文論文の発表と討論	第19回：英文論文の発表と討論
第5回：英文論文の発表と討論	第20回：英文論文の発表と討論
第6回：英文論文の発表と討論	第21回：英文論文の発表と討論
第7回：英文論文の発表と討論	第22回：英文論文の発表と討論
第8回：英文論文の発表と討論	第23回：英文論文の発表と討論
第9回：英文論文の発表と討論	第24回：英文論文の発表と討論
第10回：英文論文の発表と討論	第25回：英文論文の発表と討論
第11回：英文論文の発表と討論	第26回：英文論文の発表と討論
第12回：英文論文の発表と討論	第27回：英文論文の発表と討論
第13回：英文論文の発表と討論	第28回：英文論文の発表と討論

第14回：英文論文の発表と討論	第29回：英文論文の発表と討論
第15回：前半まとめ	第30回：後半まとめ

アスレティックトレーニング演習（1）

広瀬 統一

本講義では各自の研究テーマに関する情報収集を行い、プレゼンテーションを行う。

教科書:なし

参考文献:なし

成績評価基準:授業の出席と課題達成度

授業計画:

第1回：ガイダンス－1	第16回：中間発表3－2
第2回：ガイダンス－2	第17回：中間発表4－1
第3回：研究テーマ関連論文抄読1－1	第18回：中間発表4－2
第4回：研究テーマ関連論文抄読1－2	第19回：研究テーマ関連論文抄読5－1
第5回：研究テーマ関連論文抄読2－1	第20回：研究テーマ関連論文抄読5－2
第6回：研究テーマ関連論文抄読2－2	第21回：研究テーマ関連論文抄読6－1
第7回：研究テーマ関連論文抄読3－1	第22回：研究テーマ関連論文抄読6－2
第8回：研究テーマ関連論文抄読3－2	第23回：研究テーマ関連論文抄読7－1
第9回：研究テーマ関連論文抄読4－1	第24回：研究テーマ関連論文抄読7－2
第10回：研究テーマ関連論文抄読4－2	第25回：研究テーマ関連論文抄読8－1
第11回：中間発表1－1	第26回：研究テーマ関連論文抄読8－2
第12回：中間発表1－2	第27回：論文作成1－1
第13回：中間発表2－1	第28回：論文作成1－2
第14回：中間発表2－2	第29回：論文作成2－1
第15回：中間発表3－1	第30回：論文作成2－2

アスレティックトレーニング演習（2）

広瀬 統一

本講義では論文抄読で得た先行研究結果をもとに、各自の研究テーマ計画立案を行う。

教科書:なし

参考文献:なし

成績評価基準:授業の出席と課題達成度

授業計画:

第1回：ガイダンス－1	第16回：中間発表・ディスカッション3－2
第2回：ガイダンス－2	第17回：中間発表・ディスカッション4－1
第3回：論文抄読・ディスカッション1－1	第18回：中間発表・ディスカッション4－2
第4回：論文抄読・ディスカッション1－2	第19回：論文抄読・ディスカッション5－1
第5回：論文抄読・ディスカッション2－1	第20回：論文抄読・ディスカッション5－2
第6回：論文抄読・ディスカッション2－2	第21回：論文抄読・ディスカッション6－1
第7回：論文抄読・ディスカッション3－1	第22回：論文抄読・ディスカッション6－2
第8回：論文抄読・ディスカッション3－2	第23回：論文抄読・ディスカッション7－1
第9回：論文抄読・ディスカッション4－1	第24回：論文抄読・ディスカッション7－2

第10回：論文抄読・ディスカッション4－2	第25回：論文抄読・ディスカッション8－1
第11回：中間発表・ディスカッション1－1	第26回：論文抄読・ディスカッション8－2
第12回：中間発表・ディスカッション1－2	第27回：論文作成1－1
第13回：中間発表・ディスカッション2－1	第28回：論文作成1－2
第14回：中間発表・ディスカッション2－2	第29回：論文作成2－1
第15回：中間発表・ディスカッション3－1	第30回：論文作成2－2

[身体運動科学研究領域]

スポーツ神経科学演習（1）

彼末 一之

運動を司る神経機構について生理学的な観点から講義する内容に関して、特に興味を持った項目について文献を調査しその内容について毎週発表する。そしてそれをレポートとしてまとめる。

成績評価基準：レポートにより評価する。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第16回：レポート作成3
第2回：文献検索1	第17回：文献検索4
第3回：文献輪読1－1	第18回：文献輪読4－1
第4回：文献輪読1－2	第19回：文献輪読4－2
第5回：文献輪読1－3	第20回：文献輪読4－3
第6回：レポート作成1	第21回：レポート作成4
第7回：文献検索2	第22回：文献検索5
第8回：文献輪読2－1	第23回：文献輪読5－1
第9回：文献輪読2－2	第24回：文献輪読5－2
第10回：文献輪読2－3	第25回：文献輪読5－3
第11回：レポート作成2	第26回：レポート作成5
第12回：文献検索3	第27回：プレゼンテーション1
第13回：文献輪読3－1	第28回：プレゼンテーション2
第14回：文献輪読3－2	第29回：プレゼンテーション3
第15回：文献輪読3－3	第30回：プレゼンテーション4

スポーツ神経科学演習（2）

彼末 一之

演習(1)でまとめた内容を基に、運動制御系についてのモデルを構築し、それから予想される仮説を基に実験を行い、レポートにまとめる。

成績評価基準：レポートにより評価する。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第16回：実験実施9
第2回：実験計画1	第17回：実験実施10
第3回：実験計画2	第18回：実験実施11
第4回：実験計画3	第19回：実験実施12
第5回：実験計画4	第20回：実験実施13

第6回：実験計画5	第21回：実験実施14
第7回：実験実施1	第22回：実験実施15
第8回：実験実施1	第23回：レポート作成1
第9回：実験実施2	第24回：レポート作成2
第10回：実験実施3	第25回：レポート作成3
第11回：実験実施4	第26回：レポート作成4
第12回：実験実施5	第27回：レポート作成5
第13回：実験実施6	第28回：プレゼンテーション1
第14回：実験実施7	第29回：プレゼンテーション2
第15回：実験実施8	第30回：プレゼンテーション3

生体ダイナミクス演習（1）

川上 泰雄

運動生理学・バイオメカニクスの分野における、人間を対象とした研究についての学習・討論を通じて演習指導を行う。実験手法の理論的背景や先行研究の知見に関して討論する。対象となる研究はスポーツ・身体運動の科学の分野において頻繁に行われる動作分析や力計測、筋形状や筋活動の定量化などが中心となる。

成績評価基準:受講状況

授業計画:

第1回：授業ガイダンス	第16回：先行研究の調査・報告(9)
第2回：運動生理学・バイオメカニクス研究手法	第17回：先行研究の調査・報告(10)
第3回：先行研究の調査・報告(1)	第18回：先行研究の調査・報告(11)
第4回：先行研究の調査・報告(2)	第19回：先行研究の調査・報告(12)
第5回：先行研究の調査・報告(3)	第20回：先行研究の調査・報告(13)
第6回：先行研究の調査・報告(4)	第21回：先行研究の調査・報告(14)
第7回：先行研究の調査・報告(5)	第22回：先行研究の調査・報告(15)
第8回：先行研究の調査・報告(6)	第23回：先行研究の調査・報告(16)
第9回：先行研究の調査・報告(7)	第24回：実験データの討議(6)
第10回：先行研究の調査・報告(8)	第25回：実験データの討議(7)
第11回：実験データの討議(1)	第26回：実験データの討議(8)
第12回：実験データの討議(2)	第27回：実験データの討議(9)
第13回：実験データの討議(3)	第28回：実験データの討議(10)
第14回：実験データの討議(4)	第29回：総合討議(1)
第15回：実験データの討議(5)	第30回：総合討議(2)

生体ダイナミクス演習（2）

川上 泰雄

人間を対象とした生体計測手法を学ぶ生体ダイナミクス演習(1)の応用として、骨格筋の形態的・機能的特徴について演習指導を行う。参加者自身が行った実験データや先行研究の調査・報告などを通じて、骨格筋の解剖学的形状とその機能的意義、神経系による骨格筋のコントロール、そしてそれらの可塑性(トレーニング効果)などについて討論を行う。

成績評価基準:受講状況

授業計画：

第1回：授業ガイダンス	第16回：先行研究の調査・報告(9)
第2回：先行研究の調査・報告(1)	第17回：先行研究の調査・報告(10)
第3回：先行研究の調査・報告(2)	第18回：先行研究の調査・報告(11)
第4回：先行研究の調査・報告(3)	第19回：先行研究の調査・報告(12)
第5回：先行研究の調査・報告(4)	第20回：先行研究の調査・報告(13)
第6回：先行研究の調査・報告(5)	第21回：先行研究の調査・報告(14)
第7回：先行研究の調査・報告(6)	第22回：先行研究の調査・報告(15)
第8回：先行研究の調査・報告(7)	第23回：先行研究の調査・報告(16)
第9回：先行研究の調査・報告(8)	第24回：実験データの討議(6)
第10回：実験データの討議(1)	第25回：実験データの討議(7)
第11回：実験データの討議(2)	第26回：実験データの討議(8)
第12回：実験データの討議(3)	第27回：実験データの討議(9)
第13回：実験データの討議(4)	第28回：実験データの討議(10)
第14回：実験データの討議(5)	第29回：総合討議(1)
第15回：実験データの討議(6)	第30回：総合討議(2)

運動生化学演習（1）

樋口 満

一過性の身体運動によって引き起こさせる体内の代謝的変動、及び運動トレーニングによる適応的变化について、理解を深めるために、運動生化学的視点からまとめられた英文総説や、関連する最新の運動生化学に関する海外の原著論文をとりあげて議論する。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表内容、及び議論への参加状況により評価する。

授業計画：

第1回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第16回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第2回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第17回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第3回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第18回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第4回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第19回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第5回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第20回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第6回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第21回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第7回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第22回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第8回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第23回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論

第9回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第24回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第10回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第25回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第11回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第26回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第12回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第27回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第13回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第28回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第14回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第29回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論
第15回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論	第30回：運動生化学に関する総説論文や原著論文の紹介と議論

運動生化学演習（2）

樋口 満

一過性の身体運動によって引き起こさせる体内の代謝的変動、及び運動トレーニングによる適応的变化について、運動生化学的視点から行われた研究を発表し、議論する。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表内容、及び議論への参加状況により評価する。

授業計画：

第1回：運動生化学に関する研究発表と議論	第16回：運動生化学に関する研究発表と議論
第2回：運動生化学に関する研究発表と議論	第17回：運動生化学に関する研究発表と議論
第3回：運動生化学に関する研究発表と議論	第18回：運動生化学に関する研究発表と議論
第4回：運動生化学に関する研究発表と議論	第19回：運動生化学に関する研究発表と議論
第5回：運動生化学に関する研究発表と議論	第20回：運動生化学に関する研究発表と議論
第6回：運動生化学に関する研究発表と議論	第21回：運動生化学に関する研究発表と議論
第7回：運動生化学に関する研究発表と議論	第22回：運動生化学に関する研究発表と議論
第8回：運動生化学に関する研究発表と議論	第23回：運動生化学に関する研究発表と議論
第9回：運動生化学に関する研究発表と議論	第24回：運動生化学に関する研究発表と議論
第10回：運動生化学に関する研究発表と議論	第25回：運動生化学に関する研究発表と議論
第11回：運動生化学に関する研究発表と議論	第26回：運動生化学に関する研究発表と議論
第12回：運動生化学に関する研究発表と議論	第27回：運動生化学に関する研究発表と議論
第13回：運動生化学に関する研究発表と議論	第28回：運動生化学に関する研究発表と議論
第14回：運動生化学に関する研究発表と議論	第29回：運動生化学に関する研究発表と議論
第15回：運動生化学に関する研究発表と議論	第30回：運動生化学に関する研究発表と議論

スポーツ生理学演習（1）

村岡 功

生理学を親学問として発展してきたスポーツ生理学は、生理学が静的（安静）状態での生命現象を対象としているのに対して、動的（運動・スポーツ）状態でのそれを対象としている。そして、その目標は、各種スポーツや身体活動に対する生体の応答と適応を明らかにすることにある。ここでは、関連する英文テキストの輪読や

英文文献の紹介、および、運動・スポーツ状態での様々な生理的指標の測定を通じて、運動・スポーツに対する生体応答と適応を理解することとする。

成績評価基準：平常点(出席等)および発表によって行う。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：生理学的指標の測定法①
第2回：原書講読①	第17回：生理学的指標の測定法②
第3回：原書講読②	第18回：生理学的指標の測定法③
第4回：原書講読③	第19回：生理学的指標の測定法④
第5回：原書講読④	第20回：生理学的指標の測定法⑤
第6回：原書講読⑤	第21回：生理学的指標の測定法⑥
第7回：原書講読⑥	第22回：生理学的指標の測定法⑦
第8回：原書講読⑦	第23回：生理学的指標の測定法⑧
第9回：原書講読⑧	第24回：生理学的指標の測定法⑨
第10回：原書講読⑨	第25回：生理学的指標の測定法⑩
第11回：原書講読⑩	第26回：生理学的指標の測定法⑪
第12回：原書講読⑪	第27回：生理学的指標の測定法⑫
第13回：原書講読⑫	第28回：生理学的指標の測定法⑬
第14回：原書講読⑬	第29回：生理学的指標の測定法⑭
第15回：原書講読⑭	第30回：まとめ

スポーツ生理学演習（2）

村岡 功

スポーツ生理学演習(1)で習得したことを基礎として、ここではより具体的に、スポーツ種目による生体応答や適応の相違を探り、それぞれ健康づくりや競技力向上の視点に立って検討することとする。そのために、各自がスポーツ種目別あるいは研究テーマ別に国内外の文献紹介等を行い、種目による生体応答と適応の相違を明らかにするとともに、同時に当該分野における最新の研究動向や先端的知見を理解する。

成績評価基準：平常点(出席等)および発表によって行う。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：文献抄読①
第2回：各種スポーツ種目の生理学①	第17回：文献抄読②
第3回：各種スポーツ種目の生理学②	第18回：文献抄読③
第4回：各種スポーツ種目の生理学③	第19回：文献抄読④
第5回：各種スポーツ種目の生理学④	第20回：文献抄読⑤
第6回：各種スポーツ種目の生理学⑤	第21回：文献抄読⑥
第7回：各種スポーツ種目の生理学⑥	第22回：文献抄読⑦
第8回：各種スポーツ種目の生理学⑦	第23回：文献抄読⑧
第9回：各種スポーツ種目の生理学⑧	第24回：文献抄読⑨
第10回：各種スポーツ種目の生理学⑨	第25回：文献抄読⑩
第11回：各種スポーツ種目の生理学⑩	第26回：文献抄読⑪
第12回：各種スポーツ種目の生理学⑪	第27回：文献抄読⑫
第13回：各種スポーツ種目の生理学⑫	第28回：文献抄読⑬

第14回：各種スポーツ種目の生理学⑬	第29回：文献抄読⑭
第15回：各種スポーツ種目の生理学⑮	第30回：まとめ

スポーツ心理学演習（1）

山崎 勝男

スポーツ心理学の研究方法は多岐に渡るが、本演習では精神生理学的な方法に基づいて、どのようにスポーツ心理学の研究が展開できるかを検討する。本年度も昨年度と同様に、K.Hugdahl : Psychophysiology, Harvard Press(最新版)を講読する。受講対象者は M1、M2とする。

成績評価基準:平常点100%

授業計画:

第1回：An Overview of Psychophysiology	第16回：資料の補足と第12－15回のまとめ（1）
第2回：Introduction	第17回：資料の補足と第12－15回のまとめ（2）
第3回：Concepts and Terms	第18回：The Heart and Blood Circulation
第4回：資料の補足と第1－3回のまとめ（1）	第19回：Cardiovascular Psychophysiology
第5回：資料の補足と第1－3回のまとめ（2）	第20回：資料の補足と第18－19回のまとめ（1）
第6回：The Brain and The Nervous System	第21回：資料の補足と第18－19回のまとめ（2）
第7回：The Nervous System	第22回：The Electroencephalogram
第8回：The Brain	第23回：Event-Related Potentials
第9回：The Autonomic Nervous System	第24回：資料の補足と第21－22回のまとめ（1）
第10回：資料の補足と第6－9回のまとめ（1）	第25回：資料の補足と第21－22回のまとめ（2）
第11回：資料の補足と第6－9回のまとめ（2）	第26回：Brain Imaging Techniques
第12回：Collecting and Analyzing Data	第27回：資料の補足と第25回のまとめ
第13回：Electrodermal Activity	第28回：Skeletal Muscles, Eye Movement, and the Respiratory System
第14回：Orienting and Conditioning	第29回：資料の補足と第27回のまとめ
第15回：Clinical Applications of Electrodermal Activity	第30回：Epilogue

スポーツ心理学演習（2）

山崎 勝男

この研究領域の生理学的な理解を深めるために、本年度も R.N.Singer et al:Handbook of Sport Psychology. Wiley, 2001を講読する。受講対象者は M1、M2とする。

成績評価基準:平常点100%

授業計画:

第1回：Levels of Performance Skill: From Beginners to Experts	第16回：Achievement Goal Theory in Sport: Recent Extensions and Future Directions
第2回：Motor Development and Skill Acquisition during Childhood and Adolescence	第17回：Attributions: Past, Present, and Future
第3回：Attention	第18回：Group Cohesion in Sport and Exercise
第4回：Augmented Feedback in Motor Skill Acquisition	第19回：Goal Setting in Sport: Investigating the Goal Effectiveness Paradox
第5回：Practice	第20回：Imagery in Sport and Exercise

第6回 : An Integrative Modeling Approach to the Study of Intentional Movement Behavior	第21回 : Understanding and Enhancing Self-Confidence in Athletes
第7回 : Expert Performance in Sport and Dance	第22回 : Self-Regulation: Concepts, Methods, and Strategies in Sport and Exercise
第8回 : Modeling: Considerations for Motor Skill Performance and Psychological Responses	第23回 : Moral Development and Behavior in Sport
第9回 : Personality and the Athlete	第24回 : Youth in Sport: Psychological Considerations
第10回 : The Development of Talent in Sport	第25回 : Physical Activity and Quality of Life
第11回 : Stress and Anxiety	第26回 : Career Termination among Athletes
第12回 : Arousal and Performance	第27回 : Using Theories of Motivated Behavior to Understand Physical Activity: Perspectives on Their Influence
第13回 : Self-Efficacy Beliefs of Athletes, Teams, and Coaches	第28回 : Helping People Initiate and Maintain a More Active Lifestyle: A Public Health Framework for Physical Activity Promotion Research
第14回 : The Psychophysiology of Sport: A Mechanistic Understanding of the Psychology of Superior Performance	第29回 : Physical Activity and Mental Health
第15回 : Intrinsic and Extrinsic Motivation in Sport and Exercise: A Review Using the Hierarchical Model of Intrinsic and Extrinsic Motivation	第30回 : Psychology of Injury Risk and Prevention

スポーツ情報処理演習（1）

菅田 雅彰

スポーツメディア情報を対象としてコンピュータにより画像・信号処理技術の基礎を学習するとともに、コンピュータを用いたメディア処理演習を通して、プログラミング技術、スポーツ動作に関する情報処理技術を習得する。

成績評価基準:出席とレポート

授業計画:

第1回 : プログラミングの基礎	第16回 : パタン認識処理の基礎
第2回 : 四則演算から配列データ処理	第17回 : 統計的パタン認識の仕組み
第3回 : 繰り返し処理と条件判定処理	第18回 : 動作映像の撮影
第4回 : データの入出力	第19回 : 動作データの解析
第5回 : グラフ作成	第20回 : 動作の特徴抽出
第6回 : プログラミング課題(1)	第21回 : 動作の識別処理(1)
第7回 : プログラミング課題(2)	第22回 : 動作の識別処理(2)
第8回 : 映像データの入出力	第23回 : フィールドにおけるスポーツ動作映像の撮影
第9回 : 映像データの表示映像	第24回 : スポーツ動作データの解析
第10回 : 映像の2値化処理	第25回 : スポーツ動作の特徴抽出
第11回 : 色特徴を用いた映像データ処理	第26回 : スポーツ動作の識別処理(1)

第12回：スポーツ映像における選手位置検出処理	第27回：スポーツ動作の識別処理(2)
第13回：スポーツ映像における選手位置検出プログラムの作成(1)	第28回：スポーツ動作の識別処理の考察(1)
第14回：スポーツ映像における選手位置検出プログラムの作成(2)	第29回：スポーツ動作の識別処理の考察(2)
第15回：スポーツ映像における選手位置検出プログラムの作成(3)	第30回：まとめと課題

スポーツ情報処理演習（2）

誉田 雅彰

演習(1)で習得した技術をさらに発展させ、スポーツメディア情報およびスポーツ身体動作に関する高度な情報処理技術を学習するとともに、スポーツメディア情報解析やスポーツ身体動作のコンピュータシミュレーションを中心として個々の研究課題に取り組む。

成績評価基準:出席とレポート

授業計画:

第1回：スポーツ映像検索の仕組み	第16回：スポーツ映像の自動生成の仕組み(1)
第2回：映像データベースの仕組み(1)	第17回：スポーツ映像の自動生成の仕組み(2)
第3回：映像データベースの仕組み(2)	第18回：固定カメラ映像を用いたスポーツ映像の自動生成(1)
第4回：映像データベースの作成(1)	第19回：固定カメラ映像を用いたスポーツ映像の自動生成(2)
第5回：映像データベースの作成(2)	第20回：移動カメラの制御方法
第6回：スポーツ映像検索処理(1)	第21回：移動カメラを用いた映像撮影
第7回：スポーツ映像検索処理(2)	第22回：移動カメラ映像処理(1)
第8回：スポーツ映像検索処理プログラムの作成(1)	第23回：移動カメラ映像処理(2)
第9回：スポーツ映像検索処理プログラムの作成(2)	第24回：移動カメラを用いたスポーツ映像の自動生成(1)
第10回：スポーツ映像検索処理プログラムの作成(3)	第25回：移動カメラ映像を用いたスポーツ映像の自動生成(2)
第11回：スポーツ映像検索実験(1)	第26回：多点ビデオ映像による視点制御の仕組み(1)
第12回：スポーツ映像検索実験(2)	第27回：多点ビデオ映像による視点制御の仕組み(2)
第13回：スポーツ映像検索性能の評価(1)	第28回：多点ビデオ映像による視点移動映像の生成(1)
第14回：スポーツ映像検索性能の評価(2)	第29回：多点ビデオ映像による視点移動映像の生成(2)
第15回：スポーツ映像検索のまとめと課題	第30回：まとめと課題

統合運動神経生理学演習（1）

宝田 雄大

研究指導内容に関連した研究論文などを輪読する。受講者が内容を紹介し、その後、全員で討論を行う。その目的は、(運動)生理学あるいは神経科学に関連した先行研究や知見の解釈研究を通じて、それらの研究の現状を知り、その内容を理解できるようになることである。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第16回：各自の興味ある研究論文などの輪読と討議1
第2回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議 1	第17回：各自の興味ある研究論文などの輪読と討議2
第3回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議 2	第18回：各自の興味ある研究論文などの輪読と討議3
第4回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議 3	第19回：各自の興味ある研究論文などの輪読と討議4
第5回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議 4	第20回：各自の興味ある研究論文などの輪読と討議5
第6回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議 5	第21回：各自の興味ある研究論文などの輪読と討議6
第7回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議 6	第22回：各自の興味ある研究論文などの輪読と討議7
第8回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議 7	第23回：各自の興味ある研究論文などの輪読と討議8
第9回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議 8	第24回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議14
第10回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議 9	第25回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議15
第11回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議10	第26回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議16
第12回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議11	第27回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議17
第13回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議12	第28回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議18
第14回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議13	第29回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議19
第15回：レポート課題と解説	第30回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議20

統合運動神経生理学演習（2）

宝田 雄大

研究指導内容に関連した研究論文などを輪読する。受講者が内容を紹介し、その後、全員で討論を行う。また、自身の研究計画の発表、討論を行う。これらの目的は、(運動)生理学あるいは神経科学に関連した研究テーマを見つけ、それを実証すべく、実験デザインを作成できるようになることである。必要に応じて、研究の成果発表をおこなう。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第16回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議1
第2回：受講者の研究計画の発表1	第17回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議2
第3回：受講者の研究計画の発表2	第18回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議3
第4回：受講者の研究計画の発表3	第19回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議4
第5回：受講者の研究計画の発表4	第20回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議5
第6回：受講者の研究計画の発表5	第21回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議6
第7回：受講者の研究計画の発表6	第22回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議7
第8回：受講者の研究計画の発表7	第23回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議8
第9回：受講者の研究計画の発表8	第24回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議9
第10回：研究指導内容に関連した実験1	第25回：研究指導内容に関連した研究論文などの輪読と討議10
第11回：研究指導内容に関連した実験2	第26回：受講者の研究成果発表および討論1
第12回：研究指導内容に関連した実験3	第27回：受講者の研究成果発表および討論2
第13回：研究指導内容に関連した実験4	第28回：受講者の研究成果発表および討論3
第14回：研究指導内容に関連した実験5	第29回：受講者の研究成果発表および討論4
第15回：レポート課題と解説	第30回：受講者の研究成果発表および討論5

スポーツ認知神経科学演習（1）

正木 宏明

スポーツ心理学で扱われてきた研究テーマに認知神経科学的手法を適用することで何がわかるのかについて学習する。スポーツ心理学・認知神経科学に関する基礎知識を習得しながら、修士論文の研究テーマを決定する。

認知神経科学研究の発展は目覚ましく、その手法はスポーツ心理学研究領域に新しい研究アプローチを与えるものである。本演習では、認知神経科学研究およびスポーツ心理学研究に関する最新の研究知見を文献紹介によって理解する。

成績評価基準：出席および研究方法論の習得に対する真摯な態度が重視される。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：研究の方向性確認
第2回：文献輪読1	第17回：研究発表5
第3回：文献輪読2	第18回：研究発表6
第4回：文献輪読3	第19回：研究発表7

第5回：文献輪読4	第20回：研究発表8
第6回：文献輪読5	第21回：研究発表9
第7回：文献輪読6	第22回：研究発表10
第8回：文献輪読7	第23回：研究発表11
第9回：文献輪読8	第24回：研究発表12
第10回：文献輪読9	第25回：研究発表13
第11回：文献輪読10	第26回：研究発表14
第12回：研究発表1	第27回：研究発表15
第13回：研究発表2	第28回：研究発表16
第14回：研究発表3	第29回：研究発表17
第15回：研究発表4	第30回：総括

スポーツ認知神経科学演習（2）

正木 宏明

演習(1)で決定した修士論文のテーマについて実験計画を立て、その妥当性について議論する。詳細な検討を重ねたうえでデータを取得し、修士論文を作成する。

修士論文の作成に必要な研究指導を行う。文献紹介を通して最新の研究知見を把握するだけでなく、実験計画、実験実施、解析、結果の解釈など、研究方法全般について理解する。

成績評価基準：出席および研究方法論の習得に対する真摯な態度が重視される。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：研究発表5
第2回：修士論文研究中間報告1	第17回：研究発表6
第3回：修士論文研究中間報告2	第18回：研究発表7
第4回：修士論文研究中間報告3	第19回：研究発表8
第5回：研究計画1	第20回：研究発表9
第6回：研究計画2	第21回：研究発表10
第7回：研究計画3	第22回：研究発表11
第8回：研究計画4	第23回：研究発表12
第9回：研究計画5	第24回：修士論文研究報告1
第10回：研究計画6	第25回：修士論文研究報告2
第11回：研究発表1	第26回：修士論文研究報告3
第12回：研究発表2	第27回：修士論文研究報告4
第13回：研究発表3	第28回：修士論文研究報告5
第14回：研究発表4	第29回：修士論文研究報告6
第15回：まとめ	第30回：総括

バイオメカニクス演習（1）

矢内 利政

バイオメカニクスは、機械工学の基礎概念や方法論を応用・発展させることにより、生物の身体活動に見られる様々な運動メカニズムや身体各階層レベルの構造・力学的性質を明らかにする応用科学領域です。本演習では、バイオメカニクスに関連する分野における研究デザインや方法論について理解し、さらに応用発展させるための基礎的事項を、国内外で報告された論文を精読し討論することを通じて学習する。また、院生が進め

ている研究課題について討議し、研究目的に合致した方法論を用いた研究デザインを構築できるよう意見を交換する。

教科書はとくに定めないでテーマに沿った論文や配布資料を参考に行う。

成績評価基準: 平常点(討議への参加)および発表によって行う。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：抄読会 5
第2回：研究方法論1	第17回：抄読会 6
第3回：研究方法論2	第18回：研究(データ)発表会 5
第4回：抄読会1	第19回：研究(データ)発表会 6
第5回：抄読会2	第20回：データ収集法:筋骨格系の可視化編1
第6回：研究(データ)発表会1	第21回：データ収集法:筋骨格系の可視化編2
第7回：研究(データ)発表会2	第22回：抄読会 7
第8回：研究デザイン1	第23回：抄読会 8
第9回：研究デザイン2	第24回：研究(データ)発表会 7
第10回：抄読会3	第25回：研究(データ)発表会 8
第11回：抄読会4	第26回：データ収集法:身体組成
第12回：研究(データ)発表会3	第27回：抄読会 9
第13回：研究(データ)発表会4	第28回：抄読会10
第14回：データ収集法:身体運動編1	第29回：研究(データ)発表会 9
第15回：データ収集法:身体運動編2	第30回：研究(データ)発表会10

バイオメカニクス演習（2）

矢内 利政

バイオメカニクス演習(1)を基礎に、これまでに明らかにされていない研究テーマを考え、その測定方法や算出方法について議論する。更に、新しい方法論の開発を行うことから、ヒトの身体運動を構成する力学的要因を明らかにする。

教科書はとくに定めないでテーマに沿った論文や配布資料を参考に行う。

成績評価基準: 平常点(出席等)および発表によって行う。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：抄読会 6
第2回：データ分析法:動作解析法1	第17回：研究(データ)発表会 5
第3回：データ分析法:動作解析法2	第18回：研究(データ)発表会 6
第4回：抄読会1	第19回：統計分析法1
第5回：抄読会2	第20回：統計分析法2
第6回：研究(データ)発表会1	第21回：抄読会 7
第7回：研究(データ)発表会2	第22回：抄読会 8
第8回：データ分析法:身体組成	第23回：研究(データ)発表会 7
第9回：抄読会3	第24回：研究(データ)発表会 8
第10回：抄読会4	第25回：論文の執筆1
第11回：研究(データ)発表会3	第26回：論文の執筆2
第12回：研究(データ)発表会4	第27回：抄読会 9

第13回：データ分析法：筋腱複合体1	第28回：抄読会10
第14回：データ分析法：筋腱複合体2	第29回：研究(データ)発表会 9
第15回：抄読会5	第30回：研究(データ)発表会10

[コーチング科学研究領域]

コーチング科学Ⅰ演習（1）

磯繁雄

スポーツ種目の中の個人種目(陸上競技)を対象に、実験手法や発表等の演習指導を行う。また、グループで研究課題を計画し、実施計画の作成、結果の算出及び考察の研究の方法と論述的視点を発表により討論する。

成績評価基準:授業中の発表を中心に評価する。

授業計画:

第1回：演習概要の説明と進め方	第16回：JISSにての現地機能説明
第2回：卒業研究の発表と今後の研究課題の方向性発表する(1)	第17回：JISSとの共同研究内容の討論会
第3回：卒業研究の発表と今後の研究課題の方向性発表する(2)	第18回：グループ別の課題設定とそのプロトコール確認
第4回：卒業研究の発表と今後の研究課題の方向性発表する(3)	第19回：グループ別の実験・調査(1)
第5回：コーチング研究に関する専門書の輪読(1)	第20回：グループ別の実験・調査(2)
第6回：コーチング研究に関する専門書の輪読(2)	第21回：グループ別の実験・調査(3)
第7回：コーチング研究に関する専門書の輪読(3)	第22回：グループ別の実験・調査(4)
第8回：コーチング研究に関する専門書の輪読(4)	第23回：グループ別発表と討論会(1)
第9回：動作解析のための撮影方法の基礎知識確認と解析方法の説明	第24回：グループ別発表と討論会(2)
第10回：「走り」の動作撮影・2次元固定とバーニング	第25回：競技種目間を共有するコーチングの視点講義
第11回：「走り」の動作撮影・3次元固定	第26回：コーチングにおけるメンタルトレーニングの説明
第12回：動作解析の入力とデータ処理の説明及び実践	第27回：競技別コーチングの現地調査(1)
第13回：動作解析の入力とデータ処理の説明及び実践	第28回：競技別コーチングの現地調査(2)
第14回：動作解析の入力とデータ処理の説明及び実践	第29回：調査結果の全体討議
第15回：データ処理後の発表	第30回：レポート課題のまとめ方説明

コーチング科学Ⅰ演習（2）

磯繁雄

演習(1)で得られた、研究方法をもとに、先行研究の精読や個別課題の芽生えを促進させる。これらの芽生えや情報をもとに、研究テーマをしづり関連研究の抄読をする。また、研究テーマの論文作成方法も学習する。

成績評価基準:授業中の発表を中心に評価する。

授業計画:

第1回：演習概要の説明と進め方	第16回：共同授業による課題設定とグループ分け
第2回：スポーツコーチングに関する輪読(1)	第17回：グループ別の討論と発表原稿まとめ
第3回：スポーツコーチングに関する輪読(2)	第18回：グループ発表と全体討議(1)
第4回：スポーツコーチングに関する輪読(3)	第19回：グループ発表と全体討議(2)
第5回：スポーツコーチングに関する輪読(4)	第20回：グループ発表と全体討議(3)
第6回：個別テーマの詳細な報告(1)	第21回：グループ発表と全体討議(4)
第7回：個別テーマの詳細な報告(2)	第22回：グループ発表と全体討議(5)
第8回：テーマの中で議題を選び全体ディベート	第23回：プロスポーツのコーチング場面の調査(1)
第9回：ディベート内容を受けて、グループ別に考察	第24回：プロスポーツのコーチング場面の調査(2)
第10回：コーチング手法に関する講義	第25回：幼稚園・小学校等のスポーツ導入のコーチング現地研修(1)
第11回：個別課題の選定と周囲に伝達するための実習(1)	第26回：幼稚園・小学校等のスポーツ導入のコーチング現地研修(2)
第12回：個別課題の選定と周囲に伝達するための実習(2)	第27回：海外のコーチング事情の調査
第13回：個別課題の選定と周囲に伝達するための実習(3)	第28回：日本の持すべきスポーツコーチングの討論会
第14回：個別課題の選定と周囲に伝達するための実習(4)	第29回：討論会内容の発表
第15回：実習成果のリポート課題のまとめ	第30回：レポート課題のまとめ方説明

コーチング科学Ⅱ演習（1）

奥野 景介

現代社会に機能する「コーチング」をスポーツ・教育の分野より科学的に、また技能的に捉え、競技に対するコーチングの現象について専門的に理解を深める。

特に、一流選手をはじめとする競技者のパフォーマンス獲得のプロセスや根拠の解明に関する諸知識を深めることをテーマとする。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：研究計画立案
第2回：ガイダンス	第17回：データミーティング 1
第3回：文献抄読 1	第18回：データミーティング 2
第4回：文献抄読 2	第19回：データミーティング 3
第5回：文献抄読 3	第20回：データミーティング 4
第6回：文献抄読 4	第21回：データミーティング 5
第7回：文献抄読 5	第22回：データミーティング 6
第8回：文献抄読 6	第23回：データミーティング 7
第9回：文献抄読 7	第24回：データミーティング 8
第10回：文献抄読 8	第25回：データミーティング 9

第11回：文献抄読9	第26回：データミーティング10
第12回：文献抄読10	第27回：データミーティング11
第13回：文献抄読11	第28回：データミーティング12
第14回：文献抄読12	第29回：まとめ
第15回：研究計画立案	第30回：まとめ

コーチング科学Ⅱ演習（2）

奥野 景介

本講座は、トップアスリートに関連する実践的研究の理解を深め、高度なスポーツ実践専門家養成を目指す上で必要な諸知識を深める。

特に、最新のスポーツトレーニング方法およびコーチング方法の開発（オリンピック等チャンピオンスポーツを対象として）について論議する。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：実験2
第2回：ガイダンス	第17回：ディスカッション1
第3回：データミーティング1	第18回：ディスカッション2
第4回：データミーティング2	第19回：実験3
第5回：データミーティング3	第20回：実験4
第6回：データミーティング4	第21回：ディスカッション3
第7回：データミーティング5	第22回：ディスカッション4
第8回：データミーティング6	第23回：実験5
第9回：データミーティング7	第24回：実験6
第10回：データミーティング8	第25回：ディスカッション5
第11回：データミーティング9	第26回：ディスカッション6
第12回：データミーティング10	第27回：実験7
第13回：研究計画立案	第28回：実験8
第14回：研究計画立案	第29回：ディスカッション7
第15回：実験1	第30回：ディスカッション8

コーチング科学Ⅲ演習（1）

土屋 純

さまざまなスポーツ種目のスポーツ技術の明確化とスポーツ技能の向上策を、スポーツバイオメカニクスとスポーツ運動の観点から解説する研究を進めるとともに、関連する研究論文を分担講読する。ディスカッションを通じて科学的なスポーツコーチングの態度を養い、同時に研究方法と結果の解釈に関する知識を深める。

成績評価基準：出席と発表の内容により評価する。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第16回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究計画2の策定(1)
第2回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究計画1の策定(1)	第17回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究計画2の策定(2)

第3回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究計画1の策定(2)	第18回：関連文献の講読(1)
第4回：関連文献の講読(1)	第19回：関連文献の講読(2)
第5回：関連文献の講読(2)	第20回：関連文献の講読(3)
第6回：関連文献の講読(3)	第21回：関連文献の講読(4)
第7回：関連文献の講読(4)	第22回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(1)
第8回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(1)	第23回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(2)
第9回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(2)	第24回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(3)
第10回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(3)	第25回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(4)
第11回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(4)	第26回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(5)
第12回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(5)	第27回：研究結果発表と課題の明確化(1)
第13回：研究結果発表と課題の明確化(1)	第28回：研究結果発表と課題の明確化(2)
第14回：研究結果発表と課題の明確化(2)	第29回：研究結果発表と課題の明確化(3)
第15回：研究結果発表と課題の明確化(3)	第30回：研究結果発表と課題の明確化(4)

コーチング科学Ⅲ演習（2）

土屋 純

さまざまなスポーツ種目のスポーツ技術の明確化とスポーツ技能の向上策を、スポーツバイオメカニクスとスポーツ運動の観点から解明する研究を進めると同時に、関連する研究論文を分担講読する。ディスカッションを通じて科学的なスポーツコーチングの態度を養い、同時に研究方法と結果の解釈に関する知識を深める。

成績評価基準：出席と発表の内容により評価する。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第16回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究計画2の策定(1)
第2回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究計画1の策定(1)	第17回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究計画2の策定(2)
第3回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究計画1の策定(2)	第18回：関連文献の講読(1)
第4回：関連文献の講読(1)	第19回：関連文献の講読(2)
第5回：関連文献の講読(2)	第20回：関連文献の講読(3)
第6回：関連文献の講読(3)	第21回：関連文献の講読(4)
第7回：関連文献の講読(4)	第22回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(1)
第8回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(1)	第23回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(2)

第9回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(2)	第24回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(3)
第10回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(3)	第25回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(4)
第11回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(4)	第26回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究2実践(5)
第12回：スポーツ技術の解明とスポーツ技能の向上策に関する研究1実践(5)	第27回：研究結果発表と課題の明確化(1)
第13回：研究結果発表と課題の明確化(1)	第28回：研究結果発表と課題の明確化(2)
第14回：研究結果発表と課題の明確化(2)	第29回：研究結果発表と課題の明確化(3)
第15回：研究結果発表と課題の明確化(3)	第30回：研究結果発表と課題の明確化(4)

コーチング科学Ⅳ演習（1）

堀野 博幸

「トップパフォーマンス構築」と「育成年代の選手育成」では、コーチング対象は異なるものの、共通する要素が多い。本演習では、多様な種目のコーチングとの交流を通して、コーチングプロセスで起こる事象を解明し、コーチングの体系化と実践的応用を目指す。

演習(1)では、コーチング領域の研究指導と連携を持ち、先行研究を涉猟するなかで、コーチングの様々な要素の整理やコーチングプロセスの課題抽出を行う。そして、先行研究から得られた知見から、自身の研究計画に関する課題を検討する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：プレゼン&ディスカッション
第2回：プレゼン&ディスカッション	第17回：プレゼン&ディスカッション
第3回：プレゼン&ディスカッション	第18回：プレゼン&ディスカッション
第4回：プレゼン&ディスカッション	第19回：プレゼン&ディスカッション
第5回：プレゼン&ディスカッション	第20回：プレゼン&ディスカッション
第6回：プレゼン&ディスカッション	第21回：プレゼン&ディスカッション
第7回：プレゼン&ディスカッション	第22回：プレゼン&ディスカッション
第8回：プレゼン&ディスカッション	第23回：プレゼン&ディスカッション
第9回：プレゼン&ディスカッション	第24回：プレゼン&ディスカッション
第10回：プレゼン&ディスカッション	第25回：プレゼン&ディスカッション
第11回：プレゼン&ディスカッション	第26回：プレゼン&ディスカッション
第12回：プレゼン&ディスカッション	第27回：プレゼン&ディスカッション
第13回：プレゼン&ディスカッション	第28回：プレゼン&ディスカッション
第14回：プレゼン&ディスカッション	第29回：プレゼン&ディスカッション
第15回：まとめ	第30回：まとめ

コーチング科学Ⅳ演習（2）

堀野 博幸

コーチングプロセスでは、選手とコーチの間で様々な課題が生じる。この課題を解決するために、コーチは現状を的確に分析し、課題改善の具体的方策を示さねばならない。本演習では、「コーチング科学」と「スポーツ

心理学」の観点から、コーチに必要な能力と効果的なコーチング法について、スポーツフィールドを常に視野に入れながら検討する。

授業では、具体的な研究計画の作成と実行を念頭に、先行研究と自身のアイデアをもとに、プレゼンテーションとディスカッションを継続していく。この授業は、修士2年次で履修することとする。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：プレゼン&ディスカッション
第2回：プレゼン&ディスカッション	第17回：プレゼン&ディスカッション
第3回：プレゼン&ディスカッション	第18回：プレゼン&ディスカッション
第4回：プレゼン&ディスカッション	第19回：プレゼン&ディスカッション
第5回：プレゼン&ディスカッション	第20回：プレゼン&ディスカッション
第6回：プレゼン&ディスカッション	第21回：プレゼン&ディスカッション
第7回：プレゼン&ディスカッション	第22回：プレゼン&ディスカッション
第8回：プレゼン&ディスカッション	第23回：プレゼン&ディスカッション
第9回：プレゼン&ディスカッション	第24回：プレゼン&ディスカッション
第10回：プレゼン&ディスカッション	第25回：プレゼン&ディスカッション
第11回：プレゼン&ディスカッション	第26回：プレゼン&ディスカッション
第12回：プレゼン&ディスカッション	第27回：プレゼン&ディスカッション
第13回：プレゼン&ディスカッション	第28回：プレゼン&ディスカッション
第14回：プレゼン&ディスカッション	第29回：プレゼン&ディスカッション
第15回：まとめ	第30回：まとめ

コーチング科学V演習（1）

倉石 平

日本におけるスポーツ競技(特にチームスポーツ)のコーチングの現状を把握する。(コーチングシステム(組織)、アナリストと育成)

コーチングにおける日本、諸外国の現状を把握する。その現状を鑑みた上で、日本における最適なコーチングのシステムを考える。また、その中で特にアナリストの役割(情報の収集、分析、反映)を考え、今後にスポーツの現場で役立たせるための実践、実習を行う。

成績評価基準：発言、資料作成、レポートなどで総合的に評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：スキル向上に関する研究計画1 策定(1)
第2回：ボールゲームにおけるコーチングについて	第17回：スキル向上に関する研究計画1 策定(2)
第3回：コーチングフィロソフィについて(コーチングの方向性、考え方)	第18回：スキル向上に関する研究計画1 実践(1)
第4回：チームとしての目的、目標、方向性を決定するために	第19回：スキル向上に関する研究計画1 実践(2)
第5回：チームプレーヤーの役割、スタッフと組織について	第20回：プレゼンテーション、課題の明確化(1)
第6回：アメリカにみる、チーム構成(NCAA)	第21回：プレゼンテーション、課題の明確化(2)
第7回：アメリカにみる、チーム構成(NBA)	第22回：プレゼンテーション、課題の明確化(3)

第8回：アメリカにおけるアナリストの存在と役割について	第23回：関連文献の講読 6
第9回：日本におけるアナリストの現状と今後について	第24回：関連文献の講読 7
第10回：ゲーム分析、データの反映、ゲーム立案について	第25回：関連文献の講読 8
第11回：関連文献の講読1	第26回：関連文献の講読 9
第12回：関連文献の講読2	第27回：関連文献の講読10
第13回：関連文献の講読3	第28回：スキルの向上をさせるために(チーム戦術)1
第14回：関連文献の講読4	第29回：スキルの向上をさせるために(チーム戦術)2
第15回：関連文献の講読5	第30回：スキルの向上をさせるために(チーム戦術)3

コーチング科学Ⅴ演習（2）

倉石 平

日本における最適なコーチングシステム(特にチームスポーツ)の検討。アナリストの役割と実践。

以下の項目について学習する。

- ①日本における、特にチームスポーツのコーチング及びコーチングシステムについて検討する。
- ②コーチングシステムの中での組織と役割の検討。
- ③アナリストの仕事の把握と実践。(反映の仕方(データ分析と表現、映像編集)とプレゼンテーション)
- ④ゲームプランの立案(反映データからの立案)、練習メニューの作成。

成績評価基準:発言、プレゼンテーション、資料作成などで総合的に評価する。

授業計画:

第1回：コーチングフィロソフィについて	第16回：リスクマネージメント
第2回：コーチングにおけるVision, Mission, Commitment	第17回：ゲームにおけるリスクマネージメント
第3回：コーチングにおける戦術戦略	第18回：練習におけるリスクマネージメント
第4回：コーチングにおける情報とは	第19回：ケガなどのリスクマネージメント／コンディショニングについて
第5回：情報収集／収集の方法(種類)	第20回：チームビルディング／モチベーションマネージメントについて
第6回：ゲーム分析について	第21回：チームビルディング／組織と役割について
第7回：データの反映／反映の仕方、方法	第22回：ポールゲームにおけるスキルについて／ファンダメンタルについて
第8回：ゲームプランの作り方、立案	第23回：ポールゲームにおけるチームスキルについて／チームルールについて
第9回：ゲーム分析ソフトについて(種類・使い方等)	第24回：指導の方法／指導目的、方向性、チェックリストなど
第10回：ゲーム分析ソフトを使っての分析(実習)	第25回：トレーニングの原則について
第11回：映像編集と良いイメージづくり	第26回：JOC、JBA における一貫指導とは／公認コーチ制度について
第12回：チェックリスト／チェックリストのつくり方	第27回：一貫指導、育成、強化とは／文部科学省、日本体育協会、JOC

第13回：ピーティングについて、年間計画と意義について	第28回：国際競争力をもつには／世界の動向について
第14回：期分け、意義と目的／月または週単位	第29回：国際競争力をもつには／条件として
第15回：日々の練習メニューについて／チェックリストについて	第30回：まとめ

トレーニング科学演習（1）

岡田 純一

目的に適した身体能力を備えること、身体能力を競技力へと結びつけること、そのために必要なあらゆる体力要素を向上させること、目的とする時期にその状態を整えることなど、コンディショニングが含有する意図は多様である。アスリートばかりでなく、一般成人、子供あるいは高齢者など様々な対象に指導するという観点から、コンディショニングに関わるレジスタンストレーニングのプログラムデザイン、アスリートの体力や生理学的特性を考慮したトレーニング計画を科学的知見に基づいて構築することを学ぶ。

成績評価基準：発表50%、レポート50%

授業計画：

第1回：コーチングと科学(個人と集団)	第16回：実習発表1
第2回：コーチングと科学(記録と採点)	第17回：実習発表2
第3回：コーチングと科学(人とモノ)	第18回：実習発表3
第4回：研究の倫理	第19回：実習発表4
第5回：社会のニーズと研究	第20回：実習発表5
第6回：研究計画法1	第21回：研究計画発表1
第7回：研究計画法2	第22回：研究計画発表2
第8回：研究計画法3	第23回：研究計画発表3
第9回：研究計画法4	第24回：研究計画発表4
第10回：研究計画法5	第25回：研究計画発表5
第11回：文献抄読1	第26回：文献抄読6
第12回：文献抄読2	第27回：文献抄読7
第13回：文献抄読3	第28回：文献抄読8
第14回：文献抄読4	第29回：文献抄読9
第15回：文献抄読5	第30回：文献抄読10

トレーニング科学演習（2）

岡田 純一

目的に適した身体能力を備えること、身体能力を競技力へと結びつけること、そのために必要なあらゆる体力要素を向上させること、目的とする時期にその状態を整えることなど、コンディショニングが含有する意図は多様である。コンディショニングに関わるレジスタンストレーニングのプログラムデザイン、体力や対象者の生理学的、バイオメカニクス的特性に関する研究法を学ぶ。

成績評価基準：レポート50% 発表50%

授業計画：

第1回：統計1	第16回：筋電図1(分析法)
第2回：統計2	第17回：筋電図2(動作と筋放電)
第3回：統計3	第18回：筋電図3(強度と筋放電量)

第4回：身体形態1(人体の線計測法)	第19回：動作分析1(分析法)
第5回：身体形態2(人体の線計測法)	第20回：動作分析2(デジタイズ)
第6回：身体形態3(体脂肪)	第21回：動作分析3(課題測定)
第7回：新体力テスト1	第22回：無酸素パワー測定1(自転車エルゴメータ)
第8回：新体力テスト2	第23回：無酸素パワー測定2(走動作)
第9回：新体力テスト3	第24回：無酸素パワー測定3(跳躍動作)
第10回：心拍数1(安静心電図と負荷心電図)	第25回：動作パワー測定1
第11回：心拍数2(最大酸素摂取量と心拍数)	第26回：動作パワー測定2
第12回：心拍数3(運動中の心拍数と主観的運動強度)	第27回：動作パワー測定3
第13回：血中乳酸の分析と運動強度1	第28回：MRIの活用1
第14回：血中乳酸の分析と運動強度2	第29回：MRIの活用2
第15回：血中乳酸の分析と運動強度3	第30回：MRIの活用3

【講義科目】

[スポーツ文化研究領域]

武道思想史特論

志々田 文明

近代史における日本武道は、学校教育と警察への導入によってその発展の地盤を形成してきた。それはまた急速な文化の西洋化の動向に対する反動でもある日本のナショナリズム勃興の一環であったともいえる。武道は基本や形の反復によって、日本的人間関係の中で修行されるため、伝統の維持装置として良くも悪くも有効な機能をもつ。その様式に魅了されて熱心に修行する海外の学習者も多い。一方で武道は、オリンピック種目としての柔道に代表されるように、日本発祥の競技スポーツとして世界に大きな愛好者をもつ。つまり、武道は国際社会におけるコミュニケーションのツールとして有効な文化なのである。

本講義は、戦中期に、現在の中国東北部に日本軍によって作られた「満洲国」が舞台である。その最高学府・建国大学において、アジアの多民族学生を対象に行われた武道教育(柔道・剣道・合気武道・弓道・角力(相撲)・騎道・銃剣道の実態を検討しながら、1)武道とは何か、2)日本人や異民族に対する武道の「教育力」、3)武道を通してみる近代(社会)史について学習する。特に3)に関連しては大英帝国のパブリックスクール教育との比較も行いたい。

教材には拙著『武道の教育力:満洲国・建国大学における武道教育』(日本図書センター／2005)を使用する。また、各種映像や写真を適宜織り込んで立体的な理解が可能なようにする。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：はじめに:武道の歴史と思想	第9回：合気武道の思想と教育
第2回：「満洲国」と建国大学の環境	第10回：合気武道の思想と教育(2)
第3回：建国大学の教育:思想と制度	第11回：弓道の思想と教育
第4回：パブリックスクールと建国大学	第12回：角力の思想と教育
第5回：剣道の思想と教育	第13回：騎道・銃剣道の思想と教育
第6回：剣道の思想と教育(2)	第14回：武学講義と武道の教育力

第7回：柔道の思想と教育	第15回：まとめ
第8回：柔道の思想と教育(2)	

スポーツ人類学特論

寒川 恒夫

サッカーをとりあげ、世界の土着化したサッカー文化について考える。テキストは以下のものを使用する。毎回、テキストの予習が課される。

Guggeis, K. et al., 2006, Football, Arnoldsche; Stuttgart.

成績評価基準:平常点

授業計画:

第1回：本科目のガイダンス	第9回：テキストの翻訳・講読(8)
第2回：テキストの翻訳・講読(1)	第10回：テキストの翻訳・講読(9)
第3回：テキストの翻訳・講読(2)	第11回：テキストの翻訳・講読(10)
第4回：テキストの翻訳・講読(3)	第12回：テキストの翻訳・講読(11)
第5回：テキストの翻訳・講読(4)	第13回：テキストの翻訳・講読(12)
第6回：テキストの翻訳・講読(5)	第14回：テキストの翻訳・講読(13)
第7回：テキストの翻訳・講読(6)	第15回：講評
第8回：テキストの翻訳・講読(7)	

スポーツ教育学特論

友添 秀則

本講義では、生涯スポーツ時代を視野に入れスポーツ教育のあり方を考察する。

具体的には、スポーツ教育を取り巻く社会的な状況の考察から、スポーツ教育の存在意義や価値論、具体的な授業方法論にまで言及する。

特に、教育の存在論にまで遡って考察していく。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：スポーツ教育の実践課題(2)
第2回：スポーツ教育の学習内容論議(1)	第10回：スポーツ教育に求められる指導者の力量
第3回：スポーツ教育の学習内容論議(2)	第11回：スポーツ教育の指導スタイル
第4回：スポーツ教育の課題(1)	第12回：スポーツ教育と学力論議
第5回：スポーツ教育の課題(2)	第13回：スポーツ教育を支える論理
第6回：スポーツ教育の課題(3)	第14回：スポーツ教育と指導者の在り方
第7回：スポーツ教育のアカウンタビリティー	第15回：レポート課題と解説
第8回：スポーツ教育の実践課題(1)	

スポーツ表象特論

リー トンプソン

スポーツは多様な形で表現されている。スポーツの表象を検討することによって、そのスポーツのことを知ることができるだけではなく、それを生み出した社会や歴史的背景についても知ることもできる。本講義ではまずスクーナートホールの講演をDVDでみて、カルチュラルスタディーズのメディア観を学ぶ。その後、様々な角度からスポーツの表象を見る。最後に授業で学んだことに基づいて受講生は発表する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中のコメント、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：スポーツにおける国家の表象(日本)
第2回：メディアと表象 I (DVD: Stuart Hall: Representation and the Media)	第10回：プロレス
第3回：メディアと表象 II	第11回：グローバリゼーション
第4回：メディア・スポーツ	第12回：受講生の発表
第5回：バリの闘鶏	第13回：受講生の発表
第6回：相撲の表象:絵画と新聞	第14回：受講生の発表
第7回：スポーツにおけるジェンダーの表象	第15回：受講生の発表
第8回：スポーツにおける国家の表象(ヨーロッパ)	

スポーツ社会学特論

宮内 孝知

スポーツ社会学の研究領域は極めて多岐にわたる。また、受講生の興味関心も多様である。それ故、ここでは、スポーツ社会学に関する基本的なテーマを設定しつつ、各自が興味・関心をもつ関連の文献を講読・発表しながら、スポーツと社会との関連を考えていくようとする。その中で、特に共通の問題意識が生じたテーマについては、ディスカッションをとおして、それをより深めていくことにする。

作成された発表レジュメ、ディスカッション、出席等で総合的に評価する。

授業計画:多岐にわたるスポーツ社会学の研究領域から幾つかのものを受講者と選択し、レジュメの作成を分担し、それを基に討論することになるが、以下のような計画が例となる。

第1回：オリエンテーション (毎時のテーマと分担の決定)	第9回：現代スポーツ論(地域社会とスポーツ振興)
第2回：スポーツ社会学論 (スポーツ社会学の必要性)	第10回：スポーツと文化
第3回：スポーツ社会学論 (社会現象としてのスポーツの捉え方)	第11回：スポーツジェンダー
第4回：スポーツ社会学論 (社会システムとしてのスポーツ)	第12回：スポーツと政治
第5回：プレイ論(スポーツ論の理論的基礎)	第13回：スポーツと経済
第6回：プレイ論(プレイ論からスポーツ論へ)	第14回：スポーツと法律
第7回：現代スポーツ論(大衆化と高度化)	第15回：スポーツと教育
第8回：現代スポーツ論(生涯スポーツ論)	

スポーツ史特論

石井 昌幸

イギリス社会史研究の一領域として、主として1980年以降に登場したスポーツ史研究の研究史を紹介とともに、そうした研究が登場した背景や、他領域との関係性について解説する。同時に、イギリス以外の社会史・レジャー史・スポーツ史研究の動向などについても、可能な限り触れたい。

成績評価基準:課題レポートによる。

授業計画:

第1回：スポーツ史研究の方法と課題	第9回：合理的娯楽と階級
第2回：歴史学研究のコンテクストにおけるスポーツ史	第10回：フットボールの組織化(1)

第3回：アスレティシズムとパブリックスクール(1)	第11回：フットボールの組織化(2)
第4回：アスレティシズムとパブリックスクール(2)	第12回：スポーツの世界伝播
第5回：民衆娯楽の衰退(1)	第13回：アメリカのスポーツ
第6回：民衆娯楽の衰退(2)	第14回：オリンピックのはじまり
第7回：娯楽の初期商業化	第15回：理解度の確認
第8回：理解度の確認	

舞踊表現特論

杉山 千鶴

舞踊あるいはその媒体となる身体について、各自の関心のある文献・論文に基づいて発表し、舞踊・身体をめぐる様々な諸相について検討する。

多様な視点からのアプローチのなされることが期待される。

成績評価基準：出席、発表、ディスカッションへの参加姿勢、レポートを総合して評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス、発表の元となる文献・論文の選定	第9回：発表⑧、随時選定
第2回：発表①、随時選定	第10回：発表⑨、随時選定
第3回：発表②、随時選定	第11回：発表⑩、随時選定
第4回：発表③、随時選定	第12回：舞踊・身体をめぐる諸相の総括①
第5回：発表④、随時選定	第13回：舞踊・身体をめぐる諸相の総括②
第6回：発表⑤、随時選定	第14回：舞踊・身体をめぐる諸相の総括③
第7回：発表⑥、随時選定	第15回：総括
第8回：発表⑦、随時選定	

体育科教育特論

吉永 武史

本講義では、カリキュラム論ならびに学習指導論の両面から体育授業の構造について解説し、良い体育授業を構築するための条件についての理解を深める。加えて、授業分析やマイクロティーチング(仮想模擬授業)を導入して、体育授業の実践的指導力を高めることを目指す。

体育科教育学は、体育授業を中心とする体育実践の改善を目的として行われる研究分野である。本講義では、カリキュラム論ならびに学習指導論の両面から体育授業の構造について解説し、良い体育授業を構築するための基礎的・内容的条件について考察する。加えて、実際の体育授業映像を用いた授業分析法について学んだり、マイクロティーチングを行うことによってマネジメントや相互作用行動などの実践的指導力を高める。受講者は、体育科教育学の基本的知識を持っていることが望ましい。

成績評価基準：出席状況(15%)、プレゼンテーション(25%)、期末レポート(60%)により評価する。

授業計画：

第1回：演習の概要と進め方	第9回：体育の指導技術論—授業のマネジメントと相互作用行動—
第2回：体育目標の変遷と体育概念の変化—身体の教育、スポーツによる教育、スポーツの中の教育—	第10回：体育の評価論—学習評価と授業評価—
第3回：体育の運動領域論—脱種目主義による運動の分類論—	第11回：体育の授業分析法(1)授業場面期間記録法による授業の勢いの分析

第4回：体育の教育課程論—新学習指導要領にみるカリキュラム改革の動向—	第12回：マイクロティーチング(1)教師の授業運営能力(マネジメント)を対象に
第5回：体育の学習内容論—「学習内容」の概念と構造—	第13回：体育の授業分析法(2)相互作用行動観察法による授業中の教師行動の分析
第6回：体育の教材づくり論—教材づくりの基本的視点—	第14回：マイクロティーチング(2)教師の相互作用行動(フィードバック)を対象に
第7回：体育の学習指導論—指導ストラテジーと学習形態—	第15回：総括ならびにレポート課題
第8回：体育の学習過程論—学習過程モデルの選択—	

中国武術史特論

林 伯原

中国の武術は、長い歴史と社会の変遷のなかで、精練、革新を重ねながら、次第に発展してきた伝統文化である。その豊富多彩な内容は、古代からアジア各国の武術の発展に大きな影響を与えてきたばかりでなく、いまや世界各国に伝えられ、国際的にも強い関心が寄せられている。中国武術は、その担い手の民族的、地域的、氏族的な違いにより、多種多様な形態をとつて展開する過程で、さまざまな古代哲学、思想、宗教及び民族精神、倫理道德観、風俗、芸術等の影響を受けていることから、世界の民族体育の中でも他に例を見ない程、多様で複雑なものになっている。

本講義では、主として中国の古代から近代及び現代における武術の歴史的展開(軍隊武術、民間武術、武科挙、武術教育、武術の諸流派とその様相、武術の形、少数民族の武術など)を論ずる。また、日本の武道や朝鮮半島の武芸と比較しながら解説を加える。中国武術の形成とその歴史的特徴に関する講義をとおして、中国の武術文化の多様性や複雑さについての理解を深め、中国武術文化が世界の文化の中で占める特異的かつ重要な位置について理解することを狙いとしている。

成績評価基準:期末のレポート及び出席状況から評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第9回：元代における独特の武術体系
第2回：古代中国における武術の起源	第10回：明代における武術の発展(1)
第3回：夏・商・西周時代における武術の実態	第11回：明代における武術の発展(2)
第4回：春秋戦国における軍隊武術の変化と民間武術の興起	第12回：清代前期における武術の実態
第5回：秦漢時代における諸民族の武術の相互影響・吸収と発展	第13回：近代中国における武術の変化(1)
第6回：魏晋南北朝における民族戦争及び民族融合による武術の変化	第14回：近代中国における武術の変化(2)
第7回：隋唐五代における武術の変遷及び武科挙の成立	第15回：現代中国における武術の発展
第8回：宋代における軍事武術の変化及び多種多様な民間武術	

体育科教育学特論

菊 幸一

歴史社会的背景から体育科教育の教科存在論を展開し、現在から近未来における社会的課題について理

解を深める。その上で、体育科教育の目的・目標論、教科内容論、各運動領域論をカリキュラム及び単元の次元と絡めて概説するとともに、授業展開における実践的な課題と結びつけて講義する。また、とくに生涯スポーツの観点から体育科教育のとらえ方やあり方について議論する。

テキスト:佐伯年詩雄(2006)、これからの体育を学ぶ人のために、世界思想社。

成績評価基準:2／3以上の出席を前提とし、授業中に課題レポートを2回提出し、内容について議論した過程と結果を50%評価する。これとは別に、最終レポート課題に対する成果を50%評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス及び「体育科教育学」の全 体像と課題	第9回：「楽しい体育」の展開(1): 「楽しい体育」論とは何か
第2回：体育とは何か(1):身体と運動	第10回：「楽しい体育」の展開(2): 「楽しい体育」の授業展開
第3回：体育とは何か(2):体育の学習指導と社会	第11回：「楽しい体育」の展開(3): 脱構築の授業研究の視点
第4回：体育とは何か(3):戦後体育の特徴	第12回：「楽しい体育」の展開(4): 批判と反批判、その可能性
第5回：体育とは何か(4):体育と生活との関係	第13回：現代体育の課題と展望(1): 新しい体育科教育がめざす子どもと理念
第6回：現代社会と体育(1): 現代社会の要求と学校体育	第14回：現代体育の課題と展望(2): 現代の教育課題と体育の役割
第7回：現代社会と体育(2): 生涯スポーツと学校体育	第15回：現代体育の課題と展望(3): いわゆる「体育」を超えて
第8回：現代社会と体育(3): 「体育」と「スポーツ」の関係	

体育科カリキュラム特論

松田 恵示

体育科カリキュラムを考察しようとした場合、学校教育全体の中に体育という教科をどのように位置づけるかという側面と、体育という教科をどのように計画し実践するのかという側面に分かれる。さらには、スポーツや健康科学といった文化内容を、学校教育全体の中でどのように計画し制度化するのかという側面や、顕在的なカリキュラムに対して潜在的なカリキュラムを検討する側面もある。こうした多様な視点からカリキュラムの理解と開発について考えてみたい。

成績評価基準:発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：カリキュラムの視点 一現代社会とスポーツ(3)
第2回：カリキュラムとは何か	第10回：カリキュラムの視点 一現代社会と子ども(1)
第3回：カリキュラム研究の概説	第11回：カリキュラムの視点 一現代社会と子ども(2)
第4回：体育科カリキュラム研究(1)	第12回：カリキュラムの視点 一現代社会と子ども(3)
第5回：体育科カリキュラム研究(2)	第13回：カリキュラムの視点 一現代社会と学校(1)
第6回：体育科カリキュラム研究(3)	第14回：カリキュラムの視点 一現代社会と学校(2)
第7回：カリキュラムの視点 一現代社会とスポーツ(1)	第15回：まとめと評価
第8回：カリキュラムの視点 一現代社会とスポーツ(2)	

体育科教育評価特論

菊 幸一

まず教育における評定と評価の違いを明らかにした上で、今日の教育全体における評価の強調に関する歴史社会的背景を理解する。その上で、体育科教育における評価論の特徴をいわゆる「学力論」との関係で把握し、目標・内容の設定の違いによる評価観の相違や評価プロセスについて理解を深める。また、評価規準の策定とそのプロセスの実態を明らかにするとともに、具体的な授業展開においてどのような活用の仕方が考えられるのかについて議論する。

成績評価基準:2/3以上の出席を前提とし、授業中に課題レポートを2回提出し、内容について議論した過程と結果を50%評価する。これとは別に、最終レポート課題に対する成果を50%評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス及び「体育科教育評価」の全体像と課題	第9回：評価規準の考え方と評価の実際(1)：理論編
第2回：体育評価の理想と現実	第10回：評価規準の考え方と評価の実際(2)：体つくり運動
第3回：体育科教育評価の構造と機能:診断、形成、総括	第11回：評価規準の考え方と評価の実際(3)：個人運動領域
第4回：体育科の目標構造の変遷と評価:目標は評価を規定する	第12回：評価規準の考え方と評価の実際(4)：集団運動領域
第5回：履修主義 vs. 習得主義が及ぼす体育評価への影響	第13回：評価規準の考え方と評価の実際(5)：表現運動領域
第6回：体育評価をめぐる概念:基準と規準、評価と評定	第14回：体育科における教育評価と学習評価:生涯教育論 vs. 学習社会論
第7回：体育の学力観と体育評価:社会は学力を規定する	第15回：現代体育の課題と体育評価のあり方
第8回：観点別評価の意義と課題:なぜ観点別なのか	

体育科教育内容特論

松田 恵示

体育科における教育内容について、歴史的視点、教授学的視点、社会学的視点といったいくつかのパースペクティブから検討することで、その特質と構造の理解を深めてみたい。合わせて、具体的な体育科の学習指導との関係から教育内容—教材—方法—評価の適切なあり方について、授業を分析することを通して考えてみたい。

成績評価基準:発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：体育の教育内容の教育的検討(1)
第2回：カリキュラムと教育内容	第10回：体育の教育内容の教育的検討(2)
第3回：体育の教育内容研究概説(1)	第11回：授業分析(1)
第4回：体育の教育内容研究概説(2)	第12回：授業分析(2)
第5回：体育の教育内容の歴史的検討(1)	第13回：授業分析(3)
第6回：体育の教育内容の歴史的検討(2)	第14回：国際比較の視点から見た体育の教育内容
第7回：体育の教育内容の社会的検討(1)	第15回：まとめと評価
第8回：体育の教育内容の社会的検討(2)	

[スポーツビジネス研究領域]

スポーツ経営学特論

木村 和彦

本講義では、日本および北米、ヨーロッパを中心としてスポーツ経営学(スポーツマネジメント)の学史的な流れを概観し、経営学を対照しながらスポーツ経営学の学問的性格を検討するとともに、スポーツ経営学における研究課題や研究方法について解説する。また学校、地域、プロスポーツ、スポーツツーリズムなど、スポーツ経営の実践領域を選択し、今日的な研究的および実践的な課題について検討する。

教科書:なし

参考書:体育・スポーツ経営学講義(大修館書店)

評価方法:小テストとレポートを総合して評価する

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：スポーツ経営の実践領域(3) スポーツツーリズムとイベント
第2回：スポーツ経営学の系譜(1) 日本、アジア	第10回：スポーツ経営の実践領域(4) スポンサーシップ
第3回：スポーツ経営学の系譜(2) 北米、ヨーロッパ、オセアニア	第11回：スポーツ経営の実践領域(5) 施設マネジメント
第4回：スポーツ経営学の学的性格	第12回：スポーツ経営の実践領域(6) 経営倫理問題
第5回：スポーツ経営学の研究課題と研究方法	第13回：スポーツ経営の実践領域(7) 契約とネゴシエーション
第6回：小テスト	第14回：スポーツ経営学の課題
第7回：スポーツ経営の実践領域(1) 学校体育と地域スポーツ	第15回：小テストと解説
第8回：スポーツ経営の実践領域(2) 大学とプロスポーツ	

健康スポーツマネジメント特論

中村 好男

健康スポーツの推進・振興は、現代社会における社会的ニーズの一つである。本講義では、健康スポーツ振興に関わる諸問題についての実践解決技法を習得することを目標として、身体運動科学・行動心理学・社会マーケティングの各々の基礎理論を学んだうえで、健康スポーツマーケティングの各種技法について学習する。

成績評価基準:CourseN@vi による毎回授業課題ならびに最終レポートによって総合的に評価する。

授業計画:

第1回：健康スポーツの背景	第9回：健康スポーツプロダクトの消費構造(3) サービスデリバリ
第2回：健康スポーツにおけるマーケティングの役割	第10回：健康スポーツマーケティングの顧客と市場分析
第3回：一般マーケティング理論	第11回：健康スポーツのプロモーション(1) プロモーションチャネル
第4回：健康行動に関わる行動科学の諸理論	第12回：健康スポーツのプロモーション(2) メッセージフレーミング

第5回：健康スポーツマーケティングのプラン	第13回：健康スポーツのサービス品質と顧客満足
第6回：健康スポーツのプロダクト	第14回：健康スポーツプログラムのマネジメント
第7回：健康スポーツプロダクトの消費構造(1) 価値交換	第15回：まとめ
第8回：健康スポーツプロダクトの消費構造(2) 消費者のバリアと受取価値	

スポーツビジネスマネジメント特論

原田 宗彦

スポーツにおける産業化と複合化によって、スポーツ産業は進化を続けている。その中でもとりわけ権利ビジネスの発展は、スポーツのメディア価値を増大させ、従来のスポーツ産業の構造をドラスティックに変化させるとともに、研究領域においても様々なパラダイムシフトをもたらした。本講義においては、スポーツビジネスのマクロ的視点として「スポーツと地域イノベーション」に関する研究、そしてミクロ的視点として「スポーツ消費者の行動学的分析」に関する研究に关心を寄せながら、様々な視覚からスポーツビジネスとマネジメントの問題を取り上げたい。例えばマクロ的視点では、スポーツ振興モデルを応用した政策提言的研究やスポーツイベントの経済効果に関する研究、ミクロ的視点ではプロスポーツにおけるファンのチームロイヤルティに関する研究や、スポーツ・フィットネス産業における経験価値マーケティングに関する研究などの研究がある。さらにメゾーレベルの研究として、コミュニティビジネスとしてのクラブマネジメントの問題にも言及する。

成績評価基準：出席（感想文）、授業態度、クラス内試験によって行う

推奨教科書：

原田宗彦他著「スポーツ産業論第四版」大修館書店、2007年

原田宗彦編著「スポーツマーケティング」大修館書店、2008年

原田宗彦訳「アメリカ・スポーツビジネスに学ぶ経営戦略」大修館書店、2006年

山下秋二・原田宗彦編著「図解スポーツマネジメント」大修館書店、2005年

授業計画：

第1回：授業ガイダンス：ビジネスコンテンツとしてのスポーツの発展	第9回：スポーツが誘発する地域イノベーション(PP)
第2回：概念装置としてのスポーツ消費者（参加者、ファン、ボランティア）	第10回：スポーツファンと経験価値マネジメント
第3回：クラブ事業のマネジメント	第11回：スポーツサービス論
第4回：地域スポーツ振興論	第12回：プレゼンテーションⅠ
第5回：公共スポーツ施設のマネジメント	第13回：プレゼンテーションⅡ
第6回：プロスポーツのマネジメント	第14回：プレゼンテーションⅢ
第7回：スポーツマーケティング概論	第15回：プレゼンテーションⅣ
第8回：チームロイヤルティとブランドエクイティ	

スポーツクラブビジネス特論

間野 義之

一年制修士と二年制修士の合併科目として、地域スポーツクラブのマネジメントならびにビジネスについて理論と事例を紹介する。

スポーツクラブビジネスの要素となる、1)ミッション・ビジョン、2)活動拠点確保、3)法人格等組織体制の整備、4)資金調達、5)人材の確保・育成について、それぞれビジネスのポイントに触れる。

特に、非営利である地域スポーツクラブにとって活動拠点の確保・維持が重要であり、そのためには地方自治体とのパートナーシップ(PPP:Public Private Partnership)が重要となることから、公共スポーツ施設の有効利用や指定管理者としての運営受託あるいはPFIなどを中心に講義を展開する。

成績評価基準:毎回講義後に提出された小レポートにて評価する。CourseN@viを通じて期日までに提出すること。

授業計画:

第1回：スポーツクラブのミッション・ビジョン	第9回：スポーツクラブの財源
第2回：【ケーススタディ1】(社)横浜カントリー＆アスレティッククラブ	第10回：【ケーススタディ5】NPO 法人 MIP スポーツプロジェクト
第3回：スポーツクラブの活動拠点(1)	第11回：スポーツクラブの組織
第4回：【ケーススタディ2】(株)リバティヒル・クラブ	第12回：【ケーススタディ6】NPO 法人ワセダクラブ
第5回：スポーツクラブの活動拠点(2)	第13回：スポーツクラブの諸問題
第6回：【ケーススタディ3】NPO 法人ゾシオ成岩スポートクラブ	第14回：【ケーススタディ7】REGISTA 有限責任事業組合
第7回：スポーツクラブの人材	第15回：まとめ
第8回：【ケーススタディ4】 NPO 法人ニッポンランナーズ	

トップスポーツビジネス特論

平田 竹男、中村 好男

本講義では、トップスポーツの世界をとりまくスポーツビジネスに関して、1)勝利(強化)・普及(振興)・市場開発(資金獲得)の関わりを示したマネジメントモデル(トリプルミッションモデル)、2)人生の中でのスポーツとの関わりを示した逆台形モデル、3)「勝者の決定構造」としてのスポーツリーグのマネジメント、の各々について、その先進事例や業界の動向など学んだ上で、その具体例の分析を通じて、トップスポーツビジネスの課題についての検証能力を養成する。

成績評価基準:授業中の発表内容を評価の対象とする。授業中に発表できなかった者については、別途提出するレポートによって評価する。

授業計画:

第1回：トップスポーツビジネスとは	第9回：指導者の立場から見たトップスポーツの現場
第2回：トップスポーツ選手育成の現場とコーチングマネジメント	第10回：スポーツにおけるジャーナリズム
第3回：選手の立場から見たスポーツビジネス興隆の現場	第11回：実践的トリプルミッションモデル
第4回：競技連盟のビジネスマネジメント	第12回：プロ選手としてスポーツを究める
第5回：スポーツ用品のマーケティング戦略	第13回：スポーツ選手のマネジメント
第6回：スポーツのビジネスの新たな融合	第14回：最前線のスポーツビジネス
第7回：プロスポーツクラブ経営論	第15回：トップスポーツビジネスの展望
第8回：最新ビジネス戦略論	

スポーツ組織特論

作野 誠一

本講では、組織論及び人材マネジメント論の理解を通じて、スポーツにおける多様な組織現象に関する知識

を身につけるとともに、自ら分析・提案する能力の涵養をめざす。スポーツ組織、とくに地域スポーツ組織を念頭に置きつつ、組織論ならびに従来の人的資源管理を超える人材マネジメントの概要について理解する。具体的には、以下のような内容から構成される。

・経営組織論要説

・人的資源管理(HRM)と人材マネジメント

・人材の獲得・育成・評価・処遇

・人材マネジメントの実際(スポーツボランティア、メディアの人材マネジメント)

・教場レポート

成績評価基準:出席状況及びレポートによって評価する。

授業計画:

第1回：授業ガイダンス	第9回：人材マネジメントの実際② スポーツメディアにおける人材マネジメント(ゲストスピーカー)
第2回：組織と人材マネジメントの理論①	第10回：前回テーマについてのディスカッション
第3回：人材マネジメントの実際① スポーツボランティアのマネジメント(ゲストスピーカー)	第11回：組織と人材マネジメントの理論⑥ 総合型地域スポーツクラブ
第4回：前回テーマについてのディスカッション	第12回：組織と人材マネジメントの理論⑦ ボランティアマネジメント
第5回：組織と人材マネジメントの理論② モチベーション	第13回：組織と人材マネジメントの理論⑧ スポーツ組織のマネジメントを考える
第6回：組織と人材マネジメントの理論③ リーダーシップ	第14回：まとめ
第7回：組織と人材マネジメントの理論④ 組織化のマネジメント	第15回：総括、教場レポート
第8回：組織と人材マネジメントの理論⑤ 運動のマネジメント	

スポーツビジネス・アドミニストレーション特論

武藤 泰明

授業方法:講義形式を基本としますが、重要な基本概念については、一部、受講者による発表の形式もとりいれる予定です。主なテキストは武藤「プロスポーツクラブのマネジメント」(東洋経済新報社2006)。この他、企業評価、バランスト・スコア・カード等についても解説ないし参考図書の紹介を行います。

授業内容:ビジネス・アドミニストレーションは日本語では「経営管理」。スポーツを実施している競技組織(クラブやチームなど)・団体(協会、連盟など)の経営や事業を分析・評価し、成果を高めていくための方法を検討します。

企業評価、事業評価の典型的な成果指標は利益やキャッシュフローですが、ほとんどのスポーツ組織は利益を目的としていないので、利益やキャッシュフローは重要ですが絶対ではありません。むしろ、成果を予め定義し、これに係わる KPI(Key Performance Indicator)によるマネジメントを行っていくことが重要です。この方法を習得することが講義の主な目的です。

成績評価基準:講義時間に提示、あるいは Course N@vi に掲示した課題の提出状況と内容によって評価します。

授業計画:

第1回：法人格の類型とガバナンス	第9回：KPI の設定・定義と測定方法
第2回：ファイナンシャル・マネジメント	第10回：KPI の設定・定義と測定方法(2)

第3回：選手：契約と移籍	第11回：経営戦略と経営計画
第4回：組織人事	第12回：経営戦略と事業戦略
第5回：マーケティング	第13回：PDCA サイクル
第6回：無体財産（商標、肖像など）のマネジメント	第14回：バランスト・スコア・カード
第7回：企業価値	第15回：まとめ
第8回：企業評価	

スポーツビジネスマーケティング特論

松岡 宏高

スポーツビジネスに関するマーケティングには、スポーツサービス（するスポーツと見るスポーツ）を効率よくプロデュース、提供する「スポーツのマーケティング（marketing of sport）」と、企業がスポーツを利用してプロモーション活動を行う「スポーツによるマーケティング（marketing through sport）」の2種類がある。前者については、スポーツを実施したり、見たりする、スポーツ消費者のニーズを理解し、そのニーズを満たすスポーツサービスを効率よく提供するための戦略が講義内容の中心となる。具体的には、マーケティング戦略、スポーツ消費者行動のメカニズム、消費者の特性やニーズを把握するためのマーケティングリサーチなどについて学習する。後者については、企業がスポーツチーム・クラブやスポーツイベントのスポンサーとなり、スポーツを利用したマーケティング活動を行うという「スポーツスponsorシップ」についての知識を習得する。

成績評価基準：授業への参加、レポート、試験、プレゼンテーションによる総合評価

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：スポーツマーケティング・リサーチ2
第2回：スポーツ産業とスポーツ消費	第10回：スポーツ・スポンサー・シップ
第3回：スポーツマーケティングの定義	第11回：プレゼンテーション
第4回：スポーツプロダクト・スポーツサービス	第12回：プレゼンテーション
第5回：スポーツ消費者	第13回：プレゼンテーション
第6回：スポーツマーケティング・プラン	第14回：プレゼンテーション
第7回：スポーツビジネスのプロモーション戦略・価格戦略	第15回：教場試験と講評
第8回：スポーツマーケティング・リサーチ1	

[スポーツ医科学研究領域]

メディカルコンディショニング特論

赤間 高雄

メディカルコンディショニングの基本はアスリートの健康管理であり、コンディションの悪化要因としてのスポーツ外傷・障害および疾病について予防、早期発見、治療をおこなうことである。この講義では、アスリートの健康管理と内科的スポーツ障害について解説する。加えて、アスリートの健康管理にとって不可欠なアンチ・ドーピングの最新情報を解説する。

成績評価基準：出席状況とレポート内容を総合的に評価する（出席50%、レポート50%）。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：喘息、過換気、アレルギー
第2回：コンディショニング、健康管理、メディカルチェック	第10回：海外渡航（時差ボケなど）、特殊環境（高山病など）

第3回：横紋筋融解症	第11回：アンチ・ドーピング(1)
第4回：貧血	第12回：アンチ・ドーピング(2)
第5回：オーバートレーニング	第13回：アンチ・ドーピング(3)
第6回：スポーツと感染症(かぜと免疫)	第14回：アンチ・ドーピング(4)
第7回：スポーツと感染症(食中毒、血液媒介病原体)	第15回：アンチ・ドーピング(5)
第8回：熱中症	

スポーツ統計学特論

荒尾 孝

人間集団を対象とした健康づくり研究においては、観察研究により健康の関連要因を明らかにし、実験研究によりその要因の因果関係を検証することが重要となる。しかし、生活者としての人間の健康現象は、多様な内的・外的要因の複雑な影響を受けており、一連の健康づくり研究においては、そのような多種多様な要因の影響を研究デザインや統計学的にコントロール(調整)する必要がある。本講義では、そのような健康づくり研究に必要な研究デザイン論と統計学的手法について講義を行う。具体的には、研究デザイン論については研究の構造としての研究プロトコールの作成方法を、また、統計解析法については検定と推定、パラメトリック検定法とノンパラメトリック検定法、多重比較検定法、多変量解析法などについて講義する。

成績評価基準：授業への出席(50%)、授業での態度、積極性など(20%)レポート課題の内容(30%)などを総合的に評価

授業計画：

第1回：講義の概要と進め方	第9回：健康科学研究における統計学(1) —統計解析の基礎
第2回：健康科学研究の基本—その枠組みと体系	第10回：健康科学研究における統計学(2) —検定法の使い分け
第3回：健康科学研究のデザイン論(総論) —研究のプロセス、機能と構造	第11回：健康科学研究における統計学(3) —多重比較検定法
第4回：研究プロトコールのデザイン各論(1) —研究テーマの設定	第12回：健康科学研究における統計学(4) —バイアスとその制御
第5回：研究プロトコールのデザイン各論(2) —研究方法1	第13回：健康科学研究における統計学(5) —多変量解析法1
第6回：研究プロトコールのデザイン各論(3) —研究方法2	第14回：健康科学研究における統計学(6) —多変量解析法2
第7回：研究プロトコールのデザイン各論(4) —対象者の選定	第15回：研究プロトコールの発表・討論
第8回：研究プロトコールのデザイン各論(5) —観察因子の設定	

スポーツ神経精神医学特論

内田 直

This lecture will be given in English language. 本講義は、すべて英語で行われる。講義および試験では、英語以外の言語は原則として使用しない。以下に示す3つの内容について講義し、講義を通じてスポーツと脳や精神機能との係わり合いについて学習する。i) 神経科学分野について、脳科学の基礎的考え方、運動にかかる各部位の働き、脳波や MRI の原理と応用。ii) 時間生物学、睡眠医学分野について、睡眠医学の基礎、

生体リズム、生体リズムとパフォーマンス、ジェットラグ症候群など。iii)生物学的精神医学の分野について、精神疾患についての概論、スポーツ選手に見られるオーバートレーニング症候群とうつ病や慢性疲労症候群との関係。

成績評価基準：出席、レポート、教場試験。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第9回：講義：睡眠と生体リズム3
第2回：講義：神経科学概論1	第10回：講義：MRIの原理と応用1
第3回：講義：神経科学概論2	第11回：講義：MRIの原理と応用2
第4回：講義：神経科学概論3	第12回：講義：生物学的精神医学1
第5回：講義：脳波1	第13回：講義：生物学的精神医学2
第6回：講義：脳波2	第14回：講義：生物学的精神医学3
第7回：講義：睡眠と生体リズム1	第15回：教場試験と全体の講評
第8回：講義：睡眠と生体リズム2	

スポーツ内科学特論

【2010年度休講】

坂本 静男

スポーツによる生理的変化と病的変化に関して、内科的観点から講義する。生理的変化としては、“体力”に対する効果、生活習慣病に対する効果などに関して述べる。病的変化としては、急性内科的障害では突然死、熱中症を主に、慢性内科的障害では貧血、オーバートレーニング症候群を主に述べる。心臓リハビリテーションやアンチ・ドーピング活動といった今日的な課題に関しても、その時の世の中の話題の程度に応じて、論じていくことになる。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：スポーツ選手に対するスポーツ医・科学サポート
第2回：メタボリックシンドロームに対する運動の効果総論	第10回：内科的スポーツ障害総論
第3回：メタボリックシンドロームに対する運動の効果各論(1)－肥満症	第11回：内科的スポーツ障害各論(1)
第4回：メタボリックシンドロームに対する運動の効果各論(2)－脂質異常症	第12回：内科的スポーツ障害各論(2)
第5回：メタボリックシンドロームに対する運動の効果各論(3)－高血圧症	第13回：内科的スポーツ障害各論(3)
第6回：メタボリックシンドロームに対する運動の効果各論(4)－糖尿病	第14回：内科的スポーツ障害各論(4)
第7回：メタボリックシンドロームに対する運動処方作成	第15回：総まとめ
第8回：スポーツ選手のコンディショニング	

運動器発育・発達特論

鳥居 俊

スポーツや身体活動において用いられ損傷を受ける筋・腱、骨・軟骨、靭帯、神経などの運動器について、

形態の発育や機能の発達がどのように生じているか、またどのような刺激により変わりうるか、などに関して論じる。可能な限り、この分野の最新の研究を題材に、論文抄読も含めて学生参加型で行う。

成績評価基準：出席と発表（レポート）による

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：腱の発育発達：学生発表
第2回：体格の発育：講義	第10回：軟骨の発育発達：講義
第3回：体格の発育：学生発表	第11回：軟骨の発育発達：学生発表
第4回：骨の発育発達：講義	第12回：神経の発育発達：講義
第5回：骨の発育発達：学生発表	第13回：神経の発育発達：学生発表
第6回：筋の発育発達：講義	第14回：靭帯の発育発達、トピックス講義
第7回：筋の発育発達：学生発表	第15回：まとめ
第8回：腱の発育発達：講義	

スポーツ外科学特論

福林 徹

体幹四肢の外傷・障害を機能解剖の面から比較検討していく。特に詳細なビデオなどを使用し、部位別の機能解剖を十分に行い、それに沿った道すじで外傷・障害の原因を解説する。

成績評価基準：授業への出席、発表、レポート等により評価する。

授業計画：

第1回：授業の紹介、脊柱 その1	第9回：レポート発表会 1
第2回：脊柱 その2	第10回：肩関節
第3回：骨盤、股関節	第11回：肘、手関節
第4回：大腿	第12回：手・手指
第5回：膝関節 その1	第13回：レポート発表会 2
第6回：膝関節 その2(微細解剖)	第14回：脳
第7回：下腿、足関節	第15回：レポート発表会 3
第8回：足、足指	

運動器解剖実習（実習科目）

福林 徹

スポーツ外科学特論を前期履修した者の中から希望者にたいして運動器を中心とした人体解剖学実習を東京大学医学部解剖学教室（本郷）において行う。実習は夏期集中方式で行い、7月下旬から8月上旬にかけての2週間を予定している。実習の詳細、日時はスポーツ外科学特論の時間に追って連絡する。本実習は人数に制限があるため、希望者が多数の場合はスポーツ外科学特論の履修態度等により決定する。

成績評価基準：出席日数、実習態度、実習後レポートで決定します。なお実習後レポートは必修です。

授業計画：

第1回：体幹、大腿、膝、下腿、足部の順に解剖を行う	第9回：胸部、腹部、背部、脊柱の解剖を行う
第2回：体幹、大腿、膝、下腿、足部の順に解剖を行う	第10回：胸部、腹部、背部、脊柱の解剖を行う
第3回：体幹、大腿、膝、下腿、足部の順に解剖を行う	第11回：胸部、腹部、背部、脊柱の解剖を行う

第4回：体幹、大腿、膝、下腿、足部の順に解剖を行う	第12回：胸部、腹部、背部、脊柱の解剖を行う
第5回：上肢を中心として肩、上腕、肘、前腕、手の順に解剖を行う	第13回：脳の解剖を行う、標本室の見学を行う
第6回：上肢を中心として肩、上腕、肘、前腕、手の順に解剖を行う	第14回：脳の解剖を行う、標本室の見学を行う
第7回：上肢を中心として肩、上腕、肘、前腕、手の順に解剖を行う	第15回：脳の解剖を行う、標本室の見学を行う
第8回：上肢を中心として肩、上腕、肘、前腕、手の順に解剖を行う	

MRIの基礎と応用

渡邊 丈夫

磁気共鳴画像法(MRI)は、強力な磁場と電磁波を用いて生体内部の情報を画像化する方法である。X線などの電離放射線を使用しないため放射線被曝がなく、撮像法を変更することにより組織間のコントラストを鮮明にしたり、任意の断面で撮像したりすることが可能であり、臨床医療および医学研究において利用価値が高く、応用範囲が広い。MRIは生体の解剖学的形態を画像化するだけでなく、脳血流変化を計測することにより、脳機能を画像化することもできる。

本講義では、理工学の基礎と医学的応用の双方から、すなわち MRI の撮像原理を中心に、実際の臨床画像を交えて診断への利用に関しては解説を加えつつ MRI に関する輪講を行う。可能であれば、本学術院が導入した MRI 装置を用いた実習も行う。

教科書:メディカル・サイエンス・インターナショナル「MRI の基本パワーテキスト第2版—基本理論から最新撮像法まで」

参考文献:なし

成績評価基準:輪講発表、出席点、授業中の発言。授業への積極的参加を奨励する。

授業計画:一人あたり教科書の約10ページを順番に担当、20分以内のプレゼンテーション(講義)と10分の質疑応答を毎週約3人ずつ行う。

第1回：ガイダンス、分担割り当て	第9回：第14章 パルスシーケンス図、第15章 撮像野(FOV)、第16章 k空間…それは最後のフロンティア！、第17章 撮像パラメータと画像の最適化
第2回：第1章 予備知識としての数学、第2章 MRI の基本原理	第10回：第18章 MRI のアーチファクト
第3回：第3章 RF 波、第4章 T1、T2、および T2*、第5章 TR、TE、組織コントラスト	第11回：第19章 高速スピノエコー法、第20章 グラジエントエコー法 Part 1 基礎原理
第4回：第6章 組織コントラスト:いくつかの臨床応用、第7章 パルスシーケンス Part 1 飽和、部分飽和、反転回復	第12回：第21章 グラジエントエコー法 Part 2 高速撮像法、第22章 エコープラナーメージング(EPI)、第23章 新しい撮像技術
第5回：第8章 パルスシーケンス Part 2 スピノエコー、第9章 フーリエ変換、第10章 画像構成 Part 1 スライスの選択	第13回：第24章 高速スピノエコー法、第25章 グラジエントエコー法 Part 1 基礎原理

第6回：第11章 画像構成 Part 2 空間エンコード	第14回：第26章 MR 血管撮影、第27章 高性能傾斜磁場、第28章 MRI におけるパルスシーケンスの多様な組み合わせ
第7回：第12章 信号処理	第15回：まとめ
第8回：第13章 データ空間	

健康行動科学特論

岡 浩一朗

本講義では、行動科学の考え方を応用して健康行動(特に、身体活動・運動)を推進させるための支援方法に関する基礎知識を獲得できるようにする。

教科書:特になし。資料は講義中に適宜配布する。

成績評価基準:出席状況、レポートなどの提出物から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：行動科学に基づいた介入(1):行動変容のメカニズム
第2回：健康づくり研究の体系化:行動疫学という考え方	第10回：行動科学に基づいた介入(2):行動変容技法
第3回：行動科学の基礎(1):行動科学の歴史	第11回：行動科学と健康カウンセリング(1):ライフスキル・自己管理スキル
第4回：行動科学の基礎(2):学習理論	第12回：行動科学と健康カウンセリング(2):行動療法・認知行動療法
第5回：健康教育と行動科学(1):健康信念モデル、計画的行動理論	第13回：ヘルスリテラシーとヘルスコミュニケーション(1):コミュニケーションスキル
第6回：健康教育と行動科学(2):社会的認知理論	第14回：ヘルスリテラシーとヘルスコミュニケーション(2):コミュニティワイドキャンペーン
第7回：ヘルスプロモーションと行動科学(1):行動変容ステージモデル	第15回：講評とレポート課題
第8回：ヘルスプロモーションと行動科学(2):生態学モデル	

スポーツ整形外科学特論

金岡 恒治

スポーツ活動に関連して発生する整形外科的傷害・障害について解説し、その疫学的研究、受傷機序解明に向けた研究、治療方法に関する研究、予防対策に関する研究について紹介する。これらの研究内容については、学生担当者が各自興味のある障害について、これまでの研究報告についての文献的考察を発表し、今後の研究の進め方についてディスカッションする。

成績評価基準:出席状況、発表内容、発言内容により評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：学生担当者の発表・ディスカッション
第2回：代表的整形外科的障害に関する研究手法の解説	第10回：学生担当者の発表・ディスカッション
第3回：学生担当者の発表・ディスカッション	第11回：学生担当者の発表・ディスカッション

第4回：学生担当者の発表・ディスカッション	第12回：学生担当者の発表・ディスカッション
第5回：学生担当者の発表・ディスカッション	第13回：学生担当者の発表・ディスカッション
第6回：学生担当者の発表・ディスカッション	第14回：学生担当者の発表・ディスカッション
第7回：学生担当者の発表・ディスカッション	第15回：学生担当者の発表・ディスカッション
第8回：学生担当者の発表・ディスカッション	

生命科学特論

鈴木 克彦

本講義は生物医科学、健康科学や臨床・教育現場に關係する学生諸君が、これから應用的、専門的な研究活動を進めていく上で、今一度分子細胞生物学や免疫学、基礎医学等の知識を再確認して、境界領域の理解や論文読解等に役立てるための基礎学力養成を目的とする。前半は下記の教科書に沿って、基本事項の確認を行いながら、最新の研究成果や時事問題との関連性を理解することを目標とする。後半は、免疫学の基礎から應用まで解説し、分子細胞生物学や免疫学等の生命科学が、いかに疾病の診断や予防・治療に應用されているかを学ぶ。

教科書:木下勉、小林秀明、浅賀宏昭. ZERO からの生命科学. 南山堂.

参考文献:永田和宏、宮坂昌之、宮坂伸之、山本一彦編. 分子生物学・免疫学キーワード事典第2版. 医学書院.

成績評価基準:授業中に指示するが、受講状況や課題等を総合して評価する。授業内容に関連する時事問題等を10分程度で発表した者に加点するので、希望者は相談すること。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス、生命とは	第9回：抗原、抗体、受容体
第2回：生命の最小基本単位・細胞とは	第10回：接着分子、サイトカイン、補体
第3回：多細胞動物、組織、発生、老化	第11回：免疫応答、自然免疫と獲得免疫
第4回：生命体を構成している物質	第12回：感染免疫、免疫不全症
第5回：体内における物質代謝	第13回：アレルギー、自己免疫疾患
第6回：遺伝子の発現と制御	第14回：生活習慣病とメタボリックシンドローム
第7回：ホメオスタシス(恒常性)	第15回：運動と免疫、まとめ
第8回：免疫の基本概念、構成細胞	

(前後したり、別のトピックスを扱う場合もある)

アスレティックトレーニング特論

広瀬 統一

本講義ではアスレティックトレーニングの中でも主にスポーツ損傷発症に関わる身体要因について分析、検討する。

教科書:なし

参考文献:なし

成績評価基準:授業の出席と課題達成度

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：スポーツ損傷の病態把握IV
第2回：機能解剖 I	第10回：スポーツ損傷に関わる身体的要因分析 I
第3回：機能解剖 II	第11回：スポーツ損傷に関わる身体的要因分析 II
第4回：機能解剖 III	第12回：スポーツ損傷に関わる身体的要因分析 III

第5回：機能解剖IV	第13回：スポーツ損傷に関わる身体的要因分析IV
第6回：スポーツ損傷の病態把握I	第14回：スポーツ損傷に関わる身体的要因分析V
第7回：スポーツ損傷の病態把握II	第15回：まとめ
第8回：スポーツ損傷の病態把握III	

[身体運動科学研究領域]

スポーツ神経科学特論

彼末 一之

スポーツのパフォーマンスには筋・腱の性質とともにそれを制御する神経系のはたらきが大きな要因である。この講義では特に人の運動制御系についての最新の知見を紹介する。また特定なテーマについて受講者が調査発表し、それについての議論からさらに理解を含める。受講者は神経科学、生理学、解剖学などの基本的な知識を持っていることが望ましい。

成績評価基準:試験と授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：運動イメージについて1
第2回：神経・筋系の生理学についての復習1	第10回：運動イメージについて2
第3回：神経・筋系の生理学についての復習2	第11回：運動イメージについて3
第4回：神経・筋系の生理学についての復習3	第12回：強調運動1
第5回：神経・筋系の生理学についての復習4	第13回：強調運動2
第6回：神経・筋系の生理学についての復習5	第14回：スポーツスキルと脳
第7回：視覚情報と運動1	第15回：教場試験と講評
第8回：視覚情報と運動2	

生体ダイナミクス特論

川上 泰雄

運動生理学・バイオメカニクスの分野における、人間を対象とした実験手法を学び、実験実習を行う。

対象となる手法は動作解析、筋力・筋パワー計測、超音波法やMRIなどの組織画像解析などを予定している。

成績評価基準:レポート

授業計画:

第1回：授業ガイダンス	第9回：研究発表と討議(8)
第2回：研究発表と討議(1)	第10回：研究発表と討議(9)
第3回：研究発表と討議(2)	第11回：研究発表と討議(10)
第4回：研究発表と討議(3)	第12回：研究発表と討議(11)
第5回：研究発表と討議(4)	第13回：研究発表と討議(12)
第6回：研究発表と討議(5)	第14回：研究発表と討議(13)
第7回：研究発表と討議(6)	第15回：総合討議
第8回：研究発表と討議(7)	

運動生化学特論

樋口 満

PHYSICAL ACTIVITY and TYPE 2 DIABETES John A. Howley, juleen R. Zierath を用いて講義・発表・討

論を行う。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポートにより評価する。

授業計画：

1. The Increasing Burden of Type 2 Diabetes: Magnitude, Causes, and Implications of the Epidemic	9. Exercise and Calorie Restriction Use Different Mechanisms to Improve Insulin Sensitivity
2. Waging War on Type 2 Diabetes: Primary Prevention Through Exercise Biology	10. Mitochondrial Oxidation Capacity and Insulin Resistance
3. Fatty Acid Uptake and Insulin Resistance	11. Effects of Acute Exercise and Exercise Training on Insulin Action in Skeletal Muscle
4. Lipid Metabolism and Insulin Signaling	12. Resistance Exercise Training and the Management of Diabetes
5. Metabolic Inflexibility and Insulin Resistance in Skeletal Muscle	13. AMPK: The Master Switch for Type 2 Diabetes ?
6. Nutrient Sensing Links Obesity With Diabetes Risk	14. Protein Kinase C and Insulin Resistance
7. Inflammation-Induced Insulin Resistance in Obesity: When Immunity Affects Metabolic Control	15. Evidence for Prescribing Exercise as a Therapy for Treating Patients With Type 2 Diabetes
8. Transcription Factors Regulating Exercise Adaptation	

バイオメカニクス特論

矢内 利政

身体運動解析にて計測された数値情報から人体の運動メカニズムを明らかにするために必要な力学的解析方法を学ぶことを目的とする。とりわけ、人体を剛体のリンクとみなしてモデル化し、各身体部位の運動を3D 剛体運動として解析する手法を学ぶ。講義は、オイラー角やオイラーパラメータを含む回転運動分析を中心とした3D Kinematic analysis を行うための基礎知識と、ニュートンとオイラーの運動方程式を用いた3D Kinetic analysis を行うための基礎知識の習得に向けて段階的に進める。

教科書はとくに定めないでテーマに沿った論文や配布資料を参考に行う。

成績評価基準：平常点(出席点)およびクイズによって行う。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：復習
第2回：平面上の物体の位置	第10回：力と運動との関係
第3回：観測点の移動	第11回：回転運動の分析
第4回：空間内の物体の位置	第12回：力の回転効果
第5回：観測点の位置と向きの移動	第13回：回転運動の勢い(角運動量)
第6回：物体の向き	第14回：回転運動における慣性(慣性モーメント)
第7回：ある物体の他の物体に対する向き	第15回：復習
第8回：回転の中心と回転軸	

スポーツ生理学特論

村岡 功

運動・スポーツは健康づくりや競技力向上のために広く行われており、生活習慣病を予防するためには、規則的な運動およびスポーツ活動が必要であると言われている。そこで、本特論では第一に、疾病(生活習慣病)と運動に関して、①生活習慣病と運動療法の適応、②肥満症と運動、③糖尿病と運動、高脂血症と運動、④高尿酸血症と運動、⑤心臓血管系疾患と運動、⑥高血圧症と運動、について概説することとする。一方、競技成績(パフォーマンス)を高めるために、スポーツ選手はトレーニング以外に様々な補助的手段(Ergogenic aids)を用いていることも知られている。そこで第二に、広く用いられている種々の補助的手段を取り上げて、その効果や倫理的問題についても概説することとした。

成績評価基準: 平常点(出席等)および試験によって行う。

授業計画:

第1回 : オリエンテーション	第9回 : 運動と生活習慣病①
第2回 : 競技力向上のための補助手段①	第10回 : 運動と生活習慣病②
第3回 : 競技力向上のための補助手段②	第11回 : 運動と生活習慣病③
第4回 : 競技力向上のための補助手段③	第12回 : 運動と生活習慣病④
第5回 : 競技力向上のための補助手段④	第13回 : 運動と生活習慣病⑤
第6回 : 競技力向上のための補助手段⑤	第14回 : 運動と生活習慣病⑥
第7回 : 競技力向上のための補助手段⑥	第15回 : テストと解説
第8回 : 競技力向上のための補助手段⑦	

精神生理学特論

山崎 勝男

特論では精神生理学領域の主要テーマである生体リズム、睡眠ポリグラフィ、注意、定位反射と慣れ、注意と事象関連電位、脳機能の左右差についての広範な文献研究を基に、現在の国際的な研究動向を探りたい。同時に、動機づけ、学習、性格等についても上記のテーマと関連づけてみたい。

成績評価基準: 平常点50%、レポート50%。

授業計画:

第1回 : 講義のガイダンス	第9回 : 睡眠行動: 睡眠ポリグラフィー
第2回 : 心の座を求めて	第10回 : 夢見の事象: REM 睡眠と NonREM 睡眠
第3回 : 脳の構造と機能: 部位と機能、ニューロンとシナプス	第11回 : 時差ボケのメカニズムとその対策
第4回 : 各種の研究方法	第12回 : 認知活動: 事象関連脳電位
第5回 : 学習と記憶: 学習の種類、学習・記憶の生理、生化学、記憶の座	第13回 : 認知活動: 眼電図、瞬目
第6回 : 大脳半球の機能差: 言語中枢、機能分担	第14回 : 認知活動: 呼吸、瞳孔の変化
第7回 : 情動とストレス: 条件情動反応、情動の中枢	第15回 : 臨床研究: 生理指標の展開
第8回 : 精神生理学の位置づけ	

スポーツ情報処理特論

誉田 雅彰

近年、スポーツを対象とするマルチメディア情報処理技術、コンピュータを用いたスポーツ身体動作の解析及びシミュレーション技術など、スポーツ分野における情報処理技術の重要性が増してきている。本講義では、画像・音声情報処理を中心とするスポーツマルチメディア情報処理技術、コンピュータ処理によるスポーツ

身体動作の解析技術、及び身体動作のコンピュータシミュレーション技術など、スポーツを対象とする高度な情報処理技術を扱う。

成績評価基準:レポートと出席

授業計画:

第1回 : スポーツ映像処理の基礎	第9回 : 2次元動作データのキネマティック処理
第2回 : 映像のデータ構造	第10回 : 2次元動作データのキネティック処理
第3回 : 画像処理技術	第11回 : 3次元動作データのキネマティック処理
第4回 : 動作映像のデジタル化処理の仕組み	第12回 : 3次元動作データのキネティック処理
第5回 : スポーツ映像における選手位置検出処理の仕組み	第13回 : 移動カメラ映像によるスポーツ映像処理
第6回 : スクリーン座標とフィールド座標の関係	第14回 : スポーツ映像検索処理
第7回 : 3次元動作映像処理	第15回 : まとめと課題
第8回 : 動作データの平滑化処理	

脳・運動の生理学特論

宝田 雄大

我々は、何らかの意味をもった運動や行動の結果を、感覚受容器と神経を介した脳への表象により知覚する。言い換えると、我々の意識がアクセスできる思考とは、感覚情報として脳へ再表象されたものだけであり、思考自体は、我々の意識の内には存在しない。ここに運動する意義があるとも言える。ところで、ヒトの筋収縮力の大きさに対する知覚は、収縮の結果引き起こされる感覚情報というよりはむしろ、その収縮に注がれる運動指令により依存し形成される。この力及び努力の知覚形成に関わる上・下行性の神経機構を解説する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート、小テスト等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回 : 受講ガイダンス	第9回 : 感覚・知覚(1)
第2回 : 筋収縮力の客観的評価～力の知覚の創出と評価～	第10回 : 感覚・知覚(2)
第3回 : レポート課題とその作成	第11回 : 感覚・知覚(3)
第4回 : 運動指令に関わる脳機能の概要(1)	第12回 : 理解度の確認
第5回 : 運動指令に関わる脳機能の概要(2)	第13回 : 感覚－運動情報の統合(1)
第6回 : 運動指令に関わる脳機能の概要(3)	第14回 : 感覚－運動情報の統合(2)
第7回 : 理解度の確認	第15回 : レポート課題と解説
第8回 : 骨格筋の興奮収縮連関	

スポーツ認知神経科学特論

正木 宏明

スポーツ場面で観察される巧みな動作の背景メカニズムを脳内情報処理の観点から検討する。ここでは、人間と環境との関わりを重視する心理学のアプローチを加えながら、スキル動作を認知神経科学的に理解する。

スポーツでは外界からの視覚情報を瞬時に認知し、適切な動作を選択・実行しなければならない。その過程には、注意、情動、動機づけ、意思決定、動作モニタリングなどが密接に関連している。これら脳内情報処理と巧みな動作発現との関係について概説する。パフォーマンスに影響を与えるスポーツ場面での情動体験やアスリートの性格特性についても概説する。

成績評価基準:出席状況およびレポートによって評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス(スポーツ認知神経科学のねらい)	第9回：脳と意識1
第2回：情動と動機づけ1(情動の脳内処理、情動理論)	第10回：脳と意識2(意思決定プロセス)
第3回：情動と動機づけ2(スポーツと情動体験)	第11回：動作の認知表象1
第4回：脳による運動制御1(大脳基底核、小脳、 帯状皮質などの機能)	第12回：動作の認知表象2
第5回：脳による運動制御2(大脳基底核、小脳、 帯状皮質などの機能)	第13回：スキル動作の脳内情報処理1(行動指標を 用いた研究の概説)
第6回：学習と記憶1(学習の脳内処理／運動学習)	第14回：スキル動作の脳内情報処理2(生理指標を 用いた研究の概説)
第7回：学習と記憶2(学習の脳内処理／運動学習)	第15回：総括
第8回：注意と空間認知	

データ分析 (Matlab)

誉田 雅彰

パソコンの普及に伴い、自然科学、人文科学を問わず、多くの分野で情報処理のスキルが必要になってきている。本講義では、より効率的かつ高度な情報処理を行う上で必要となるプログラミング技術の習得を目指す。具体的には、Matlab 言語を対象とし、プログラミングの初步から画像処理、動作データや筋電データなどの信号処理まで、講義と演習を通して具体的なプログラミング技術を習得する。なお、受講には、Word や Excel などのパソコン操作を習得していることを前提とする。

成績評価基準:出席と課題提出により行う。

授業計画:

第1回：プログラミング技術の概要	第9回：データの入出力
第2回：四則演算のプログラム	第10回：関数のしくみ
第3回：1次元配列の処理	第11回：関数の応用
第4回：多次元配列の処理	第12回：グラフ作成処理
第5回：繰り返し処理	第13回：Excel データファイルの入出力
第6回：繰り返し処理の応用	第14回：動作解析のプログラミング
第7回：条件分離処理	第15回：まとめと課題演習
第8回：条件分離処理の応用	

[コーチング科学研究領域]

コーチング特論

儀 繁雄

スポーツの持つコーチングの現状を選手、研究者、管理運営者の立場から実践研究をもとに明らかにする。これらの現状からトップアスリート育成のためのコーチングシステムの構築について講義する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習概要の説明と進め方	第9回：アーリストデータの活用(個人種目)
第2回：コーチングの語源とスポーツコーチングの 方向性	第10回：アーリストデータの活用(チーム種目)

第3回：スポーツコーチングと教師との歴史的変遷	第11回：招聘講師による講義と内容まとめ
第4回：近代オリンピックの変遷とコーチングの役割変化	第12回：強化策の策定視点と周囲との調整内容
第5回：地域経済とスポーツコーチングの共存	第13回：タレント発掘の視点
第6回：(コーチングと教師・オリンピック・地域)グループ分けと討論	第14回：トップアスリートが代表者と持つべき資質と学習内容
第7回：討論内容の発表(1)	第15回：レポート課題とそのまとめ方
第8回：討論内容の発表(2)	

コーチ学特論（総合講座）

奥野 景介、杉山 千鶴
磯 繁雄、岡田 純一、堀野 博幸、土屋 純

コーチングの対象者はレベル、種目など多様である。本講座では、コーチング現場で起こる様々な事象や情報を提供し、スポーツ科学の観点から分析し、理解を深める。講義は総合講座形式で行うが、種々のコーチングの情報を体系化することを試み、スポーツ科学の実践的応用を視野に入れて展開する。

成績評価基準：授業出席状況、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：各競技における連盟・協会の取り組みほか4
第2回：コーチングの実際1	第10回：コーチングの実際5
第3回：各競技における連盟・協会の取り組みほか1	第11回：各競技における連盟・協会の取り組みほか5
第4回：コーチングの実際2	第12回：コーチングの諸情報1
第5回：各競技における連盟・協会の取り組みほか2	第13回：コーチングの諸情報2
第6回：コーチングの実際3	第14回：コーチングの諸情報3
第7回：各競技における連盟・協会の取り組みほか3	第15回：コーチングの諸情報4
第8回：コーチングの実際4	

その他に補講期間に授業を実施する場合がある。

コーチングバイオメカニクス特論

土屋 純

スポーツ技術の明確化あるいはスポーツ技能の評価のひとつの手法として、スポーツバイオメカニクスの研究方法を用いた運動の定量化が行われる。スポーツのコーチにとってはそうした定量値のもつ意味の把握が技術指導の際の有益な情報となりえる。ここではスポーツ運動のコーチングの際に必要となるバイオメカニクス的視点とその方法について取り扱う。

成績評価基準：出席と発表の内容により評価する。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第9回：スポーツ動作のバイオメカニクス(2)
第2回：バイオメカニクスの基本的知識:Kinematics(1)	第10回：スポーツ動作のバイオメカニクス(3)
第3回：バイオメカニクスの基本的知識:Kinematics(2)	第11回：スポーツ動作のバイオメカニクス(4)
第4回：バイオメカニクスの基本的知識:Kinematics(3)	第12回：スポーツ動作のバイオメカニクス(5)
第5回：バイオメカニクスの基本的知識:Kinetics(1)	第13回：スポーツ動作のバイオメカニクス(6)
第6回：バイオメカニクスの基本的知識:Kinetics(2)	第14回：スポーツ動作のバイオメカニクス(7)
第7回：バイオメカニクスの基本的知識:Kinetics(3)	第15回：スポーツ動作のバイオメカニクス(8)
第8回：スポーツ動作のバイオメカニクス(1)	

コーチング心理学特論

堀野 博幸

スポーツパフォーマンスは、技術・体力・戦術要因から構成される。そして、心理要因が、それら3つの要素を総合的に支えている。本講義では、アスリートとコーチを中心として、コーチングプロセスに関与する人間的心理的課題を考察する。スポーツフィールドで発生する様々な心理的問題を取り上げ、その問題の本質を精査し、その問題解決の方向性について、受講生のプレゼンテーションとディスカッションを通して検討する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：発表
第2回：コーチング	第10回：発表
第3回：心理学	第11回：グループワーク
第4回：発表	第12回：グループワーク
第5回：発表	第13回：レポート作成
第6回：グループワーク	第14回：レポート作成
第7回：グループワーク	第15回：まとめ
第8回：発表	

上記の内容を適宜進めていく。

コンディショニング特論

岡田 純一

目的に適した身体能力を備えること、身体能力を競技力へと結びつけること、そのために必要なあらゆる体力要素を向上させること、目的とする時期にその状態を整えることなど、コンディショニングが含有する意図は多様である。コンディショニングに関わるレジスタンストレーニングのプログラムデザイン、アスリートの体力や生理学的特性を考慮したトレーニング計画を科学的知見に基づいて構築することを専門書より学ぶ。

教科書:Essentials of Strength Training and Conditioning (Human Kinetics)

成績評価基準:発表50%、レポート50%

授業計画:

第1回：オリエンテーション、プログラムデザインの概要、実践例	第9回：Program Design 7 (Rest periods)
第2回：コンディショニング研究の背景	第10回：Conditioning tool 1 (Plyometric)
第3回：Program Design 1 (Need Analysis)	第11回：Conditioning tool 2 (Stretching)
第4回：Program Design 2 (Exercise selection)	第12回：Conditioning tool 3 (Speed & Agility)
第5回：Program Design 3 (Training Frequency)	第13回：Conditioning tool 4 (Aerobic endurance)
第6回：Program Design 4 (Exercise Order)	第14回：Conditioning tool 5 (Periodization)
第7回：Program Design 5 (Training load & repetitions)	第15回：Conditioning tool 6 (Facility & Equipment)
第8回：Program Design 6 (Volume)	

パフォーマンス評価

奥野 景介

スポーツのパフォーマンスは技術面、体力面、心理面、戦術面等の側面から評価することができる。本講座ではスポーツの現場では実際にどのようなパフォーマンス評価がなされているかを知り、ツールとしてのスポーツ科学の活用方法について論議する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：「球技(ゴール)」のパフォーマンス評価
第2回：パフォーマンス評価概論	第10回：「球技(ネット)」のパフォーマンス評価
第3回：「走」のパフォーマンス評価	第11回：「チームスポーツ」のパフォーマンス評価
第4回：「跳」のパフォーマンス評価	第12回：「武道・格闘技」のパフォーマンス評価
第5回：「投」のパフォーマンス評価	第13回：「トップアスリート」のパフォーマンス評価
第6回：「泳・漕」のパフォーマンス評価	第14回：「ラケットスポーツ」のパフォーマンス評価
第7回：「採点競技」のパフォーマンス評価	第15回：まとめ
第8回：「記録競技」のパフォーマンス評価	

スポーツ戦術戦略特論

倉石 平

スポーツが高度化とともに不可欠なことは、データの収集、分析、反映である。特にトップパフォーマンスにおけるデータの収集、収集方法、データの分析、PC のソフトを使った分析、分析の考え方、データの反映などはスポーツが高度化するにつれ、欠くことができない。これらの手法を身につけることはコーチ、アナリスト等に関しては重要な問題である。本講義ではこれらの手法について学習する。

ゲームに勝利するためには、ゲームプラン(作戦)の立案が不可欠である。それらを立案するためには、自ら(個人、もしくはチーム)を熟知すること、そして相手(個人もしくはチーム)を熟知すること、さらにはそれらを対比することが重要となる。先人達の戦い方(いくさの仕方など)から学びながら、現在のスポーツゲームに照らしあわせて科学的に検証してゆく。

この授業ではスポーツにおける情報収集、分析、反映を主たる内容とし、どのようにして収集をするのか、またその収集をする方法はどのようなものか、道具は何を用いるかなどを学ぶ。さらに、その収集したデータをどのように分析や解析を行うのか、それらの作業で得られた情報(データ)の反映をどのようにするのか検証する。

そして実際のゲームを題材にしてゲーム分析を行い、個々が行った分析結果を発表し、客観的な分析がなされているか、妥当性があるのかなどを討論する。

成績評価基準:出席、発言、レポートなどを鑑みて評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：情報の収集(オープンソースインテリジェンスでの収集)
第2回：情報とは	第10回：情報の分析(ゲーム分析ソフトを使っての実習1)
第3回：情報の収集と分析	第11回：情報の分析(ゲーム分析ソフトを使っての実習2)
第4回：情報の反映	第12回：情報の分析(ゲーム分析ソフトを使っての実習3)
第5回：競技別情報の扱いと現状(プレゼン1)	第13回：情報の反映(データの反映)
第6回：競技別情報の扱いと現状(プレゼン2)	第14回：プレゼン1(反映)
第7回：競技別情報の扱いと現状(プレゼン3)	第15回：プレゼン2(反映) まとめ
第8回：情報の収集(カメラを使っての収集)	

[領域共通科目]

論文作成技法 01 02 03 04

衣笠 竜太、坂本 将基、沼尾 成晴、柳澤 修

この講義では学術論文を作成する際に必要とされる、1)学術論文の基本的な組み立て方や、2)学術論文を作成する際に知っておかなければならない言葉のルール、に関する知識を身に着けるとともに、学術論文を作成する技術を養います。

教科書:「大学生と留学生のための論文ワークブック」、浜田麻里 他、ぐろしお出版

参考資料:なし

成績評価基準:授業への出席と課題達成度

授業計画:

第1回 : 論文作成技法ガイドンス この授業の流れ;学術論文とは(原著、総説、資料、症例報告などの別);投稿規程の紹介(ここでは簡単に論文によって規定が異なることを提示。この授業では規定に左右されない);論文とは(例を提示しながら論文の構成<p24-25>および付属要素<p168-175>について解説)	第9回 : 論文作成VI<p105-116> 行動提示と論の展開
第2回 : 論文作成基礎<p2-20、ただし p16-18 の手書き原稿の部分は割愛する> 論文作成の基礎;文の形;論文で用いる語・表現、用いない語・表現;引用方法;句読点のつけ方 など	第10回 : 論文作成VII<p117-128> 結びの役割;全体のまとめ;評価
第3回 : 論文の構成<p24-48> 論文の構成復習;構成の作り方;本論のまとめ方;3種類(事実、意見、行動)の文の書き方	第11回 : 論文作成VIII<p129-132> 展望提示;(練習)
第4回 : 論文作成 I <p52-63> 序論の役割と背景説明	第12回 : 論文作成IX<p133-152> 資料(図表、資料、調査・実験)の作成
第5回 : 論文作成 II <p64-78> 問題提起;方向づけ;全体の予告	第13回 : 論文作成X<p153-166> 展開の技術
第6回 : 論文作成III<p80-92> 本論の役割と論拠提示(データ提示)	第14回 : 論文作成実習1
第7回 : 論文作成IV<p93-99> 本論における論拠提示(意見提示・考察)	第15回 : 論文作成実習2
第8回 : 論文作成 V<p100-104> 結論提示	

スポーツ科学演習 01 02 03 04 05

柳澤 修、衣笠 竜太、田内 健二、坂本 将基、沼尾 成晴

二年制修士課程の演習として、人文・社会科学から自然科学まで幅広い分野のスポーツ科学研究の基礎を身につけ、教養としてのスポーツ科学研究の様相を理解する。そのことによって修士論文の作成を計画的に導くことを目的とする。

学生参加型の演習とし、交代での発表と、全員での討論を行う。

成績評価基準：演習での発言ならびにレポートにて評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：研究発表(7)
第2回：研究発表(1)	第10回：研究発表(8)
第3回：研究発表(2)	第11回：研究発表(9)
第4回：研究発表(3)	第12回：研究発表(10)
第5回：研究発表(4)	第13回：研究発表(11)
第6回：研究発表(5)	第14回：総合討論
第7回：研究発表(6)	第15回：まとめ
第8回：中間まとめ	

－修士課程 1年制コース－

【研究指導】

[トップスポーツマネジメントコース]

トップスポーツマネジメント研究指導

平田 竹男

トップスポーツマネジメントに関する実践力と理論的研究能力の育成を図りつつ、トップスポーツマネジメントに関わる諸問題を高度な教育・研究を通して解明するための研究指導を行う。

[スポーツクラブマネジメントコース]

スポーツクラブマネジメント研究指導

間野 義之

学校運動部活動と企業スポーツを両輪とした日本型スポーツシステムの限界が見え始めたなか、地域密着型の新たなスポーツシステムが求められている。企業運動部のクラブ化はもとより、Jクラブやプロ野球でも地域に根付いたクラブ化を模索しており、その一方で学校・地域・家庭・企業・行政の連携による「総合型地域スポーツクラブ」の普及・育成が国策として進められている。プロ・アマを問わず、これらのクラブが自主独立し健全に発展するためには、多くの複雑な問題が存在する。それら諸問題の現実的な解決策(ソリューション)について総合的に研究指導する。具体的には、受講生自身が関与する(であろう)スポーツクラブのビジネスプラン(事業計画書)について研究指導し、そのプランをもってリサーチペーパーとする。

Keywords: スポーツクラブ、ビジネスプラン、NPM (New Public Management)

[健康スポーツマネジメントコース]

健康スポーツマネジメント研究指導

中村 好男

本研究指導では、健康増進の実務経験を有する者に対して、運動やスポーツを中心とした健康増進活動の実践技能とそのマネジメント能力を開発することによって、社会的に要請される人材を育成することを目的とする。まず、マーケティングならびに社会マーケティングについての基礎理論を学習した上で、各々の関与する実務分野の状況に応じて、体力科学、運動処方論、栄養学、行動科学などの関連諸領域の基礎理論を学習する。それらの基礎知識を前提として、地域行政あるいは健康関連組織における健康増進のマネジメントを行う上での実務的・専門的能力を開発する。具体的には、地域自治体・総合型地域スポーツクラブ・老人福祉施設等のさまざまな現場(フィールド)において、医療費削減や介護予防に資するためのプログラムを開発しその評価モデルを構築した上で、そのビジネスプラン(事業計画書)を提出することを、本コースの到達目標とする。

Keywords: 体力、健康、運動、健康増進、行動科学、マネジメント、マーケティング

[介護予防マネジメントコース]

介護予防マネジメント研究指導

岡 浩一朗

超高齢社会の到来に向けて、年金や医療とともに介護などの社会保障制度の整備、改革が進められている。平成18年度からの介護保険制度改革では、特に高齢者に対する介護予防の取り組みが注目され、その方法論の確立が急務となっている。特に、介護予防の対象者を効果的・効率的に把握するためにはどのような手法がよいのか、どのようにして有効な介護予防プランを立て、効果のあがるサービス(たとえば、運動器の機能向上プログラム等)を提供し、モニタリングしていくべきかなどは重要な課題であり、またこのような一連の過程を総合的な介護予防システムとして構築していくことが求められている。このような背景のもと、本研究指導では、保健、医療、福祉あるいは運動・スポーツ指導の現場で高齢者の健康づくりに携わる者が、介護予防に関する最新の理論や実践技能を学び、行政や介護・健康づくり関連組織において介護予防実践に関わっていく上での実務的・専門的能力が高まるようにする。

【演習】

[トップスポーツマネジメントコース]

トップスポーツマネジメント演習（1）

平田 竹男

トップスポーツマネジメントに関する実践力と理論的研究能力の育成を図りつつ、トップスポーツマネジメントに関わる諸問題を高度な教育・研究を通して解明するための演習を行う。

成績評価基準:授業出席および授業中の発表を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：スポーツビジネスとは	第16回：夏期研究成果中間報告(1)
第2回：トップスポーツビジネスのトリプルミッションとは	第17回：夏期研究成果中間報告(2)
第3回：勝利ミッションとは	第18回：研究計画書の作成技法
第4回：普及ミッションとは	第19回：論文作成技法(1.構成)
第5回：市場ミッションとは	第20回：論文作成技法(2.表記ならびに引用法)

第6回：理念とは	第21回：論文作成技法 (3. 問題設定・仮説提示から研究目的まで)
第7回：トップスポーツマネジメントの具体事例(1) 選手マネジメント1	第22回：論文作成技法 (4. 問題解決のための方法・結果の一貫性)
第8回：トップスポーツマネジメントの具体事例(2) 選手マネジメント2	第23回：論文作成技法(5. データ分析)
第9回：トップスポーツマネジメントの具体事例(3) スポーツ用品1	第24回：論文作成技法(6. 統計分析と検定)
第10回：トップスポーツマネジメントの具体事例(4) スポーツ用品2	第25回：論文作成技法 (7. 研究目的と考察の一貫性と結論)
第11回：トップスポーツマネジメントの具体事例(5) スタジアム1	第26回：研究成果発表(1)
第12回：トップスポーツマネジメントの具体事例(6) スタジアム2	第27回：研究成果発表(2)
第13回：トップスポーツリーグの具体事例(1)	第28回：プレゼンテーション技法(1)
第14回：トップスポーツリーグの具体事例(2)	第29回：プレゼンテーション技法(2)
第15回：夏期休業中の個別研究推進に向けた課題 提示と解説	第30回：まとめ：口頭試問演習

[スポーツクラブマネジメントコース]

スポーツクラブマネジメント演習（1）

間野 義之

一年制修士課程の演習として、スポーツクラブのマネジメントならびにビジネスプランの基礎を身につけ、リサーチペーパーの作成を計画的に導くことを目的とする。

学生参加型の演習とし、交代での発表と、全員での討論を行う。

成績評価基準：演習での発言ならびにレポートにて評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第16回：後期のガイダンス
第2回：リサーチペーパーと研究計画	第17回：プレ調査結果(1)
第3回：研究計画(1)	第18回：プレ調査結果(2)
第4回：研究計画(2)	第19回：プレ調査結果(3)
第5回：研究計画(3)	第20回：本調査計画(1)
第6回：先行研究レビュー(1)	第21回：本調査計画(2)
第7回：先行研究レビュー(2)	第22回：本調査計画(3)
第8回：先行研究レビュー(3)	第23回：本調査結果(1)
第9回：文献調査研究結果(1)	第24回：本調査結果(2)
第10回：文献調査研究結果(2)	第25回：本調査結果(3)
第11回：文献調査研究結果(3)	第26回：考察(1)
第12回：プレ調査計画(1)	第27回：考察(2)
第13回：プレ調査計画(2)	第28回：考察(3)

第14回：プレ調査計画(3)	第29回：総合討論
第15回：中間まとめ	第30回：まとめ

[健康スポーツマネジメントコース]

健康スポーツマネジメント演習（1）

中村 好男

本授業では、まず、マーケティングならびに社会マーケティングについての基礎理論を学習した上で、各々の受講生が関与する実務分野の状況に応じて、体力科学、運動生理学、栄養学、行動科学などの関連諸領域の基礎理論を学び、それらの基礎知識を前提として、地域行政あるいは健康関連組織における健康増進のマネジメントを行うまでの実務的・専門的能力を習得する。

成績評価基準：授業出席および授業中の発表を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：健康スポーツのマネジメントとは	第16回：夏期研究成果中間報告(1)
第2回：健康スポーツマーケティングの具体事例(1) フィットネス業界	第17回：夏期研究成果中間報告(2)
第3回：健康スポーツマーケティングの具体事例(2) 地域スポーツクラブ	第18回：研究計画書の作成技法
第4回：健康スポーツマーケティングの具体事例(3) 特定保健指導	第19回：論文作成技法(1. 構成)
第5回：健康スポーツマーケティングの具体事例(4) ウォーキング	第20回：論文作成技法(2. 表記ならびに引用法)
第6回：健康スポーツマーケティングの具体事例(5) 栄養指導	第21回：論文作成技法 (3. 問題設定・仮説提示から研究目的まで)
第7回：健康スポーツのマーケティングとマネジメント	第22回：論文作成技法 (4. 問題解決のための方法・結果の一貫性)
第8回：健康スポーツマーケティングに関する調査(1)	第23回：論文作成技法(5. データ分析)
第9回：健康スポーツマーケティングに関する調査(2)	第24回：論文作成技法(6. 統計分析と検定)
第10回：健康スポーツマーケティングに関する調査(3)	第25回：論文作成技法 (7. 研究目的と考察の一貫性と結論)
第11回：健康スポーツマーケティングに関する調査(4)	第26回：研究成果発表(1)
第12回：健康スポーツマーケティングに関する調査(5)	第27回：研究成果発表(2)
第13回：予備調査結果発表(1)	第28回：プレゼンテーション技法(1)
第14回：予備調査結果発表(2)	第29回：プレゼンテーション技法(2)
第15回：夏期休業中の個別研究推進に向けた課題 提示と解説	第30回：まとめ：口頭試問演習

[介護予防マネジメントコース]

介護予防マネジメント演習（1）

岡 浩一朗

本演習では、介護予防に関する最新情報や基礎知識、実践手法に関するリテラシーを高め、リサーチペー

パーをまとめるための研究能力および問題解決能力を高めることを主な目標にする。特に、情報検索、論文読解、統計解析、プレゼンテーションスキルのトレーニングを中心に演習を進める。

教科書:特になし。資料は講義中に適宜配布する。

成績評価基準:出席状況、レポートなどの提出物から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第16回：プレゼンテーションスキルトレーニング(2)
第2回：情報検索トレーニング(1)	第17回：プレゼンテーションスキルトレーニング(3)
第3回：情報検索トレーニング(2)	第18回：プレゼンテーションスキルトレーニング(4)
第4回：情報検索トレーニング(3)	第19回：プレゼンテーションスキルトレーニング(5)
第5回：論文読解トレーニング(1)	第20回：クリティカルリーディングトレーニング(1)
第6回：論文読解トレーニング(2)	第21回：クリティカルリーディングトレーニング(2)
第7回：論文読解トレーニング(3)	第22回：クリティカルリーディングトレーニング(3)
第8回：論文読解トレーニング(4)	第23回：クリティカルリーディングトレーニング(4)
第9回：論文読解トレーニング(5)	第24回：クリティカルリーディングトレーニング(5)
第10回：統計解析トレーニング(1)	第25回：ダイレクトリーディングトレーニング(1)
第11回：統計解析トレーニング(2)	第26回：ダイレクトリーディングトレーニング(2)
第12回：統計解析トレーニング(3)	第27回：ダイレクトリーディングトレーニング(3)
第13回：統計解析トレーニング(4)	第28回：ダイレクトリーディングトレーニング(4)
第14回：統計解析トレーニング(5)	第29回：ダイレクトリーディングトレーニング(5)
第15回：プレゼンテーションスキルトレーニング(1)	第30回：レポート課題と解説

【マネジメント科目】

トップスポーツビジネス特論（再掲）

平田 竹男、中村 好男

本講義では、トップスポーツの世界をとりまくスポーツビジネスに関して、1)勝利(強化)・普及(振興)・市場開発(資金獲得)の関わりを示したマネジメントモデル(トリプルミッションモデル)、2)人生の中でのスポーツとの関わりを示した逆台形モデル、3)「勝者の決定構造」としてのスポーツリーグのマネジメント、の各々について、その先進事例や業界の動向など学んだ上で、その具体例の分析を通じて、トップスポーツビジネスの課題についての検証能力を養成する。

成績評価基準:授業中の発表内容を評価の対象とする。授業中に発表できなかった者については、別途提出するレポートによって評価する。

授業計画:

第1回：トップスポーツビジネスとは	第9回：指導者の立場から見たトップスポーツの現場
第2回：トップスポーツ選手育成の現場とコーチングマネジメント	第10回：スポーツにおけるジャーナリズム
第3回：選手の立場から見たスポーツビジネス興隆の現場	第11回：実践的トリプルミッションモデル
第4回：競技連盟のビジネスマネジメント	第12回：プロ選手としてスポーツを究める
第5回：スポーツ用品のマーケティング戦略	第13回：スポーツ選手のマネジメント

第6回：スポーツのビジネスの新たな融合	第14回：最前線のスポーツビジネス
第7回：プロスポーツクラブ経営論	第15回：トップスポーツビジネスの展望
第8回：最新ビジネス戦略論	

スポーツの法と契約

水戸 重之

近時、プロ野球の球界再編問題と選手会によるストライキ、プロ野球選手の代理人交渉や海外移籍問題、2005年に開幕したプロバスケット・リーグ「bjリーグ」、スポーツ選手の肖像権問題、オリンピックの代表選考やアンチ・ドーピングとスポーツ仲裁など、スポーツにおいて法律問題や契約問題が一般の関心を集めている。いまでもなく、スポーツも国民の社会的活動の一つとして「法の支配」を受けるものである。本授業では、①選手（競技者）、②球団・クラブ（チーム会社）、③リーグ・競技者団体（協会）の三者のバランスがスポーツ界の発展にとって重要であるとの視点の下、これらの間に生ずる法律問題・契約問題を学習するとともに、契約の過程で行われるスポーツ契約交渉についても学習する。また、スポーツ界におけるセクハラ事件やしごき事件、スポーツ関連団体の不祥事をとりあげ、法律とスポーツマンシップやモラルとの関係も考えていく。法律学を学んだことのない者にも基本的な法学・法解釈学が習得できることを目指す。

成績評価基準：レポート及び授業参加態度を総合的に判断して評価します。

授業計画：

第1回：スポーツ法入門①／ガイドンス	第9回：リーグ・スポーツの仕組みと法律問題④
第2回：スポーツ法入門②	第10回：競技団体の法律問題
第3回：選手の権利と地位①	第11回：国際競技大会の法律問題
第4回：選手の権利と地位②	第12回：スポーツ・コンテンツの法的保護①
第5回：スポーツエージェントの理論と実務	第13回：スポーツ・コンテンツの法的保護②
第6回：リーグ・スポーツの仕組みと法律問題①	第14回：スポーツ紛争の解決手段
第7回：リーグ・スポーツの仕組みと法律問題②	第15回：総括
第8回：リーグ・スポーツの仕組みと法律問題③	

スポーツビジネス・アドミニストレーション特論（再掲）

武藤 泰明

授業方法：講義形式を基本としますが、重要な基本概念については、一部、受講者による発表の形式もとりいれる予定です。主なテキストは武藤「プロスポーツクラブのマネジメント」（東洋経済新報社2006）。この他、企業評価、バランスト・スコア・カード等についても解説ないし参考図書の紹介を行います。

授業内容：ビジネス・アドミニストレーションは日本語では「経営管理」。スポーツを実施している競技組織（クラブやチームなど）・団体（協会、連盟など）の経営や事業を分析・評価し、成果を高めていくための方法を検討します。

企業評価、事業評価の典型的な成果指標は利益やキャッシュフローですが、ほとんどのスポーツ組織は利益を目的としていないので、利益やキャッシュフローは重要ですが絶対ではありません。むしろ、成果を予め定義し、これに係わるKPI（Key Performance Indicator）によるマネジメントを行っていくことが重要です。この方法を習得することが講義の主な目的です。

成績評価基準：講義時間に提示、あるいはCourse N@viに掲示した課題の提出状況と内容によって評価します。

授業計画：

第1回：法人格の類型とガバナンス	第9回：KPIの設定・定義と測定方法
第2回：ファイナンシャル・マネジメント	第10回：KPIの設定・定義と測定方法(2)
第3回：選手：契約と移籍	第11回：経営戦略と経営計画

第4回：組織人事	第12回：経営戦略と事業戦略
第5回：マーケティング	第13回：PDCAサイクル
第6回：無体財産(商標、肖像など)のマネジメント	第14回：バランスト・スコア・カード
第7回：企業価値	第15回：まとめ
第8回：企業評価	

スポーツプロモーション特論

平田 竹男、中村 好男

本授業では、トップスポーツの現場における競技スポーツ団体、プロスポーツチーム、選手マネジメント、マスメディア、などの様々な立場でのプロモーションの現状と課題について学習する。授業は単に受け身で参加するのではなく、受講生自らがスポーツプロモーションの現状を調査・分析して発表できるようになることを目標とする。以下の授業内容(競技種目等)は、あくまでも例示であり、毎回、学生が自らの関心テーマとして発表する具体的な事例に対して、授業参加学生全員によるディスカッションを行うこと(ケーススタディ)により、考察を深める。

成績評価基準:授業中の発表内容を評価の対象とする。授業中に発表できなかった者については、別途提出するレポートによって評価する。

授業計画:

第1回：スポーツプロモーションとは	第9回：メディア戦略(テレビ)
第2回：トップスポーツのプロモーション(野球)	第10回：メディア戦略(新聞)
第3回：トップスポーツのプロモーション(サッカー)	第11回：メディア戦略(インターネット)
第4回：トップスポーツのプロモーション(水泳)	第12回：スポーツ選手のプロモーション戦略
第5回：トップスポーツのプロモーション(ゴルフ)	第13回：プロスポーツクラブのプロモーション戦略
第6回：トップスポーツのプロモーション(バドミントン)	第14回：競技団体のプロモーション戦略
第7回：トップスポーツのプロモーション(フットサル)	第15回：スポーツプロモーションの課題
第8回：トップスポーツのプロモーション (バレーボール・プロレス)	

トップスポーツマネジメント特論

平田 竹男、中村 好男

本授業では、競技スポーツ団体、プロスポーツチーム、選手マネジメント、などの様々な立場からの最前線の事例に基づいて、トップスポーツの現場におけるマネジメントの現状と課題について学習する。授業は単に受け身で参加するのではなく、受講生自らがトップスポーツの現場で体験している事例を発表し、その現状を分析できるようになることを必要とする。以下の授業内容(競技種目等)は、あくまでも例示であり、毎回、学生が自らの関心テーマとして発表する具体的な事例に対して、授業参加学生全員によるディスカッションを行うこと(ケーススタディ)により、考察を深める。

成績評価基準:授業中の発表内容を評価の対象とする。授業中に発表できなかった者については、別途提出するレポートによって評価する。

授業計画:

第1回：トップスポーツのマネジメント	第9回：スポーツメディア(テレビ)
第2回：トップスポーツの現場(野球)	第10回：スポーツメディア(新聞)
第3回：トップスポーツの現場(サッカー)	第11回：スポーツメディア(広告)
第4回：トップスポーツの現場(水泳)	第12回：スポーツ選手のマネジメント
第5回：トップスポーツの現場(ゴルフ)	第13回：プロスポーツクラブのマネジメント

第6回：トップスポーツの現場（バドミントン）	第14回：競技団体のマネジメント
第7回：トップスポーツの現場（フットサル）	第15回：スポーツ環境のマネジメント
第8回：トップスポーツの現場 (バレーボール・プロレス)	

スポーツクラブビジネス特論（再掲）

間野 義之

一年制修士と二年制修士の合併科目として、地域スポーツクラブのマネジメントならびにビジネスについて理論と事例を紹介する。

スポーツクラブビジネスの要素となる、1)ミッション・ビジョン、2)活動拠点確保、3)法人格等組織体制の整備、4)資金調達、5)人材の確保・育成について、それぞれビジネスのポイントに触れる。

特に、非営利である地域スポーツクラブにとって活動拠点の確保・維持が重要であり、そのためには地方自治体とのパートナーシップ（PPP:Public Private Partnership）が重要となることから、公共スポーツ施設の有効利用や指定管理者としての運営受託あるいはPFIなどを中心に講義を展開する。

成績評価基準：毎回講義後に提出された小レポートにて評価する。CourseN@viを通じて期日までに提出すること。

授業計画：

第1回：スポーツクラブのミッション・ビジョン	第9回：スポーツクラブの財源
第2回：【ケーススタディ1】(社)横浜カントリー＆アスレティッククラブ	第10回：【ケーススタディ5】NPO 法人 MIP スポーツプロジェクト
第3回：スポーツクラブの活動拠点(1)	第11回：スポーツクラブの組織
第4回：【ケーススタディ2】(株)リバティヒル・クラブ	第12回：【ケーススタディ6】NPO 法人ワセダクラブ
第5回：スポーツクラブの活動拠点(2)	第13回：スポーツクラブの諸問題
第6回：【ケーススタディ3】NPO 法人ソシオ成岩スポーツクラブ	第14回：【ケーススタディ7】REGISTA 有限責任事業組合
第7回：スポーツクラブの人材	第15回：まとめ
第8回：【ケーススタディ4】 NPO 法人ニッポンランナーズ	

スポーツビジネスマーケティング特論（再掲）

松岡 宏高

スポーツビジネスに関するマーケティングには、スポーツサービス（するスポーツと見るスポーツ）を効率よくプロデュース、提供する「スポーツのマーケティング（marketing of sport）」と、企業がスポーツを利用してプロモーション活動を行う「スポーツによるマーケティング（marketing through sport）」の2種類がある。前者については、スポーツを実施したり、見たりする、スポーツ消費者のニーズを理解し、そのニーズを満たすスポーツサービスを効率よく提供するための戦略が講義内容の中心となる。具体的には、マーケティング戦略、スポーツ消費者行動のメカニズム、消費者の特性やニーズを把握するためのマーケティングリサーチなどについて学習する。後者については、企業がスポーツチーム・クラブやスポーツイベントのスポンサーとなり、スポーツを利用したマーケティング活動を行うという「スポーツスponサーシップ」についての知識を習得する。

成績評価基準：授業への参加、レポート、試験、プレゼンテーションによる総合評価

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：スポーツマーケティング・リサーチ2
第2回：スポーツ産業とスポーツ消費	第10回：スポーツ・スponサーシップ

第3回：スポーツマーケティングの定義	第11回：プレゼンテーション
第4回：スポーツプロダクト・スポーツサービス	第12回：プレゼンテーション
第5回：スポーツ消費者	第13回：プレゼンテーション
第6回：スポーツマーケティング・プラン	第14回：プレゼンテーション
第7回：スポーツビジネスのプロモーション戦略・価格戦略	第15回：教場試験と講評
第8回：スポーツマーケティング・リサーチ1	

スポーツ組織特論（再掲）

作野 誠一

本講では、組織論及び人材マネジメント論の理解を通じて、スポーツにおける多様な組織現象に関する知識を身につけるとともに、自ら分析・提案する能力の涵養をめざす。スポーツ組織、とくに地域スポーツ組織を念頭に置きつつ、組織論ならびに従来の人的資源管理を超える人材マネジメントの概要について理解する。具体的には、以下のような内容から構成される。

- ・経営組織論要説
- ・人的資源管理(HRM)と人材マネジメント
- ・人材の獲得・育成・評価・処遇
- ・人材マネジメントの実際(スポーツボランティア、メディアの人材マネジメント)
- ・教場レポート

成績評価基準：出席状況及びレポートによって評価する。

授業計画：

第1回：授業ガイダンス	第9回：人材マネジメントの実際② スポーツメディアにおける人材マネジメント(ゲストスピーカー)
第2回：組織と人材マネジメントの理論①	第10回：前回テーマについてのディスカッション
第3回：人材マネジメントの実際① スポーツボランティアのマネジメント(ゲストスピーカー)	第11回：組織と人材マネジメントの理論⑥ 総合型地域スポーツクラブ
第4回：前回テーマについてのディスカッション	第12回：組織と人材マネジメントの理論⑦ ボランティアマネジメント
第5回：組織と人材マネジメントの理論② モチベーション	第13回：組織と人材マネジメントの理論⑧ スポーツ組織のマネジメントを考える
第6回：組織と人材マネジメントの理論③ リーダーシップ	第14回：まとめ
第7回：組織と人材マネジメントの理論④ 組織化のマネジメント	第15回：総括、教場レポート
第8回：組織と人材マネジメントの理論⑤ 運動のマネジメント	

経営と戦略

黒須 充、柳沢 和雄

地域密着型のスポーツクラブの経営では、明確な経営戦略と計画にもとづいて多くの人的な資源を活用して永続性を高める。本講義では地域スポーツ振興における地域密着型のスポーツクラブのマネジメントの基礎要件とその具体的な方法を概説する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：全体ガイダンス	第9回：スポーツ経営と経営資源
第2回：ドイツ社会とスポーツ	第10回：スポーツ空間と総合型地域スポーツクラブ
第3回：変革期にあるドイツのスポーツクラブ	第11回：社会経済システムと総合型地域スポーツクラブ
第4回：総合型地域スポーツクラブと学校、行政、企業との協働	第12回：地域活性化と総合型地域スポーツクラブ
第5回：理解度の確認	第13回：生涯スポーツとマーケティング戦略
第6回：日本における生涯スポーツ振興政策	第14回：スポーツ経営の領域とマーケティング
第7回：生涯スポーツ振興とスポーツ経営	第15回：課題作成とまとめ
第8回：生涯スポーツ振興をめぐる経営戦略	

スポーツクラブマネジメント研究法

間野 義之

一年制修士向けの講義科目として、地域スポーツクラブマネジメントの研究方法について理論と事例を紹介する。

アンケート調査やインタビュー調査などの実務実践について学習する。

前提条件:スポーツクラブマネジメント演習(1)を履修していること。

成績評価基準:毎回講義後に提出された小レポートにて評価する。CourseN@vi を通じて期日までに提出すること。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：地域スポーツクラブのプロモーションに関する研究
第2回：地域スポーツクラブの定義	第10回：地域スポーツクラブの組織体制に関する研究
第3回：地域スポーツクラブの経営実態に関する研究	第11回：地域スポーツクラブの正会員・参加会員に関する研究
第4回：地域スポーツクラブの設立過程に関する研究	第12回：地域スポーツクラブのステイクホルダーに関する研究
第5回：地域スポーツクラブのマネジメント人材に関する研究	第13回：地域スポーツクラブの解散過程に関する研究
第6回：地域スポーツクラブの指導者に関する研究	第14回：地域スポーツクラブの効果に関する研究
第7回：地域スポーツクラブの財源に関する研究	第15回：総合討議
第8回：地域スポーツクラブの活動拠点に関する研究	

健康スポーツマネジメント特論（再掲）

中村 好男

健康スポーツの推進・振興は、現代社会における社会的ニーズの一つである。本講義では、健康スポーツ振興に関わる諸問題についての実践解決技法を習得することを目標として、身体運動科学・行動心理学・社会マーケティングの各々の基礎理論を学んだうえで、健康スポーツマーケティングの各種技法について学習する。

成績評価基準:CourseN@vi による毎回授業課題ならびに最終レポートによって総合的に評価する。

授業計画:

第1回：健康スポーツの背景	第9回：健康スポーツプロダクトの消費構造(3) サービスデリバリ
第2回：健康スポーツにおけるマーケティングの役割	第10回：健康スポーツマーケティングの顧客と市場分析
第3回：一般マーケティング理論	第11回：健康スポーツのプロモーション(1) プロモーションチャネル
第4回：健康行動に関わる行動科学の諸理論	第12回：健康スポーツのプロモーション(2) メッセージフレーミング
第5回：健康スポーツマーケティングのプラン	第13回：健康スポーツのサービス品質と顧客満足
第6回：健康スポーツのプロダクト	第14回：健康スポーツプログラムのマネジメント
第7回：健康スポーツプロダクトの消費構造(1) 価値交換	第15回：まとめ
第8回：健康スポーツプロダクトの消費構造(2) 消費者のバリアと受取価値	

健康行動科学特論（再掲）

岡 浩一朗

本講義では、行動科学の考え方を応用して健康行動(特に、身体活動・運動)を推進させるための支援方法に関する基礎知識を獲得できるようにする。

教科書:特になし。資料は講義中に適宜配布する。

成績評価基準:出席状況、レポートなどの提出物から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：行動科学に基づいた介入(1):行動変容 のメカニズム
第2回：健康づくり研究の体系化:行動疫学という 考え方	第10回：行動科学に基づいた介入(2):行動変容 技法
第3回：行動科学の基礎(1):行動科学の歴史	第11回：行動科学と健康カウンセリング(1):ライフ スキル・自己管理スキル
第4回：行動科学の基礎(2):学習理論	第12回：行動科学と健康カウンセリング(2):行動療 法・認知行動療法
第5回：健康教育と行動科学(1): 健康信念モデル、計画的行動理論	第13回：ヘルスリテラシーとヘルスコミュニケーション(1): コミュニケーションスキル
第6回：健康教育と行動科学(2): 社会的認知理論	第14回：ヘルスリテラシーとヘルスコミュニケーション(2): コミュニケーションスキル
第7回：ヘルスプロモーションと行動科学(1):行動 変容ステージモデル	第15回：講評とレポート課題
第8回：ヘルスプロモーションと行動科学(2):生態 学モデル	

健康スポーツ指導法演習

妹尾 弘幸、矢野 史也

本授業では、健康スポーツの実践指導の方法論について学ぶと共に、その指導法を習得することを目的と

する。夏期集中(合宿)で実施。具体的な内容としては、動作改善指導技法、介護予防運動技法、野外健康活動指導技法、食生活改善指導技法、コミュニケーションスキル、について学習する。

成績評価基準:授業参加状況ならびにレポートによる総合評価。

授業計画:

第1回 : 食生活改善指導法①	第5回 : 動作改善指導技法①
第2回 : 食生活改善指導法②	第6回 : 動作改善指導技法②
第3回 : 健康指導のためのコミュニケーションスキル	第7回 : 野外健康活動指導技法①
第4回 : 介護予防運動指導	第8回 : 野外健康活動指導技法②

レクリエーション指導法演習

妹尾 弘幸

本授業では、健康増進プログラムあるいは介護予防の現場で必要とされるレクリエーションの基礎理論を学ぶと共に、各種レクリエーションプログラムの作成技法を習得する。夏期集中授業。主として介護予防指導の現場で必要とされるレクリエーションの進め方を体験・実演する(実技中心)。

成績評価基準:授業参加状況ならびにレポートによる総合評価。

授業計画:

第1回 : レクリエーション指導の基礎	第5回 : 介護予防分野におけるレクリエーション実技 その1
第2回 : レクリエーション指導演習	第6回 : 介護予防分野におけるレクリエーション実技 その2
第3回 : アイスブレーキングについて	第7回 : 認知症予防とレクリエーション
第4回 : レクリエーション指導と介護予防	第8回 : レクリエーション指導 まとめ

健康指導コミュニケーション

奥田 文子

本授業では、健康スポーツの現場での指導コミュニケーションのスキルの向上を目指す。

夏期集中授業。健康運動指導における指導者の役割、指導コミュニケーションの目的、理論、分析について、講義ならびにグループワークによって実習する。

成績評価基準:授業参加状況ならびにレポートによる総合評価。

授業計画:

第1回 : 受講ガイダンス	第5回 : アプローチの事例分析
第2回 : 求められる健康スポーツ指導	第6回 : コミュニティ・エンパワメント
第3回 : 接近性(1)	第7回 : 身体学習
第4回 : 接近性(2)	第8回 : ワークのまとめ

ヘルスプロモーション演習

中村 好男、岡 浩一朗、矢野 史也、奥田 文子

本演習では、ヘルスプロモーションに関する研究の最新情報を整理し、リサーチペーパーをまとめるための研究能力および問題解決能力を高めることを主な目標にする。特に、ダイレクトリーディング(特定の領域を決めて、一定数の論文を読み、その要旨をプレゼンテーションする)を中心に演習を進める。

教科書:特になし。資料は演習中に適宜配布する。

成績評価基準:出席状況、プレゼンテーション、レポートなどの提出物から総合的に評価する。

分担状況:

中村:第1回、第12回、第13回、第14回

岡:第9回、第10回、第11回、第15回

矢野:第2回、第3回、第4回、第5回

奥田:第6回、第7回、第8回

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第9回：ヘルスカウンセリング研究論文読解(1)
第2回：ヘルスフィットネス研究論文読解(1)	第10回：ヘルスカウンセリング研究論文読解(2)
第3回：ヘルスフィットネス研究論文読解(2)	第11回：ヘルスカウンセリング研究論文読解(3)
第4回：ヘルスフィットネス研究論文読解(3)	第12回：ヘルスマーケティング研究論文読解(1)
第5回：ヘルスフィットネス研究論文読解(4)	第13回：ヘルスマーケティング研究論文読解(2)
第6回：ヘルスコミュニケーション研究論文読解(1)	第14回：ヘルスマーケティング研究論文読解(3)
第7回：ヘルスコミュニケーション研究論文読解(2)	第15回：講評とレポート課題
第8回：ヘルスコミュニケーション研究論文読解(3)	

健康スポーツマネジメント研究法

中村 好男

本授業では、前期に学習したマーケティングならびに体力科学、運動生理学、栄養学、行動科学などの関連諸領域の基礎理論の学習成果を確認した上で、各々の受講生が関与する実務分野の状況に応じて必要とされる具体的な研究技法を学習する。各自の研究に必要とされる準備作業を成就し、研究計画書を作成することを、本授業の到達目標とする。

成績評価基準:授業出席および授業中の発表を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：学術文献データベース利用法	第9回：統計と検定(1)
第2回：文献検索実践技法	第10回：統計と検定(2)
第3回：論文読解技法(1)	第11回：論文作成技法(1)問題設定
第4回：論文読解技法(2)	第12回：論文作成技法(2)仮説の提示と検証
第5回：健康スポーツに関する調査データの分析(1)	第13回：質問調査紙作成技法
第6回：健康スポーツに関する調査データの分析(2)	第14回：インタビュー調査法
第7回：健康スポーツに関する調査データの分析(3)	第15回：研究計画の作成と倫理審査手続き
第8回：健康スポーツに関する調査データの分析(4)	

介護予防特論

大渕 修一

将来学生が、介護予防のマネジメントができるようになるために、介護予防の目指すところ、マネジメント、サービス、事業評価、関連する施策を理解する。また、介護予防に関する情報の処理方法を身につける。

教科書:

鈴木隆雄他監修: 指導者のための介護予防完全マニュアル 東京都高齢者研究福祉振興財団

鈴木隆雄他監修: 続介護予防完全マニュアル 東京都高齢者研究福祉振興財団

参考書:

大渕修一、佐竹恵治:改訂版 介護予防包括的高齢者運動トレーニング 健康とよい友だち社

成績評価基準:

- ・授業参加 10%
- ・準備、発表 20%
- ・小テスト 20%
- ・期末試験(レポート) 50%

授業計画:

第1回：介護予防とは何か(介護予防のターゲット)	第9回：認知機能低下予防プログラム(手段)
第2回：介護予防とは何か(具体的なプログラム)	第10回：低栄養予防(考え方)
第3回：介護予防コーディネーション (地域資源の整理、対象者のスクリーニング)	第11回：低栄養予防(プログラム)
第4回：介護予防コーディネーション (アセスメント、ケアマネジメント)	第12回：口腔機能改善プログラム(必要性)
第5回：運動器の機能向上プログラム(筋力向上トレーニング)	第13回：口腔機能改善プログラム(方法)
第6回：運動器の機能向上プログラム(転倒予防トレーニング)	第14回：介護予防のまちづくり(共助のシステム作り)
第7回：運動器の機能向上プログラム(運動器疾患予防トレーニング)	第15回：介護予防リーダの養成
第8回：認知機能低下予防プログラム(背景)	

老年リハビリテーション演習

小島 基永

老年リハビリテーションに関する文献等を手がかりに、介護予防コーディネーション(介護予防のまちづくり)を如何にすすめていくかについて、グループワークを中心とした演習を行う。併せて、これに役立つリハビリテーション領域の知識・技術(特に運動機能障害に関する検査測定)について実習を通して学習し、検査測定結果の解析方法についても演習を通して理解を深める。

教科書:特になし。資料は演習中に適宜配布する。

成績評価基準:出席状況、レポートなどの提出物から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第9回：老年リハビリテーション領域の知識・技術 (上肢・体幹の関節可動域、解析)
第2回：医学的リハビリテーションと老年リハビリテーション(1)	第10回：老年リハビリテーション領域の知識・技術 (上肢・体幹の筋力、検査測定)
第3回：医学的リハビリテーションと老年リハビリテーション(2)	第11回：老年リハビリテーション領域の知識・技術 (上肢・体幹の筋力、解析)
第4回：老年リハビリテーションと介護予防ケアマネジメント	第12回：老年リハビリテーション領域の知識・技術 (下肢の筋力、検査測定)
第5回：老年リハビリテーションと介護予防コーディネーション	第13回：老年リハビリテーション領域の知識・技術 (下肢の筋力、解析)
第6回：老年リハビリテーション領域の知識・技術 (下肢の関節可動域、検査測定)	第14回：老年リハビリテーション領域の知識・技術の発展(介護予防における評価)

第7回：老年リハビリテーション領域の知識・技術 (下肢の関節可動域、解析)	第15回：レポート課題と解説
第8回：老年リハビリテーション領域の知識・技術 (上肢・体幹の関節可動域、検査測定)	

介護予防演習

岡 浩一朗

本講義では、地域支援事業(特定高齢者施策、一般高齢者施策)や介護予防給付で実施される効果的な介護予防サービスを計画・実行していく上で役立つ基礎知識と実践技能を学ぶ。特に、各種サービスプログラムの具体的な内容と進め方、評価方法を実習形式によって理解するようとする。

教科書:特になし。資料は演習中に適宜配布する。

成績評価基準:出席状況、レポートなどの提出物から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方・運動器の機能向上	第9回：尿失禁予防(1)
第2回：運動器疾患対策	第10回：尿失禁予防(2)
第3回：介護予防のポピュレーションアプローチ(1)	第11回：認知症予防(1)
第4回：介護予防のポピュレーションアプローチ(2)	第12回：認知症予防(2)
第5回：足病医学とフットケア(1)	第13回：うつ・閉じこもり予防(1)
第6回：足病医学とフットケア(2)	第14回：うつ・閉じこもり予防(2)
第7回：口腔機能向上(1)	第15回：課題の整理とまとめ
第8回：口腔機能向上(2)	

備考:上記の講義内容の順序は変更される可能性がある。

老年学特論

大渕 修一

将来が学生は高齢者の問題を、成長の過程の一部としてとらえ、科学的情報を元に、妥当に判断ができるようになるために、老年学の諸問題を医学的、社会的、生物学的に教授する。

教科書:柴田博他 老年学要論 建帛社

成績評価基準:

- ・授業参加 10%
- ・準備、発表 20%
- ・小テスト 20%
- ・期末試験(レポート) 50%

授業計画:

第1回：老年学とは(その課題)	第9回：健康度と老化の指標(健康指標の分類)
第2回：老年学とは(その方法)	第10回：健康度と老化の指標 (個人の指標、集団の指標)
第3回：人口の高齢化について(世界の人口問題)	第11回：老年期の疾病(疾病と老化の関係)
第4回：人口の高齢化について(日本の人口問題と対策)	第12回：老年期の疾病(障害)
第5回：老化とは(概念)	第13回：老化の社会学(老いに対する態度)
第6回：老化とは(老化学説、環境、健康)	第14回：老化の社会学(社会参加とサクセスフルエイジング)

第7回：寿命(限界寿命)	第15回：老年学の応用
第8回：寿命(寿命に影響を与える要因)	

介護予防マネジメント研究法

岡 浩一朗

本講義は、介護予防に関連した修士論文をまとめたための研究技法の獲得を目指す。特に、介護予防に関連した研究の調査・実験法、データ解析法、論文のまとめ方を中心に講義を行う。

教科書:特になし。資料は講義中に適宜配布する。

成績評価基準:出席状況、レポートなどの提出物から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：講義の概要と進め方	第9回：介護予防に関する研究データ解析法(4)
第2回：介護予防に関する調査・実験法(1)	第10回：介護予防に関する研究論文のまとめ方(1)
第3回：介護予防に関する調査・実験法(2)	第11回：介護予防に関する研究論文のまとめ方(2)
第4回：介護予防に関する調査・実験法(3)	第12回：介護予防に関する研究論文のまとめ方(3)
第5回：介護予防に関する調査・実験法(4)	第13回：介護予防に関する研究論文のまとめ方(4)
第6回：介護予防に関する研究データ解析法(1)	第14回：介護予防に関する研究論文のまとめ方(5)
第7回：介護予防に関する研究データ解析法(2)	第15回：全体解説とレポート課題
第8回：介護予防に関する研究データ解析法(3)	

論文作成技法 01 02 03 04 (再掲)

衣笠 竜太、坂本 将基、沼尾 成晴、柳澤 修

この講義では学術論文を作成する際に必要とされる、1)学術論文の基本的な組み立て方や、2)学術論文を作成する際に知っておかなければならぬ言葉のルール、に関する知識を身に着けるとともに、学術論文を作成する技術を養います。

教科書:「大学生と留学生のための論文ワークブック」、浜田麻里 他、くろしお出版

参考資料:なし

成績評価基準:授業への出席と課題達成度

授業計画:

第1回：論文作成技法ガイドンス この授業の流れ;学術論文とは(原著、総説、資料、症例報告などの別);投稿規程の紹介(ここでは簡単に論文によって規定が異なることを提示。この授業では規定に左右されない);論文とは(例を提示しながら論文の構成<p24-25>および付属要素<p168-175>について解説)	第9回：論文作成VI<p105-116> 行動提示と論の展開
第2回：論文作成基礎<p2-20、ただし p16-18 の手書き原稿の部分は割愛する> 論文作成の基礎;文の形;論文で用いる語・表現、用いない語・表現;引用方法;句読点のつけ方 など	第10回：論文作成VII<p117-128> 結びの役割;全体のまとめ;評価

第3回：論文の構成<p24-48> 論文の構成復習；構成の作り方；本論のまとめ方；3種類（事実、意見、行動）の文の書き方	第11回：論文作成Ⅷ<p129-132> 展望提示；（練習）
第4回：論文作成Ⅰ<p52-63> 序論の役割と背景説明	第12回：論文作成Ⅸ<p133-152> 資料（図表、資料、調査・実験）の作成
第5回：論文作成Ⅱ<p64-78> 問題提起；方向づけ；全体の予告	第13回：論文作成Ⅹ<p153-166> 展開の技術
第6回：論文作成Ⅲ<p80-92> 本論の役割と論拠提示（データ提示）	第14回：論文作成実習1
第7回：論文作成Ⅳ<p93-99> 本論における論拠提示（意見提示・考察）	第15回：論文作成実習2
第8回：論文作成Ⅴ<p100-104> 結論提示	

【基礎選択科目】

経済学

藤田 康範

米国に次ぐ世界第2位の経済大国であった日本の国際的地位が低下し始めています。

日本のGDP（国内総生産）は、現在、中国に抜かれつつあり、長期的には、BRICs諸国の台頭により、2050年になると、中国、アメリカ、インドに次ぐ第4位へと後退し、第5位のブラジル、第6位のロシアに追い上げられていると試算されています。

2008年のノーベル経済学賞受賞者・ポール・クルーグマン氏（Paul Robin Krugman, 1953-）もまた「将来の世界経済は、米国と欧州連合、中国、インドの四大勢力など大国間の駆け引きで動くことになり、日本は、二番手集団の先頭といったところだ」と述べています。

2009年11月「ドバイ・ショック」によって行き先を失った世界の資金が円に流れで円高・ドル安・ユーロ安が進行しても、その強みを活かすこともなく、日経平均株価は低迷を続けています。

この講義は、このように大きく展開する世の中において、高い付加価値を生み出すための基礎を培うことを目標とします。より具体的には、

- ① 日本経済・世界経済に関する新聞・雑誌等の内容を理解し、平易に説明できるようになること
- ② その上で、経済学的思考によって様々な経済現象を分析し、論評できるようになることを目指します。

暗記することよりも考えることを重視し、経済情報の収集・分析・編集・発信を楽しんでいただきながらみなさんの潜在能力を引き出そうと思っています。可能な限り平易に説明し、無理なく丁寧に進めるように努めますので、特別な予備知識や準備は一切不要です。

（経済学において数学がどのように活用されるのかについて興味のある方は、藤田康範『経済・金融のための数学』（シグマベイスキャピタル）を読んでおいて下さい。）

本講義を通じて、経済の本質を冷静に見極める眼を養い、自分自身の判断基準を構築していただけたらと希望しています。

試験、レポート、平常点等を適切に組み合わせ、みなさんの力が無理なく最も発揮されるような評価方法にし

たいと考えています。詳細については、第1回の講義の際に説明します。

授業計画：

第1回：はじめに—経済学の考え方	第9回：市場機構の機能(1)
第2回：GDPの決定の理論	第10回：市場機構の機能(2)
第3回：マクロ経済政策の理論	第11回：バブルの生成・崩壊(1)
第4回：株式会社のしくみ(1)	第12回：バブルの生成・崩壊(2)
第5回：株式会社のしくみ(2)	第13回：アジア通貨危機
第6回：日本の経営	第14回：サブプライム問題
第7回：資産価格の理論	第15回：おわりに—日本経済再活性化に向けて
第8回：為替レートの理論	

MBAエッセンシャル

山本 真司

スポーツ・ビジネスの戦略構築は、スポーツ競技面のマネジメントとビジネスのマネジメントの両立という問題を避けて通れない。スポーツ・ビジネスをビジネス戦略の見地から考えるためにには、基本となる企業戦略論、マーケティング戦略論、ファイナンス理論の根幹の理解は必須である。本講義では、これらの基本的なビジネス・スキルをスポーツビジネスに応用可能な視点から学ぶことを目的とする。欧米のビジネス・スクールで教えるレベルのビジネス論のファンダメンタルな部分を身につけるための講義である。

成績評価基準：宿題・レポートにより評価する。

授業計画：

第1回：受講ガイダンス	第9回：企業経営論(2) 企業ポートフォリオ戦略
第2回：MBA エッセンシャル概論(1) スポーツビジネスを例として	第10回：戦略立案のプロセス(1)—企業診断・ポジショニング
第3回：MBA エッセンシャル概論(2) スポーツビジネスを例として	第11回：戦略立案のプロセス(2)—4C診断概論
第4回：企業戦略論(1) 基本概論	第12回：戦略立案のプロセス(3)—コスト戦略
第5回：企業戦略論(2) 演習	第13回：戦略立案のプロセス(4)—マーケティング戦略
第6回：企業ファイナンス戦略(1)	第14回：戦略立案のプロセス(5)—成長戦略
第7回：企業ファイナンス戦略(2)	第15回：まとめと質疑応答
第8回：企業経営論(1) フル・ポテンシャル戦略	

リスクマネジメント

野口 和彦

高度化した社会においては、問題が発生してからの対応では、結局甚大な影響を避けることができないことが明らかになっています。そのことから、事前に組織や社会に影響を与える不確定要因を事前に把握して対応を考えるリスクマネジメント技術の導入が進められてきました。さらに、近年のリスクマネジメントは、これまでのネガティブな影響を管理する手法から、組織目標の達成を支援するための手法へと大きく進化しています。

本講座では、現代社会や組織が抱えている様々な問題をリスクマネジメントの視点で整理します。

次に、リスクの本質論、マネジメントプロセス、そのプロセスを運用するマネジメント環境の整備、マネジメントシステムのあり方について、最新のリスクマネジメントの考え方も含め講義を行ないます。

また、講義の中では、最近の企業の失敗・事故・事件・不祥事等を随時とりあげ、リスクマネジメントから見た課題や対応にあり方について議論を行ないます。

本講座では、常に「リスク(不確定性を含んだ事象)を管理する」ということの本質」と「組織や社会におけるリスクマネジメント適用時の課題」を念頭におき議論を進めていきます。

評価は、出席とレポートで行います。

授業計画:

第1回：現代社会におけるリスクマネジメントの必要性	第5回：効果的にリスクマネジメントを実施するための環境整備のあり方
第2回：リスク概念の変遷	第6回：有効なリスクマネジメントの要点
第3回：組織の経営や運営における諸課題	第7回：組織や個人のレベルにあったリスクマネジメントの仕組み
第4回：組織目標の達成を支援する最新のリスクマネジメントの基本プロセス	第8回：リスクマネジメントを自組織に導入するための要点

マーケティングリサーチ

内田 学

本講座では、各種統計データを要約し、分析する統計学およびマーケティングリサーチの基礎を学習する。具体的には、前半では、マーケティングリサーチを学ぶうえで知っておきたいマーケティングマネジメントおよび統計学の基礎(記述統計、推測統計等)を学ぶ。その後、実際に回帰分析やコンジョイント分析等の多変量解析を学習する。本講座は、初学者でも理解できるように、丁寧に解説していく(毎回、電卓を持参のこと)。

成績評価基準:授業出席状況(20%)、小テスト(15%)、グループワーク&プレゼンテーション(20%)、プレゼンテーション(個人)(20%)、最終試験(25%)等で総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス、マーケティングの基礎(1)	第9回：小テスト
第2回：統計学の基礎(1)(記述統計①)	第10回：多変量解析の基礎(2)(重回帰分析)
第3回：マーケティングの基礎(2)	第11回：多変量解析の基礎(3) (コンジョイント分析、クラスター分析等)
第4回：統計学の基礎(2)(記述統計②)	第12回：プレゼンテーション(個人)
第5回：統計学の基礎(3)(推測統計)	第13回：グループワーク(コンジョイント分析)
第6回：リサーチデザイン	第14回：プレゼンテーション(グループ)
第7回：データと収集方法の決定	第15回：理解度の確認
第8回：多変量解析の基礎(1)(回帰分析)	

指導実践マネジメント

清水 隆一

いまビジネス界、特に上司と部下の関係で注目されている、「個」のやる気と自主性を引き出すマネジメント&コミュニケーションのスキルの一つである「コーチング」。もちろん、スポーツ界においても応用の幅が広く、トップアスリートや初心者、高齢者といった「個人」のマネジメントから、団体スポーツ、学校の部活、地域のスポーツクラブなどにおける「組織」のマネジメントにおいても非常に有効性が高い。

この授業では、講義形式だけではなく、ディスカッションやロールプレーを中心に受講生の積極的な参加を促すことで、実践的に「コーチング」の“マインド&スキル”を身につけることを目的としている。また、参加者が、「コーチング」を実際に使って、どのように「個人」や自身が所属している「組織」をマネジメントしていくかまで一緒に考えていく。

評価は、出席、および最終授業後に簡単なレポート提出することで行う。

授業計画：

第1回：観察と傾聴の体感（インタビュー）	第5回：組織活性化の必須条件とは
第2回：自発性を引き出すには	第6回：潜在能力を引き出すには
第3回：グループディスカッション	第7回：共通認識の重要性
第4回：ロールプレー	第8回：自分自身の人マネジメントスタイルの構築

データ分析 (SPSS)

前園 久智

この講義では、数学、統計学、コンピューターの知識を仮定せず、記述統計、相関（回帰）分析、仮説検定などの統計分析について学んでもらいます。データ処理には、統計処理ソフト SPSS を用います。

実験やアンケート、その他のフィールドワークなどによりデータを収集し、加工・分析し、そこより情報を得るためにには統計学の知識が必要となります。この講義では、煩雑なデータ処理に SPSS を使うことで、統計分析の手法の習得をより簡潔に実現することを目的とします。実在するデータを用い、演習中心の授業を行います。

特に教科書は指定しません。毎回、講義ノートを用意します。ただし、推測統計学（統計的推定・検定など）についての参考書を持っていることが望ましいです。

なお、授業の進度により、授業内容の一部を変更することがあります。

成績評価基準：提出課題と出席状況により評価します。

授業計画：

第1回：ガイダンス 講義内容概説 統計処理ソフト概説 (SPSS、R、Excel など) 授業開始に際しての受講者へのアンケート	第9回：2次元データの分析(2) 相関分析(共分散、相関係数) 順位相関係数 相関と回帰(独立変数、従属変数)
第2回：データを読む・記述する(1) データの分類と測定の尺度 有効数字 SPSS 入門(1)(基本操作、データ入力、変数の設定、簡単な計算)	第10回：2次元データの分析(3) 単回帰分析(回帰直線、最小2乗法、決定係数、予測など) 重回帰分析への序論
第3回：データを読む・記述する(2) 母集団と標本(全数調査と標本調査) 記述統計と推測統計 SPSS 入門(2)(ダイアログボックスによる操作とシンタックスによる操作、グラフ作成)	第11回：確率変数と確率分布 離散型確率分布(二項分布、ポアソン分布など)と連続型確率分布(正規分布、カイ2乗分布、t分布、F分布など) 正規分布などの確率計算
第4回：SPSS における外部データの入出力 SPSS への外部データの取り込み MS-Office(Excel、Word など)との連携	第12回：標本分布 標本平均・標本分散などの分布 不偏性 中心極限定理 乱数発生機能を用いた中心極限定理の確認
第5回：1次元データの分析(1) 度数分布表とヒストグラム(累積度数、相対度数、階級数の決定方法など) SPSS による作成方法	第13回：統計的検定(1) 仮説検定の考え方 有意水準 両側検定と片側検定 検定の誤りの種類 母平均の検定

第6回：1次元データの分析(2) 中心を表す統計量(代表値、平均値・中央値・最頻値など) 順位による統計量 データの並べ替え	第14回：統計的検定(2) 二標本問題 正規分布などの再生性 母平均の差の検定 独立性の検定
第7回：1次元データの分析(3) ばらつきを表す統計量(散布度、平均偏差・分散・標準偏差) モーメント統計量 データの標準化 度数分布表からの基本統計量の計測	第15回：統計的検定(3) 一元配置分散分析 レポート作成指導
第8回：2次元データの分析(1) 2次元データの視覚化・集計(散布図・クロス集計表の作成) ピボットテーブル機能など	

– 博士後期課程 –

【研究指導】

[スポーツ文化研究領域]

武道論研究指導

志々田 文明

本博士課程研究指導においては、各自の博士論文の完成に至る研究計画の実施について、歴史学、思想史、社会学的な観点から、研究方法論、論述方法論、発表技術について定期的・継続的に専門的指導・助言を行う。また特に、受講者がその研究を絶えず論文にし、国内外の学会で発表するためのサポートを行う。

スポーツ人類学研究指導

寒川 恒夫

博士論文の作成指導を行う。最広義のスポーツ(民族スポーツ、国際スポーツ、過去スポーツ、遊戯、舞踊、養生法、武術・武道、などなど)の文化人類学研究の他に、身体文化(Körperkultur)と関わる身体論をも扱う。また、スポーツ人類学の主要方法論であるフィールドワークを学ぶため、海外における民族スポーツの調査が予定されている。

スポーツ倫理学・教育学研究指導

友添 秀則

本研究指導は博士論文の作成指導を行うことを主眼としている。博士論文の課題設定の方法及び内外のスポーツ倫理学及びスポーツ教育学に関する先行研究の分析・検討の指導を行った後、研究方法論の策定について指導する。また、必要に応じてスポーツ哲学やスポーツ教授学等のスポーツの人文社会科学的研究の分析を通して、博士論文執筆に必要な情報分析の仕方、論文執筆に必要とされるスキルの指導も行う。

スポーツメディア論研究指導

リー トンプソン

メディアとはコミュニケーションの媒体となるものであるが、とくにマスコミュニケーションの手段であるテレビ、ラジオ、新聞などのマスメディアをいうことが多い。マスメディア研究には大きく分ければ制作、内容、オーディエンスという3つの領域がある。スポーツメディア論では、少なくとも一つの領域からスポーツとメディアの関係を取り上げる。私は特に内容について関心があるが、マスメディアとスポーツの関係を理解するには、全体を把握

する必要がある。社会学の立場から指導する。

Keywords:スポーツ社会学、メディア、内容分析、オーディエンス

[スポーツビジネス研究領域]

健康スポーツ論研究指導

中村 好男

本研究指導では、“スポーツを通じた健康増進”という社会的ニーズに応えるために、体力科学、運動生理学、栄養学などの＜身体の理論＞から、行動科学、社会マーケティングといった＜行動の理論＞、さらには、ビジネスマネジメント、マーケティングなどの＜社会組織の理論＞まで、様々な領域における基礎学問分野の知見を踏まえて、「地域住民へのスポーツ振興」ならびに「健康増進の達成」という目標を実現するための実践的技法を確立することを目指している。具体的には、地域自治体、総合型地域スポーツクラブ、老人福祉施設等のさまざまな現場(フィールド)での実践的研究によって、医療費削減や介護予防に資するためのプログラムの開発とその評価モデルの構築に加えて、地域社会における健康増進ならびに介護予防システムの構築を行う。主な研究課題は、1)健康増進を目標とする運動やスポーツの振興と奨励の手法開発と評価、2)ウォーキングプログラムの開発と指導、3)介護予防のための筋力向上トレーニングプログラムの開発と実践活用、4)スポーツビジネスの活性化とスポーツ振興、5)総合型地域スポーツクラブの運営と地域スポーツ指導者の育成などがある。

Keywords:体力、健康、運動、健康増進、介護予防、ウォーキング、行動科学、マネジメント

スポーツビジネスマネジメント論研究指導

原田 宗彦

スポーツビジネスとスポーツマネジメント関連の研究論文を精読し、アブストラクトを作成する。これによって論文の書き方と構成、そしてデータ処理と統計の応用方法について学ぶ。講義では、各自がプロジェクトを持ち、国内と海外での学会発表を行うことを義務づける。

トップスポーツビジネス論研究指導

平田 竹男

本研究指導では、IT 技術の発展およびマネジメント手法の進化を背景に、近年急速に進展を遂げるスポーツの世界をとりまくスポーツビジネスおよびエンターテイメントビジネス(以下トップスポーツビジネスといふ。)を対象として研究指導を行っていく。

研究内容としては、具体的先進事例の学習を通じて基礎的理解を深めるとともに、トップスポーツビジネスを研究する上で必要不可欠な理論である、経営学、経済学、行政・政治学、法学の諸理論について深く学び、具体的事例の分析に必要な定量的分析手法を習得する。それによって、トップスポーツビジネスに関わる経営課題に対する解決方法を明確にするための調査・研究能力を開発し、実際にトップスポーツビジネスの現場で生かすことのできる経営能力の開発を目指す。

具体的な研究課題としては、

- 1)「強化・振興・資金獲得」というトップスポーツの果たす3つのミッションの関わりと循環を解明するためのマネジメントモデルの構築
- 2)トップスポーツクラブにおける、「勝者の決定構造」や「観客数を規定する要因」についての統計的分析
- 3)地域クラブにおけるトップスポーツビジネスの構造分析
- 4)日本・アジア・欧米によるトップスポーツビジネスの構造比較分析
- 5)人生におけるトップスポーツ等との関わりと転機に関するキャリア形成モデルの構築
- 6)IT 技術の発展とトップスポーツビジネスのビジネスモデル変革・将来の可能性に関する分析
- 7)メディアの変遷とトップスポーツビジネスとの関係性

などがあげられる。

Keywords: スポーツビジネス、スポーツ産業、経営、マネジメント、ビジネスモデル、エンターテイメント、地域、アジア、IT、通信・放送の融合

[スポーツ医科学研究指導]

運動免疫学研究指導

赤間 高雄

免疫系は神経系および内分泌系と協調してホメオスタシスの維持に働いており、運動による免疫系の変化はストレス反応として考えることができる。運動による免疫機能の変化の概要は、中程度の運動によって免疫機能が高まり、過激な運動によって免疫機能は抑制されると考えられている。しかし、運動による免疫機能の変化のメカニズム、運動による免疫機能の変化を適切に示す指標、あるいは運動の条件による免疫機能の変化については不明な点が多く、いま研究が進みつつある。これらを主に生化学的および分子生物学的手法で解析し、生涯スポーツと競技スポーツにおける応用を研究する。具体的には、運動による免疫機能の変化のメカニズムを動物実験で検討する、高齢者の免疫機能を向上させる運動処方を明らかにする、およびアスリートにおけるコンディショニングへの利用方法を開発する、などがあげられる。アスリートにおけるコンディショニングの要因としてドーピング防止も研究テーマとする。

健康運動疫学研究指導

荒尾 孝

健康づくり研究においては、集団の健康実態を定量的に評価し、健康阻害あるいは増進に関係する要因を明らかにする。そのうえで、問題解決の具体的な対策を立案・実践し、その効果を科学的に評価することが重要である。そのような一連の研究活動においては、疫学方法論に基づく質の高い研究をデザインし、疫学統計学による適切なデータ解析を行うことが重要となる。そして、そのような質の高い研究から得られる成果(evidence)を政策に反映させ、学校、地域、職域といったより大きな集団レベルでの健康づくりの実践とその効果を検証することが求められる。そこで、本講では身体活動・運動・スポーツによる健康づくりに関する質の高い研究方法を習得することを目標とし、健康づくり研究のデザイン論とデータ解析法について指導する。また、研究室で実践している児童の健康な生活習慣づくり、地域における全住民を対象とした健康づくりプログラムとシステム作り、職域におけるハイリスク者の生活習慣病予防プログラムの開発といった研究活動に参加することにより研究実践の能力向上を図る。

スポーツ神経精神医科学研究指導

内田 直

スポーツと中枢神経系の関わりを研究対象として、研究指導を行う。具体的な内容としては、睡眠覚醒や生体リズムとスポーツパフォーマンスの関連、身体運動が脳や心の働きに与える影響(たとえば運動によるうつ状態の改善、集中力などの改善等)、スポーツパフォーマンスに関連した脳機能などである。方法としては、ポリグラフ検査、MRI 検査、行動学的方法、疫学的方法などを用いる。研究の内容は、修士課程で学んだ内容をさらに発展させ、国際誌に論文発表ができるレベルを目指している。

スポーツ健康管理学研究指導

坂本 静男

スポーツ選手や一般市民スポーツ愛好家などのコンディショニングあるいは健康管理、また運動不足者に対する健康管理における運動の重要性に関して、研究論文による検討や、自身の研究データによる考察を行っていく。その過程において、研究者としての研究に対する取り組み方や研究者に必要な人間性などを会得してもらう。そして研究論文を作成するサポートを行っていく。

スポーツ外科学研究指導

福林 徹

スポーツ科学者やコーチ、トレーナーなどに要求される外科領域でのスポーツ医学の諸問題についての研究指導を行う。具体的には、人体の部位別機能解剖とそれに基づいた評価法、スポーツによって生じる代表的な外傷・障害の診断と現場での処置、最新の治療法、およびスポーツ復帰までのリハビリテーション法について研究指導する。スポーツの種目別特性を加味しながら、最新の治療器や治療法、近年のこの分野での研究の動向についてもふれ、博士後期課程での研究のベースになるようとする。

健康行動科学研究指導

岡 浩一朗

身体活動・運動を中心とした健康づくりに関する心理学、行動科学的側面の研究について指導を行う。主な研究のテーマは、1) 中年者の健康増進(行動変容理論に基づく身体活動推進プログラムの開発と評価、がん予防のための身体活動の普及手法の提案、運動によるメンタルヘルス改善効果の検証など)、2) 高齢者の介護予防(介護予防運動プログラムの開発と評価、介護予防事業の医療経済的評価、介護予防の効果的な普及手法の提案など)、3) 患者のリハビリテーション(心疾患患者のQOL改善のための運動療法の開発、膝痛・腰痛患者における効果的な痛みの自己管理法の探索など)である。さらに、4) 子どもの心の発育発達に及ぼす運動(特に、野外活動)の影響や身体活動支援環境の特定、5) 競技スポーツ選手の効果的な心理的コンディショニング手法の開発や健康関連問題への心理的援助などについても取り上げる。このような研究を通じて、修士課程で学んだ内容をさらに発展させ、国内外の学会発表や学術論文の投稿を行い、博士学位論文の作成に必要な研究指導を行う。

スポーツ整形外科学研究指導

金岡 恒治

脊椎疾患・外傷に関する研究を行うのに必要な、脊椎の動作解析、筋電解析、画像評価、統計解析などの研究手法を紹介する。

予防医学研究指導

鈴木 克彦

激しい運動や過酷なトレーニングなどの身体的ストレスによる内科的障害の評価、病態や適応の機序究明、および栄養、サプリメント、水分補給、休養、各種補完代替医療等による予防策の科学的根拠について研究する。具体的には、運動を中心とした生体のストレス応答と適応のメカニズムについて、特に生体防御(白血球機能、ホルモン・サイトカインの動態、活性酸素の代謝、筋損傷と修復)の面から研究している。また、適度な運動による生活習慣病の予防・治療と作用機序に関する検討、ストレス応答や免疫機能の解析・評価法の開発、臨床病院との連携による免疫低下、炎症、老化の制御に関する基礎的・応用的検討を進めている。複数の研究プロジェクトに関わらながら、自らのテーマを設定し、研究を計画・実行し、学会発表、論文作成を独力で進められるように支援する。

Keywords: 運動、ストレス、白血球、活性酸素、ホルモン、サイトカイン、炎症、老化、生活習慣病

アクティヴ・ライフ研究指導

彼末 一之、齋藤 美穂
今泉 和彦、竹中 晃二、永島 計

アクティヴ・ライフとは心と体の健康を指すのみならず、人々が活力をもって生きることのできる地域や社会のあり方をも含むものである。要介護高齢者は年々増加し、中高年者のメタボリックシンドロームが社会問題となっている。一方、子どもの心身異常も顕在化しており、体力・運動能力の低い子どもや、対人関係や社会関係を構築できない子どもの増加などが指摘されている。このような問題の原因を探り、またその解決策という視点から「スポーツ」を研究する。特に以下のテーマに着目して研究を指導する。

① 子どものスキル発達と運動・スポーツの影響(彼末)

- ② 色彩がパフォーマンスに及ぼす影響の心理学的研究(齋藤)
- ③ 骨格筋のホルモン受容体遺伝子発現と可塑性との関連およびサプリメント(特に亜鉛)摂取に伴う骨格筋および各種内臓器官のホルモン受容体遺伝子発現応答(今泉)
- ④ ヘルスコミュニケーションを用いた健康行動変容(竹中)
- ⑤ 運動をはじめとするストレス時の温度、疲労、口渴感覚の修飾メカニズムの解析(永島)

[身体運動科学研究領域]

スポーツ神経科学研究指導

彼末 一之

運動に必要な神経機構について①基本的な脳機構の解析と②実際のスポーツをモデルとした運動の解析、を並行して行うことで、基礎から応用までの広い視点を養うことを目標として指導を行う。特に高次脳機能解析にはMRIを使った解析を原理から実際まで学んで特定のテーマについて研究する。一方スポーツの解析は野球、陸上競技などを中心に系統的な解析を行って競技力向上につなげられるような研究を行うことを目標とする。

生体ダイナミクス研究指導

川上 泰雄

人間を対象とした生体計測に関する研究を指導する。特に、骨格筋・腱の形態的特性と機能的特性に関しての研究を発展させる。人体筋の非侵襲的な可視化および収縮の定量化に関して、超音波やMRI等の画像解析の手法などを駆使して研究を進める。研究テーマの中心は1. 人体筋のメカニクス、2. 筋特性の個人差と適応性、の2点である。1については、人体筋腱複合体を筋組織(筋線維)と腱組織に分け、それぞれの特性(筋特性、腱特性)を人間生体について定量化し、筋線維と腱組織との間の相互作用や身体運動における両者の協調について調べる。2については、筋特性の個人差と適応性に関して、体肢の筋群の筋量および筋形状の横断的・縦断的測定を行う。学生毎に明確な短期・長期研究計画を立案し、実験、学会発表、論文投稿、学位論文作成等の研究指導を行う。

運動生化学研究指導

樋口 満

スポーツにおける競技力向上とコンディショニングに関しては、身体組成とエネルギー代謝機能、糖・脂質代謝機能について、運動生化学的視点から研究発表をして議論する。

また、運動による健康増進、生活習慣病予防に関しては、肥満、高脂血症、糖尿病、骨粗鬆症などの疾患の予防、治療と関連させて、運動生化学的視点から研究発表をして議論する。

スポーツ生理学研究指導

村岡 功

スポーツ生理学は各種スポーツ活動に対する生理的な応答と適応を探求する学問であるが、本格的に研究がなされたようになったのはたかだか60年前からである。しかし、近年に至って、運動不足に対する危機感から規則的なスポーツおよび身体運動が推奨されるとともに、一流競技者を育成するための科学的なバックアップが求められるようになったことなどを背景として、この分野は広く社会から注目を浴びるようになってきた。そして、これらのことと運動して、研究面でも著しい進歩がみられている。ここでは、主にエネルギー代謝に関する領域を中心テーマとして、スポーツや身体運動による健康づくりおよび各種スポーツにおける選手育成の観点から、最近の知見に基づいて研究指導を行う。

スポーツ心理学研究指導

山崎 勝男

精神生理学的な方法論によって、スポーツ行動の心理学的なシステムと生理学的なシステムの翻訳メカニズ

ムを追究する。現在展開中の研究テーマは、1) 事象関連脳電位を指標とした運動プログラムの解析、2) 運動スキル獲得過程のポリグラム的解析、3) 睡眠一覚醒リズムと精神的健康度の調査研究、4) 動機づけの脳波・ポリグラム的解明、5) 末梢自律系の指標による感情・情動の類別である。

スポーツ情報処理研究指導

菅田 雅彰

スポーツメディア情報およびスポーツ身体動作に関する高度な情報処理技術に関する文献研究を行うとともに、スポーツメディア情報解析、スポーツ身体動作のコンピュータシミュレーション、感覚身体運動システムのメカニズムなどを中心として個々の研究課題に取り組む。

スポーツ認知神経科学研究指導

正木 宏明

ここでは、アスリートの美しく巧みな動作を生み出す脳機能の解明を目指している。そのため、人間と環境との関わりを重視する心理学的手法と、機能的MRIや脳波(事象関連電位)等の認知神経科学的手法を適用した実験を主に行う。巧みな動作スキルの多くは、外界からの視覚情報を瞬時に認知し、適切な動作を選択・実行するプロセスと関係が深い。またそのプロセスには、注意・情動・動機づけ、意思決定、動作モニタリング等が関与している。さらに、パフォーマンスに影響を及ぼす情動体験(あがり等)やアスリートの性格特性についてもそのメカニズムを探究する。換言すれば、スポーツ心理学の主要テーマである「運動学習」に関する脳機能について、実験を通して明らかにしていく研究内容である。

本研究指導での主要テーマには以下のものがある。

- ・パフォーマンスマニタリング機能の解明
- ・外界刺激の認知処理と反応生成に関する脳内情報処理の解明
- ・情動体験の機序とパフォーマンスとの関係
- ・運動学習理論の実験的検証
- ・アスリートのパーソナリティ
- ・その他

バイオメカニクス研究指導

矢内 利政

高速度カメラをはじめとする各種計測システムを用いた身体運動解析と、超音波診断装置やMRIを用いて可視化した人体内部情報分析を応用して、スポーツにおける競技力向上のメカニズムや傷害発症のメカニズムを明らかにするとともに、スポーツパフォーマンスの力学的な規定因子についてバイオメカニクス的に検討する。

[コーチング科学研究領域]

コーチング科学Ⅲ研究指導

土屋 純

スポーツパフォーマンスは技術面、戦術面、体力面、心理面などに細分化されて評価され、それについて向上策が検討されることが一般的である。本演習ではこのうち技術面、とりわけスポーツ技術の把握とその指導方法について、スポーツバイオメカニクスとスポーツ運動の観点から解明する研究を進める。

【講義科目】

【領域共通科目】

テクニカル・ライティング 01 02

エディソン・デヴィド

We will review and discuss the concepts needed for writing a thesis in the field of sports technology which can be published in a professional journal.

Course Goals:

Understand fundamental organization and parts of research thesis

Understand process of thesis formation

Learn language patterns for each section of research thesis

Learn citation standards

Use computer software to observe language patterns and aid thesis preparation

Textbook and Materials:

Materials will be provided by the instructor

Grading:

Grades will be based on the following:

Class participation

Completion of homework material

Writings from your masters thesis, or a final written “journal article” in your field of specialization

Other: Class attendance and participation are an integral part of the course. Members are required to contribute to group studies by presenting their findings on language use.

A Class Plan:

1. Week 1: Orientation: Course goals; grading Overview of research thesis/paper Class members' needs analysis	9. Week 9: Abstract section
2. Week 2: Writing concepts: subject, audience, purpose	10. Week 10: References, citations, plagiarism
3. Week 3: Individualized data banks AntConc concordance software Titles	11. Week 11: Formatting your research thesis/paper
4. Week 4: Biographies, acknowledgements (<i>Class members' data banks due</i>) Outlining	12. Week 12: Thesis consultations (<i>AntConc findings due</i>)

5. Week 5: Materials and methods section Language of process	13. Week 13: Thesis consultations AntConc generalizations (patterns) for sports technology papers
6. Week 6: Results section Tables and figures	14. Week 14: Thesis consultations
7. Week 7: Introduction section	15. Week 15: <i>(Final papers due)</i>
8. Week 8: Discussion and conclusion section(s)	

テクニカル・プレゼンテーション 01 02

エディソン・デヴィド

We will develop the skills needed to present scientific and technical research to an international conference audience. The course will include the following:

Discussion of concepts needed to prepare presentations, such as purpose, audience, organization, style and delivery.

Introduction to presentation software (PowerPoint)

Presentations by class members and peer evaluations

Question and answer sessions, and strategies for dealing with them

Course Goals:

Understand the importance of presentations and their inherent problems

Deliver presentations from notes with confidence

Design clear and attractive visual aids using PowerPoint

Understand how to deal with questions from the audience

Learn citation standards

Textbook and Materials:

Anthony, Laurence. *Presenting Research in Science and Engineering*. 2009. DTP Publishing: Tokyo.

The textbook will be supplemented by handouts from the instructor.

Grading:

Grades will be based on the following:

Materials used to prepare presentations

PowerPoint files for presentations

Presentation delivery skills

Evaluation reports on other students' presentations.

Other:

Class attendance and participation are an integral part of the course, since members are required both to work individually and in groups, give a series of presentations and evaluate the presentations of other students.

Note. Adapted for Sports Facility Center, from Laurence Anthony's "Advanced Technical Presentation"

course syllabus.

A Class Plan:

1. Week 1: Orientation: Course goals; grading Overview of presentations: Importance; types Problems of talking in front of people Understanding body language	9. Week 9: Language of presentations: Title, outline, introduction, conclusion sections
2. Week 2: Presentation concepts: audience, purpose, organization	10. Week 10: Language of presentations (continued): Explaining science and engineering methods/processes
3. Week 3: Presentation concepts (continued): organization, style, delivery	11. Week 11: Language of presentations (continued): Explaining data in figures and tables
4. Week 4: Introduction to presentation software (PowerPoint)	12. Week 12: Language of presentations (continued): Understanding and answering questions from the audience
5. Week 5: Outlining Overview of first presentation: Background to current research; format; guidelines	13. Week 13: Overview of second presentation: Findings of current research General design and format for second presentation Guidelines for presentations and evaluation reports.
6. Week 6: Class members' first presentation: (5 minute presentation, 2 minute question/answer session)	14. Week 14: Class members' second presentation: (8 minute presentation, 2 minute question/answer session)
7. Week 7: Class members' first presentation (continued): (5 minute presentation, 2 minute question/answer session)	15. Week 15: Class members' second presentation: (5 minute presentation, 2 minute question/answer session)
8. Week 8: First presentation discussion and feedback.	

テクニカル・プレゼンテーション 03 04

ファーン・グレン

In this course, students will develop the oral presentation skills needed to present scientific and technical research findings in their specialist field to an international conference audience. The course will be divided into four parts. In the first part of the course, there will be general discussion on the macro level aspects of oral presentations that need to be considered during the preparation process. These include purpose, intended audience, organization, flow, style, and delivery. There will also be a discussion on the problems associated with presentation Q&A and effective strategies to deal with these. In the second part of the course, there will be a short tutorial on how presentation software applications can be effectively used to explain the background, methods, results, and conclusions of scientific and engineering studies. In the third part of the course, students

will be required to prepare and then give an oral presentation introducing the background to their current research. Students in the audience will be required to ask questions during the question time session, and submit a report on their impressions of the presentation and areas they think could be improved. Following a similar procedure, in part four of the course, students will be required to prepare and give a more complete presentation on the findings of their research similar to that given at an international conference. As in part three, students in the audience will be required to ask questions and submit an evaluation report. After each set of presentations, there will be a general discussion and feedback session that highlights problems and areas for improvement.

Course Goals:

- understand the importance of presentations and their inherent problems
- control nerves and deliver a presentation with confidence and authority
- design clear and attractive visual aids
- use popular presentation software packages
- identify the audience, purpose, organization, flow, style, and delivery of presentations
- deliver a presentation from a prepared speech or notes with comprehensible pronunciation and intonation
- use natural-sounding linking phrases and expressions when navigating and explaining presentation content
- understand how to deal with questions from the audience
- learn how to cite and reference presentation resources and data

Textbook and Materials: Course materials will be announced in the first lesson.

Grading: Students will be evaluated based on a portfolio of work comprising of:

- 1) Materials used to prepare a presentation on a general topic in the student's field.
- 2) PowerPoint file for the presentation on a general topic in the student's field.
- 3) Materials used to prepare a presentation on a specific topic in the student's field.
- 4) PowerPoint file for the presentation on a specific topic in the student's field.
- 5) Evaluation reports for other students' presentations.

Other:

- ① Students are required to work individually or in groups, and give a series presentations of increasing sophistication in English during the span of the course. Students are also required to evaluate and submit reports on the presentations of other students in the class. Therefore, attendance and participation are an integral part of the course.
- ② A basic tutorial on the use of presentation software (Microsoft PowerPoint) will be given, although prior knowledge of such software is desired.

A Class Plan:

1. Week 1 (1) General Introduction: Aims of course. Evaluation procedure. (2) Overview of Oral Presentations: Importance of oral presentations. Types of oral presentations. Differences between Japanese and English presentations. (3) Introductory-Presentation: Experiencing the problems of talking in front of people	9. Week 9 Language of presentations (1) Explaining the Title/Outline/Introduction/Conclusion sections of a presentation
--	---

(4) Introductory–Presentation: Understanding body language	
2. Week 2 Considerations when preparing an oral presentation – audience, purpose, organization	10. Week 10 Language of presentations (2) Explaining science and engineering methods/processes
3. Week 3 Considerations when preparing an oral presentation – organization, style, flow, delivery	11. Week 11 Language of presentations (3) Explaining data in the form of figures/tables
4. Week 4 (1) Introduction to presentation software (PowerPoint) (2) Slide design in PowerPoint (mastering the master slide) (3) Navigating slides in PowerPoint	12. Week 12 Language of presentations (4) Understanding and answering questions from the audience
5. Week 5 (1) Overview of Presentation One – Background to current research. (2) General design and format for Presentation One. (3) Guidelines for preparing presentations and completing evaluation reports.	13. Week 13 (1) Overview of Presentation Two – Findings of current research (2) General design and format for Presentation Two. (3) Guidelines for preparing presentations and completing evaluation reports. (4) Group Work
6. Week 6 Presentation One (session 1) – Background to current research (5 minute presentation, 2 minute question/answer session)	14. Week 14 Presentation Two (session 1) – Findings of current research (8 minute presentation, 2 minute question/answer session)
7. Week 7 Presentation One (session 2) – Background to current research (5 minute presentation, 2 minute question/answer session)	15. Week 15 Presentation Two (session 2) – Findings of current research (8 minute presentation, 2 minute question/answer session)
8. Week 8 Presentation One discussion and feedback.	

リサーチマネジメント

中村 好男、間野 義之、柴田 愛、曹 振波
時澤 健、中田 大貴、宮下 政司、宮本 直和

この授業では、グローバル COE「アクティヴ・ライフを創出するスポーツ科学」における研究者養成プログラムの一環として、研究実施・論文作成の前提としての研究計画の策定、論文投稿プロセスでの諸技法、研究費の適正支出に関する知識など、研究者としての基本マネジメント能力を育成する。

成績評価基準：提出課題（研究計画、研究費申請書類、研究成果報告書など）を評価する。

授業計画：

第1回：科学というゲーム	第9回：研究費の獲得（概要）
第2回：科学者のキャリアと雇用市場	第10回：研究費の使途と使用上の諸注意
第3回：研究計画の策定	第11回：博士論文の作成と審査手続き
第4回：論文の作成と投稿	第12回：ポスドク職への応募（書類・面接・選考基準）
第5回：論文の査読から受諾まで	第13回：大学教員（テニュア）への道
第6回：論文査読演習（1）	第14回：海外ポストへのチャレンジ
第7回：論文査読演習（2）	第15回：成功が成功を生む
第8回：編集委員会と論文査読者の役割	

なお、上記授業は、おおむね月2回程度の頻度で実施（スケジュールは適宜連絡する）。

また、上記授業と並行して、以下の課題演習が課される。

4～5月 学術振興会特別研究員申請書の作成

7～10月 科学研究費計画調書の作成技法

6～7月 倫理審査書類の作成技法

11～12月 研究成果報告書の作成

アクティヴ・ライフ研究法 I（子どもの健全育成）a

矢内 利政、曹 振波、時澤 健

スポーツ科学の立場からアクティヴ・ライフを創出するプロジェクトの一貫として、子どもの健全育成をテーマとした研究を実践し、新しい知見を探求することを目的とする。具体的には、スポーツ科学における各専門分野における研究のデザインや方法論をさらに応用発展させ、現代に生きる子どもたちの生活習慣、身体特性、運動能力等に関する研究テーマに取り組むための研究デザインや測定方法について議論し意見交換をおこなう。更に、各院生が取り組んでいる研究課題や研究成果についての新しい知見を共有し、トップスポーツの振興についての知見を深める。

成績評価基準：平常点（討議への参加）および発表によって行う。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：研究の実践3（研究計画の実施）
第2回：研究デザイン	第10回：研究の実践4（研究計画の実施）
第3回：抄読会1 (研究デザインに着目した Critical review)	第11回：中間報告会
第4回：研究の実践1 (研究課題の決定および研究のデザイン)	第12回：研究の実践5
第5回：研究方法論と統計処理	第13回：研究の実践6

第6回：抄読会2 (研究方法論に着目した Critical review)	第14回：研究成果発表会1
第7回：研究の実践2(研究計画の作成)	第15回：研究成果発表会2
第8回：研究計画発表会	

アクティヴ・ライフ研究法 I (子どもの健全育成) b

矢内 利政、曹 振波、時澤 健

スポーツ科学の立場からアクティブ・ライフを創出するプロジェクトの一貫として、子どもの健全育成をテーマとした研究を実践し、新しい知見を探求することを目的とする。具体的には、スポーツ科学における各専門分野における研究のデザインや方法論をさらに応用発展させ、現代に生きる子どもたちの生活習慣、身体特性、運動能力等に関する研究テーマに取り組むための研究デザインや測定方法について議論し意見交換をおこなう。更に、各院生が取り組んでいる研究課題や研究成果についての新しい知見を共有し、トップスポーツの振興についての知見を深める。

成績評価基準: 平常点(討議への参加)および発表によって行う。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：研究の実践3(研究計画の実施)
第2回：研究デザイン	第10回：研究の実践4(研究計画の実施)
第3回：抄読会1 (研究デザインに着目した Critical review)	第11回：中間報告会
第4回：研究の実践1 (研究課題の決定および研究のデザイン)	第12回：研究の実践5
第5回：研究方法論と統計処理	第13回：研究の実践6
第6回：抄読会2 (研究方法論に着目した Critical review)	第14回：研究成果発表会1
第7回：研究の実践2(研究計画の作成)	第15回：研究成果発表会2
第8回：研究計画発表会	

アクティヴ・ライフ研究法 II (中高年の健康増進) a

岡 浩一朗、柴田 愛、宮下 政司

スポーツ科学の立場からアクティブ・ライフを創出するプロジェクトの一貫として、中高年の健康増進をテーマとした研究を実践し、新しい知見を探求することを目的とする。具体的には、スポーツ科学における各専門分野における研究のデザインや方法論をさらに応用発展させ、中高年者における生活習慣病予防や介護予防等に関する研究テーマに取り組むための研究デザインや測定方法について議論し意見交換をおこなう。更に、各院生が取り組んでいる研究課題や研究成果についての新しい知見を共有し、中高年の健康増進についての知見を深める。

成績評価基準: 平常点(討議への参加)および発表によって行う。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：研究の実践3(研究計画の実施)
第2回：研究デザイン	第10回：研究の実践4(研究計画の実施)
第3回：抄読会1	第11回：中間報告会

(研究デザインに着目した Critical review)	
第4回：研究の実践1 (研究課題の決定および研究のデザイン)	第12回：研究の実践5
第5回：研究方法論と統計処理	第13回：研究の実践6
第6回：抄読会2 (研究方法論に着目した Critical review)	第14回：研究成果発表会1
第7回：研究の実践2(研究計画の作成)	第15回：研究成果発表会2
第8回：研究計画発表会	

アクティヴ・ライフ研究法Ⅱ（中高年の健康増進）b

岡 浩一朗、柴田 愛、宮下 政司

スポーツ科学の立場からアクティヴ・ライフを創出するプロジェクトの一貫として、中高年の健康増進をテーマとした研究を実践し、新しい知見を探求することを目的とする。具体的には、スポーツ科学における各専門分野における研究のデザインや方法論をさらに応用発展させ、中高年者における生活習慣病予防や介護予防等に関する研究テーマに取り組むための研究デザインや測定方法について議論し意見交換をおこなう。更に、各院生が取り組んでいる研究課題や研究成果についての新しい知見を共有し、中高年の健康増進についての知見を深める。

成績評価基準：平常点(討議への参加)および発表によって行う。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：研究の実践3(研究計画の実施)
第2回：研究デザイン	第10回：研究の実践4(研究計画の実施)
第3回：抄読会1 (研究デザインに着目した Critical review)	第11回：中間報告会
第4回：研究の実践1 (研究課題の決定および研究のデザイン)	第12回：研究の実践5
第5回：研究方法論と統計処理	第13回：研究の実践6
第6回：抄読会2 (研究方法論に着目した Critical review)	第14回：研究成果発表会1
第7回：研究の実践2(研究計画の作成)	第15回：研究成果発表会2
第8回：研究計画発表会	

アクティヴ・ライフ研究法Ⅲ（トップスポーツの振興）a

土屋 純、中田 大貴、宮本 直和

スポーツ科学の立場からアクティヴ・ライフを創出するプロジェクトの一貫として、トップスポーツの振興をテーマとした研究を実践し、新しい知見を探求することを目的とする。具体的には、スポーツ科学における各専門分野における研究のデザインや方法論をさらに応用発展させ、トップスポーツの振興に関する研究テーマに取り組むための研究デザインや測定方法について議論し意見交換をおこなう。更に、各院生が取り組んでいる研究課題や研究成果についての新しい知見を共有し、トップスポーツの振興についての知見を深める。

成績評価基準：平常点(討議への参加)および発表によって行う。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：研究の実践3(研究計画の実施)
第2回：研究デザイン	第10回：研究の実践4(研究計画の実施)
第3回：抄読会1 (研究デザインに着目した Critical review)	第11回：中間報告会
第4回：研究の実践1 (研究課題の決定および研究のデザイン)	第12回：研究の実践5
第5回：研究方法論と統計処理	第13回：研究の実践6
第6回：抄読会2 (研究方法論に着目した Critical review)	第14回：研究成果発表会1
第7回：研究の実践2(研究計画の作成)	第15回：研究成果発表会2
第8回：研究計画発表会	

アクティヴ・ライフ研究法Ⅲ（トップスポーツの振興）b

土屋 純、中田 大貴、宮本 直和

スポーツ科学の立場からアクティヴ・ライフを創出するプロジェクトの一貫として、トップスポーツの振興をテーマとした研究を実践し、新しい知見を探求することを目的とする。具体的には、スポーツ科学における各専門分野における研究のデザインや方法論をさらに応用発展させ、トップスポーツの振興に関する研究テーマに取り組むための研究デザインや測定方法について議論し意見交換をおこなう。更に、各院生が取り組んでいる研究課題や研究成果についての新しい知見を共有し、トップスポーツの振興についての知見を深める。

成績評価基準：平常点(討議への参加)および発表によって行う。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：研究の実践3(研究計画の実施)
第2回：研究デザイン	第10回：研究の実践4(研究計画の実施)
第3回：抄読会1 (研究デザインに着目した Critical review)	第11回：中間報告会
第4回：研究の実践1 (研究課題の決定および研究のデザイン)	第12回：研究の実践5
第5回：研究方法論と統計処理	第13回：研究の実践6
第6回：抄読会2 (研究方法論に着目した Critical review)	第14回：研究成果発表会1
第7回：研究の実践2(研究計画の作成)	第15回：研究成果発表会2
第8回：研究計画発表会	

XIX 全学共通設置科目の概要

次の科目は、全学共通設置科目として全大学院学生を対象に設置されている。

聽講を希望する場合は、所沢総合事務センターで交付する聽講願を使用し、所定の方法によって申請をすること。なお、聽講するには指導教員の承認が必要となり、事前に申請書に指導教員の押印が必要となる。

修得した単位は、他箇所聽講科目と合わせて10単位を限度に修了に必要な単位に算入することができる。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 01 (文章作成力養成)	太田 裕子	前期	2	木 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。日本の大学(院)では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して学生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章作成力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業（「文章作成力養成」クラス）は、自分の修士論文・博士論文を書くために学びたい人のためのクラスです。

「志望理由」の欄に、修士または博士の研究計画（研究計画は1,000字）を、書いて下さい。クラス定員は20名です。希望者数が定員を超えた場合は、応募者を審査して履修者の決定を行います。ご了承下さい。履修の可否とクラス分けの結果は、4月5日前後にメールでお知らせします。

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書く一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業計画

第1回：外来語と専門用語を扱う

第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く

第3回：接続表現で文と文をつなげる

第4回：語句を明確に使う

第5回：「マップ」を作って書く

第6回：「パラグラフ」を作る

第7回：主張を根拠で支える

第8回：論点を整理する

第9回：抽象度の調節をする

第10回：参考文献を示す

第11回：「ブロック引用」をする

第12回：要約引用をする

第13回：図や表を作る

第14回：「私語り」から脱出する

第15回：題名をつける

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』(ひつじ書房、2008)2,000円+税

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された文章の出来栄え 70%。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 02 (指導力養成)	佐渡島紗織	前期	2	木 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。日本の大学(院)では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して学生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章作成力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業（「指導力養成」クラス）では、自分の修士論文・博士論文の準備という目的に加えて、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。

本授業は、修士1年生、博士1・2年生のみを対象とします。「志望理由」の欄に、修士または博士の研究計画（研究計画は1,000字）を書いて下さい。クラス定員は20名です。希望者数が定員を超えた場合は、研究計画書を審査して履修者の決定を行います。ご了承下さい。履修の可否は、4月5日前後にメールでお知らせします。

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業計画

第1回：外来語と専門用語を扱う

第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く

第3回：接続表現で文と文をつなげる

- 第4回：語句を明確に使う
- 第5回：「マップ」を作つて書く
- 第6回：「パラグラフ」を作る
- 第7回：主張を根拠で支える
- 第8回：論点を整理する
- 第9回：抽象度の調節をする
- 第10回：参考文献を示す
- 第11回：「ブロック引用」をする
- 第12回：要約引用をする

■ 教科書

準教科書:佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』(ひつじ書房、2008)2,000円+税
 (どうしても購入しなければならないというものではないが、授業内容が本書に準拠しているので、手元に置くことをお勧めします。)

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された文章の出来栄え 70%

■ 関連URL

<http://www.cie-waseda.jp/awp/ondemand/tutortraining.html>「学術的文章の作成」授業ページ

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 03 (留学生向け)	加納なおみ	前期	2	金 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

- ・修士論文などアカデミックライティングの構成と書き方のプロセスを理解し、論理的整合性、一貫性を高める書き方を学ぶ。
- ・思考を深め、文章化するために有効な方法を学び、自分の意見を確立していく。
- ・読み手の視点を獲得しながら、書き手としての成長をめざす。
- ・学術論文の書式を学ぶ。
- ・ピア活動を通じ、ライティングコミュニティー／グループ構築の可能性を探る。
- ・文章と口頭発表の特色を理解し、基本を習得する。

■ 授業計画

第1回：枠組み・研究課題・研究対象・研究方法を設定する

第2回：先行研究・資料を調べる

第3回：引用する(1)

第4回：引用する(2)

第5回：レビューを書く

第6回：「マップ」を作り、論点を決める

第7回：リサーチクエスチョンを立てる

第8回：アウトラインを作る
第9回：パラグラフを書く
第10回：推敲する その(1)
第11回：図表・文献リストを作成する
第12回：口頭発表し、フィードバックし合う(1)
第13回：口頭発表し、フィードバックし合う(2)
第14回：推敲する その(2)
第15回：総まとめ

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された課題の出来栄え 60%、口頭発表 10%

■ 関連URL

http://open-waseda.jp/common/contents/syllabus/9a00006003_02.html

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 0 4 (文章作成力養成)	佐渡島紗織 吉野亜矢子	後期	2	火 2 時限

- 授業概要・授業の到達目標
- 授業計画
- 教科書
- 参考文献
- 評価方法
- 備考
- 関連URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 0 5 (指導力養成)	太田 裕子	後期	2	木 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。日本の大学(院)では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して学生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章作成力養成」クラスと「指導力

養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業（「指導力養成」クラス）では、自分の修士論文・博士論文の準備という目的に加えて、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。（早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおける学部生指導補助については、http://www.waseda.jp/cie/writing_center/pdf/ta.pdfをご覧下さい。）

本授業は、修士1年生、博士1・2年生のみを対象とします。「志望理由」の欄に、修士または博士の研究計画（研究計画は1,000字）を、書いて下さい。クラス定員は20名です。希望者数が定員を超えた場合は、研究計画書を審査して履修者の決定を行います。ご了承下さい。履修の可否とクラス分けの結果は、4月5日前後にメールでお知らせします。

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業計画

- 第1回：外来語と専門用語を扱う
- 第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く
- 第3回：接続表現で文と文をつなげる
- 第4回：語句を明確に使う
- 第5回：「マップ」を作って書く
- 第6回：「パラグラフ」を作る
- 第7回：主張を根拠で支える
- 第8回：論点を整理する
- 第9回：抽象度の調節をする
- 第10回：参考文献を示す
- 第11回：「ブロック引用」をする
- 第12回：要約引用をする
- 第13回：図や表を作る
- 第14回：「私語り」から脱出する
- 第15回：題名をつける

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』（ひつじ書房、2008）2,000円+税

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された文章の出来栄え 70%。

■ 関連URL

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/ondemand/tutortraining.html>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 06 (留学生向け)	加納なおみ	前期	2	金 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

- 修士論文などアカデミックライティングの構成と書き方のプロセスを理解し、論理的整合性、一貫性を高める書き方を学ぶ。
- 思考を深め、文章化するために有効な方法を学び、自分の意見を確立していく。
- 読み手の視点を獲得しながら、書き手としての成長をめざす。
- 学術論文の書式を学ぶ。
- ピア活動を通じ、ライティングコミュニティー／グループ構築の可能性を探る。
- 文章と口頭発表の特色を理解し、基本を習得する。

■ 授業計画

第1回：枠組み・研究課題・研究対象・研究方法を設定する

第2回：先行研究・資料を調べる

第3回：引用する(1)

第4回：引用する(2)

第5回：レビューを書く

第6回：「マップ」を作り、論点を決める

第7回：リサーチクエスチョンを立てる

第8回：アウトラインを作る

第9回：パラグラフを書く

第10回：推敲する その(1)

第11回：図表・文献リストを作成する

第12回：口頭発表し、フィードバックし合う(1)

第13回：口頭発表し、フィードバックし合う(2)

第14回：推敲する その(2)

第15回：総まとめ

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された課題の出来栄え 60%、口頭発表 10%

■ 関連URL

http://open-waseda.jp/common/contents/syllabus/9a00006002_06.html

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
国際人養成実践講座	内海 善雄 松本 充司	後期	2	木 5 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

前国際電気通信連合（ITU、国連の専門機関）事務総局長より、外国人との交渉や国際社会で活躍できるための基礎知識と心構えを、第一線で活躍している実務家も招き、実践的に付与する。対外交渉や国際機関での仕事のやり方の実際を知るとともに、国際社会の人間関係や、国際関係のパワーポリティクスを理解する。なお、本科目は日本語で授業を行なうが、相当程度の英語使用能力が要求される。また、大学院生を対象に授業を行なうが、将来国際社会での活躍を志す学部生（3年以上）にも開放する。

■ 授業計画

- 第1回：国際社会とは
- 第2回：国際交渉の基本(1)
- 第3回：国際機関
- 第4回：国際機関の中の人事管理
- 第5回：国民性
- 第6回：国際会議(1) 概要
- 第7回：国際会議(2) 実地経験
- 第8回：国際会議(3) 議事手続き
- 第9回：国際社会で働く(1) ゲスト
- 第10回：国際社会で働く(2) ゲスト
- 第11回：国際社会で働く(3) ゲスト
- 第12回：国際交渉の基本(2)
- 第13回：スピーチのしかた(1)
- 第14回：スピーチのしかた(2)
- 第15回：スピーチのしかた(3)

■ 教科書

- 内海善雄著「勝つための国際交渉術」日刊工業新聞社
- 内海善雄著「国連という錯覚—日本人の知らない国際力学」日本経済新聞出版社

■ 参考文献

授業中に適宜紹介する

■ 評価方法

- (1)出席 50%。
- (2)レポート 50%（テーマを与え、国際会議で行うスピーチの原稿を作成）。

■ 備考

<http://yutsumi.web.fc2.com/Education/wasedacourse.htm>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
研究倫理概論	土田 友章 浦川道太郎 高林 龍 深澤 良彰 福田 耕治	後期	2	フルオンデマンド

■ 授業概要・授業の到達目標

最近、研究倫理をめぐる虚偽記載、データ捏造等の不正行為等が相次いで明らかになっています。論文作成・発表、共同研究等の研究活動を遂行するうえで、予めわきまえておくべき研究倫理について、知的財産権、被験者保護等の基本的事項をはじめ、欧米諸国における取り組み、利益相反、企業倫理、更には研究ノートとデータ管理、安全保障等に関する事項について、学内外の専門の先生方により、具体的な事例を多く交えながらオンライン形式でお伝えします。文系理系を問わず今後研究に従事する多くの大学院生および学部3・4年生が、研究倫理に関する理解を深め、研究者として地球市民として世界に参加してゆく態度を整えることを期待します。

■ 授業計画

【序論 なぜ研究の倫理か 現代世界における科学技術研究】

第1回：はじめに なぜ研究倫理か

第2回：EU/欧米諸国における研究倫理

第3回：研究における不正行為:FFP(ねつ造・改ざん・盗用)の実際

第4回：研究における不正行為と法:民事訴訟

【研究の計画】

第5回：研究計画のあり方

第6回：被験者保護の基本(1) (ヒトゲノム、ES細胞を含む)

第7回：被験者保護の基本(2) (動物実験を含む)

第8回：質的調査の研究倫理(新規)

第9回：利益相反の諸相

【研究の遂行】

第10回：研究ノートとデータ管理の実践

第11回：メンターとトレイニー、Authorshipと出版の倫理、共同研究

【研究の成果】

第12回：知的財産をめぐって

第13回：研究倫理と企業倫理

第14回：安全保障の観点から見た科学技術者の社会的責任

第15回：研究倫理の実践:早稲田大学の体制

■ 教科書

未定

■ 参考文献

未定

■ 評価方法

講義後的小テストを踏まえ総合的に評価する。

■ 備 考

○理系、文系を問わない内容です。多くの大学院学生に受講して欲しいと思います。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
質的研究方法入門	太田 裕子	前期	2	火 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

質的研究方法を用いた研究を行い、人文社会科学系の学術論文を作成する際必要となる基本的な考え方や研究手法を学ぶことを、本授業の目的とする。

質的研究方法は、実証研究における領域のひとつで、「具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする」(フリック, 2002, p. 19)点がその特徴である。大がかりな質問紙調査や実験によって収集したデータを統計処理する数量的研究方法に対し、質的研究方法は、観察、インタビュー、映像分析などの手法を単独または複数組み合わせることによって、現象を捉えようとする。

どのような手法を用いてデータを収集し分析するかは、研究者の立場や研究の問い合わせによって決定づけられる。そのため、本授業では、質的研究方法の理論的背景を理解したうえで、受講者が自分の研究の立場や問い合わせに適した研究方法を見つけることを目指す。本授業では、特に観察とインタビューを取り上げ、それらの種類と方法を学ぶ。

本授業は、次の三点をねらいとする。

- 1) 質的研究方法の理論的背景、および観察とインタビューの種類と方法を理解する。
- 2) 質的研究法の強みと弱み、倫理的問題を理解する。
- 3) 観察、インタビューの手法を用いた研究をデザインし、実施することができる。

受講者は、実際に観察やインタビューを用いた研究を行い、小型の学術論文を作成することを通して、上記三点を学ぶ。

■ 授業計画

未定

■ 評価方法

課題レポート60%、最終レポート25%、授業への参加度15%

■ 備 考

本授業は、初めて質的研究方法を学ぶ修士課程の学生を主な対象とする。所属する研究科で研究方法に関する授業が設置されている場合には、そちらを受講されたい。

また、本授業は、フィードバックの都合上、受講者を20名までとさせていただく。そのため、履修希望者が定員を超える場合には、書類選考を行う。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
グローバル起業戦略 - 夢は世界に (大学院用)	大久保秀夫 東出 浩教	前期	2	木 6 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

(1) 授業の目的

授業の目的は、「自分の人生を彩るグローバルな事業達成体験」を積み重ねるための、

「起業家的なマインドセット」と

「グローバルビジネス展開のためのスキルセット」

を大学院の方々に身につけていただくことです。

不確実なこれからの時代に“幸せで成功したキャリア”を勝ち取るためにには、国境の枠を超えて活躍できる能力が必要不可欠であり、この点は諸外国の科学的な研究成果を振り返っても明らかです。

言語能力も重要ですが、むしろ、自分で事業を興す、もしくは企業の一員として企業での新規プロジェクトを担当し、事業開始後、数年の内には海外數カ国(しばしば数十カ国)のパートナーとアライアンスを組む。結果、世界の様々な地域の顧客に喜ばれる“価値”を提供できる。これらを達成するためのスキルと能力がキャリアへの扉を開くキーになることが分かってきています。国内の大企業で自分のポジションを守つていれば幸せになれる、という時代は終わりました。

(2) 授業の方法

授業は大きくは3つのブロックに分けられます。すべてのブロックにおいて、ゲストや教員からの一方的なメッセージ発信ではなく、ゲスト、教員、受講者がやり取り(講演、インタビューセッション、ケースディスカッション等)をしながら、受講者“腹に何かが落ちる”経験を達成することを目標とします。

具体的に、第一のブロックでは、日本の起業家の方々で、すでに国境を越えて羽ばたき大きな成功を収めている起業家をお招きします。ゲスト講師による実践的な経験・体験をふまえた上での講義担当教員との「対談」と受講者の質疑が授業のコアになります。

第二ブロックでは、大所高所から日本企業の国際化を眺められてきた方々を交え、受講者、担当教員との対話と議論をオーガナイズします。

そして、第三ブロックでは、ここ3年ほどの間にグローバル市場にチャレンジをし始めた新進気鋭の起業家をお招きし、将来の国境を越えた起業へのヒントを紡ぎ出します。

また、受講者の方々には、“大きく夢”をもつてもらうための2つのプロジェクトワークにチャレンジしてもらうことなる予定です。

(3) フォーバル寄附講座

本講座は、株式会社フォーバルからの寄附講座となっています。フォーバル社は1980年に創業され(<http://www.forval.co.jp/index.htm>)、今まで成長し続けている企業です。現在でも、数々の新規事業を手掛け、一方で、アントレプレナー制度などにより、起業家の育成に取り組むと共に、数々の“国境を超える活動”に取り組み始めています

■ 授業計画

全12回の授業を以下の予定で実施します(一部変更の可能性あり)。

第1回：講義：「グローバル起業戦略の意味、意義、重要性」とは

本講義の主題の解説、ゲスト講演を聞くにあたっての事前学習の提示など

第2回：起業そしてグローバリゼーションを達成した起業家および企業戦略のケーススタディ(1)

ユニデン株式会社 取締役ファウンダー 藤本 秀朗

第3回：起業そしてグローバリゼーションを達成した起業家および企業戦略のケーススタディ(2)

株式会社パソナ 代表取締役 南部 靖之

第4回：起業そしてグローバリゼーションを達成した起業家および企業戦略のケーススタディ(3)

株式会社エイチ・アイ・エス 取締役会長 澤田 秀雄

第5回：これまでのまとめ

担当教員による講義および受講者との議論、および翌週のプレゼンテーションへの導入

第6回：受講者の皆さんとのプロジェクトワークの第一回発表と議論

第7回：日本放送協会(NHK)第17代会長 海老沢 勝二、および

在タイ日本国元大使 太田 博 + 懇親会（1回目）

第8回：第2回課題に向けたワークショップ

第9回：グローバル戦略を展開しつつある起業家および企業戦略のケーススタディ(1)

株式会社クリーク・アンド・リバー社 代表取締役 井川 幸広

第10回：グローバル戦略を展開しつつある起業家および企業戦略のケーススタディ(2)

株式会社デジタルハーツ 代表取締役 宮澤 栄一

第11回：グローバル戦略を展開しつつある起業家および企業戦略のケーススタディ(3)

株式会社ディー・エヌ・エー 代表取締役社長 南場 智子

第12回：受講者の皆さんとのプロジェクトワークの第二回発表とラップアップ + 懇親会(2回目)

(注1) 5月第2週、第3週に関しては休講の予定。全3回に相当する補講を、受講者の予定を勘案し期間中に設定します。

(注2) 第7週および第12週に関しては、6限および7限の時間帯に懇親会を開催いたします。

■ 教科書

特に指定しない。必要に応じて講義内で資料を配布する

■ 評価方法

出席点(ゲスト対談へのコメントなど含む)…40%

ワークショップ、中間提出課題…20%

レポート課題…40%

■ 備考

(1) 寄附講座の特色として、フォーバル社において培われた知識・経験・ネットワークを活かしたアリティのある、一方通行でない授業を実施します。受講者・講演者が本音を語り合う交流会、アントレプレナー制度やインターンシップなどの機会へも積極的に参加し自分を成長させてもらえればと期待しています。

(2) フォーバル社寄附講座も今年で3年目です。今回は、「グローバル起業戦略」と内容も一新した新規科目になっていますので、これまでに「ブロードバンド起業塾」を受講した方も履修可能です。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
持続可能な発展とリスクマネジメント (アジア編) (大学院用)	天児 慧 天野 正博 勝間 靖 森川 靖 山田 満	前期	2	金 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

今日、世界は「人間の安全保障」ひいては「持続可能性」という問題に直面しており、国際社会では、持続可能な発展に向けて企業に対する様々な要請も強くなっている。そこで前期では人間の新たな脅威の問題を特にアジアを中心に考え、状況の把握とその問題解決への取り組みを考える。これらはグローバルな現象として理解できるものであるが、そこには「アジア的特徴」を見ることができ、アジア自身がそのことをしっかりと認識し対応していく必要があり、いかにしてこの問題に取り組んでいくべきか、何をなすべきかが問われてくる。

この講座ではこれらの問題に関する専門的知識を提供し、かつ企業の取組みの現状を説明する。特にアジアの全般的な状況の理解を目的とする。

■ 授業計画

第1回：天児 慧 総論1

第2回：関 正雄 総論2

第3回：松岡俊二：環境

第4回：松岡俊二：環境

第5回：天野正博：環境

第6回：佐野 肇(株式会社損保ジャパン・リスクマネジメント、ERM研究開発部上席研究員)=自然災害・
気候変動とリスクファイナンス

第7回：阿古智子：感染症

第8回：大谷順子：感染症

第9回：工藤宏一郎：感染症

第10回：山本雅司(株式会社損保ジャパン・リスクマネジメント取締役、BCM事業本部長)=感染症リスクマ
ネジメント

第11回：阿古智子：貧困と女性

第12回：勝間 靖：貧困と人権

第13回：堀井 浩：エネルギー問題とガバナンス

第14回：福渡 潔(株式会社損害保険ジャパンCSR・環境推進室課長)=持続可能な発展と企業経営
<演習>

第15回：結論(天児、関)

■ 教科書

特に指定なし。

■ 参考文献

第1回の時に、全体の参考文献の資料配布予定。

■ 評価方法

出席数とレポート提出(特に関心の高かった3つ以上の回の講義内容をベースにテーマ設定をし、関連付けながらレポートにする)A4用紙4枚以上、もしくは試験による。

■ 備 考

特に指定なし。

■ 関連URL

必要な場合、第1回時に連絡。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
儒教を読み解く	永富 青地	夏季	2	無その他

■ 授業概要・授業の到達目標

本講義では、儒教の特質と機能を再検討しつつ、儒教は東アジアの歴史と文化に何をもたらしたか、現代において儒教はいかなる意味を持っているのかを考えていく。ゲストスピーカーとして中国、北京大学の高名な儒教研究者を複数招聘し、中国において展開している最新の儒教研究方法とその成果を講義してもらう。それによって受講者は儒教研究の最先端を共有することになる。また、儒教の過去・現在・未来についても議論していきたい。なお、本科目は夏季集中講義とする。

ゲストスピーカーの北京大学の各先生は中国語で授業を行うため、日本語への通訳もつけることとする。

本授業は大学院生を対象とする。

■ 授業計画

第1回：再度儒教を問う1

第2回：再度儒教を問う2

第3回：儒教の特質についての討論

第4回：中国における儒教の機能1

第5回：中国における儒教の機能2

第6回：中国における儒教の機能についての討論

第7回：東アジア思想史上における儒教の意味1

第8回：東アジア思想史上における儒教の意味2

第9回：東アジア思想史上における儒教の意味についての討論

第10回：儒教研究はいかにあるべきか1

第11回：儒教研究はいかにあるべきか2

第12回：儒教研究はいかにあるべきかについての討論

第13回：現代における儒教1

第14回：現代における儒教2

第15回：現代における儒教についての討論

■ 教 科 書

特に指定しない。

■ 参考文献

随時指示する。

■ 評価方法

レポートと平常点。

■ 備 考

オリエンテーション:4月9日(金) 12:20-12:50(予定)

授業日程:8月2日(月)-6日(金)(1日3コマ×5日間)

授業時間:第1時限は13時から、第2時限は14時45分から 第3時限は16時30分から

教室:22号館8階の会議室(本部キャンパス、道路をはさんで中央図書館のはすむかいの黄色いビル)

8月2日(月) 第1時限-第3時限(13:00-18:00)

8月3日(火) 第1時限-第3時限(13:00-18:00)

8月4日(水) 第1時限-第3時限(13:00-18:00)

8月5日(木) 第1時限-第3時限(13:00-18:00)

8月6日(金) 第1時限-第3時限(13:00-18:00) ※3時限は懇親会

変更の可能性があるため、詳細はCourse N@viのお知らせを随時参照のこと

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
中国研究の最前線	周 程 劉 傑	前期	2	木 5 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

この講義では、現在の中国研究で話題になっている事柄を論議する。本講義では、北京大学をはじめとする中国の有力大学からゲストスピーカーを招へいし、最先端の中国研究についての報告を行うことも予定する。講義使用言語は日本語と中国語とする。中国語での講義については通訳が付くので、中国の思想、文化、環境、社会などの問題に関心を持つ大学院生なら誰でも受講可能である。

■ 授業計画

未定

■ 評価方法

研究発表、授業・討議への参加度、レポート等を総合的に判断する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
地域研究としての台湾	梅森 直之 浅古 弘 江 正殷 春山 明哲	前期	2	火 2時限

■ 授業概要・授業の到達目標

現在の台湾を、どのように理解すればよいか。また、これからの台湾の行方はいかなるものか。台湾を的確に捉えるには、どうすればよいのだろうか。本講義では、台湾を様々な角度から検討し、地域研究としての台湾の可能性を考える。また、こうした新しい台湾研究のあり方を模索することによって、既存の比較政治学、比較法学、比較歴史研究、東アジア研究に関しても、新たな視点を提供したい。

本講義は、オムニバス形式の講義であり、政治学、歴史学、法学、地域研究を専門とする、複数の教員が担当する。それぞれ専門分野から台湾研究の現状、可能性等について、受講生とともに文献・資料等を通じて検討し議論を行う。また、学外で活躍する研究者の招聘も積極的に行い、最先端の台湾研究と接触する機会を提供する。

■ 授業計画

- ・本講義は、複数の教員によるオムニバス形式の講義である。
- ・教員は原則としてすべての講義に出席し、議論に参加する。
- ・主なテーマは下記の通り。ただし、内容や順番に関しては変更の可能性がある。
- ・また、何義麟氏(国立台北教育大学)がゲスト・スピーカーとして参加する。

第1回：イントロダクション：台湾研究のおもしろさ

第2回：日本における台湾研究の歴史

第3回：台湾研究最前線1：岡松文書をめぐって

第4回：台湾研究最前線2：裁判史料をめぐって

第5回：台湾研究最前線3：2.28事件

第6回：台湾研究最前線4：多文化主義と多言語主義1

第7回：台湾研究最前線5：多文化主義と多言語主義2

第8回：台湾統治の開始1：日清戦争から征服戦争へ

第9回：台湾統治の開始2：後藤新平とその統治1

第10回：台湾統治の開始3：後藤新平とその統治2

第11回：台湾統治の展開1：矢内原忠雄とその時代

第12回：台湾統治の展開2：抗日運動の諸相

第13回：台湾統治の展開3：霧社事件

第14回：脱植民地への展望

第15回：レビュー

■ 教科書

講義中に指示する。

■ 参考文献

講義中に指示する。

■ 評価方法

研究発表、授業・討議への参加度、レポート等を総合的に判断する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日中関係の構造分析	徐 顕芬	後期	2	木 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本講義は、現代の日中関係を構造的に理解することを目的に設定する。この分野の基本的文献を読み、ディスカッションを行う。具体的には、第1に、日中両国間の相互作用のダイナミクスを長いスパンで把握する。第2に、日中関係をめぐる国際環境、特に日・米・中三ヶ国関係の変遷を考察する。そして第3に、日中関係をめぐる日中それぞれの国内政治、政策決定を検討する。特に政策決定アスター(組織及び人物)を整理し、「世代交替」の意味合いを分析する。

講義の進め方については、講師による講義形式(最初の15分間程度)と、履修者による文献の内容報告・発表というゼミナール形式を併用して実施する。

期末に履修者全員のレポート集『日中関係の構造分析』2010年度号(仮題)を作成する予定。

■ 授業計画

未定

■ 評価方法

成績の評価は、授業での報告・ディスカッションへの貢献度と、期末レポートに基づく。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本列島の日常史（前編）	新川登亀男	前期	2	金 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

日本列島を対象とした歴史研究には長い蓄積があり、多くの成果が生まれている。しかし、かかえている課題も多い。そこで、これらのこと整理しつつ、21世紀の歴史研究と歴史理解のあり方について考えてみたい。なかでも、列島の古代史に生きた人々の論理や日常性および感性をどのように掘り起こし、あるいは取り戻して、再構成し、いきいきとした歴史記述を残していくには、どうしたらよいのか。当たり前の課題なのだが、これこそが歴史に取り組む本道ではなかろうか。そして、もっとも忘がちで、かつ難しい課題である。

ここでは、これに取り組む手掛かりとして、高取正男の著書『神道の成立』(平凡社)を輪読し、自由に議論したい。著者は既に故人であるが、本書は歴史学・民俗学・宗教学などを総動員して、古代列島人の論理と心性を活写してみせた名著として語り継がれている。

授業参加者については、専門専攻を問わない。むしろ、歴史一般に関心を抱く各研究科の各専攻の人々に期待したい。そして、参加者それぞれの分野(方法)とテキストの方法とを突き合わせながら、創造的

に考えていきたい。同時に、日本列島史のとらえ方を学び、それを各自の専門専攻のなかに取り入れて活かしてもらうことを目標としている。

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション(進行計画の説明、意見交換)
第2回：高取正男に関する説明と確認
第3回：参加者の問題意識と課題の報告・議論1
第4回：参加者の問題意識と課題の報告・議論2
第5回：参加者の問題意識と課題の報告・議論3
第6回：『神道の成立』(以下、テキストと略称)輪読1(「本来的な世俗的宗教」1)
第7回：テキスト輪読2(「本来的な世俗的宗教」2)
第8回：テキスト輪読3(「神仏隔離の論拠」1)
第9回：テキスト輪読4(「神仏隔離の論拠」2)
第10回：テキスト輪読5(「神道の自覚過程」1)
第11回：テキスト輪読6(「神道の自覚過程」2)
第12回：テキスト輪読7(「淨穢と吉凶」1)
第13回：テキスト輪読8(「淨穢と吉凶」2)
第14回：テキスト輪読9(「女性司祭」)
第15回：総括と成果確認

■ 教科書

高取正男『神道の成立』(平凡社ライブラリーほか)

■ 参考文献

高取正男『民間信仰史の研究』(法藏館)

高取正男『日本の思考の原型』(平凡社ライブラリーなど)

■ 評価方法

平常点80%、レポート20%

■ 備考

専門の枠を超えて飛翔し、そして、専門に立ち帰るダイナミズムを共有したい。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本列島の日常史（後編）	海老澤 袁	後期	2	火3時限

■ 授業概要・授業の到達目標

政治史や経済史に収斂されない日常的に営まれる歴史の書として、ここでは網野善彦氏の著作を取り上げたい。1970年代から2000年代初頭にかけて、日本の歴史学界に多大な影響を及ぼした氏の業績は、網野史学と呼ばれ、『網野善彦著作集』19巻にまとめられている。このなかで、歴史研究者のみならず、一般の読者にも広く読まれた『無縁・公界・楽/日本中世における自由と平和』(1978年、平凡社)を取り上げたい。豊富な史料が載せられており、厳密な史料読解を行いながら、網野史学の特質を探っていく。この書には歴史研究者から多くの批判が寄せられ、それに網野氏が反論して熱い論争が交わされた。その過程を学ぶこと

ができるのも本書を取り上げた理由である。講読のテキストとしては、平凡社ライブラリーの『[増補]無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』を用いる。

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション〈本授業の進め方について〉
- 第2回：「エンガチョ」・「江戸時代の縁切寺」について
- 第3回：「若狭の駆け込み寺 万徳寺の寺法」について
- 第4回：「周防の「無縁所」」について
- 第5回：「京の「無縁所」」について
- 第6回：「無縁所と氏寺」について
- 第7回：「公界所と公界者」について
- 第8回：「自治都市」について
- 第9回：「一揆と惣」について
- 第10回：「十楽の津と楽市樂座」について
- 第11回：「無縁・公界・楽」について
- 第12回：「山林」について
- 第13回：「市と宿」について
- 第14回：「墓所と禅律僧・時衆」について
- 第15回：まとめ

■ 教科書

平凡社ライブラリー150『[増補]無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』(平凡社、1996年)

■ 参考文献

『網野善彦著作集』全19巻(岩波書店)

■ 評価方法

出席状況、課題・提出物等による。

■ 備考

網野氏を批判した論考についても十分検討を加えたい。

■ 関連URL

<http://www.f.waseda.jp/ebisawa/ebisawa/index.html>(海老澤衷研究室)

<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>(東京大学史料編纂所)

<http://www.rekihaku.ac.jp/>(国立歴史民俗博物館)

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
信仰と思想（前編）	永富 青地	前期	2	月 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

中国明代、そして日本の江戸時代において大きな影響力を有していた陽明学は、決して宗教ではない。しかしながら、陽明およびその弟子たちが共有していた「良知」への強烈な確信は、確かに信仰と呼ぶにふさわしいものであろう。また、それは中国思想のバックボーンである性善説の、一つの頂点なのである。

本演習では、陽明の語録として中国及び江戸期日本において広く読まれた伝習録を読むことにより、陽明学の精髓を探っていきたい。

■ 授業計画

第1回：徐愛との出会い

第2回：朱子学との決別

第3回：上巻における徐愛以外の弟子との対話 1

第4回：上巻における徐愛以外の弟子との対話 2

第5回：上巻における徐愛以外の弟子との対話 3

第6回：強敵との対決 中巻

第7回：抜本塞源論 1

第8回：抜本塞源論 2

第9回：抜本塞源論 3

第10回：良知とは何か 下巻

第11回：良知とは何か 2

第12回：良知とは何か 3

第13回：無善無惡説の衝撃 1

第14回：無善無惡説の衝撃 2

第15回：無善無惡説の衝撃 3

■ 教科書

和刻本伝習録のコピーを配布する

■ 参考文献

教場で指示する

■ 評価方法

授業中の応答を中心とするため、予習は欠かせない

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
信仰と思想（後編）	森 由利亜	後期	2	金 7 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

○授業概要

この授業では、現在世界の道教学を牽引する最も重要な学者の一人であるJohn Lagerwayによって著され、すでに研究上の古典としての地位を獲得している著作、Taoist Ritual in Chinese Society and History (Macmillan Publishing Company, New York; Collier Macmillan Publishers, London, 1987)を通読します。毎回一章をあつかい、そこで扱われている内容の大綱を把握し、最終的には本書を通覧し、その全体的な構想や主題についての考察を行います。

各授業ではテキスト自体を読むことはあまりありません。むしろ、予習してきていただいた内容をまとめてゆくことが教場での主たる作業内容になるでしょう。章ごとに担当者を割り当ててゆく予定です。授業を効率化するために簡単なレジュメを用意してもらいます。

○到達目標

ラガウェイの道教学の基本的な観点を習得するとともに、より一般的には道教に関する知識を英語でどのように表現するかを学ぶ機会となるはずです。また、学術的な英語を速読する練習にもなります。

■ 授業計画

- 第1回 : Introduction: What is Taoism
- 第2回 : Ch.1
- 第3回 : Ch.2
- 第4回 : Ch.3
- 第5回 : Ch.4
- 第6回 : Ch.5
- 第7回 : Ch.6
- 第8回 : Ch.7
- 第9回 : Ch.8
- 第10回 : Ch.9
- 第11回 : Ch.10
- 第12回 : Ch.11
- 第13回 : Ch.12
- 第14回 : Ch.13
- 第15回 : Ch.14–Conclusion

■ 教科書

Lagerway, John. *Taoist Ritual in Chinese Society and History*, Macmillan Publishing Company, New York; Collier Macmillan Publishers, London, 1987.

現在では入手困難な書であるため、必要な部分をコピーして配布します。

■ 参考文献

特になし。

■ 評価方法

出席と平常点を勘案します。平常点としては、毎回予習を行って臨んでいるかどうか、正確な読解ができるかどうかが特に注目されます。

■ 備考

特になし。

■ 関連URL

特になし。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
民族と人類（前編）	岡内 三眞	前期	2	金 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

『天工開物』を読み、実験を試み技術の歴史を確かめて、現代技術との比較を試みる。

宋 應星『天工開物』は、中国明代の1637年に刊行された技術書である。藪内 清の訳注をテキストにして、万物の生産と加工技術を明らかにし、現代技術との関連を探る。

このため考古学資料、民族資料、文献資料などを参考にし、生産、加工について実験を試み、受講者自身が工夫しながら当時の技術を復原する。

『天工開物』のさまざまな技術の中から一つを選んで読解する。その技術をあとづけ現代にいかに繋がるかをたどり、現代社会との関係を明らかにすることを到達目標とする。

■ 授業計画

- 第1回：テキスト『天工開物』の紹介、授業計画の説明
- 第2回：テキストの読解と実験準備
- 第3回：テキストの読解と実験の予測
- 第4回：考古資料、民族資料、文献史料の読解と実験
- 第5回：各種資料、テキストの読解と実験
- 第6回：各種資料、テキストの読解と実験
- 第7回：各種資料、テキストの読解と実験
- 第8回：各種資料、テキストの読解と実験
- 第9回：各種資料、テキストの読解と実験
- 第10回：各種資料、テキストの読解と実験
- 第11回：各種資料、テキストの読解と実験
- 第12回：各種資料、テキストの読解と実験
- 第13回：読解、実験結果など研究成果の取りまとめ
- 第14回：研究成果のパワーポイントによる発表
- 第15回：研究成果の報告書作成

■ 教科書

宋 應星撰、藪内 清訳注1969『天工開物』東洋文庫130 平凡社

■ 評価方法

出欠席40%、実験経過30%、研究発表10%、研究報告書20%

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
民族と人類（後編）	李 成市	後期	2	火 2時限

■ 授業概要・授業の到達目標

今西龍(1875-1932)は、京都帝国大学教授・京城帝国大学教授として、朝鮮前近代史の研究に多くの業績を残している。主著に『新羅史研究』『百濟史研究』『朝鮮古史の研究』『朝鮮史の栄』『高麗及李朝史研究』などがあるが、それらはすべて没後に刊行された。『高麗及李朝史研究』(1974年)を除いて、1934年から1937年までに近沢書店(京城)から刊行され、その後、1970年に国書刊行会から復刻版が刊行されている。

とりわけ朝鮮古代史研究の開拓者として、文献学、考古学(現地調査)を駆使した研究は、今も古典として

の輝きを失わない。入手は困難であるが、まずは『新羅史研究』所載の論文から、特色ある研究を選んで読んでゆきたい。

これまで植民地統治下でなされた今西の研究については、韓国や北朝鮮の学界では批判的な見解も少なくなかったが、近年、韓国において『新羅史研究』が翻訳刊行されたように、その学問的価値は今でも失われることはない。

当時の研究状況と全く異なるのは、考古学的な成果と、木簡や石碑など出土文字資料の発見であるが、そうした変化にもかかわらず学問的な価値を失わないのは、その研究方法に認めることができる。歴史研究がなされた時代状況という文脈を意識しながら、眞の意味での史学史的位置づけができるような読み込みを心がけたい。

■ 授業計画

第1回：解題と文献の選定

第2回：文献の講読1

第3回：文献の講読2

第4回：文献の講読3

第5回：文献の講読4

第6回：文献の講読5

第7回：文献の講読6

第8回：文献の講読7

第9回：文献の講読8

第10回：文献の講読9

第11回：文献の講読10

第12回：文献の講読11

第13回：文献の講読12

第14回：史学史から見た今西龍の検討

第15回：講義の総括

■ 評価方法

授業の参加度

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
EU機構と政策過程研究	福田 耕治	前期	2	火 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

現代行政の活動は、もはや「国民国家」の枠内にとどまらない。現代国家の行政活動が、なぜ、さまざまな領域で国際化、グローバル化を余儀なくされ、国際機関行政を発達させ、NGOや企業、個人との協力関係をも強化していくかざるを得なくなったのか、国際行政と国内行政の制度的諸関係はどのように発展してきたのか、規制行政の国際化や国際的調整をめぐる諸問題の論点は何か、について考える。

2010年度は、EU機構と政策過程研究を中心とし、欧洲ガバナンスの機能と構造を取りあげる。リスボン条約は、今後のEU統合の方向性、行方を考える上で重要な機構的枠組み、政策過程などを規定するEUの新

たな基本条約であるといってよい。本演習では、リスボン条約を単に概観するだけではなく、EU主要機関の特質や機構改革の方向性、その意味あるいは、EUにおける多様なガバナンス方式の比較を通じて、リスボン条約の意義と問題点を理論的かつ実証的に検討を行い、欧州統合の全体像を俯瞰し、EUを体系的に捉えられるよう政治経済学や国際関係論の理論にも配慮するとともに、それぞれの学問分野における専門的研究へと誘えるよう、研究の方法論をも含めた丁寧な指導を行う。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンス—国際行政とは何か。
- 第2回：EUの国際行政と加盟国行政の関係、第1次資料、EU公式資料
- 第3回：欧州ガバナンスの構造とEU諸機関
- 第4回：EU法秩序・リスボン条約の構造と機能
- 第5回：欧州理事会とEU閣僚理事会
- 第6回：欧州議会の機能と構造
- 第7回：欧州議会と国際政党、直接選挙の現状分析
- 第8回：欧州委員会の機能と構造—リスボン条約による改革
- 第9回：欧州委員会事務局の構造と国際公務員人事行政
- 第10回：EU政策過程の構造と利益集団、NGOの機能
- 第11回：EU政策形成・決定過程と加盟国統治機構の関係・共同体方式ガバナンス
- 第12回：EU政策実施過程と加盟国行政機関
- 第13回：EUの政策評価制度とNPM改革
- 第14回：EU財政構造と財務行政管理
- 第15回：EU・欧州ガバナンスの課題

■ 教科書

- 福田耕治『国際行政学——国際公益と国際公共政策』有斐閣、2003年。
- 福田耕治編著『EU・欧州統合研究』成文堂、2009年。

■ 参考文献

- EUに関する最新の英語研究論文を中心に取り上げ、検討、議論する。
- 福田耕治編『EUとグローバル・ガバナンス』早稲田大学出版部、2009年。

■ 評価方法

- 授業の際の報告、議論、質疑応答、レポートによる。

■ 関連URL

<http://jpn.cec.eu.int> <http://europa.eu.int/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
EU国際公共政策の研究	福田 耕治	後期	2	火 2時限

■ 授業概要・授業の到達目標

現代世界には、解決を必要としているさまざまな問題がある。しかし、国家レベルの公共政策だけでは問題解決が困難か、非効率である場合が少なくない。そこで本講義では、グローバル化に伴う地球環境の破

壊、途上国の開発に伴う貧困層の拡大、人権の抑圧、あるいは国境を越える組織犯罪や感染症の拡大など、地球規模の諸問題を解決するための国際公共政策、あるいは各国の公共政策や規制を調整し、整合化させるための国際的規範、措置のモデルとして、EUの国際公共政策(環境、開発、人権、人道、社会保障、公共空間、共通外交・安全保障政策など)を事例として取り上げる。文理融合・学際的な視点から考察し、それぞれの政策領域の特色や他の公共政策との関係、今後の課題等についてエビデンスに基づいて議論する。

■ 授業計画

第1回：EU環境エネルギー政策

第2回：EU科学技術政策、イノベーション政策

第3回：EU共通農業政策

第4回：EU人の自由移動政策

第5回：EU財政・金融政策

第6回：EU地域開発・空間政策

第7回：EU社会政策・社会保障政策

第8回：EU保健・医療政策、

第9回：EU雇用・労働政策

第10回：EU教育・文化・言語政策

第11回：EU移民・難民政策

第12回：EU:通商政策、中小企業政策

第13回：EU開発途上国政策

第14回：EU外交・安全保障・防衛政策

第15回：EU人権・人道政策

をもふまえ、EU国際公共政策と加盟国の国内公共政策との間の関係、

について討論を通じて理解を深める

■ 教科書

福田耕治編『EU・欧州統合研究』成文堂、2009年および

International Review of Administrative Sciences, Journal of Common Market Studies, International Organization, Journal of Public Policy, など、主として最新の学術誌所収の論文を選んで教材とする。

■ 参考文献

福田耕治編『EUとグローバル・ガバナンス』早稲田大学出版部、2009年

福田耕治他『EU/国境を越える医療専門職と患者の自由移動』文眞堂、2009年

■ 評価方法

授業時の報告と討議、レポートを踏まえて総合的に評価する

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
欧州統合理論の研究	中村 英俊	前期	2	火 3時限

■ 授業概要・授業の到達目標

いくつかの国際地域において、国民国家を超える(=狭義の統合)現象ないしは国境を横断する(=広義の統合)現象が観察できる。世界において、部分的ではあるが「戦争の不在」という現象を観察することもできる。

本講義では、ヨーロッパ地域における政治統合体としてのEUの事例を中心に、様々な地域統合現象の理論的考察・分析を試みたい。次のようなテーマを取り上げる予定。

1. 世界における「地域」(regions)——地域統合論と地域研究の異同性
2. 地域統合の理論と概念
 - (1) E・ハースの新機能主義
 - (2) K・ドイッチュの交流主義
 - (3) 比較地域統合論——J・ナイの『部分的平和』
3. ヨーロッパ統合の歴史と現状
 - (1) EUと超国家的制度
 - (2) 安全保障共同体としてのEU
 - (3) 民生パワーとしてのEU
4. 國際統合と國民統合——EUとUSAの「連邦制」
5. 地域機構と「戦争の不在」——APEC, ARF, ASEAN+3, SAARC, NAFTA, OAS, GCC, AU, EAC, etc.

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション
第2回：地域統合論・歐州統合理論の概説
第3回：K・ドイッチュの交流主義アプローチ
第4回：E・ハースの新機能主義アプローチ
第5回：P・シュミッターの新機能主義と「スピル・オーバー」仮説
第6回：S・ホフマンによる統合論批判
第7回：J・ナイの比較地域統合論：1970年代
第8回：W・ウォーレスの「主権の共有」論
第9回：A・モラブチックの制度主義
第10回：W・マトリイの比較地域統合論：1990年代
第11回：E・アドラーとM・バー・ネットの「安全保障共同体」論
第12回：非ヨーロッパ地域への「安全保障共同体」概念の適用
第13回：「民生パワー」としてのEU
第14回：国際政治の中のEU
第15回：総括

上記テーマについて、リーディング・リストに基づく重要文献を読む。そして、ゼミ形式の講義では、ヨーロッパ統合の理論・現実について議論し、さらに比較研究の観点から、「アジア地域統合」の可能性と限界(あるいは「東アジア共同体」創設の条件)などについての議論も重ねたい。

■ 参考文献

- ・鶴武彦(1985)『国際統合理論の研究』(早稲田大学出版部)
- ・Adler, Emanuel, and Barnett, Michael (eds.) (1998) Security Communities (Cambridge: Cambridge University Press).
- ・Deutsch, Karl W., et al. (1957) Political Community and the North Atlantic Area: International

Organization in the light of historical experience (Princeton University Press, 1957; reprinted, Westport, CT: Greenwood Press, 1969).

- Fawcett, Louise, and Hurrell, Andrew (eds.) (1995) Regionalism in World Politics (Oxford University Press)
[菅英輝・栗栖薰子監訳『地域主義と国際秩序』九州大学出版会、1999年]
- Haas, Ernst B. (1958/1968) The Uniting of Europe: Political, Social, and Economic Forces, 1950–1957 (Stanford University Press, Stanford, 1958; reissued with a new Preface, 1968).
- Mattli, Walter (1999) The Logic of Regional Integration: Europe and Beyond (Cambridge University Press).
- Nye, Joseph S. (1971/1987) Peace in Parts: Integration and Conflict in Regional Organization (Boston: Little, Brown and Company, 1971; reissued with a new Preface by University Press of America, 1987).

■ 評価方法

授業での報告(レジュメの作成を含む)、議論(ディスカッション)への貢献度、レポートを総合的に評価する。

■ 備 考

地域統合論(ジャーナリズムコース)との合併授業。

欧州統合理論の研究(オープン教育センター設置「大学院EU・欧州統合研究テーマカレッジ」科目)との合併授業。

授業運営に際しては、Course N@viの機能を適宜利用する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
Contemporary Issues in European Integration	中村 英俊	夏季	2	無その他

■ 授業概要・授業の到達目標

This course will provide an opportunity for Waseda graduate students to take an intensive course on European integration studies which is usually provided at a European university, such as the University of Oxford, the Free University of Berlin, and so on. EU Institute in Japan at Waseda University (EUIJ-Waseda) will invite one scholar from a European university for the summer intensive course.

In 2009, Dr Katrin Auel, DAAD Lecturer and Fellow in Politics, Department of Politics and International Relations, the University of Oxford, will come to Waseda for one week: the week commencing 24th August. Dr Auel will provide us with four substantial days of teaching, according to the following four major subjects:

- (1) Theories of Integration;
- (2) EU institutions and decision-making;
- (3) Enlargement; and
- (4) Representation.

On each day, she will give a lecture, followed by a discussion session in a seminar format. She will send us the reading lists and the questions/titles for assignments in late April. Students are required to prepare intensively for the summer course and to write at least four essays. This requirement will enable you to

understand the four lectures given by Dr Auel, and to participate actively in the discussion of the four subjects with your own prepared essays.

Professor Nakamura will co-ordinate the course as a whole, and will provide two preparatory classes. In 2009, these will be carried out on 25th April and 1st July. He will utilize the Course N@vi education system, to enable any student to keep abreast of the development of this course. The official language for this course is English, but any student can communicate with Professor Nakamura in Japanese on the fringe of this course.

■ 授業計画

[0] 25th April: preparatory class (A) by Prof. Hidetoshi Nakamura

[0] 1st July: preparatory class (B)

Summer Intensive Course by Dr. Katrin Auel in the week commencing 24th August

Day 1 (24th or 25th August): Theories of Integration

[1] Lecture (1) by Dr Auel

[2] Discussion (1-1)

[3] Discussion (1-2)

[4] Discussion (1-3)

Day 2 (25th or 26th August): EU institutions and decision-making

[5] Lecture (2) by Dr Auel

[6] Discussion (2-1)

[7] Discussion (2-2)

Day 3 (26th or 27th August): Enlargement

[8] Lecture (3) by Dr Auel

[9] Discussion (3-1)

[10] Discussion (3-2)

[11] Discussion (3-3)

Day 4 (27th or 28th August): Representation

[12] Lecture (4) by Dr Auel

[13] Discussion (4-1)

[14] Discussion (4-2)

[15] Conclusion by Dr Auel and Prof. Nakamura

■ 教科書

The reading lists and the questions/titles for assignments will be provided by Dr Katrin Auel in late April.

■ 評価方法

attendance, four essays, discussion

■ 備 考

You are able to send any prior question to Hidetoshi Nakamura through e-mail either in English or in Japanese.

■ 関連URL

For Dr Katrin Auel's profile, see:

<http://www.politics.ox.ac.uk/about/staff/staff.asp?action=show&person=171&special=>

For EU Institute in Japan at Waseda University (EUIJ-Waseda), see:

<http://www.euij-waseda.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
The Politics and International Relations of the European Union	ベーコン ポール・マルティン	後期	2	木 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

This course offers students a comprehensive guide to twentieth century European political history. It explains the circumstances in which the project of European co-operation began. Students will gain a clear understanding of the main institutions, policies and decision-making processes of the contemporary EU, with a particular focus on EU foreign policy.

The class offers a fair and honest appraisal of the political divisions that exist between influential members of the EU, and a balanced assessment of the strengths and weaknesses of the European approach to international relations.

There will be several concrete case studies of key events in international politics that have helped to shape the contemporary EU, and which have served to reveal the EU's strengths and weaknesses. These case studies include Rwanda, Bosnia/Srebrenica, Kosovo, the Iraq War, and the question of EU enlargement.

■ 授業計画

第1回 : Introduction/The Evolution of European Political Institutions

第2回 : Origins of WWI

第3回 : Origins of WWII

第4回 : Theories of European Integration

第5回 : The European Commission

第6回 : The Council of Ministers/European Council

第7回 : The European Parliament

第8回 : The EU and Human Rights

第9回 : EU Enlargement

第10回 : EU Enlargement Case Study: Turkey

第11回 : The EU and Rwanda

- 第12回 : The EU and Bosnia/Srebrenica
 第13回 : The EU, NATO and Kosovo
 第14回 : The EU, the US and the Iraq War
 第15回 : Overview/Conclusions

■ 教科書

Michelle Cini, European Union Politics, (Second edition), Oxford University Press, 2007.

■ 参考文献

A comprehensive list of readings will be provided in the first class.

■ 評価方法

Class presentations, class comprehension exercises, two essays, class participation.

■ 備考

This class is taught entirely in English.

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
The Political System of the EU	舒 昱	後期	2	水 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

Has the European Union (EU) turned into a regional government without statehood? How to decode the politics of EU policy-making beyond classic integration theories? What are the roles of conventional political actors (such as voters, parties, and interest groups) in a multi-levelled governance structure? This course intends to provide students with the basic analytical tools to answer these important questions about the EU.

In addition to Hix's acclaimed textbook – ‘The Political System of the European Union’ (2005, 2nd edition, Palgrave), we are going to read several key articles in comparative politics literature of the EU.

The course is divided into three parts: (i) decoding the institutional structure of the EU, (ii) tracing the actors in EU politics, and (iii) linking structure and agency in EU policy-making. Following a seminar format, each student is required to conduct in-class presentation based on pre-assigned reading materials.

■ 授業計画

- 第1回 : Guidance and Introduction
 第2回 : The EU's Institutional Context
 第3回 : Executive Politics in the EU
 第4回 : Legislative Politics in the EU
 第5回 : Judicial Politics in the EU
 第6回 : Actor I: The Member States
 第7回 : Actor II: The Public
 第8回 : Actor III: Domestic and European Political Parties
 第9回 : Actor IV: Interest Groups and Think Tanks
 第10回 : Case I: The Treaty-Making Process
 第11回 : Case II: The Politics of EU Budget

第12回 : Case III: The Economic and Monetary Union

第13回 : Case IV: The Political Economy of EU's External Relations

第14回 : Case V: Referendums and European Integration

第15回 : Summary and Evaluation

■ 教科書

Hix, Simon (2005) The Political System of the European Union, 2nd edition, London: Palgrave.

Marks, Gary and Steenbergen, Marco R. (2004) European Integration and Political Conflict, Cambridge: Cambridge University Press.

■ 参考文献

Gabel, Matthew (1998) Interests and Integration: Market Liberalization, Public Opinion, and European Union, Ann Arbor: University of Michigan Press.

Hix, Simon; Noury, Abdul and Roland, Gerard (2007) Domestic Politics in the European Parliament, Cambridge: Cambridge University Press.

Hug, Simon (2002) Voices of Europe: Citizens, Referendums, and European Integration, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

Moser, Peter; Schneider, Gerald and Kirchgassner, Gebhard (eds.) (2000) Decision Rules in the European Union: A Rational Choice Perspective, New York : St. Martin's Press.

Thomson, Robert; Stokman, Frans N.; Achen, Christopher and Konig, Thomas (eds.) (2006) The European Union Decides, Cambridge: Cambridge University Press.

Van der Eijk, Cees and Franklin, Mark (1996) Choosing Europe? European Electorate and National Politics in the Face of Union, Ann Arbor: University of Michigan Press.

■ 評価方法

Attendance(20%)、Class Presentation(35%)、Term Essay(45%)

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
現代演劇特論（入門）	秋葉 裕一	前期	2	金3時限

■ 授業概要・授業の到達目標

欧米の演劇の影響下に成立した日本の近現代演劇の運動には、日本および日本人の在り様に対する根本的な懷疑、批判が存在する。ベルトルト・ブレヒトの日本における受容もその一例と言えるだろう。この演習では、ブレヒトの生涯と戯曲作品に触れたのち、日本における具体的な受容を井上ひさしの例に跡づけて見る。

ブレヒトの問題意識は現代にも及び、その関心は幅広い。演劇や文学の研究者以外の受講者も歓迎す

る。映像情報を活用することが頻繁にある。授業時間をオーバーすることが少くない。この点の了解を願う。

当学科目担当者は演劇博物館を拠点とする21世紀COE事業において、また後継のグローバルCOE事業において、「ベルトルト・ブレヒト研究とその日本における受容」を課題として研究を重ねてきた。問題意識と研究成果を演習の中で積極的に紹介したい。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンス。ベルトルト・ブレヒトの生涯と作品について。
- 第2回：戯曲『コーカサスの白墨の輪』前半を読み、映像資料を見る。
- 第3回：戯曲『コーカサスの白墨の輪』後半を読み、映像資料を見る。
- 第4回：戯曲『コーカサスの白墨の輪』の考察と分析。
- 第5回：戯曲『肝つ玉おつ母とその子供たち』前半を読み、映像資料を見る。
- 第6回：戯曲『肝つ玉おつ母とその子供たち』後半を読み、映像資料を見る。
- 第7回：戯曲『肝つ玉おつ母とその子供たち』の考察と分析。
- 第8回：詩集『家庭用説教集』を読む。
- 第9回：詩集『家庭用説教集』の考察と分析。
- 第10回：井上ひさしの生い立ちと作品について。
- 第11回：戯曲『藪原検校』を読む。
- 第12回：戯曲『藪原検校』の映像資料を見る。
- 第13回：戯曲『藪原検校』の考察と分析。
- 第14回：予告された課題について、教場でレポートを作成する。
- 第15回：レポートについての評価と、評価基準の解説。

■ 教科書

必要なテキストは授業担当者の側で準備する。

■ 評価方法

出席、授業への参加、レポートをもとに評価を行う。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
現代演劇特論（発展）	秋葉 裕一	後期	2	金 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

吹米の演劇の影響下に成立した日本の近現代演劇の運動には、日本および日本人を異化して眺める立場なり、見方が存在する。ブレヒトと日本におけるブレヒト受容もその一例と言えるだろう。前期の「現代演劇特論」（入門）では、ベルトルト・ブレヒトの生涯と作品、そして井上ひさしを例に日本におけるブレヒト受容を扱った。後期は、違った角度から、ブレヒトの作品を眺め、また井上ひさしの受容例を考察する。

ブレヒトは1898年に生れ、1956年に亡くなった。20世紀のいわば前半を生きた演劇人である。しかし、作品の持つメッセージは現代の21世紀をも射程に入れている。その現代性と多様性を探りたい。演劇や文学の研究者以外の受講も歓迎する。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンス。ベルトルト・プレヒトの生涯と作品について。
- 第2回：『暦物語』中の小説『実験』『傷ついたソクラテス』を読む。
- 第3回：『暦物語』中の小説『異端者の外套』『年寄りらしくない婆さん』を読む。
- 第4回：『暦物語』中の詩を読む。
- 第5回：『暦物語』中の詩を読む。
- 第6回：戯曲『ガリレイの生涯』を読み、映像資料を見る。
- 第7回：戯曲『ガリレイの生涯』を読み、映像資料を見る。
- 第8回：戯曲『ガリレイの生涯』の考察と分析。
- 第9回：井上ひさしの生い立ちと作品について。
- 第10回：戯曲『頭痛肩こり樋口一葉』前半を読み、映像資料を見る。
- 第11回：戯曲『頭痛肩こり樋口一葉』後半を読み、映像資料を見る。
- 第12回：戯曲『きらめく星座』前半を読み、映像資料を見る。
- 第13回：戯曲『きらめく星座』後半を読み、映像資料を見る。
- 第14回：予告された課題について、教場でレポートを作成する。
- 第15回：レポートについての評価と、評価基準の解説。

■ 教科書

必要なテキストは授業担当者の側で準備する。

■ 評価方法

出席、授業への参加、レポートをもとに評価を行う。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
現代演劇と多文化主義（入門）	澤田 敬司	前期	2	金 1 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本年度は、オーストラリア・ニュージーランド・カナダの多文化社会を構成する(1)「先住民」(2)「移民・難民」の自己表象、および他者表象を取り上げ、それに込められた政治性や伝統・文化、ハイブリディティについて分析を行う。テクストには演劇と映画を均等に取り上げ、両者メディアの政治的文脈の違いについても議論を喚起したい。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：ポストコロニアル理論の検討
- 第3回：ポストコロニアル理論の検討
- 第4回：ポストコロニアル理論の検討
- 第5回：発表
- 第6回：作品の鑑賞と分析
- 第7回：作品の鑑賞と分析
- 第8回：作品の鑑賞と分析

第9回：発表
第10回：作品の鑑賞と分析
第11回：作品の鑑賞と分析
第12回：作品の鑑賞と分析
第13回：作品の鑑賞と分析
第14回：発表
第15回：まとめ

※日程は変更する可能性がある

■ 教科書

教場で指示する。

■ 参考文献

『演劇学のキーワーズ』(ペリカン社) 佐和田敬司『現代演劇と文化の混淆』(早稲田大学出版部)

■ 評価方法

また、受講生の関心領域の作品も取り上げ、上記の議論との接点について考えながら、発表・討議を行う。

授業への参加、レポートを総合的に判断する。

■ 関連URL

<http://homepage2.nifty.com/wombat/>

※ 講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
現代演劇と多文化主義（発展）	澤田 敬司	後期	2	金 1 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本年度は、オーストラリア・ニュージーランド・カナダの多文化社会を構成する(1)「先住民」(2)「移民・難民」の自己表象、および他者表象を取り上げ、それに込められた政治性や伝統・文化、ハイブリディティについて分析を行う。テクストには演劇と映画を均等に取り上げ、両者メディアの政治的文脈の違いについても議論を喚起したい。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス

第2回：ポストコロニアル理論の検討

第3回：ポストコロニアル理論の検討

第4回：ポストコロニアル理論の検討

第5回：発表

第6回：作品の鑑賞と分析

第7回：作品の鑑賞と分析

第8回：作品の鑑賞と分析

第9回：発表

第10回：作品の鑑賞と分析

第11回：作品の鑑賞と分析
第12回：作品の鑑賞と分析
第13回：作品の鑑賞と分析
第14回：発表
第15回：まとめ
※日程は変更する可能性がある

■ 参考文献

『演劇学のキーワーズ』(ペリカン社) 佐和田敬司『現代演劇と文化の混淆』(早稲田大学出版部)

■ 評価方法

授業への参加、レポートを総合的に評価する。

■ 関連URL

<http://homepage2.nifty.com/wombat/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本の伝統演劇論（入門）	三宅 晶子	前期	2	月 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

前年度に引き続き世阿弥自筆能本を取り上げる。

世阿弥は9本の自筆能本を残しており、その他に、臨模本1本、同時代の別筆本1本、計11本の能本が、室町前期のものとして現存している。世阿弥自筆能本の次に古い謡本は室町後期まで下るから、謡の資料としても格段に古いが、これらは後の時代の単なる謡本ではなく、演出まで記した能本の形を持っている。もちろん、国語学的にも大変貴重な資料であると同時に、世阿弥当時の能がどのように演じられていたかを知ることの出来る、第一級資料である。

世阿弥自筆能本を底本として、現存する主な謡本との校合、詞章の解説、出典調べ、演出資料の調査など、能の作品研究に欠かせない調査・研究法の基礎をマスターすることを目的とする。

能にのみ用いる狭い研究方法ではなく、広く伝統演劇すべてに応用可能な、オーソドックスな方法論である。

担当曲を決めて、発表形式とする。

参加人数によっては、各人一曲、あるいは複数の者で一曲となる。

■ 授業計画

第1回：『世阿弥自筆能本』概説・能の作品研究の方法概説

第2回：担当曲決定、謡本の調査方法概説

第3回：担当曲1 諸本校合・校訂本文作成

第4回：担当曲1 注釈

第5回：担当曲2 諸本校合・校訂本文作成

第7回：担当曲2 注釈

第8回：担当曲3 諸本校合・校訂本文作成

第9回：担当曲3 注釈
第10回：担当曲4 諸本校合・校訂本文作成
第11回：担当曲4 注釈
第12回：担当曲5 諸本校合・校訂本文作成
第13回：担当曲5 注釈
第14回：全体の見直し
第15回：まとめ

■ 教科書

『世阿弥自筆能本集』(1997年、岩波書店刊)を使用するが、授業時に配布するコピーを代用することも可能。

■ 参考文献

岩波日本思想大系『世阿弥禪竹』
岩波日本古典文学大系『謡曲集上』

■ 評価方法

平常点・発表・レポートそれぞれ3分の1。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本の伝統演劇論（発展）	三宅 晶子	後期	2	月 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

前期「日本の伝統演劇論（入門）」に続き、金春禪鳳自筆能本・謡本を取り上げる。

世阿弥自筆能本について書写年代が古い金春禪鳳自筆能本（富士山）と、謡本の中から、担当者が適当な能作品を選び、諸本校合、典拠、詞章、演出などについての調査・報告、参加者による討議を行う。

■ 授業計画

第1回：担当曲1 作品研究上 作詞作曲面など

第2回：担当曲1 作品研究下 演出面など

第3回：担当曲2 作品研究上

第4回：担当曲2 作品研究下

第5回：担当曲3 作品研究上

第6回：担当曲3 作品研究下

第7回：担当曲4 作品研究上

第8回：担当曲4 作品研究下

第9回：担当曲5 作品研究上

第10回：担当曲5 作品研究下

第11回：世阿弥自筆本の特色

第12回：金春禪鳳自筆能本の特色

第13回：金春禪鳳自筆謡本の特色

第14回：世阿弥と禪鳳の作品と能本・謡本

第15回：まとめ

■ 教科書

『世阿弥自筆能本集』(1997年、岩波書店刊)を使用するが、授業時に配布するコピーを代用することも可能。

■ 参考文献

岩波日本思想大系『世阿弥禪竹』

岩波日本古典文学大系『謡曲集上・下』

■ 評価方法

平常点・発表・レポートそれぞれ3分の1。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本映画と演劇（入門）	藤井 仁子	前期	2	木 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

演劇・舞台の伝統との関連で日本映画を論じた、英語または日本語の文献を輪読します。たんに両者の影響関係を扱うのではなく、異質な表象形式との出会い(または出会い損ない)に注目することで、「映画とは何か」という問いをさらに突き詰めて考えてみましょう。さしあたり映画学の専門的な論文を読みこなす能力の獲得を目指しますが、英語圏での日本映画研究の成果に接することで、自文化を他者の視点から再考する契機にもしてください。

具体的には、語り物の伝統を継承した無声映画期の弁士、溝口健二作品に登場する歌舞伎や新劇といったテーマを取り上げる予定ですが、詳しくは受講生と相談のうえ決定します。日本映画の場合と比較するために、必要に応じて外国映画にかんする文献を読むこともあります。

後期の「日本映画と演劇（発展）」と統けて履修することで、いっそうの学習効果が期待されます。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス、資料配布、発表順の決定など

第2回：参考上映、解説、討議

第3回：文献輪読と討議(1)

David Bordwell, Figures Traced in Light: On Cinematic Staging (Berkeley: University of California Press, 2005). (予定)

第4回：文献輪読と討議(2)

第5回：文献輪読と討議(3)

第6回：文献輪読と討議(4)

第7回：文献輪読と討議(5)

第8回：文献輪読と討議(6)

第9回：文献輪読と討議(7)

第10回：文献輪読と討議(8)

第11回：文献輪読と討議(9)

第12回：文献輪読と討議(10)

第13回：文献輪読と討議(11)

第14回：文献輪読と討議(12)

第15回：全体のまとめ、討議

■ 教科書

プリントを配布します。

ただし、受講生の希望によっては開講後に特定の書籍をテキストとして購入してもらうかもしれません。

■ 参考文献

適宜紹介しますが、以下はできるだけ早く各自で読んでおくべきでしょう。四方田犬彦『日本映画史100年』(集英社新書、756円)。

■ 評価方法

出席を重視し(30%)、訳読の出来に議論での発言を加味して総合的に評価します。授業期間中に関連作品の上映が行なわれる場合など、適宜レポートの提出を求め、出来に応じて加点することも考えています。

■ 備考

英文の読解力はもちろん高いに越したことはないものの、語学の授業ではないので、映画学に関心を持ち、かつそのための努力を惜しまぬすべての学生に開かれた授業とします。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本映画と演劇（発展）	藤井 仁子	後期	2	木 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

演劇・舞台の伝統との関連で日本映画を論じた、英語または日本語の文献を輪読します。たんに両者の影響関係を扱うのではなく、異質な表象形式との出会い(または出会い損ない)に注目することで、「映画とは何か」という問いをさらに突き詰めて考えてみましょう。さしあたり映画学の専門的な論文を読みこなす能力の獲得を目指しますが、英語圏での日本映画研究の成果に接することで、自文化を他者の視点から再考する契機にもしてください。

具体的には、語り物の伝統を継承した無声映画期の弁士、溝口健二作品に登場する歌舞伎や新劇といったテーマを取り上げる予定ですが、詳しくは受講生と相談のうえ決定します。日本映画の場合と比較するために、必要に応じて外国映画にかんする文献を読むこともあります。

前期の「日本映画と演劇（入門）」から続けて履修することで、いっそうの学習効果が期待されます。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス、資料配布、発表順の決定など

第2回：参考上映、解説、討議

第3回：文献輪読と討議(1)

Aaron Gerow, Kitano Takeshi (London: BFI, 2007). (予定)

第4回：文献輪読と討議(2)

第5回：文献輪読と討議(3)

第6回：文献輪読と討議(4)

第7回：文献輪読と討議(5)

第8回：文献輪読と討議(6)

第9回：文献輪読と討議(7)
第10回：文献輪読と討議(8)
第11回：文献輪読と討議(9)
第12回：文献輪読と討議(10)
第13回：文献輪読と討議(11)
第14回：文献輪読と討議(12)
第15回：文献輪読と討議(13)；全体のまとめ

■ 教科書

プリントを配布します。

ただし、受講生の希望によっては開講後に特定の書籍をテキストとして購入してもらうかもしれません。

■ 参考文献

適宜紹介しますが、以下はできるだけ早く各自で読んでおくべきでしょう。四方田犬彦『日本映画史100年』(集英社新書、756円)。

■ 評価方法

出席を重視し(30%)、訳読の出来に議論での発言を加味して総合的に評価します。授業期間中に関連作品の上映が行なわれる場合など、適宜レポートの提出を求め、出来に応じて加点することも考えています。

■ 備考

英文の読み解力はもちろん高いに越したことはないものの、語学の授業ではないので、映画学に关心を持ち、かつそのための努力を惜しまぬすべての学生に開かれた授業とします。

前期の「日本映画と演劇(入門)」から続けて受講することが望ましいので、映画学の予備知識がまったくない場合、後期のみの受講は避けたほうが賢明です。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
人形淨瑠璃文楽の作品世界（入門）	神津 武男	前期	2	火 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

「人形淨瑠璃文楽」の作品世界について講じます。具体的には国立劇場(東京)5月の人形淨瑠璃文楽公演で上演される作品および関連作品を取り上げます(演目未詳)。

淨瑠璃本は、人形劇の台本として近世日本の都市住民の娯楽であつただけでなく、近代ではアジアの植民地や南米の移民社会など、ひろく日本人社会で享受された、巨大な、おそらく唯一の江戸文学でした。人文学諸領域において検討されるべき課題と考えます。

なお講義では、近世期の原本(初板初摺本)の複写物を使用して、板本の変体仮名が判読可能となるように進めています。

■ 授業計画

- 第1回：人形淨瑠璃文楽概説(通史)
- 第2回：人形淨瑠璃文楽概説(研究史)
- 第3回：人形淨瑠璃文楽概説(研究の基本文献)

第4回：人形淨瑠璃文楽概説(古文献資料)

第5回：作品精読

第6回：作品精読

第7回：作品精読

第8回：作品精読

第9回：作品精読

第10回：作品精読

第11回：作品精読

第12回：作品精読

第13回：作品精読

第14回：前期のまとめ その一

第15回：前期のまとめ その二

■ 教科書

プリントして適宜配布。

■ 参考文献

神津武男「淨瑠璃本史研究」(八木書店、2009年)

■ 評価方法

第1に「レポート」で評価します。レポートの課題は、5月に東京・国立劇場小劇場で行われる人形淨瑠璃文楽公演(学生負担:4,000円程度を予定)を観ての自由論述とします。第2に平常点(参加意欲など)を基準とします。

■ 備考

国立劇場(東京)での文楽公演は、5月、9月、12月、2月(大学暦順)です。講義では直近に上演の作品を具体例として取り上げますので、受講生の皆さんには出来るだけ、文楽公演を観覧してください。

■ 関連URL

国立劇場(日本芸術文化振興会)HP <http://www.ntj.jac.go.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
人形淨瑠璃文学の資料学的研究（入門）	神津 武男	前期	2	金 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

「人形淨瑠璃文楽」を研究する際の、基本文献や資料の扱い方につき講じます。

同じく日本の伝統演劇と称えられる「能楽」「歌舞伎」に比して、近代の東京に活動の拠点を持たなかった「人形淨瑠璃」は、近代の学問体系の中でも出遅れていて、歌舞伎研究者の兼業に委ねられることが少なくありません。

一個に独立した研究分野たるにはどのような研究方法が求められるのか。近世期の原資料を駆使して、「人形淨瑠璃文楽」を研究するための方法・手法について、概説します。

基本文献である『義太夫年表 近世篇』の活用方法について習熟するとともに、その利用上の注意点について理解することを目標とします。

■ 授業計画

- 第1回：概論(人形淨瑠璃の歴史1)
- 第2回：概論(人形淨瑠璃の歴史2)
- 第3回：概論(人形淨瑠璃の研究史1)
- 第4回：概論(人形淨瑠璃の研究史2)
- 第5回：各論(基本文献『義太夫年表 近世篇』)
- 第6回：各論(基本文献『義太夫年表 明治篇』)
- 第7回：各論(基本文献『義太夫年表 大正篇』)
- 第8回：各論(基本文献『人形淨瑠璃舞台史』)
- 第9回：各論(原資料「番付」)
- 第10回：各論(原資料「絵尽」)
- 第11回：各論(原資料「淨瑠璃本」1通し本)
- 第12回：各論(原資料「淨瑠璃本」2道行揃)
- 第13回：各論(原資料「淨瑠璃本」3抜き本)
- 第14回：総論(まとめ1)
- 第15回：総論(まとめ2)

■ 教科書

プリントして適宜配布。

■ 参考文献

神津武男「淨瑠璃本史研究」(八木書店、2009年)

■ 評価方法

授業で取り上げる作品について上演史に関するレポートを作成して貢います。

■ 備考

国立劇場(東京)での文楽公演は、5月、9月、12月、2月(大学暦順)です。講義では直近に上演の作品を具体例として取り上げますので、受講生の皆さんには出来るだけ、文楽公演を観覧してください。費用は1部3-6千円です。

■ 関連URL

国立劇場(日本芸術文化振興会)HP <http://www.ntj.jac.go.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

2010年度 大学院スポーツ科学研究科目配当表

課程	科目区分	研究領域・コース	科目名	単位	担当教員	備考
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ文化	武道論研究指導	一	志々田 文明	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ文化	スポーツ人類学研究指導	一	寒川 恒夫	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ文化	スポーツ倫理・教育学研究指導	一	友添 秀則	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ文化	スポーツメディア論研究指導	一	リー トシブソン	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ文化	スポーツ社会学研究指導	一	宮内 孝知	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ文化	スポーツ史研究指導	一	石井 昌幸	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ文化	舞踊論研究指導	一	杉山 千鶴	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ文化	体育科教育学研究指導	一	吉永 武史	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツビジネス	スポーツ経営学研究指導	一	木村 和彦	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツビジネス	健康スポーツ論研究指導	一	中村 好男	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツビジネス	健康スポーツマネジメント論研究指導	一	原田 宗彦	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツビジネス	スポーツビジネスマネジメント論研究指導	一	間野 義之	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツビジネス	トップスポーツ・ビジネス論研究指導	一	平田 竹男	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツビジネス	トップスポーツ論研究指導	一	作野 誠一	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツビジネス	スポーツビジネス・アドミニストレーション研究指導	一	武藤 泰明	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツビジネス	スポーツビジネスマークティング研究指導	一	松岡 宏高	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	運動免疫学研究指導	一	赤間 高雄	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	健康運動医学研究指導	一	荒尾 孝	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	スポーツ神経精神医科学研究指導	一	内田 直	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	スポーツ健康管理医学研究指導	一	坂本 静男	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	運動器スポーツ医学研究指導	一	鳥居 劍	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	スポーツ外科学研究指導	一	福林 徹	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	健康行動科学研究指導	一	岡 浩一朗	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	スポーツ整形外科学研究指導	一	金岡 恒治	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	予防医学研究指導	一	鈴木 克彦	
修士(2年制コース)	研究指導	スポーツ医科学	アスレティックトレーニング研究指導	一	広瀬 統一	
修士(2年制コース)	研究指導	身体運動科学	スポーツ神経科学研究指導	一	後末 一之	
修士(2年制コース)	研究指導	身体運動科学	生体ダイナミクス研究指導	一	川上 泰雄	
修士(2年制コース)	研究指導	身体運動科学	運動生化学生物研究指導	一	樋口 満	
修士(2年制コース)	研究指導	身体運動科学	スポーツ生理学研究指導	一	村岡 功	
修士(2年制コース)	研究指導	身体運動科学	スポーツ心理学研究指導	一	山崎 勝男	
修士(2年制コース)	研究指導	身体運動科学	スポーツ情報処理研究指導	一	菅田 雅彰	
修士(2年制コース)	研究指導	身体運動科学	統合運動神経生物学研究指導	一	宝田 雄大	
修士(2年制コース)	研究指導	身体運動科学	スポーツ認知神経科学研究指導	一	正木 宏明	

課程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担 当 教 員	備 考
修士(2年制コース)	研究指導	身体運動科学	バイオメカニクス研究指導	一	矢内 利政	
修士(2年制コース)	研究指導	コーチング科学	コーチング科学 I 研究指導	一	磯 繁雄	
修士(2年制コース)	研究指導	コーチング科学	コーチング科学 II 研究指導	一	奥野 景介	
修士(2年制コース)	研究指導	コーチング科学	コーチング科学 III 研究指導	一	土屋 純	
修士(2年制コース)	研究指導	コーチング科学	コーチング科学 IV 研究指導	一	堀野 博幸	
修士(2年制コース)	研究指導	コーチング科学	コーチング科学 V 研究指導	一	倉石 平	
修士(2年制コース)	研究指導	コーチング科学	トレーニング科学研究指導	一	岡田 純一	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	武道論演習(1)	4	志々田 文明	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	武道論演習(2)	4	志々田 文明	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツ人類学演習(1)	4	寒川 恒夫	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツ人類学演習(2)	4	寒川 恒夫	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツ倫理学・教育学演習(1)	4	友添 秀則	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツ倫理学・教育学演習(2)	4	友添 秀則	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツ倫理学・教育学演習(1)	4	リー トシブソン	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツメディア論演習(2)	4	リー トシブソン	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツ社会学演習(1)	4	宮内 孝知	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツ社会学演習(2)	4	宮内 孝知	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツ史演習(1)	4	石井 昌幸	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	スポーツ史演習(2)	4	石井 昌幸	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	舞踊論演習(1)	4	杉山 千鶴	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	舞踊論演習(2)	4	杉山 千鶴	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	体育科教育学演習(1)	4	吉永 武史	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ文化	体育科教育学演習(2)	4	吉永 武史	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツ経営学演習(1)	4	木村 和彦	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツ経営学演習(2)	4	木村 和彦	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	健康スポーツ論演習(1)	4	中村 好男	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	健康スポーツ論演習(2)	4	中村 好男	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツビジネスマネジメント論演習(1)	4	原田 宗彦	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツビジネスマネジメント論演習(2)	4	原田 宗彦	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツクラブビジネス論演習(1)	4	間野 義之	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツクラブビジネス論演習(2)	4	間野 義之	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	トップスポーツビジネス論演習(1)	4	平田 竹男	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	トップスポーツビジネス論演習(2)	4	平田 竹男	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツクラブ組織論演習(1)	4	作野 誠一	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツクラブ組織論演習(2)	4	作野 誠一	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツビジネス・アミニストレーション演習(1)	4	武藤 泰明	

課程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担 当 教 員	備 考
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツビジネス・アドミニストレーション演習(2)	4	武藤 泰明	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツビジネスマークティング演習(1)	4	松岡 宏高	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツビジネス	スポーツビジネスマークティング演習(2)	4	松岡 宏高	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	運動免疫学演習(1)	4	赤間 高雄	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	運動免疫学演習(2)	4	赤間 高雄	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	健康運動医学演習(1)	4	荒尾 孝	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	健康運動医学演習(2)	4	荒尾 孝	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	スポーツ神経精神医学演習(1)	4	内田 直	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	スポーツ神経精神医学演習(2)	4	内田 直	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	スポーツ健康医学演習(1)	4	坂本 静男	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	スポーツ健康医学演習(2)	4	坂本 静男	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	運動器スポーツ医学演習(1)	4	鳥居 俊	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	運動器スポーツ医学演習(2)	4	鳥居 俊	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	スポーツ外科学演習(1)	4	福林 徹	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	スポーツ外科学演習(2)	4	福林 徹	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	健康行動科学演習(1)	4	岡 浩一朗	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	健康行動科学演習(2)	4	岡 浩一朗	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	スポーツ整形外科学演習(1)	4	金岡 恒治	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	スポーツ整形外科学演習(2)	4	金岡 恒治	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	予防医学演習(1)	4	鈴木 克彦	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	予防医学演習(2)	4	鈴木 克彦	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	アスレティックトレーニング演習(1)	4	広瀬 統一	
修士(2年制コース)	演習科目	スポーツ医科学	アスレティックトレーニング演習(2)	4	広瀬 統一	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	スポーツ神経科学演習(1)	4	彼末 一之	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	アスレティックトレーニング演習(2)	4	彼末 一之	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	生体ダイナミクス演習(1)	4	川上 泰雄	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	生体ダイナミクス演習(2)	4	川上 泰雄	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	運動生化学演習(1)	4	樋口 满	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	運動生化学演習(2)	4	樋口 满	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	スポーツ生理学演習(1)	4	村岡 功	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	スポーツ生理学演習(2)	4	村岡 功	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	スポーツ心理学演習(1)	4	山崎 勝男	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	スポーツ心理学演習(2)	4	山崎 勝男	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	スポーツ情報処理演習(1)	4	菅田 雅彰	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	スポーツ情報処理演習(2)	4	菅田 雅彰	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	総合運動神経生理学演習(1)	4	宝田 雄大	

課程	科目区分	研究領域・コース	科目名	単位	担当教員	備考
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	統合運動神経生理学演習(2)	4	宝田 雄大	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	スポーツ認知神経科学演習(1)	4	正木 宏明	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	スポーツ認知神経科学演習(2)	4	正木 宏明	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	バイオメカニクス演習(1)	4	矢内 利政	
修士(2年制コース)	演習科目	身体運動科学	バイオメカニクス演習(2)	4	矢内 利政	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 I 演習(1)	4	磯 勉雄	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 I 演習(2)	4	磯 勉雄	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 II 演習(1)	4	奥野 景介	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 II 演習(2)	4	奥野 景介	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 III 演習(1)	4	土屋 純一	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 III 演習(2)	4	土屋 純一	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 IV 演習(1)	4	堀野 博幸	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 IV 演習(2)	4	堀野 博幸	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 V 演習(1)	4	倉石 平	
修士(2年制コース)	演習科目	コーチング科学	コーチング科学 V 演習(2)	4	倉石 平	
修士(2年制コース)	演習科目	トレーニング科学	トレーニング科学演習(1)	4	岡田 純一	
修士(2年制コース)	演習科目	トレーニング科学	トレーニング科学演習(2)	4	岡田 純一	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	武道思想史特論	2	志々田 文明	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	スポーツ人類学特論	2	寒川 恒夫	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	スポーツ教育学特論	2	友添 秀則	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	スポーツ表象特論	2	リー トンプソン	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	スポーツ社会学特論	2	宮内 孝知	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	スポーツ史特論	2	石井 昌幸	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	舞踊表現特論	2	杉山 千鶴	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	体育科教育特論	2	吉永 武史	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	中国武術史特論	2	林 伯原	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	体育科教育学特論	2	菊 幸一	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	体育科カリキュラム特論	2	松田 惠示	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	体育科教育評価特論	2	菊 幸一	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツ文化	体育科教育内容特論	2	松田 惠示	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツビジネス	スポーツ経営学特論	2	木村 和彦	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツビジネス	健康スポーツマネジメント特論	2	中村 好男	1年制合同
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツビジネス	スポーツビジネスマネジメント特論	2	原田 宗彦	
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツビジネス	スポーツクラブビジネス特論	2	間野 義之	1年制合同
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツビジネス	トップスポーツビジネス特論	2	平田 竹男、中村 好男	1年制合同
修士(2年制コース)	講義科目	スポーツビジネス	スポーツ組織特論	2	作野 誠一	1年制合同

課程	科目区分	研究領域・コース	科目名	単位	担当教員	備考
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	スポーツビジネス スポーツビジネス	スポーツビジネス・アドミニストレーション特論 スポーツビジネスマークティング特論	2	武藤 泰明	1年制合同
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	スポーツ医科学 スポーツ医科学	メディアカルコミュニケーション特論 スポーツ統計学特論	2	松岡 宏高	1年制合同
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	スポーツ医科学 スポーツ医科学	スポーツ精神医学特論 スポーツ神経精神医学特論	2	赤間 高雄	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	スポーツ医科学 スポーツ医科学	スポーツ内科学特論 スポーツ外科学特論	2	荒尾 孝	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	スポーツ医科学 スポーツ医科学	運動器発育・発達特論 運動器解剖実習	2	内田 直	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	スポーツ医科学 スポーツ医科学	MRIの基礎と応用 健康行動科学特論	2	坂本 静男	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	スポーツ医科学 スポーツ医科学	スポーツ整形外科学特論 生命科学特論	2	鳥居 俊	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	スポーツ医科学 スポーツ医科学	アスレティックトレーニング特論 スポーツ神経科学特論	2	福林 徹	
修士(2年制コース)	実習科目 講義科目	スポーツ医科学 スポーツ医科学	生体ダイナミクス特論 運動生化学特論	2	福林 徹	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	スポーツ医科学 スポーツ医科学	バイオメカニクス特論 スポーツ生理学特論	2	渡邊 丈夫	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	精神生理学特論 スポーツ情報処理特論	2	岡 哲一朗	1年制合同
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	脳運動の生理学特論 スポーツ認知神経科学特論	2	金岡 恒治	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	データ分析(Matlab) コーチング特論	2	鈴木 克彦	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	コーチング特論 コーチング特論	2	広瀬 統一	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	コーチング特論 コーチング特論	2	後末 一之	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	コーチング特論 コーチング特論	2	川上 泰雄	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	コーチング特論 コーチング特論	2	樋口 滉	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	バイオメカニクス特論 スポーツ生理学特論	2	矢内 利政	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	精神生理学特論 スポーツ情報処理特論	2	村岡 功	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	脳運動の生理学特論 スポーツ認知神経科学特論	2	山崎 勝男	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	データ分析(Matlab) コーチング特論	2	菅田 雅彰	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	コーチング特論 コーチング特論	2	磯 葉雄	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	コーチング特論 コーチング特論	2	奥野、杉山、礒、岡田、 堀野、土屋	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	コーチングバイオメカニクス特論 コーチング心理学特論	2	土屋 純	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	コンディショニング特論 バフォーマンス評価	2	堀野 博幸 畠田 純一	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	スポーツ戦術戦略特論 論文作成技法 01	2	奥野 景介	
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	論文作成技法 02	2	坂本 将基	1年制合同
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	論文作成技法 03	2	衣笠 竜太	1年制合同
修士(2年制コース)	講義科目 講義科目	身体運動科学 身体運動科学	論文作成技法 04	2	柳澤 修	1年制合同
					沿尾 成情	1年制合同

課程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担 当 教 員	備 考
修士(2年制コース)	講義科目	領域・コース共通科目	スポーツ科学演習 01	2	柳澤 修	
修士(2年制コース)	講義科目	領域・コース共通科目	スポーツ科学演習 02	2	衣笠 龍太	
修士(2年制コース)	講義科目	領域・コース共通科目	スポーツ科学演習 03	2	田内 健二	
修士(2年制コース)	講義科目	領域・コース共通科目	スポーツ科学演習 04	2	坂本 将基	
修士(2年制コース)	講義科目	領域・コース共通科目	スポーツ科学演習 05	2	沼尾 成晴	
修士(1年制コース)	研究指導	トップスボーツマネジメント研究指導	—	平田 竹男		
修士(1年制コース)	研究指導	スポーツクラブマネジメント研究指導	—	間野 義之		
修士(1年制コース)	研究指導	健康スポーツ	健 康 ス ポ ー ツ	—	中村 好男	
修士(1年制コース)	研究指導	介護予防	介護予防マネジメント研究指導	—	岡 浩一朗	
修士(1年制コース)	演習科目	トップスボーツ	ト ッ プ ス ボーツ マ ネ ジ メ ャ ト 演 習 (1)	4	平田 竹男	
修士(1年制コース)	演習科目	スポーツクラブ	ス ポ ー ツ ク ラ ブ	4	間野 義之	
修士(1年制コース)	演習科目	健康スポーツ	健 康 ス ポ ー ツ	4	中村 好男	
修士(1年制コース)	演習科目	介護予防	介護予防マネジメント演習 (1)	4	岡 浩一朗	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ト ッ プ ス ボーツ バ ジ ネ ス 特 論	2	平田 竹男、中村 好男	学部合併、2年制合同
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ス ポ ー ツ の 法 と 契 約	2	水戸 重之	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ス ポ ー ツ ジ ネ ス ・ ア デ ミ ニ ス 特 論	2	武藤 泰明	2年制合同
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ス ポ ー ツ プ ロ モ ー シ ョ ン 特 論	2	平田 竹男、中村 好男	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ト ッ プ ス ボーツ マ ネ ジ メ ャ ト 特 論	2	平田 竹男、中村 好男	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ス ポ ー ツ ク ラ ブ バ ジ ネ ス 特 論	2	間野 義之	2年制合同
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ス ポ ー ツ 組 織 特 論	2	作野 誠一	2年制合同
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	経営と戦略	2	黒須 光、柳沢 和雄	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ス ポ ー ツ ク ラ ブ マ ネ ジ メ ャ ト 研 究 法	2	間野 義之	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ス ポ ー ツ ジ ネ ス マ ー ケ テ イ ナ グ 特 論	2	松岡 宏高	2年制合同
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	健 康 ス ボーツ マ ネ ジ メ ャ ト 特 論	2	中村 好男	2年制合同
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	健 康 行 動 科 学 特 論	2	岡 浩一朗	2年制合同
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	健 康 ス ボーツ 指導法演習	1	妹尾 弘幸、矢野 史也	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	レクリエーション指導法演習	1	妹尾 弘幸	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	健 康 指 導 ユ ニ ニ ケ ー シ ョ ン	1	奥田 文子	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	ヘルスプロモーション演習	2	中村、岡、矢野、奥田	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	健 康 ス ボーツ マ ネ ジ メ ャ ト 研 究 法	2	中村 好男	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	介護予防特論	2	大渕 修一	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	老年リハビリテーション演習	2	小島 基永	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	介護予防演習	2	岡 浩一朗	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	老年学特論	2	大渕 修一	
修士(1年制コース)	マネジメント科目	(コース共通)	介護予防マネジメント研究法	2	岡 浩一朗	
修士(1年制コース)	講義科目	領域・コース共通科目	論文作成技法 01	2	坂本 将基	

課程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担 当 教 員	備 考
修士(1年制コース)	講義科目 講義科目	領域・コース共通科目 領域・コース共通科目	論文作成技法 02 論文作成技法 03	2	衣笠 竜太	
修士(1年制コース)	講義科目	領域・コース共通科目	論文作成技法 04	2	柳澤 修	
修士(1年制コース)	基礎選択科目	(コース共通)	経済学	2	沼尾 戎晴	
修士(1年制コース)	基礎選択科目	(コース共通)	MBAエッセンシャル	2	藤田 康範	
修士(1年制コース)	基礎選択科目	(コース共通)	リスクマネジメント	1	山本 真司	
修士(1年制コース)	基礎選択科目	(コース共通)	マークティングリサーチ	2	野口 和彦	
修士(1年制コース)	基礎選択科目	(コース共通)	指導実践マネジメント	1	内田 学	
修士(1年制コース)	基礎選択科目	(コース共通)	データ分析(SPSS)	2	清水 隆一	
修士(1年制コース)	基礎選択科目	(コース共通)	武道論研究指導	—	前園 久智	
博士後期	研究指導	スポーツ文化	スポーツ人情学研究指導	—	志々田 文明	
博士後期	研究指導	スポーツ文化	スポーツ倫理学・教育学研究指導	—	寒川 恒夫	
博士後期	研究指導	スポーツ文化	スポーツ倫理学・教育学研究指導	—	友添 秀則	
博士後期	研究指導	スポーツ文化	スポーツメディア論研究指導	—	リー トンブソン	
博士後期	研究指導	スポーツ文化	健康スポーツ論研究指導	—	中村 好男	
博士後期	研究指導	スポーツビジネス	スポーツビジネスマネジメント論研究指導	—	原田 宗彦	
博士後期	研究指導	スポーツビジネス	トップスポーツビジネス論研究指導	—	平田 竹男	
博士後期	研究指導	スポーツ医科学	運動免疫学研究指導	—	赤間 高雄	
博士後期	研究指導	スポーツ医科学	健康運動医学研究指導	—	荒尾 孝	
博士後期	研究指導	スポーツ医科学	スポーツ精神医学研究指導	—	内田 直	
博士後期	研究指導	スポーツ医科学	スポーツ健康管理学研究指導	—	坂本 静男	
博士後期	研究指導	スポーツ医科学	スポーツ外科学研究指導	—	福林 徹	
博士後期	研究指導	スポーツ医科学	健康行動科学研究指導	—	岡 浩一朗	
博士後期	研究指導	スポーツ医科学	スポーツ整形外科学研究指導	—	金岡 恒治	
博士後期	研究指導	スポーツ医科学	予防医学研究指導	—	鈴木 克彦	
博士後期	研究指導	スポーツ医科学	アクティブライフ研究指導	—	彼末 一之	
博士後期	研究指導	身体運動科学	スポーツ神経科学研究指導	—	川上 泰雄	
博士後期	研究指導	身体運動科学	生体ダイナミクス研究指導	—	樋口 满	
博士後期	研究指導	身体運動科学	運動生化学研究指導	—	正木 宏明	
博士後期	研究指導	身体運動科学	スポーツ生理学研究指導	—	村岡 功	
博士後期	研究指導	身体運動科学	スポーツ心理学研究指導	—	山崎 勝男	
博士後期	研究指導	身体運動科学	スポーツ情報処理研究指導	—	誉田 雅彰	
博士後期	研究指導	身体運動科学	スポーツ認知神経科学研究指導	—	矢内 利政	
博士後期	研究指導	身体運動科学	バイオメカニクス研究指導	—	土屋 純	
博士後期	講義科目	コーチング科学	コーチング科学山研究指導	—	エディソン デヴィド	
博士後期	講義科目	領域共通科目	テクニカルライティング 01	2	エディソン デヴィド	
博士後期	講義科目	領域共通科目	テクニカルライティング 02	2	エディソン デヴィド	

課程	科目区分	研究領域・コース	科目名	単位	担当教員	備考
博士後期	講義科目 講義科目	領域共通科目	テクニカル・プレゼンテーション 01	2	エディソン デヴィド	
博士後期	講義科目 講義科目	領域共通科目	テクニカル・プレゼンテーション 02	2	エディソン デヴィド	
博士後期	講義科目 講義科目	領域共通科目	テクニカル・プレゼンテーション 03	2	ファーン グレン	
博士後期	講義科目 講義科目	領域共通科目	テクニカル・プレゼンテーション 04	2	ファーン グレン	
博士後期	講義科目 講義科目	領域共通科目	テクニカル・プレゼンテーション 05	2	ファーン グレン	
博士後期	講義科目 講義科目	領域共通科目	テクニカル・プレゼンテーション 06	2	ファーン グレン	
博士後期	講義科目	領域共通科目	リサーチマネジメント	2	中村、間野、柴田、曹、時澤、中田、宮下、宮本	
博士後期	講義科目	領域共通科目	アクティヴ・ライフ研究法(子どもの健全育成)a	2	矢内 利政、曹 振波、時澤 健	
博士後期	講義科目	領域共通科目	アクティヴ・ライフ研究法(子どもの健全育成)b	2	矢内 利政、曹 振波、時澤 健	
博士後期	講義科目	領域共通科目	アクティヴ・ライフ研究法(中高年の健康増進)a	2	岡 浩一朗、柴田 愛、宮下 政司	
博士後期	講義科目	領域共通科目	アクティヴ・ライフ研究法(中高年の健康増進)b	2	岡 浩一朗、柴田 愛、宮下 政司	
博士後期	講義科目 講義科目	領域共通科目	アクティヴ・ライフ研究法(トップスポーツの振興)a	2	土屋 純、中田 大貴、官本 直和	
博士後期	講義科目 講義科目	領域共通科目	アクティヴ・ライフ研究法(トップスポーツの振興)b	2	土屋 純、中田 大貴、官本 直和	

早稲田大学はハラスメント防止に真摯に取り組んでいます。

もう一步先のハラスメント理解のための Q&A

解説

Q. ハラスメントって何ですか？

A. ハラスメントとは、性別、社会的身分、人種、国籍、信条、年齢、職業、身体的特徴等の属性あるいは広く人格に関わる事項等に関する言動によって、相手方に不利益や不快感を与え、あるいはその尊厳を損なうことをいいます。大学におけるハラスメントとしては、性的な言動によるセクシュアル・ハラスメント、勉学・教育・研究に関連する言動によるアカデミック・ハラスメント、優越的地位や職務上の地位に基づく言動によるパワー・ハラスメントなどがあります。

Q. ハラスメントって何で問題なのですか？

A. 人権侵害だからです。ごく気軽な気持ちでの行為や言動が相手にとっては耐えられない苦痛となっていることもあります。結果として、日常生活に支障をきたすケースも少なくありません。自分に置き換えて、問題意識を高く持つことが大切です。そのためにも正しい知識、理解が求められます。ハラスメント防止委員会では、「ハラスメント防止に関するガイドライン」を制定し、対応を定めるとともに、パンフレットやWebサイトで様々な情報を提供しています。是非活用してください。

ハラスメント防止委員会URL
<http://www.waseda.jp/stop/>

Q. 学生がハラスメントにあうのは、どんな場面ですか？

A. きわめて残念なことですが、授業・ゼミ等がアカデミック・ハラスメントやセクシュアル・ハラスメントの場、サークル等がセクシュアル・ハラスメントやパワー・ハラスメントの場になります。

Q. 学生が加害者になることもありますか？

A. はい、あります。たとえばサークルのコンパで性的な言動を繰り返したり、飲酒を強要したり、交際をしつこく迫った結果、相手が不快感を持った場合には、セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメントになります。

相談

Q. ハラスメントをうけた場合、どこに相談すればいいのでしょうか？

A. ハラスメント防止室（相談室）に相談してください。開室時間、相談方法、連絡先等の詳細については下記を参照してください。

Q. ハラスメント防止室では何をしてもらえるのですか？

A. 現状について専門の相談員が詳細をうかがいます。かなりのケースが、この段階で気持ちに整理がつき、解決にいたっています。相手との関係について調整を希望する場合は、【対応策の検討】に進みます。その後、ハラスメント防止委員会の苦情処理案件の対象と認定された場合は、当事者からあらためてお話を伺い、相手方との調整が始まります。秘密保持と被害者への報復等の禁止が明確に定められているので、安心して相談してください。また、外部の相談窓口もWebサイトで紹介しています。

Q. ハラスメントなのかわからないのですが、相談してもよいでしょうか？我慢しようか悩んでいます。

A. 感情には個人差があるので人によってはハラスメントと感じないようなケースでも、本人の主観的な感情が重要な要素になり、ハラスメントになることがあります。まずは、ハラスメント防止室に相談してください。

Q. 友人から相談されているのですが？

A. 友人に相談されたら、まずは真剣に耳を傾けて下さい。そして、適切な対処のために、ハラスメント防止室などの専門窓口へ相談するよう勧めてください。

■相談窓口 ハラスメント防止室

相談は、電話・メール・Fax・手紙どの方法でも承ります。来室前なら匿名での相談も可能です。来室の際は必ず電話で予約をしてください。

【TEL】 03-5286-9824 *留守番電話機能つき

【Fax】 03-5286-9825

【E-mail】 stop@list.waseda.jp

【URL】 <http://www.waseda.jp/stop/>

【開室時間】 月～金 9：30～17：00

【事務所所在地】

〒169-8050 新宿区戸塚町1-104

早稲田大学24-8号館2階（相談室）

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

電話 04-2947-6703 (ダイヤルイン)

FAX 04-2947-6801

<http://www.waseda.jp/sports/supoken/>



早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

GRADUATE SCHOOL of SPORT SCIENCES
WASEDA UNIVERSITY